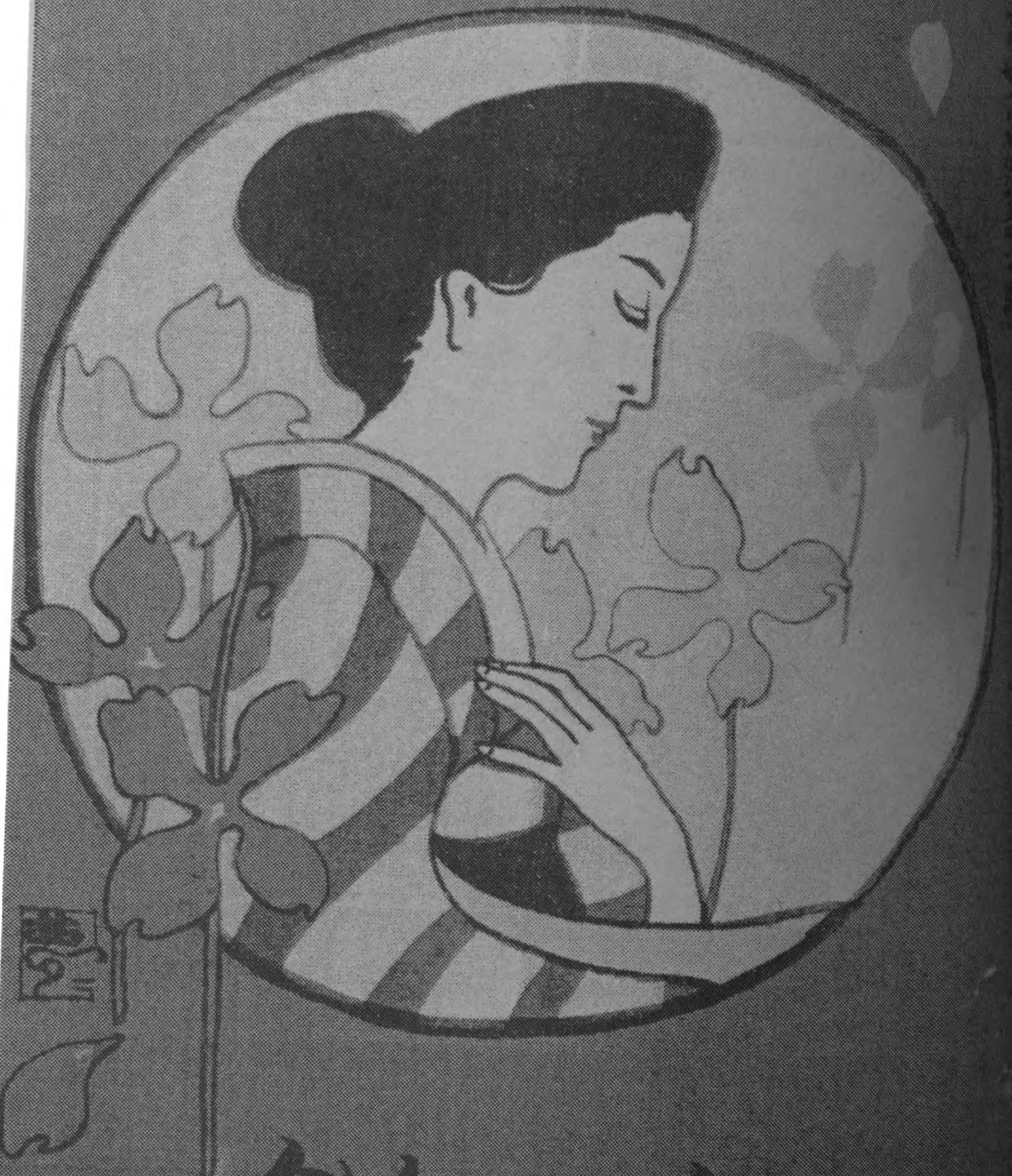


女鐸

第七年第八號



女鑑　第拾七年第八號目次





帰省　　飯澤天羊画

常に清新の記事を滿載せるは本誌の大特色也

避暑地の友

婦人世界

銷夏の伴侶

八月一日發行 毎月一回 二卷九號 一冊拾五錢 郵稅一錢五厘 六冊分郵稅共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎逆境より成功したる婦人の實歷談…

◎少女歌劇あげ羽姬（いほへ子）

◎感心なる主婦（伊藤君子）

◎小兒下痢手當（加藤博士）

◎子供に多き鼻咽腔病…ドクトル佐藤敏夫

◎私の感心せる女學生（菱沼安子）

◎婦人日常生活法を讀む（鳩山春子 跡見花蹊）

○○○○○○○○○○ 見よ新工風の大文字 ○○○○○○○○○○

◎私は常に愉快に生活して居ります 嘉悅孝子

◎女は如何に男子の心を觀察すべきか… 村井弦齋

◎我が娘を旅行さしたる實驗談 子爵夫人 加納鎰子

◎避暑地の生活に依りて得たる利益……井上光子

◎獨身婦人の模範 跡見花蹊刀自面影

◎絛蟲病全治實驗（高峯雪子）

◎蓮を詠じた古來の名歌

◎弦齋夫人料理談

△番茶は如何に煎じ出すか…

△素麵は如何にゆでるか…

△白玉は如何に製するか……

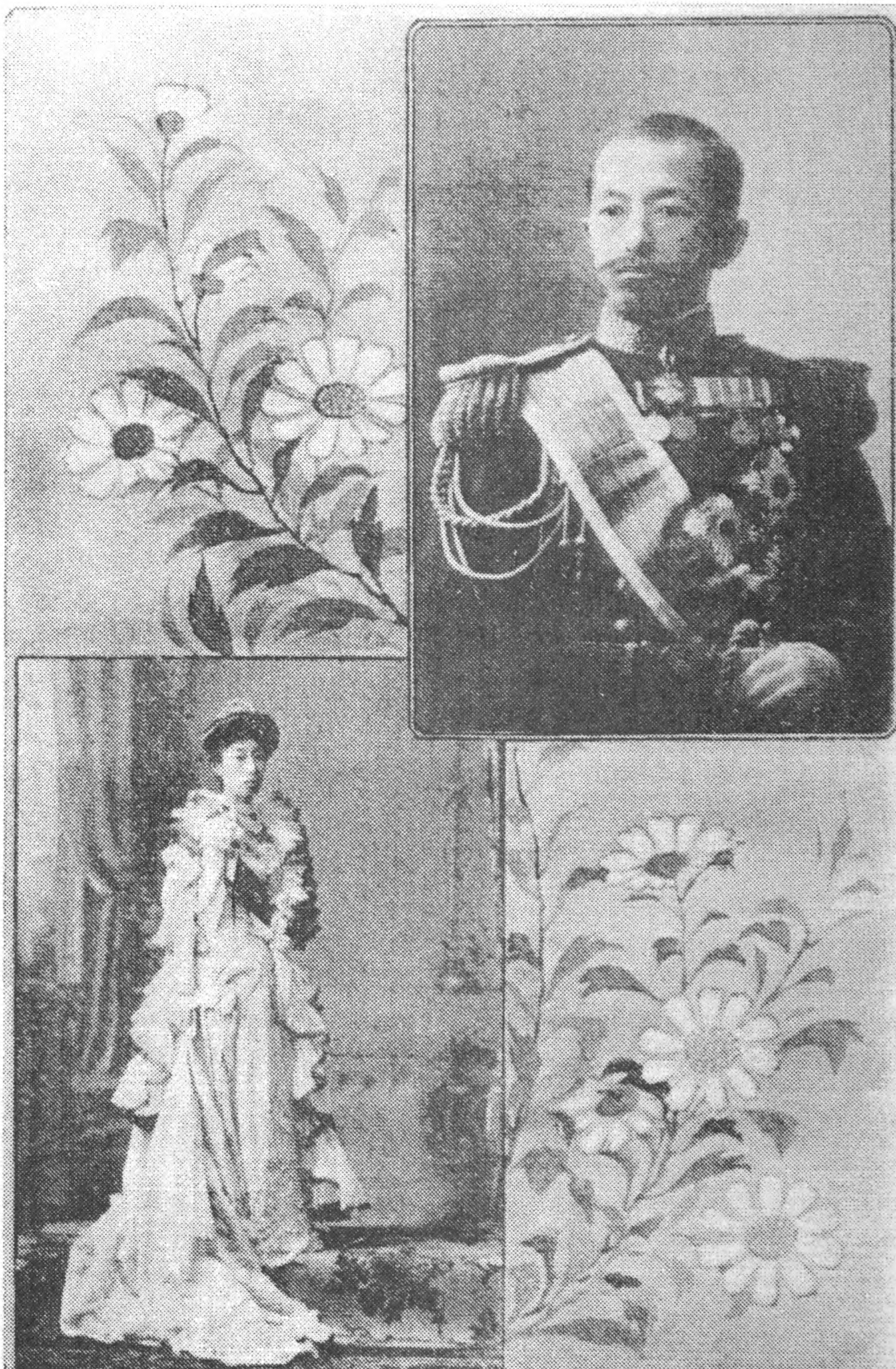
△避暑地の料理は如何にするか

△口繪◎公爵三條公美氏令夫人◎學習院女學部卒業生◎名家の令孃◎新婚寫眞◎秋の七くさ（花蹊）◎夕涼み◎田園の月（彩色畫）▽

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）賣捌全國書店


東京砲兵工廠技手
日野清三郎君案出
新案登録
露國陸軍の刻印あり
戦利廢棄弾丸
薬莢で出来た
真に趣味ある
戦利好紀念物
ナイフ
ペン軸
東京下谷池之端仲町
電話下谷長九六五 一三四
宮内省
御用
玉寶堂
取次御望みの方には御相談に應ず

有栖川宮両殿下



歌壇の貴夫人



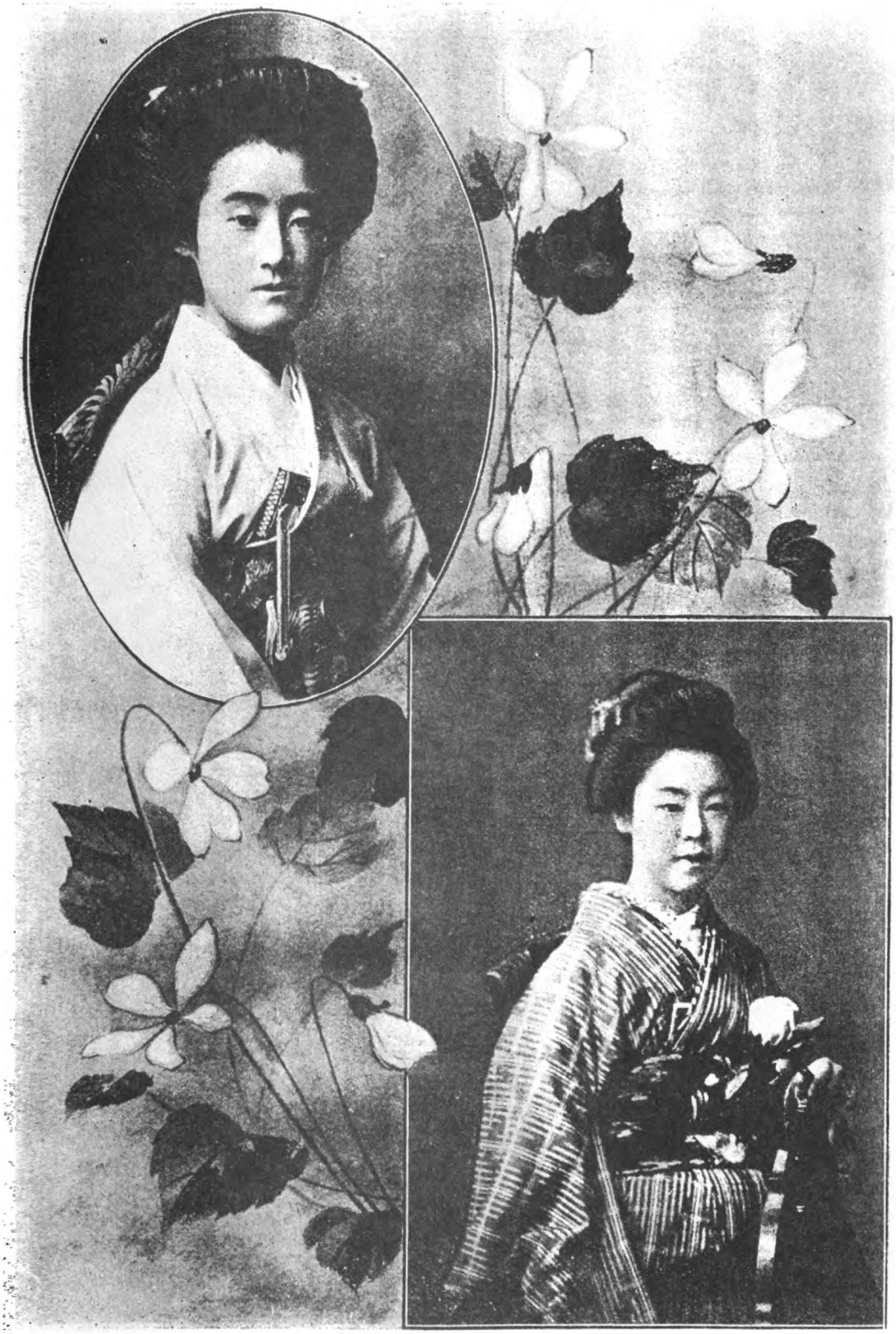
右より　内藤子爵世嗣夫人佳子君　大河内子爵夫人國子君　松平子爵夫人岳子君

左より　樺山子爵世嗣夫人常子君　酒井伯爵夫人夏子君　高木博士夫人鐵子君

佐々木信綱氏の家庭



才媛百佳選



其の九　松平直方君令嬢妙子君

其の十　橋本男爵令嬢小菊子君

POST CARD ALBUM.

獨逸シッフェル會社製

繪葉書帖（ゑはがきブック）

▲意匠嶄新——裝釘堅牢

▲價格　金六拾錢より金拾五圓まで

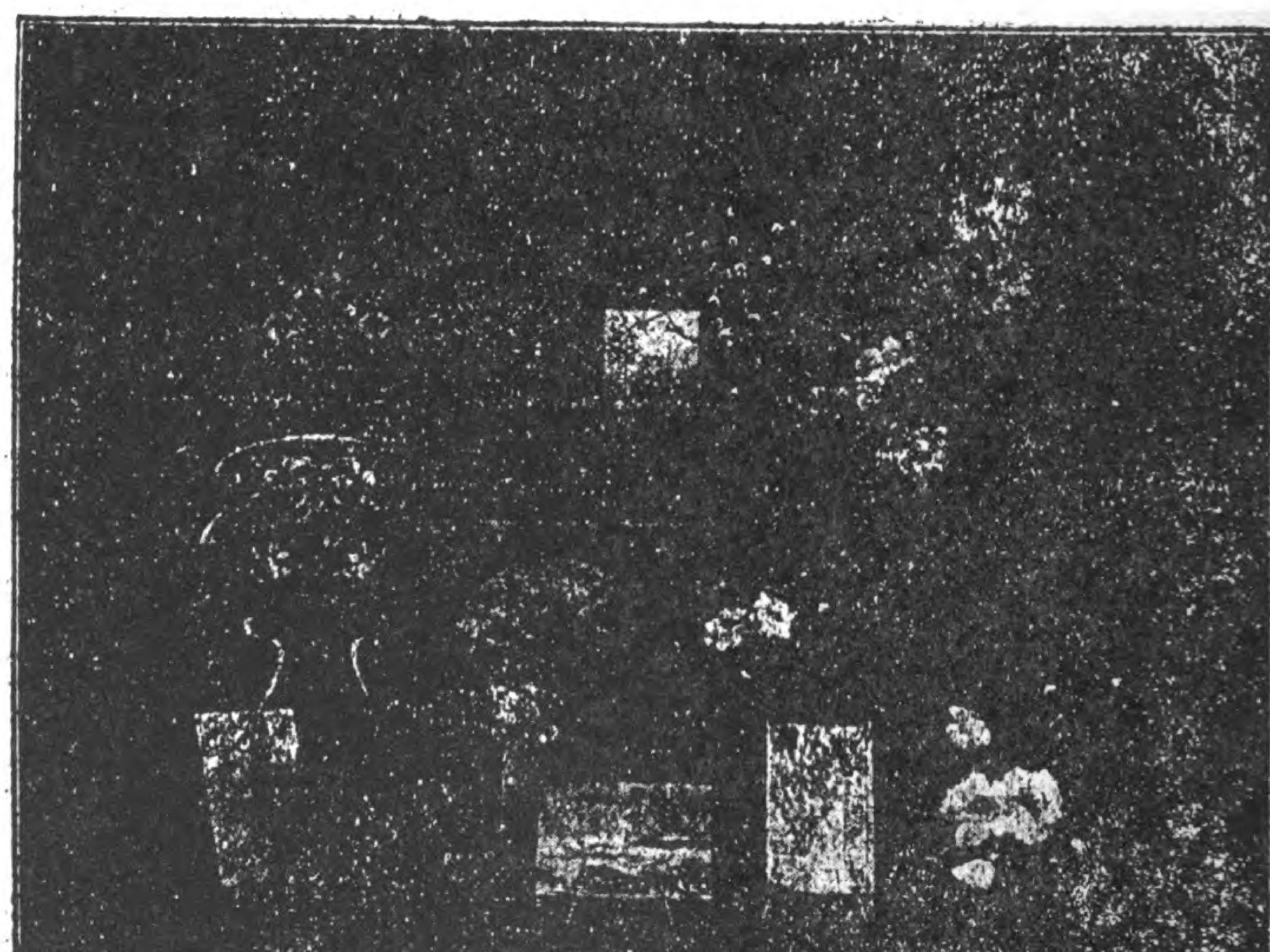
右數十種新着仕候に付店内に陳列仕置候間御來觀の程奉希候

地方より御送金は

（振替貯金口座二二八一六番）

神田區表神保町

中西屋書店



麗はしき家庭

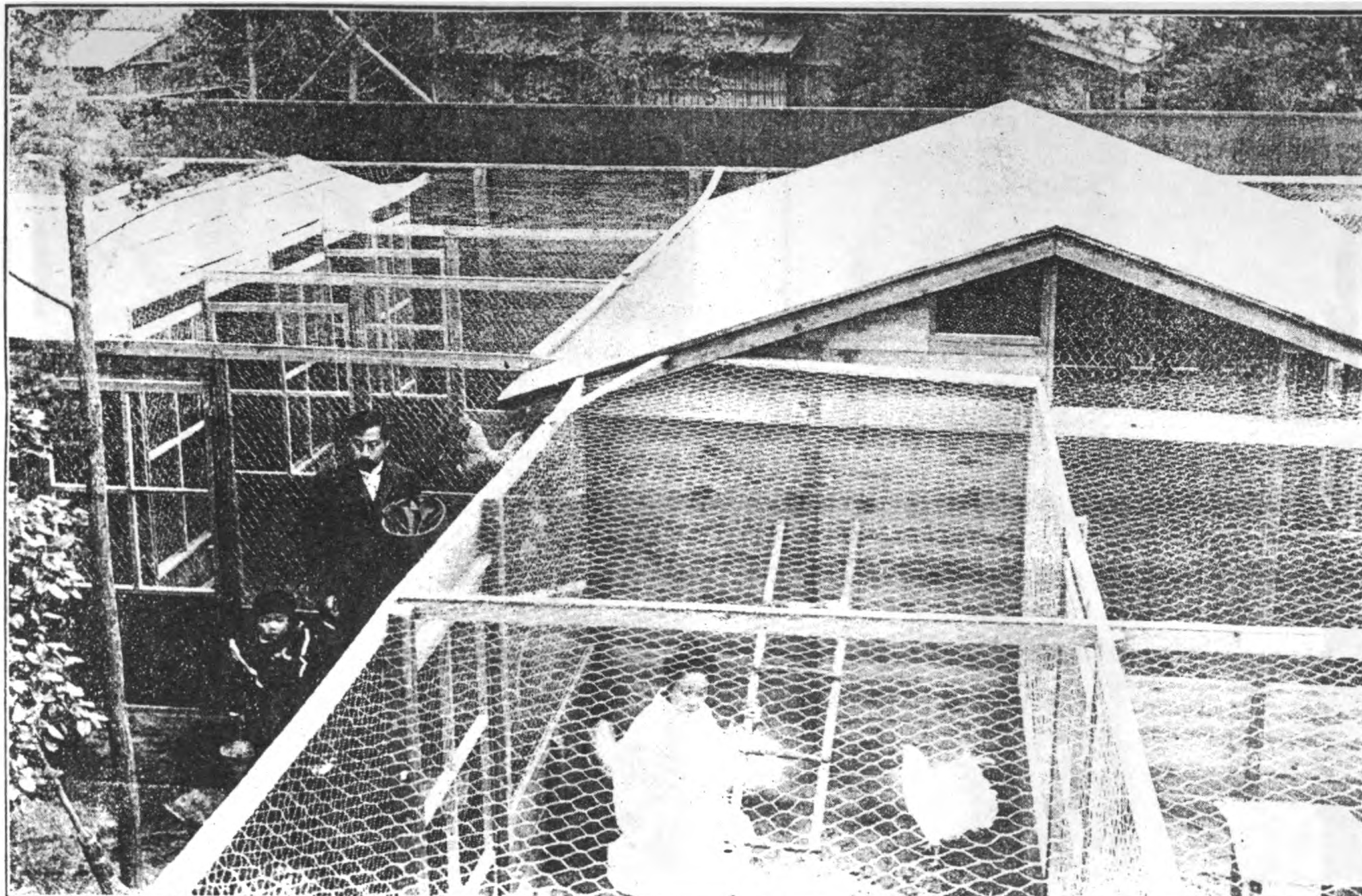


阿部泰藏氏の一家



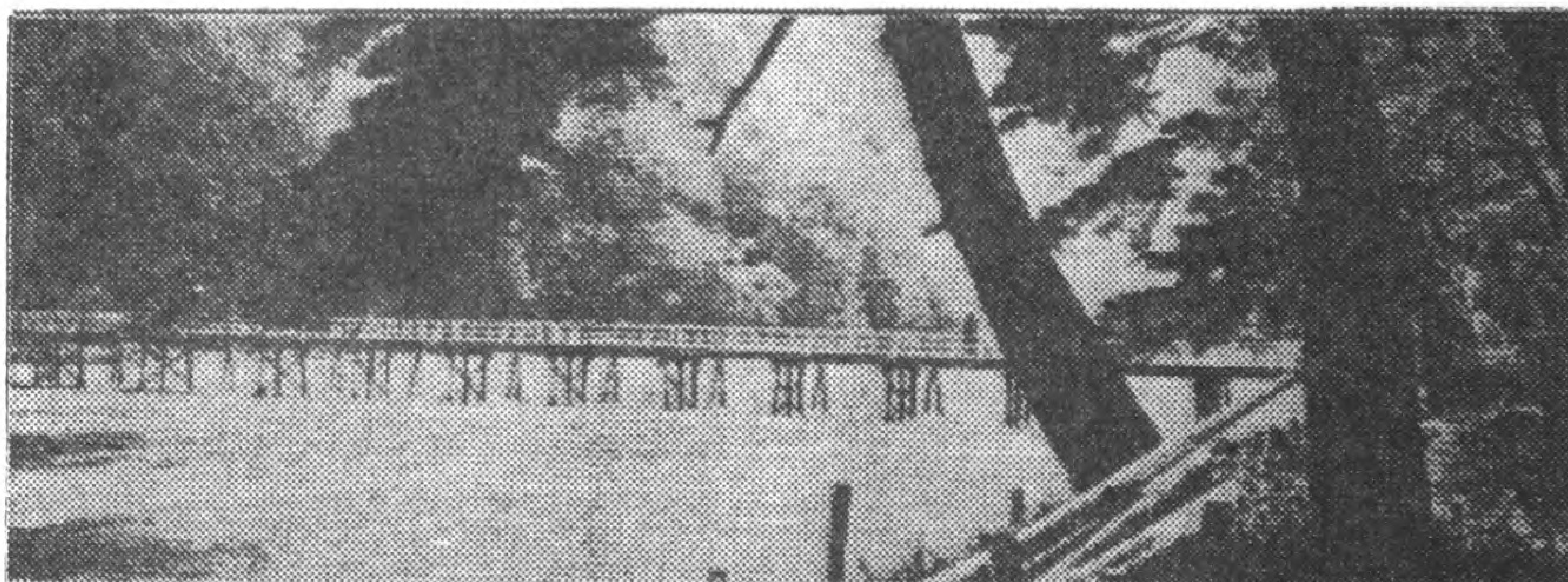
坪井中將の一家

貴族の養鶏

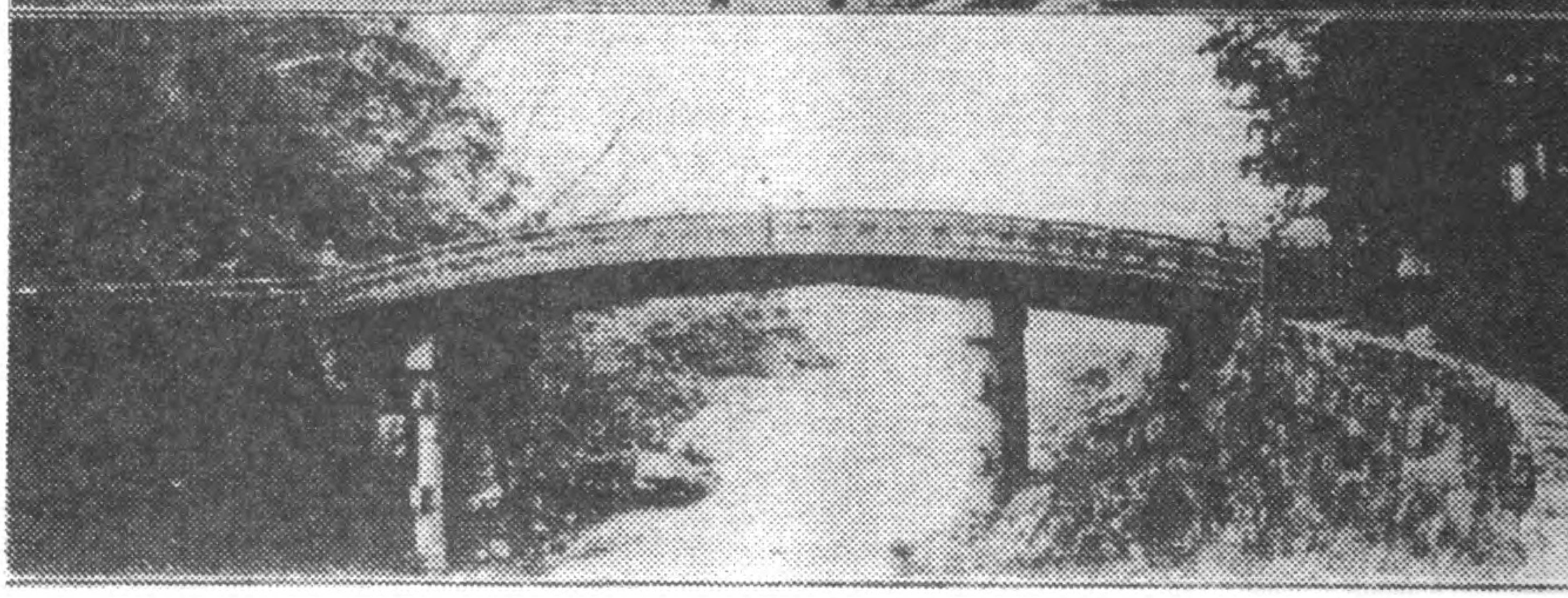


子爵法學士　前田利定君　同夫人清子君

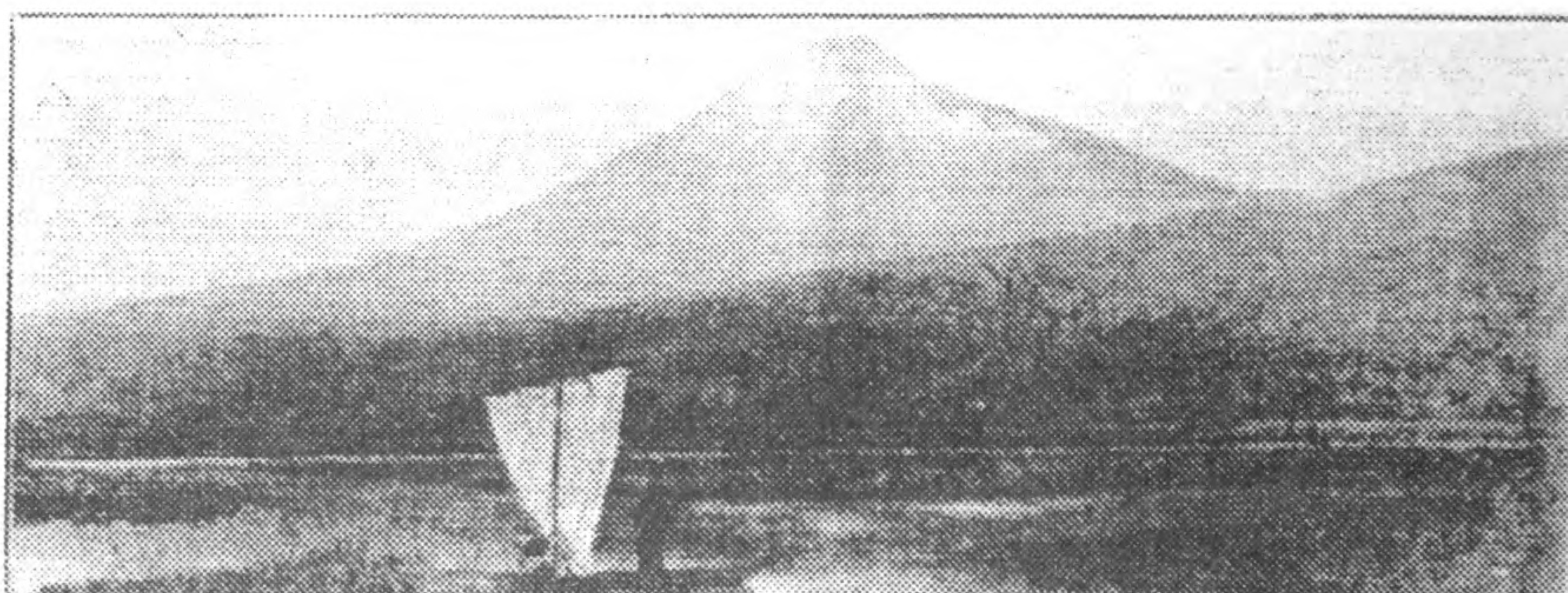
名所八景（一）



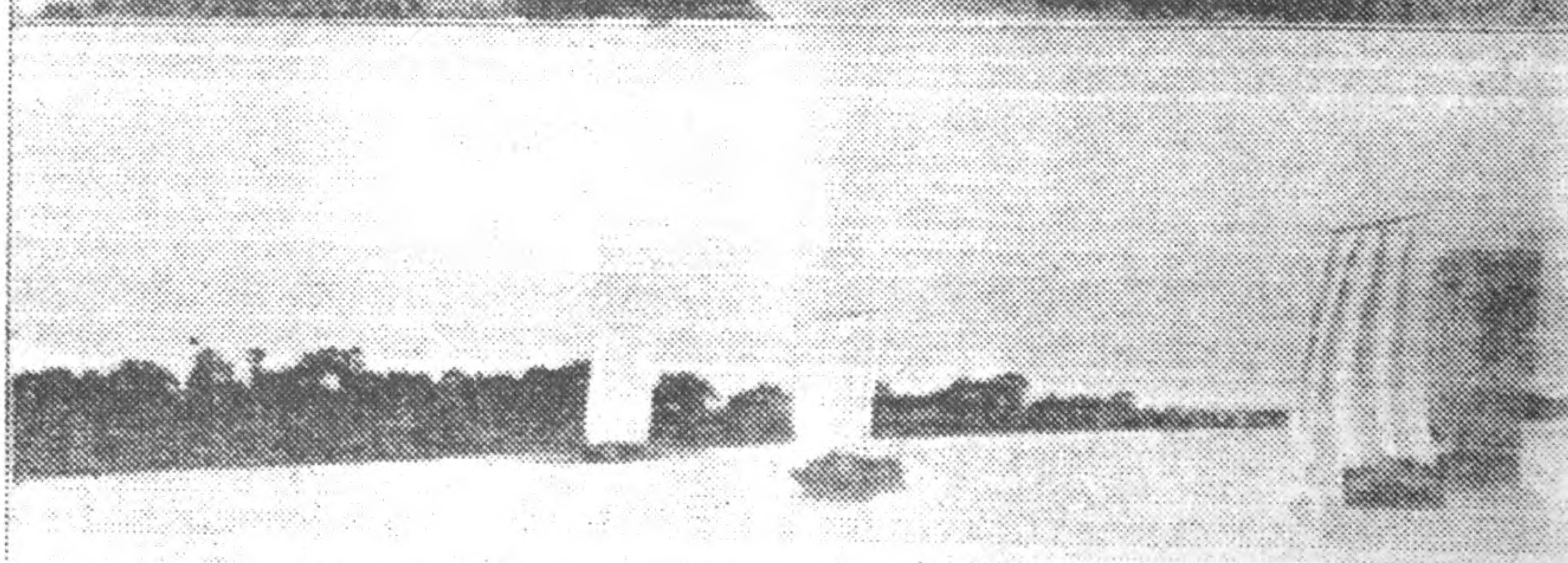
京都嵐山



日光御神橋

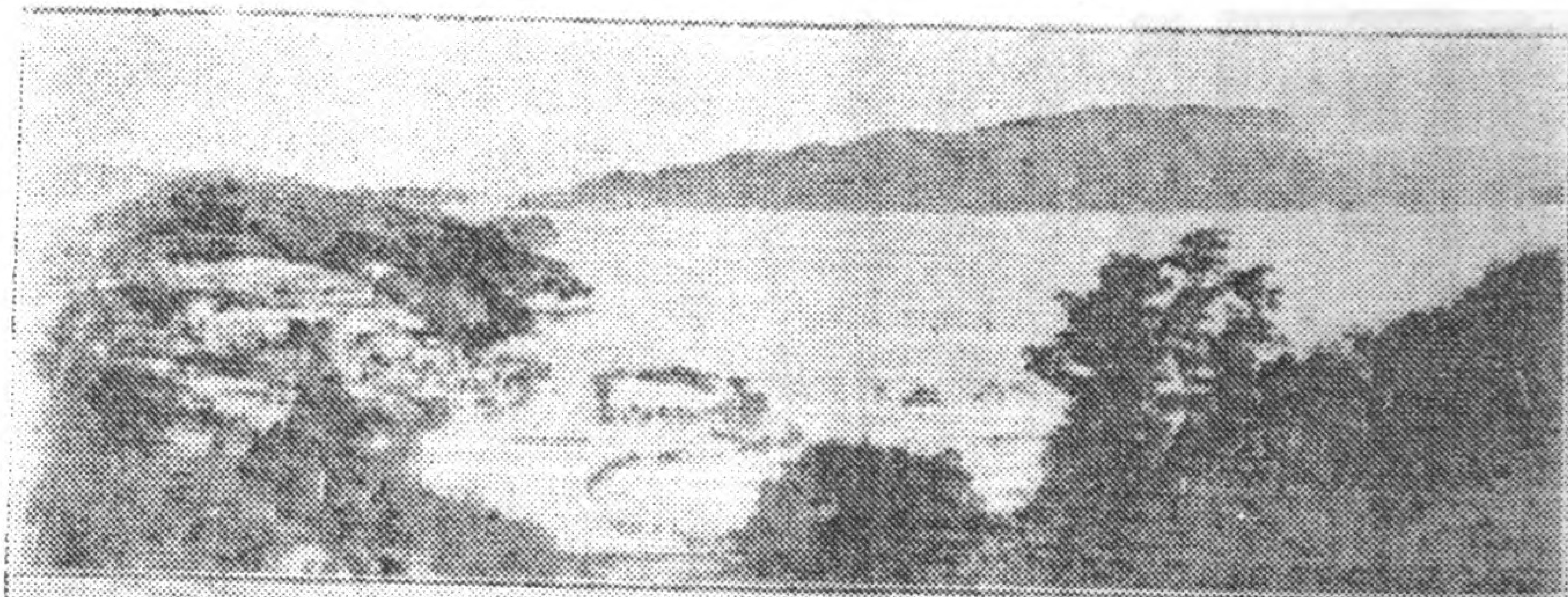


駿州富士川

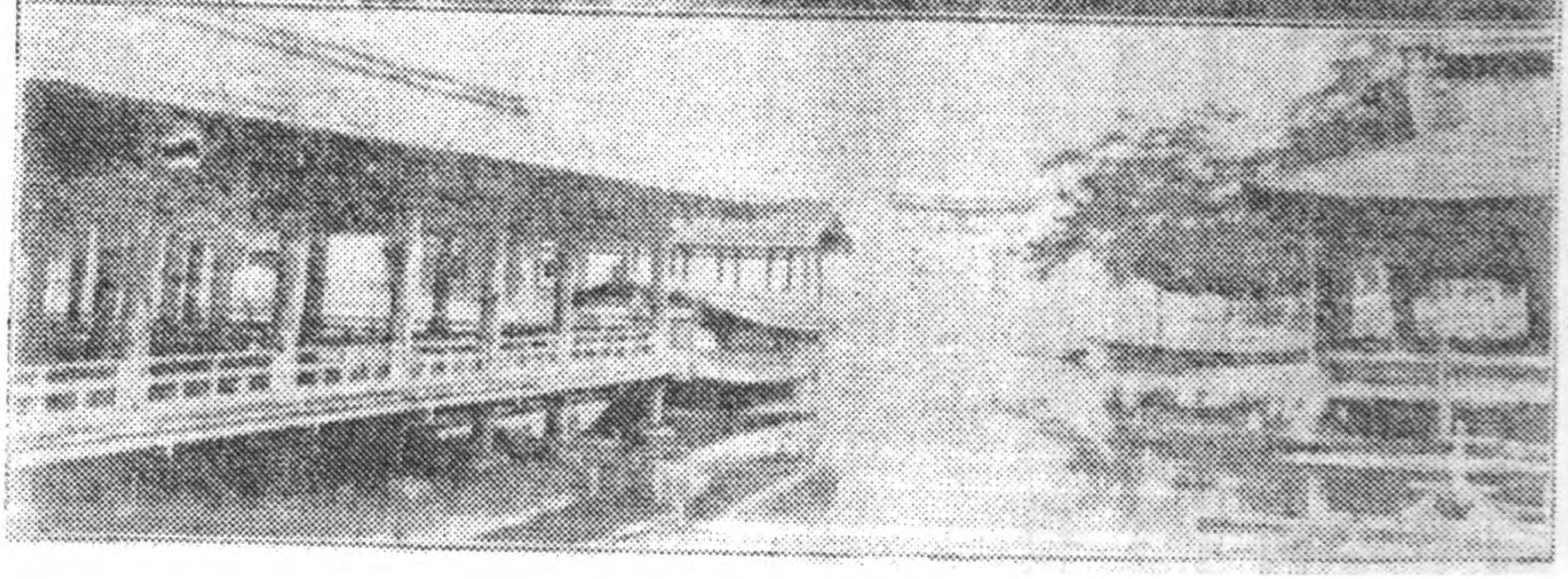


下總市川

名所八景（二）



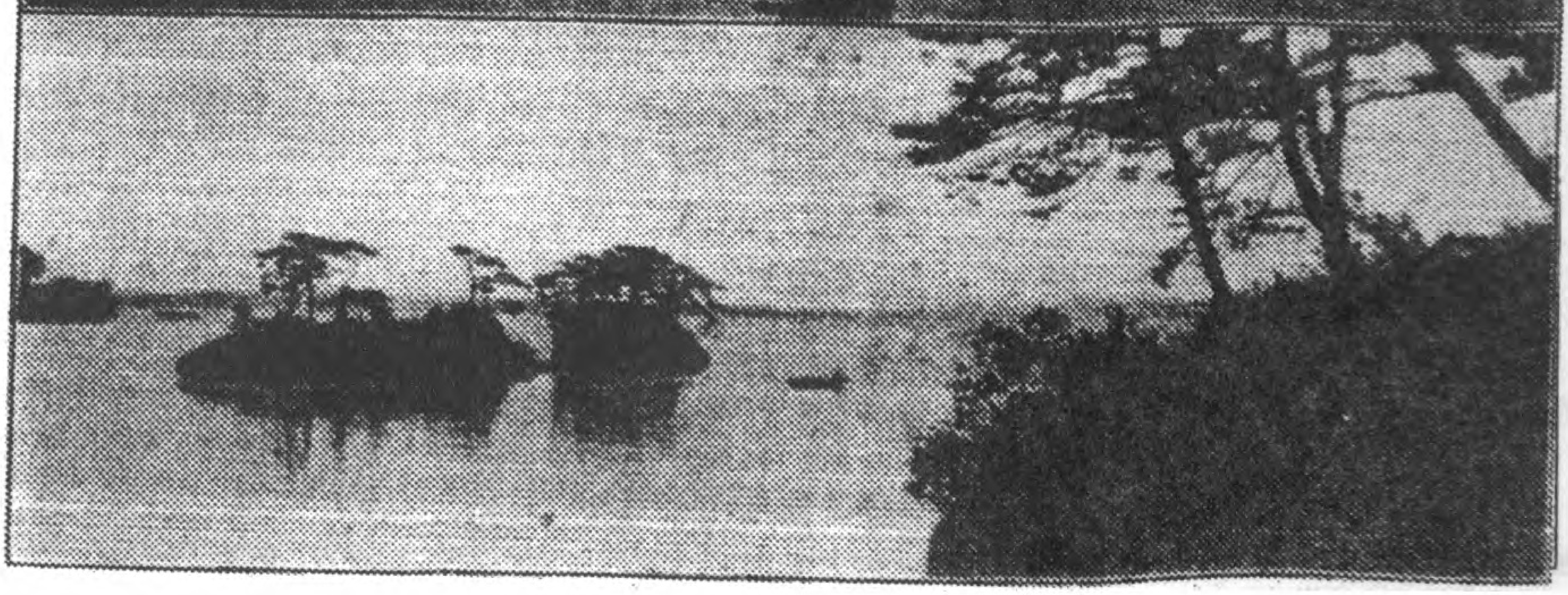
伊勢いせ港



安藝嚴島



品川夕陽



奥州松島



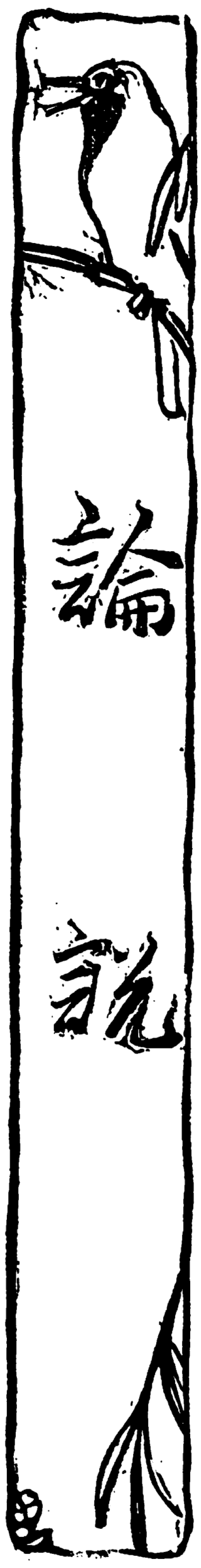
女鑑

第十七年第八號

朝顔

寐亂れ髪のあかつきに　淡く濃く色さま〳〵に
咲く朝がほの色見れば　目さむるばかり麗しく
よべかぞへにし蕾より　おほく咲にし葉隠れの
はなさへ見つけ心ゆく　ながめは盡きじ中々に
やがて萎まん様もなき　さかりの色を見頃にて
おのが勤にいそしめよ　その夜の夢の安らけく
あくれば花は昨日にも　おとらぬさまの咲振や
露のひぬ間と喞てるは　はなの心を知らぬなり

（中川愛氷作）



良妻賢母說

貞淑溫順たれ

文學博士　箕作元八

近來我國にては、男女同權論や、女子獨立論が、漸々盛んならんとするの傾きあり、又婦人等が、家庭内の事を打棄てるまでに、外部の事業に熱中することありても人が之を餘り怪しまぬ樣になつて來た、然るに却て、外國にては、女子獨立論、男女同等論に對する反動漸く起らんとしつゝある、

目今我國の女子に付き、改良を爲すべき事は決して少からず、從て種々の議論も出て居るが、現今我輩の眼に映ずる所の趨勢にては、歐米に於て既に物議となりたる如き、女子の放肆跋扈に終りはせぬかとの虞である、而して一たび此に至れば、後に救濟の道を講ずるも、其目的を達するは、頗る困難なることである、故に余は現今の如き過渡時代に於ては、頗る愼重の態度を取りて、女子問題を十分に研究し、眞の進歩を圖らんければならぬと考へる

男子も女子も相互に特別の事業をなし、相援助し相補充して、以て社會的事業を圓滿に大成する者である以上は、其間に少しも尊卑の區別は無いのである、唯一目したる所に於て、男子の事業が派手にあつて

女子のが比較的地味に見えるけれども、之に尊卑の別を附するは、皮相的觀察である

然るに今の我國の女子獨立論者は、男子の不品行を排斥するの餘、この原因を女子が獨立する能はずして、男子の奴隷の如くなるに歸し女子をして、獨立自營して、男子と競爭せしめんとし、甚だしきは女子に、結婚を以て主なる目的とす可からずと警戒するに至る、余も今の男子の不品行を慨嘆し、之を排斥することに於て、敢て是等の論者に讓らざるを信ず、然れども此救濟の方法は、寧ろ旗鼓堂々、男子の罪惡を攻撃し、之に社會的の制裁を加ふ可きであつて、或論者の如く、女子を煽動し、男子を敵視し、少くとも、外交の對手を扱ふの態度を取らしむる爲めに、之と同樣なる職業を營む如きは、第一に女性の美質を撲滅するのみならず、男子が必死となりて働きつゝある社會の激烈なる生存競爭場裡に、同數若くは其以上の女子を驅入れて、生計を益々困難ならしめ、從つて婚姻をも困難にし道德上及び經濟上社會に害毒を流すものである、女子に結婚を斷念すべし抔云ふは、男女自然の衝動を蔑如せんとする暴論なれば、其結果は風俗壞亂にありと云へば、夫で充分だと思ふ、

或は、女子獨立して職業を營む時は、夫婦共稼の手段を與ふるものであつて、結婚の爲にも都合好かる可しと云ふ者もあらんが、夫れも一理ある説である、余と雖、絕對的に女子に職業を敎ふ可らずといふのではない、夫婦共稼は暫くおき、夫病氣の時、或は寡婦となりたる時等に、共に益あるべし、然れども、此職業たる、成るべく女子に特有なるもので無くてはならぬ、然らざれば社會に害あり、又此職業を授けるにも、同時に良妻賢母たらしむる素養を怠らざることに注意せねばならぬと思ふ。

日本は今過渡時代の初期に在る、地方には尙ほ、長老政治的、組合的家族多く、一方の都には、歐米の交際社會に類したることも少なからず、或は舅の尙ほ全權を握つて嫁を壓する家族あれば、子女の敎育を放

擲して、社會事業に奔走する若婦人もあり、元來日本婦人は、世界に殆んど比なき貞淑温順、献身的の婦人なり、彼等は義務の權化なり、彼等は温順なれども、時に其決心は鐵石の如し、彼等はその操の爲に死をだも恐れず、彼等は其子の爲に水火に入るを辭せず、況んや自己の樂しみを捨て、甘んじて苦しみを嘗めて以て、其夫の事業を翼贊するに於てをや、然れども彼等は教育に於て大に缺乏せり、彼等はその智識に於て、其の趣味に於て、男子には劣る所多し、是れ男子をして已れを尊敬せしめ、男子を補助し、男子を保護し、男子を救濟し、男子を慰藉し、男子を奬勵する天職をつくすに當りて、甚だしく不足を感ぜしむる所である、

故に目下女子教育は國家の急務たるや勿論なり、然れども今の教育家は、果して理想的の教育を爲しつゝあるか、彼等は良妻賢母の修養を敎へずして、僅に抽象的の倫理を講じ、却つて一方には良妻賢母たるべき者が、最も賤しむべき虛榮心、利己心を抑制することを忘る者あり、或者は女子に獨立論を敎へて女子に家庭の事を斷念せんと勸めつゝあるに非ずや、或者は運動會、卒業式等に、華美を競うてその虛榮心を養成しつゝあるに非ずや、或者は平生に於てすら、其衣服の競爭を制止せずして、其節儉の心を撲滅しつゝあるに非ずや、斯の如く成り往かば、彼等は才智まだ十分ならずして、利己心虛榮心のみ盛んとなりて、己が華美なる服裝を得自由に交際を爲さんが爲に、其夫の心を只利の一方に向けんとするに至る恐あり、此塲合に其妻の希望に從ふ所の男子は、更に高尚なる目的を捨つることあるべく、之に從はざる夫は家庭の不和不快に苦しめらるゝに至るであらう。

世の西洋心醉者は、歐米特に米國にて女子の權力強きを、文明の徴候の如く思ふ人が隨分少くない樣だ然し、之れは、餘程考慮を要する事である、西洋にて現に女子跋扈に對する反動の暗流がある、多くの有

爲の男子が立派なる位置を有し、可なりの財産を有するにも拘はらず、圓滿の家庭を作る可き婦人なきため特に結婚せざる者が、今中々多くある、余はドイツにて斯る種類の人を見た、彼は云つた、『今の婦人は利己心强く、其結婚するは、樂を爲すを目的とするから、夫となる者は、自由を奪はれて了ふ、自分の向上心を制肘せられる、結婚は自分の仕事を妨害するもので慰藉を得る事は中々稀である』、余が確かなる人より聞きたる所にては、米國には斯る男子甚だ多しと云ふ、其言ふ所は、少しく極端かも知れないが、多少其事情はあると思ふ、現に余は某々學者の妻君が其學問に忠實なるに同情を表せず、己が交際好なるが爲に、其夫をして氣の毒なる狀態に置かしめて居るのを知つて居る、又某紳士が營々として働きつゝあるに、妻君は家にありて之を慰藉するに勤めずして、絶えず旅行をなし、宴會に行くことをのみ爲しつゝあるを知つて居る、夫から妙齡の女子が半老者の富豪に嫁するは、此皆利己心の爲にして一邊の愛情なきものである、然らざるも妻が夫に對し、外交的態度を取ッて、之を駕御するの方法を講じ之を若き婦人に敎へつゝあるのもある。

勿論、西洋の社會と雖も、其大多數が斯の如きものであるとは言はれぬ、否中には極めて想想的の家庭もある、婦人にして學問もあり、常識もあり、良妻賢母の資格を具備して、婦人の模範と成る可き者も少くない、余が嘗て讀んだ米國のある雜誌に未婚既婚の夫人等が、寄り集りて、其品定をする話がある、勿論想像話であるが、其內で一番怜悧な婦人が、妾は、我夫を以て世界中の最も幸福なる人となすことを理想とするから、自然我夫の敬愛を得たと云ふてゐる、即ち此米國記者の理想婦人は、我輩の理想とする、貞淑温良の夫人であつて、家庭は差措きても、外部に働きて功名を顯す婦人を理想とはして居らぬのである、唯前に述べた樣な男女關係の例は、今の文明國と稱する國に於て決して少くない、此儘にして置け

ば益々甚だしくなるかも知れぬ、夫から不貞操なる行爲が、此等の國の上流中流に於ては、日本よりも確かに多いのである、勿論之は男女同罪であるが、やはり圓滿なる家庭を得ることが困難になりて結婚が極めて晩くなるに基く所が多いのではあるまいか。

何にしても我邦の女子教育家は、一も西洋、二も西洋と、西洋にある事は、皆善い様に思ふ考を根本的に捨てゝ、眞面目に未來の婦人の養成を研究せねばならぬ、先づ余の考にては、左の如き點に最も注意せねばならぬと思ふ。

一、女子教育は良妻賢母を作ることを主眼とすること。

二、從つて日本婦人に固有なる貞淑温良の性質を成るべく保存し、必要なる科學的智識を授けて、其常識を勸誘し、健全なる文學美術を教へて其趣味を高尚にすること。

一、女子特有の虚榮心を抑制し、其慈愛心獻身的精神を發揮せしむること。

一、女學生をして平生節儉を尊ぶの風を養成せしむ可きこと。(目下我國の女學生は歐米の者より華美なる服裝を爲しつゝあり、愼むべし)

一、職業を教ふる時は、特別に女子に適して、將來男子と競爭せざる可らざる如きものを選ばざる事。

此精神を以て、女子教育に從事せば、庶幾くは、今將に起らんとしつゝある弊害を除き、理想的婦人を作りて、彼等をして、彼の學問職業に從事するため往々早くより家庭と離れる如きことなく、良感化を失ひつゝある男子を、再び温き家庭の和氣を以て包み、之を救濟保護せしめ、以て社會全體を健全幸福ならしむるを得るならん。

家庭に於ける分業

伯爵　板垣退助

女子教育は良妻賢母を作ることを主要とせねばならぬ、或學者は婦人の理想を高尚にし、婦人の權利を擴張して、將に來らんとする新時代の要求に適應するの準備を爲すべしと絶叫するけれど、是れ一種の突飛的議論に過ぎない、其聲の高い割合に、其實の擧らざるは覩易きことである、成程婦人の理想を高尚にし、婦人の權利を擴張する至極尤のことで、誰も異論はあるまいが、併し旦夕に行はるゝことではない、所謂婦人の天分教育、習慣等の健全な時に於て、始めて主張すべく絶叫すべきである、斯る事は先づ良妻賢母なるものが出來て、漸次に實行さるゝ譯である、又良妻賢母なるものは、何れの時代にも必要であつて、若し之がなかつたならば、社會は解散し、國家は滅亡しなければならぬ。

然るに仔細に婦人の天分教育、習慣等を撿べずして、直に其理想を高尚にし、其權利を擴張すべしと絶叫する如きは、其本を顧みずして、其末に走るものと云はねばならぬ、自分は女子の天分の不完全なるを知り、教育の不備なるをも知り、習慣の惡きをも知る、これ啻に婦人のみならず、男子に於ても、夙に此缺點あるを知つて居る、世人は動もすれば、婦人は決して良妻賢母に甘んずべきものにあらずして、其智識を發展し、其地位を增進し、其權利を擴張して、男子と相對等して、其幸福を平分すべしと云ふ、甚だ嘉すべき主張である、されど婦人には婦人だけの天分あり、教育あり、習慣あり、一々男子と相對等し、其幸福を平分にすることの出來ぬ場合もあり、境遇もなきにあらずと思ふ、

又婦人は良妻賢母になりたりとて、其智識を發展し其徳器を琢磨し、其地位を增進し、其權利を擴張して、男子と對等の幸福を平分することの出來ぬ理由はあるまい、但婦人中の或者に於ては、天分上若く

は或事情の爲に妻たり母たることの出來ぬものもあるべきが、それ等には音樂とか繪畫とか、相當の娯樂もあり、仕事もあるのである、自分は斯る婦人にまでも、妻たり母たるを强ゆべしとは云はぬ、素より普通一般の婦人は、良妻賢母たるべしと要めたるのみである、

人や丶もすれば、良妻賢母を云爲し、若くは之を教養する學校を批難するものもあるが、婦人は男子と異り、直接に社會的大事業を爲し遂げるの資に乏しいけれども、隨つて一家の平和と調停とを得るには遠く男子の及ばざる所である、殊に其兒童を育て敎育するは、專ら婦人の手にありて、男子はすべて此煩に堪へざるものである、何となれば男子は平生社會に出で丶種々に經營し、貢獻し居るを以て、顧みて其兒童の育成敎養までも爲すべき遑なく、亦心得なきより、知らず識らず放任することになる、而して兒童は將來の大人たり、相續者たりであるから兒に對しては賢母、夫に對しては良妻にならねばならぬに誰も異議を唱ふるものはあるまい、之に異議を挾むものは、未だ男女の本性を解せぬ人である、

女子たるの道

子爵　秋元興朝

女子敎育の要は、女子を良妻賢母たらしむるにあることは論を俟たぬ話である、然るに近來それを否定するものが出るやうになつた、個人主義から云へば理屈はないこともないが、その個人主義なるものが、昔の武士道のやうに、默々の裡に人格を高める、人權を完全にするといふ如きものではあるまい、一國があれば社會がある、個人主義で以てこの社會が立つて行くことが出來るであらうか、哲學の見地から云へば、個人主義もよいが、實行上からは、絕對の個人主義で押通して行くことは出來ぬ、即ち社會といふ觀

念がなければ、公徳も共にない譯であるから、

さて如何なれば女子は良妻賢母たるべきものであるか、良妻賢母たれと女子に勸むるのは、如何なる譯であるかといへば、女子は妻となるべきものであるといふことは論を俟たぬ話であらう、既に妻となれば、惡妻となるべきものではあるまい、而して妻が一面に母となる、これ亦愚母となるべきものであるまい、必ず良妻賢母とならねばならぬことは、一と二を合して三といふよりも明らかなることである、苟も社會といふ觀念があり、一家といふ觀念があれば、女子をして良妻賢母とならしむることの大切なるは云ふまでもなきことである、

然るに女子に良妻賢母たれと勸むるは、女子をして卑屈ならしめ、奴隷たらしむるものである、といふ如き、浮ついた女子には耳ざはりのよいことを唱へて、それを時代に伴ふ新説の如く喋々して居るものがある、實はこれ位淺薄なる云分はないもので、卑屈の如く思ひ、奴隷の如く感ずるのは、まだ良妻賢母を解せぬからである、さて如何にすれば良妻賢母と稱せられ得べきかと云ふことに就ては、それは時世に伴つて行かねばならぬ、併し突飛に軌道を外してはならぬ、即ち中庸といふことがむづかしい所以である、そこで我國の女子には日本の女子といふ考を捨てゝはならぬ、我國の女子に我國特有の美質がある、温良貞淑の徳の如きは第一に數ふべきものである、鼠は鼠として、猫は猫として其體を備へ、その長所を有して居る如く、歴史上から習慣を容易に換へることは出來ぬ、弊は矯めても、根本から破壞することはよくない、日本の女子を全然西洋の女子の如くしてしまふ如きことは、善惡に拘らずよくないことである、

堅實なる良妻賢母となり、技藝に堪能であれば、束縛を受けるも受けぬもない話である、即ち女子の權利は自然に認められる譯で、徒らに非良妻賢母説を唱ふるは、女子に自殺をすゝめると同じ事である、



胃腸の養生法

醫學博士 長與稱吉

◉咀嚼の不完全は胃病の原因

然し世の中には健全な歯牙を有つて居ながら、咀嚼を充分にしない人がある。尤も日本には昔から「早飯早糞早仕度」などゝいつて、早く飯を食ふのを一つの藝――寧ろ美風となし、盛んに之れを奬勵したものだ、現今でも業務の忙しい商家、仕事を急ぐ職人などは、鵜呑みにさせないまでに急がせる惡弊があつて、少しでも永く食膳に向つて居ると、忽ち「永飯だ、大食ひだ」などゝいつて、大いに批難する、是れでは丸で「胃病になれ、なれ」と奬めるやうなもので、實に愚の極だ。

そこへいつては流石に歐洲人は感心である。衛生思想が發達して居るだけに、早くも此の點に着目し一回の食事に一時間の餘も費して、充分に咀嚼する風習になつて居る。尤も是れは食物の關係で、パンや肉類は自然充分に噛まなければならぬ、性質を備へて居るからでもあらうけれど、米飯や麥飯が鵜呑みにされるからといつて、咀嚼を怠つて可いといふ事は決してないのである、言ふまでもなく

◉食品の硬軟は決して消化不消化の標準にはならない。

ので、硬いものでも能く噛めば、消化し易い食品と

なり、軟かなものでも嚙み方が粗末であると、消化し難い食品となるのであるから、返す返すも此の點に注意して貰いたいものだ。

元來、吾々同胞の食品は、米だの、麥だの、豆だのといふ、澱粉質のものが主になつて居るのだから肉類よりも一層克く嚼んで、唾液と克く混和するやうにする必要があるのだ。何故ならば唾液は口内で、澱粉質の一部を消化する作用を有つて居るからである。然らば

◉日本食どれだけ費つて咀嚼したらば良いか

といふに余の實驗に據ると、肉眼で見て、十分に咀嚼せられて居るといふまでには、三椀の飯に、大凡二十七分間かゝる。故に余の病院では、患者に向つて一椀の飯を十分間程かゝつて、咀嚼させるやうに勸めて居る。斯の如く習慣を作つて、二三週間もつゞけてゆくと、顯然其効が現はれて來て、腹具合が良くなるから、最早、早食をしやうと思つても出來なくなるのである。

咀嚼に就ての利益は尙ほ此の外にもある。夫れは咀嚼のために胃液の分泌が反射的に高まるといふ事である。之れは間接に現はれる利益で、左程必要でないやうに思はれるが、決して然うでない、咀嚼が久しければ其の間に胃液が分泌して、食物を消化す用意をなし、口から降つて來るのを待ち受けて、直ちに消化に着手るのである。之れは健康な人にも必要な事は勿論であるが、殊に胃の弱つた人は、猶更ら反射的に胃の分泌を高めて、胃液の不足を補ふのが必要なのである。

◉唾液の話

唾液は舌の下にある舌下腺や顎下腺、頰部にある耳下腺などから分泌する混合液で、此の中には「プチアリン」といふ一種の醱酵素があつて、これが澱粉質の消化を營むのである。俗間には飯に茶を混けたり、又は液汁をかけたりして、さらさらと搔込む

習慣があるが、これは宜しくない、唾液が充分に混和しないばかりでなく、咀嚼も思ふやうに出來ないからして、

◉茶漬や汁かけ飯は胃に大毒

である必要があれば、湯茶や、汁は別々に取つたがよい。

其他唾液は、水分に乏しいごつごつした食品や、其他の固形食餌を粘滑にして、食道通過を容易ならしめる作用を有つて居る。其の證據に、麥焦や、卵の黄身、卵の花のやうなものは、嚼む必要はなけれども、唾液を混ぜずには迚も嚥みこむことが能ないのである。

以上述べ來つた所を總括すると

第一には　急食の弊を避け遲食の習慣を作る事
第二には　粥のやうになるまで丁寧に咀嚼する事
第三には　歯牙の養生、口内の清淨を怠らぬ事

等で、是等の要件は是非各自に實行して貰いたいのである。

◉舌の活動

歯牙と唾液との間に在つて、攝食時に忠實な働きを爲すのは、舌である。舌は談話器械として重要なる役目を務むる外に、消化器械として大切な任務を果すのである。即ち

第一に　味覺を司ること。物を味はふ役目
第二に　食物を歯の間に送ること。
第三に　食物を克く唾液に混和せしめる事。
第四に　食物を咽頭の方に送ること。

等である。

◉咽頭から食道まで

咽頭は食道の入り口で、口腔の最も奥、鼻孔の後下方に當つた所、此の部は食道と氣道との追分で、一歩過ると、食物が氣管の中へ落ち込まうとする、危險な道路である、然しそこには造物主が巧みな防禦物を設けて、其の過ちを無からしむべく工夫され

てある。防禦物とは何か、夫は會厭軟骨といふ、匙形の小片で、舌の後下方にあつて、食物の通過時に際し、彼れは巧に氣道の上孔を掩ひ盡すのである。

食物が咽頭を無事に下つて、食道へさしかかると直ちに食道では嚥下運動といふのを起して、殘りなくそれを胃中に送り下げる。食道の下端、正に胃に入らんとする口を『解剖上』噴門といふ。

門歯から茲までの距離は普通約八寸二分内外。

◉二　食物は胃中で如何に變化さるゝか

唾液と共に嚥下された食物は、胃の中へ來ても、先づ最初の間は、唾液の作用を受けて澱粉消化をされつゝあるが、食物が口内に入ると間もなく、其の前から少しづゝ分泌されて居た胃液が、漸次濃厚になつて來て、同時に唾液の作用が止まつて來る。

胃液の中には、蛋白質（肉類）を消化する鹽酸とペプシン。牛乳を凝固せしめるラーブ醱酵素などいふ物があるが、其の中で最も大切なのは鹽酸である。

余の調査た所によると、本邦人は食後一時間十五分たてば、胃液が最も濃厚になつて來る。恰も眞清水が地中から涌出る如くに、少しづゝ分泌さるゝのが、其の時刻に至ると、最も濃厚になつて、從つて其の中の鹽酸が亦濃厚の極點に達するのである。此の時唾液が自己の作用を失ふのは、鹽酸の爲めで、最早唾液は胃中に於て役に立たないものとなる。其の代り鹽酸はペプシンと力を協せて蛋白質の消化を營むのである。蛋白質の消化せられる狀態は恰も水の中に入れた氷砂糖が漸々溶けてゆく樣な物である

斯の如くにして胃液が食物を溶かして居る間に、胃は全力を擧げて、盛んに運動を始める。是れ即ち胃の運動官能で、食物をば胃液と克く混和せしめ、磨り潰すやうに、揉みつ、こなしつする。而して漸次其の內容を腸に向つて輸り出すのである。

此の運動官能は、食物の種類と分量とで相違があるが、余は本邦人の食物と、分量を平均して、普通

一食に飯三椀、牛肉三十匁、豆腐半丁と假定し、之れによつて試驗した所が、其の食物が丁度五時間を經て、全く腸の方へ送り出されて了ふ事を知り得た。で、余はこれを運動官能の一位と見做して居る。
然し之れは幼時からの習慣によつて、非常に異つて來るもので、農夫の如きは一度に五六椀も平げて、夫れで平氣だ、即ち胃の官能は充分これに耐え得るのである。斯の如く胃の官能が、普通よりも盛んになつても、夫れは決して病氣とは言はれないが若し之れに反して、所謂一位以下に減弱した時——即ち前に擧げた、食物を五時間で消化して腸に送るといふ事が出來なくなつたならば、其の時は立派に病氣といつてよい。
胃の出口は、丁度手指を二本程通ずる小程さな孔で解剖上そこを『幽門』と名づけらるゝ。
胃には分泌、運動の官能を有する外に、食物を吸收する官能と、知覺を主宰る官能を有つて居るが、これは前二者の官能に比較すれば、左まで重要のものでないから略して置く。（以下次號）

◎前號正誤　消化機官配列表三S字狀部の下『直腸』の二字を脫す

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第一　天氣と氣分

家庭をよく治めやうと思つたならば、先づ第一に家の人の氣分をよくすると云ふことが一番大切なことであります。併し氣分と云ふものは色々の自然の現象の爲に支配されて居るものでありますから、只人の注意計りでこれをよくすると云ふ譯には參りませぬ。
其の中にも天氣の好惡、氣候の寒暖、風の吹き鹽梅、氣壓の如何と云ふやうなことが最も人の氣分を動かすものであります。
それゆゑ、西洋人も羅馬人は或る風が吹く時は固有の羅馬人ではないといつて居りますが、これは或

る異なつた風の吹く時は其の影響の為に國民の性質まで動かされると云ふことを述べたのであります。

それですから、一家を治めるには天氣の好し惡しと云ふことに、主婦たる人がよく氣を付けなければなりませぬ、今日は天氣が惡い、暑苦しい、又妙な風が吹くと云ふとを自分が感じましたならば、年寄や子供は屹度氣分よくないと云ふことを考へまして、其の取扱ひ方によく氣を付けて行くやうにしなければなりませぬ。どう云ふ風に氣を付けるかと申しますと、詰り逆はないやうに、一層常時より心を用ひて其の人の心を激させないやうにして行くと云ふことが大切であります。

丁度、子供などは外の動物と同じやうなものでありまして、雨の降る時、風の吹く時は焦れると云ふやうなことがあるのであります。總ての動物は皆天氣の為に支配されて居るものでありますが、取分け蜜蜂が雨の降る前、風の吹く前は大變巣の中で騒ぎ又鯉が天氣の時と雨の降る時とは運動の有様を異にすると云ふやうに、少し氣を付けて居ると自分の家に飼つて居る動物に就いても天氣の具合が分る程であります。

斯う云ふことは、主婦たる人がよく心得て今日はどうも子供が騒ぐかも知れない。又年寄がぢれて難かしい事を云ふかも知れぬと豫期して居ると云ふことは、丁度天氣豫報、地震豫報が出來るのと同じ譯であつて、其仕度をして置くことが出來ますから、一家の中を治めることが大變に容易く出來るのであります。

元來、氣分と云ふことは、總ての人の心の基礎となるものでありまして、人は全く氣分が惡くも好くもないと云ふことは少いものであります。何か熱心に事をして居るとか、外の事に心を奪はれて居る時は餘り氣分のよし、あしを感じませんが、其の外の時は、大抵好いか惡いか何方かに傾くのであります。殊に人の自分と云ふ考、學問上の語で云ふと自我と云ふものは、總て氣分と云ふことを中心として

出來て來るものでありまして、氣分が何時もいきいきして居ると云ふ人はこの世の中の見方も樂天的であつて、何をするにしても困難と戰つてゆくと云ふ考が起ります。又これと反對に絶えず氣分が惡いと云ふ人は、それが積り〳〵つて厭世的、悲觀的と云ふ風になつて來るのであります。

それですから、一家内の人の氣分を何時も好するやうに務めるのは最も大切なことであつて、これが家庭の幸福の根本になるのであります。前申したやうに天氣の具合からくる氣分と云ふものは殆ど人力では如何することも出來ないものでありますが、只それに堪へることが出來るやうに身體を養つて行くと云ふことが大切なことであります。

それで、次には身體の狀態に就いて御話しやうと思ひます。

第二　身体の狀態

今日の心理學は、只無形の心を調べる計りではない。其の心の基く處、或は心に伴つて離れない處の身體の有樣を大に注意して調べるやうになつて來たのであります。

それですから、人の心を調べるとか又人の心を慰めてゆくとか、又はこれを支配してゆくとか、又はこれを敎へてゆくとか云ふやうな事をするのに就いては、必ず其の身體の有樣に氣を付けねばならないのであります。

身體の總ての作用が、充分になつて、立派な働をするやうにならなければ、心も充分に働くことが出來ないのでありますが、中にも内臟の働の惡いと云ふとが、最も多く氣分に關係するのであります。瘠せて居る人が癇癪持であつて、氣が短いと云ふのは腸胃が惡いからであります。腸胃が惡いと從つて身體の榮養が十分でない。其の爲に何か外から刺戟を受けると其刺戟の爲め直ぐ心が激してゆくやうになつて居るのであります。

そこで、一家の主婦たる人が家の人を取扱ふに就

ても瘠せて居る人、肥つて居る人、或は何處か病氣のある人など、それ〲特別の注意をして、其人々の氣分を傷はないやうにするのが必要であります。

子供はお腹の具合の惡い時に非常に喧しいことを云ふのであります。今申すやうに内臟が惡い爲に氣分がすつかり惡くなつてきて、何事でも面白くなく腹を立てやすいのでありますから、斯う云ふ時は、只叱つたり、只機嫌をとつたりしても直るものではありません。只機嫌をとつて居る時には、餘程氣の長い人でも、「是れ程氣を長くしてやるのに、まだ直らないか」と云つて疳癪を起すやうになるのであります。勿論氣を長くして逆はないやうに親切にして取扱つてやると云ふことは大事なことでありますが、第一に身體をよく直してやると云ふことに務めなければならない。

それゆゑ、主婦たる人がよく生理衛生の事を心得て居るべき事は勿論のこと、看護の仕方、或は平生有り觸れてよく起る病氣の原因と云ふやうな事もよく心得て居つて、醫者に掛ける迄もなく養生によつて其の病氣を取り去つて行くと云ふことは大事なことであります。これをやつて見ても、只の養生では到底癒らないと云ふことを見て取つたならば、少しも猶豫なくこれを醫者に見せて、醫者と相談して根本的に其の身體の惡い處を直さなければなりませぬ。

年寄などが氣候や天氣の具合や、其の外込入つた色々の刺戟の爲に心を動し氣を焦立つと云ふのは、これは持前でありますから、仕方がないやうなものでありますけれども、それとても身體がよくて自分の自由になると云ふ間は、其の慰め方によつて、その心を和げ、何時も氣分をよく保たせることが出來るのであります。年寄に就いては、やはり子供と同じやうに身體に注意すると云ふことが必要であります。

全體、日本の人は大變に氣が短くて物に激し易い人種である。殊に日本人は自殺堅氣と云ふやうなとがあると云ふ位で、直に怒つて、命を捨てゝ仕舞ひ

或は直に失望して氣を落して仕舞と云ふ事がある。これは勿論、色々の關係から人種の持前として現れて來たのでありませうが、之を益々助けて強くするものは日本人の腸胃の惡いと云ふことであります。

日本の人は西洋の人に較べると割合に粗食をする。主に菜食であつて、肉や脂肪に乏しいから、澤山食べねばならぬ。すると運動を十分にして消化を助けなければならぬのでありますが、其の割合に運動と云ふことを怠つて居たのみならず子供などに乳を飲ますのも誠に不規則であります。乳離れをしてからも間食をさせなどして誠に不規則であります。其の爲に胃は始終働て居ると云ふやうな點からして、次第々々に弱くなつて腸胃病と云ふものは日本人の普通の病氣であると云ふやうになつてまゐりました。其の爲に始終氣分が惡い人が多いのであります。



家を治める人はよく此の邊に氣を付けて子供がやかましく云つてもそれは一時のことでありますから、一寸位の事に妄りに間食をせないやうにし、又同じ食物を選ぶにしても、其の成分をよく知つて居つて、安値いものでも滋養分のあるものを選んで年寄には年寄、子供には子供と云ふやうに適當な食物を食べさせると云ふことは、いつも

心を爽かにし、氣分をよくする爲めに必要であります。

身體のことは食物計りではありません。一般の衞生上運動が必要であると云ふことは申す迄もないことであります。子供は學校で色々の運動法を習つて來ますが、家に於ても色々の運動法を考へて之を行ふと云ふことが必要であります。休暇の時などによく適當な運動をすると云ふことは、只一家團欒の樂みのほかに、必要なことがあるのであります。今迄は一家團欒と云ふことは一處にぢつと坐つて居るやうな事と思つて居つたのでありますが郊外散歩もよい、室内運動もよい。ピンポンをすると云ふやうな事もよい娯樂であります。それゆゑ老人には余り馬鹿々々しくない適當な運動をすゝめるがよいのであります。こゝによく心を用ひる人は偉い人でも馬鹿らしいなど丶云はないで運動をよくして身體を保つ事をするのであります。

故岩倉公は始めて啞鈴の來た時、(世の人は「おしやぶり」のやうで馬鹿げて居るといやがつたのでありますが、)高等師範學校らか(其時分は東京師範學校と云つたのですが)、敎師をわざ〳〵御頼みになつて御邸の中で敎師と只二人で啞鈴の稽古をなさつたと云ふことであります。

それですから氣を付けて自分で自分の身體を矯めて行くと云ふことは只自分計りの爲めでなく一家のものがおの〳〵自分の身體によく注意すれば、一家全體の氣分がよくなつてくるのであります。それですから子供の爲に、又一家内の爲になるのであると思つて、めい〳〵によく身體を大事にすること、運動に氣を付ける事が大切であります。

其外冷水浴をするとか、身體を摩擦するとか云ふやうな事も、まことによい事であります、詰り皮膚を丈夫にすると云ふことは、風を引くとか肺病に罹らないとか云ふこと計りではない。人の心の働を强くすると云ふことは非常に必要なことであります。皮膚が弱くては忍耐力が弱く何事をするにしても續

かないと云ふことになるのであります。皮膚が丈夫になると忍耐力が強くなつて難しい事でも長く續ける事が出來るのであります。

それで冷水浴は余り小さい子供の好まないものでありまして、子供は冷たいものがかゝるのは大變嫌ふものでありますが、少し譯が分つて來たならば身體を微温湯でふいてやり、段々進んでは冷水で拭いてやるとか、少し大きくなつては湯殿へ行つて朝冷い水をあびさせると云ふことが皮膚を丈夫にするに必要であります。

それから、日に焦けると云つて子供を家の中に引籠めて計りおく事は大變に惡い事であります。日にやけて色が黒くなつたのは家の中に入れて置けば直に治つて白くなるものであります。併し一旦弱い身體になつた者は中々取り返す事が出來ませんから、只色が黒くなると云ふやうな眼前のことの爲に日向に出て日光に當ると云ふことを嫌ふやうな事は極いけないことであります。勿論帽子も被らず傘もさゝず夏の炎天に子供や女を出すと云ふことはよくないことでありますから、それは戒めなければならぬ事でありますが、春とか秋とか云ふやうな時、其外夏でも朝とか夕とか云ふやうな時に直接に身體を日光に當てると云ふことは、衛生上大變によいことであります。

斯う云ふ事を私が心理學上から御話をしますと、何か學問違ひの御話をして居るやうでありますが、前にも申す通り、今日の心理學と云ふものは生理學と關係して離れる事の出來ないものであります。さうして心をよくしやうとするには、どうしても身體から導いて來なければならぬのであります。全體衛生と云ふことは只直接身體を丈夫にすると云ふことでありますが、其最後の目的は心を丈夫にすると云ふ事にあるのであります。

それですから此の事を皆さんが御忘れにならないで一家をよく治めて行かうと云ふには、家庭の衛生と云ふことに注意することを希望するのでありま

す。併し一般に家庭衞生の事に就きましては長與博士から御話がありますから、私は只心に關することのみを說かうと思ひます。

●孝女父母を感化す

下谷區入谷町三三九指物職白石某長女お君（十一才）は目下萬年小學校尋常科四年級に通學し居り學業の成績及び操行等極めて嘉賞すべき少女なるが一昨年十二月中學校にて賭博の不都合なる事を說示されし以來篤て自分の兩親が賭博を好み常に賭場などに出入するを子供心にも悲しみ爾來日々母を捕へて諫言至らざるなく力及ばぬ時は交番に行き巡査に其可否を問ふべしなど幼心にも一生懸命になりて兩親を正道に導かんと勉めしかば母も此頃に至りて全く前非を後悔しお君は又之れに力を得て爾來は母の外出する每に必ず同伴し或は尾行し母と相談の上父が得意先より得來る報酬も父に代りて自ら受取り一通りの生活費を差引たる上其殘金丈けを父に渡し或は他家より自宅を賭場に借り度き由申込たる者あれば自ら斷然之を謝絕する等かよわき少女の一心を以て遂に全く兩親の惡習を矯正したるのみならず數日前受持敎員山下訓導がお君外數名を自宅に呼集め虛偽に就て訓戒を與へたる時お君は可愛き双眼に涙浮べながら私は先生に今迄虛偽を申して居りましたいつぞや皆のうち親や兄で賭博するものはないかと仰せられた時ありませぬと申しましたと悄然として申立て右の次第を詳しく物語りしかば同校職員一同は深くお君の功績を感じ翌十六日朝九時より溫習會の開くを幸ひ卒業生及び生徒一同の面前にて盛なる表彰式を擧行せりと

家庭と社交

小金井喜美子

何か家庭の事に就てとの折角のお尋ねですが、私は良人が持病があるのと、子供が多勢ありますのと尚ほ一つは家庭に餘裕が左樣ないのとで、世間の方々のやうに交際場裏に立たないで、只僅に校友會位へ顏を出して、其所で御交際をすると云ふ風であるから、自然諸家へあがつて家庭を拜見すると云ふ機會が少ないので、從つて之ぞと云ふ思ひ浮ぶ節もないのです、實は皆樣のやうに少しは社會の爲にも盡さねばならぬのである、けれども何分前に述べたやうな事情で、自分は思ひながらも爲る事は出來ませんから、まづ其は皆樣に願つて置て、其代り子供等を敎育して、他日其等を社會有用のものにしたいと云ふ事のみを心掛けて居りますが、併しまだ孰れも敎育の過渡時代であれば、果して如何に成り行きますか、若しも誤つて人樣の物笑ひになるやうな事は

あるまいかと、日夜それのみを氣遣つて居ります、左れば廣く眼を配つて種々の家庭を觀たことの無いのですから、取り立てお話をする事も無いが、私の心安く願つて居る某家の奥樣の仰せらるゝには、若しも非常に派出な家庭のお家へ伺つて夫を見ると、何うか自分も斯う華美にしたいと思ひ、また質素のお宅へ伺へば直ぐ其氣になり、何うも氣移りがしてならないものですが、まづそれは自分の今日の境遇や生活の程度等と照し合せて、如何に先方が華美を貴び或は質素を旨として居られましても、その華美といひ質素と云ふにも程度のある事なれば、何も他人樣を定規にするには及ばないかと考へます、すべて自己は自己の生活、境遇、性質等を克く省りみて交際するが良いと思ひます、尤も餘裕のある方々は自由に爲さるが良い、けれども世間の手前又は外見を憚りて身分不相應の事を爲さらぬが可い、諺に蟹は甲良に似せて穴を穿るとか、實に此は千古の金言で、克く處世の秘訣を盡して居ると考へます、而して交際を爲るにも自己に利益のある方をお友達に持たねばなりません、利益と云ひまして決して金品の恩惠を意味するのでは無い、謂ゆる智識の交換をしたり又は心附た事は互に注意もしやうが忠告もすると云ふやうな益友を持つと、斯ういふ風に爲したいものであるとお話しがありましたが、之は大いに私共の心得て居るべき要件であると思ひます、

前にも述べましたやうに、私は小供の教育をして他日自分に代つて社會に貢献させたいと一向に考へます所から、それに一つは良人が病身でありますから、それやこれやで箇樣な場處へ引込みましたが子供達は少し學校へ行くのに遠方で可愛相のやうである、けれども日々その遠方の所へ通學に往復するせいか、何れも壯健で感冒一つ引きません、ツイ先日のことでありました、或日曜日に良人が當年九つになるのを連れて散歩に行つてまゐりますと、良人は持病のために大いに疲勞を覺えたと云ふにも拘はらず、子供の元氣は壯んなもので、直ぐ庭へ出て運

動をして居ると云ふ工合であります、御覽の通り自家の庭園には樹木や花卉の類ばかりで、庭石といふものは一つもありません、と云ふのは子供達の運動場に供すると云ふ考であります、それ故に築山も泉水も庭石も無い、而して大きい樹木は兎も角として彼所此所に植えてある花卉の類は、みんな子供が野外で採取して來たもので、互に花の輪數の多少などを競爭して居ります、彼方に咲て居る月見草は、矢張りそれでありまして、野外ではあれ程成育しないものですが、あの通り昨今は花盛りで日々百五十乃至二百位の花が咲くので、互に自分〲の採取したもの丶輪數を數へて誇つて居ります、之に就て此程東京大學の理科へ通學なさる一人の學生の方は、朝に晩に宅の前を往復なさる丶所より、不圖あの月見草を御覽になつて大層良い種であるから、實を結びたらば少し分配を賴むと申込まれましてからは、一層喜んで居ります、

而して私共では、近所でお聞でも判りますが、學校のお友達でも平日はお遊びを斷つて置きまして、土曜日には皆樣にお出でを願つて十分にお遊びを願ふのであります、左れば土曜日には御近所が御迷惑な程賑かで、大人も小供も一緒になつて遊戲運動するのでありますが、御近所で小金井さんは小供化したと御仰る位ゐです、と云ふは大人も小人も倶に遊ぶのでありますからツマリ幼い者の好む事をしなければ興にならず、且つ一緒に娛しむと云ふ事にならないのであるから、鈕廻し電報遊といふやうな事をするので、倶に分け隔てなく娛しむから左樣云はる丶のであります、その代り平日は自家の小供だけで學校から皈りますと自由に庭園で運動させる事と定めておきます、ソレデ學校から戾りましても、決して復習など丶云ふ事は強いないで勝手に夕食まで遊ばして置き、食後再び或時刻まで一緒に雜話等をなし、時が來れば皆それ〲に書齋へ入つて仕舞ひますから、幼い者でも何か致すのです、而して朝は大きい者から遲刻してはならぬと云ふやうに先に出掛

て見せて決して側から催促は致しません、のみならず女中に帶を締めさせるの何のと云ふことは致させません、一切自分は自分で處置せねばならぬと云ふやうに致して居るのです、

私も平生餘暇さへ得ますれば讀書を致して、子供の敎育を誤らないやう、且は自分の心鏡を磨く事に意を用ゐて居りますが、中々及ばぬ事のみで慚入ります、但し之に就て一つの面白いお話があります、それは先頃の事でありました、私が感冒の心地で臥褥つて居りますと、末の當年三才になります者は、最早皆が書齋へ退きますと、私の枕邊に書籍を持つて參るのであります、何に致せ只今は箇樣な風に行つて居りますが、果して何う往くものでありますかそれに小供と云ふものは、變化の激しいものでありますから少しも油斷はなりません、

或學校の先生の仰せらるゝに、日曜日に餘り小供に運動を烈しく爲せると、何うも月曜日の授業時間に學科の飲込みが惡いのみならず、甚しく疲勞した者は居睡りをすると云ふ事をお聞き申しました、何にも之を聞き申してからと云ふではありません、その以前より前に述べましたやうに、土曜日に十分運動させまして、日曜日にはその都度方向を代へて良人が散歩に連れてまゐります、

夫から立ち入つて御存じのお友達などから、御子息などの入る學校の撰擇などに就て時々御相談に預りますが、その時は及ばずながら手の届くだけは御相談に應じて居ります、何うもお話し爲るやうな事が無くて濟みませんが、若しも御參考にもなる事があれば仕合せのことゝ存じます。

婦人の衞生

楠田病院長　楠田謙藏

近來は大部女子の獨立とか又は獨身生活などゝ云ふ事を見聞しますが、それは少しく極端ではあるまいか、成程時と處とにより、或は某事情の爲には獨

立もしなければなるまい、又獨立生活も良いかも知らんが、予の考へでは、無論女子と云ふものは、他日男性と結婚して子孫を繁殖せしめねばならぬものであらうと考へるのである、何故かと云ふに、若し今日或一部の者の云ふやうに、女子が悉く獨身生活をする事と爲つたならば、子孫を繁殖するの途が絶えて仕舞つて、吾人の祖國は廢亡に歸する事は火を睹るよりも燎らかな事ではあるまいか、依つて予は女子と云ふものは、男性と相竢つて子孫を繁殖し祖國の萬々歲ならん事を期すべき大責任のあるものとして、聊か女子に關する衛生上の事を述べやうと思ふのである、

◉姙娠と異常

其一　腹部

すでに他に嫁して姙娠するときは、全身に種々の異狀を現はすは勿論の事であるが、一見誰が視ても直ぐ分るのは腹部の膨脹で、腹部が大きくなると身體が不格好になると同時に、一方には多少瘦せるが上に血色が惡くなる、之等の爲に姙娠中は女子の姿色が衰ふることは常である、けれども之は產後に體力が回復するときは、元の如くなる事を得るものなれば、あながち分娩によつて早く其容色を損するものでは無いのである、左れば姙娠中は其樣な事は氣に掛けぬが宜い、若し餘りに其樣な事を心配すると胎兒に障るから何處までも心を寛やかに持つて居るが宜いのである、

其二　消化器

消化器即ち胃や腸などは姙娠の爲に障碍を受くる事が少なからぬのである、一體この障碍は精神的の作用より來るもので、その輕いものは只一時食慾を減じ、或は平生好みたる食物を嫌ひ、却つて酸味の物を好んで食するやうになると云ふが如き異常を現はすに過ぎない、けれども重きものに至ると嘔氣又は嘔吐を催して食慾は甚しく減ずる、更に一層重きものになると、食物は一切食べない、のみならず食

物を見ても忽ち嘔氣を催ほするのがある、更に進んで甚だしいのは、食物の事を思つても嘔氣を催ほするに至る者がある、夫が爲に身體は非常に衰弱して來る、時としては人事不省に陷りて譫語を云ふのがある、此の如き症狀を呈するものを惡阻即ちつわりと云ふのである、此の症狀が重くなると、或は胎兒を危險に陷らしむるやうの事があるものなれば、速に醫師に治療を乞ふのが安全である、

其三　呼吸

姙娠の呼吸と云ふものは、俗に肩で呼吸をすると云ふが如く、月の重なるに從つて、出す息、引く息の間が促まつて急しくなつて來るものである、その他血の循環を妨げらるゝことが多い爲に、脚部に浮腫を來すことのあるものである、左れば姙婦は通常の婦人よりも脚氣に罹り易く、また種々の傳染病にも罹り易いのである、且つ往々眼病を發したり、歯痛に惱むものがあるのは、全く之が爲である、

其四　精神上の變態

この精神上の變態が、姙婦に現はるゝことの顯著なるばかりでは無くして、且つ屢次なることは實驗に乏しからざる事であるが、之を發するの度と、又その有樣とは、各人に由りて大いに相違する、けれども概して何れも感情の過敏になることは一般のやうである、時としては憂鬱に陷り、他愛もなき事を憂ひ悲しみ、或は怒り罵るのもある、而して理解力が減じ、甚しく或事を嫌ひ、又は甚しく或事を好むと云ふ風に、酷く一方に偏りたる擧動を爲すやうに至るものがある、是等は凡て精神上の變態に基くものである、尙ほ異常を擧ぐれば夥多あるけれども、以上述べたる所のものは之が重なるものである、

⑤姙娠と攝生

其一　家族

姙娠は素より病氣では無いのであるから、之を病人のやうに取扱ふには及ばない、けれども姙娠中は前にも云へるが如く容易に病に罹るのみならず、精

神上にも身體上にも已に幾分の異狀を起して居るのであれば、家族のものは之に對して慰藉を努めねばならぬのである、

其二　譚話

その慰藉を爲すに方り、若し譚話等を試みんとする時は、卑猥粗暴殘忍等の事を避けて、例へば、旅行、風景、樹木、草花に就て興あることゝ、自然を吟詠したる詩歌等を話し草となし又は賢良貞淑の美譚等を取り交せて爲さねばならぬのである、

其三　運動

未だ姙娠の初期は左樣でもないが、併し成るべく



は初めより、重き物を擔ひ、水を運び、遠き路を歩み、險しき阪を上り、又は數次階段を上下し、遠く汽車にて旅行し、人力車を惡しき道に走らするなど之は何れも宜くない、避けねばならぬ、此く云ったからとて餘りに引籠り勝ちなるも甚だ宜くない、それ故に適度の運動は爲さねばならぬのであるが、平生好きだからとてローンテニス等のやうな、凡てあら〳〵しく身體を勞するものは斷然廢さねばならぬ、それに之は家庭にも出ることなれど、餘り劇しくない自己平生の務めは、成るべく爲るが宜い、而して外出は餘り好ましくは無いと

云ふものゝ、まだ月の淺い中に、時間と生活の許す限りは、時々郊外に出て散歩を試むるに努むるが良い、左もないと、姙婦自身の身體のためにも、將又胎兒の現在および將來のためにも甚だ良くないのである、茲に一の注意すべきは、自分の氣に入つたからとて、風景等に見惚て知らず〳〵長い時間を經過すると云ふは最も愼しむべき事である、

坪井中將未亡人を訪ふ

中川愛氷

氣の向くまゝに、筆の進むまゝに、人を毀貶することの罪ふかきは云ふまでもないが、褒譽することも亦害は少くない、近時紙上に現はるゝ、貞淑の女子、賢良の婦人は極めて尠からぬが、さて裏面に廻れば、お座のさめる事が多い、臭きものに蓋をするまではよいが、この中は麝香で候ふと云へば、一層鼻持のならぬと同じく、いつの間にか、如何はしき人が、貞女になつたり、賢夫人になつたりして居る、と、噴飯さずには居られない、ある町家の夫人が、私は奥樣と云はれるほど貧乏はしませぬと云ひしも一理あることである、人は博士でない所がえらいと云ふやうな賛辭もある、貞女と云ひ、賢夫人といふも、あまり價高からざる今日に於て、予は極めて高價なる尊敬を拂ふべき賢夫人に面會するの機を得た、時は七月四日で、その賢夫人と云ふは坪井中將未亡人賀尾子刀自である。

武勳赫々たる坪井中將は、男八人女五人といふ珍しき子福者で、極めて圓滿なる好家庭であつた、好事常に魔多し、中將には日清戰爭後、間もなく易簀せられ、それより名門の子女十三人、母君の手によつて、養育せらるゝことになつた、中將が生前せめて半ダース位の子供であれば、少しは教育らしい教育も出來るが、と云はれたさうであるが、その多數の子女を纖手にて引受け、夫君の御紀念として、教育に丹精せられたること、人の親として盡すべき道

に於て中將が在世の日以上であつた事は、この慈愛深き母君に養育せられたる子女の成績を見ても知るべし、最も景仰すべき人格を有せられて居ることが解る、そこで刀自と三十分ばかりの談話中に得たる感想を記して子女教育の一助にしたいと思ふ、

▽幼稚園と家庭

幼兒、殊に幼稚園時代は、極めて放任主義で、他日如何なる難事業にも堪へらるゝだけの腦を、この時に養つて置かねばならぬ、早く腦の運轉を初めると、小賢しくばかりなつて、大きな人物にはなり得ない、故に幼稚園でも、極めて完全なるものは別であるが、大抵の人ならば、成るべく入園せしめず、家庭に於て面倒を見る方がよい、と云ふので、坪井家では初めのうちは幼稚園へ入れられなかつたのである、所が幼稚園と云ふのは或一面に於ては、幼兒を見得で入園せしめる所となつてゐるから、坪井家に向つて、體面上入園を勵める人もある、何うで遊ばして置くのであるから、何處に遊ぶも同じ事であるから、と三四番目の方から入園せしめられたが、あまり成績がよくなかつたので、いよ／＼それは廢せられる事になつた、所が四番目の令息が、學齡に達した時は、坪井中將が江田島海軍兵學校長であつて、同地の小學校に入學せしめねばならぬことになつた、然るに中將は一年や二年は後れてよいからと云うて入學せしめぬので、刀自がそれは何ういふ譯ですかと聞くと、地方の事ではあり、海軍兵學校長の子息であるから、と云ふので、よくもない成績をよきやうに繕ひ、もし惡く庇うてくれるやうなことがあつたならば、本人は慢心して、自分位エライものはない、と云ふやうになり勝である、何も一年や二年や小學校へ入れるのが後れたからと云うてさう心配するほどの事ではない、と答へられて、多く心に留めて居られぬやうにも見える、まさかそんな事はない譯であるが、刀自の身になつては、さうでございますか、とばかりも云ふて居られないので此地がさういふ關係上よくないといふ事であれば、上

京させて小學校に入れるやうにしませう、といふので、中將も素より異議なく、學齡を一年後れて小學校へ入れられたが、聞く所によれば、この令息は小學校以來成績常に拔群で、初め一年の損は早くも取返されたとの事である、

▽この母にしてこの子

そこで敎育の方針は、男子の方は思ひ〳〵で、それ〳〵高等の敎育を受けさせるやうにして、學者になるのもあり、軍人になられたのもあり、少し離れて園藝家になられたのもある、女子は日本女子の美德より生れたる良妻賢母仕立で就中女子大學などへ入學を希望せられた。令孃もあつたさうであるが、忽ち否決せられたとのことである、されば日本女子の美風は、この坪井家に於て見ることが出來る、當時第一流の刑法學者牧野英一氏に嫁せられたる令孃の如きは、同人間に賢夫人の譽かくれなく、この刀自にしてこの令孃ありと評判されて居る、

▽十人十種

こゝに一本の菊がある、假に十三の蕾が付いて居るとすれば、この蕾を同じやうに滿足に咲かせしむることが出來るであらうか、いかなる名園丁でも首をひねるであらう、而して不可能と答へるであらうたゞ無事に咲かせると云ふことさへむづかしいのであるから、それを一際目立つやうな花にしたいと云ふには、その幾つかを犧牲に供せねばならぬ、故に數多きを以て誇る菊は、犧牲に供してむしり取たる蕾をも算入するのである、然るに犧牲なしに、蕾を物にすることは容易でない、即ち子女十三人も敎育せらるゝ刀自の苦勞思ふべく、而して咲く花の悉く美ならざるはなき如く、刀自の手を離るゝ子女、人の模範とするに足らざるなきは大に誇るに足るべきことで、女子敎育の要は、この刀自の如くならんことを期すべきである、刀自は語つて曰く、何分にも十三人の子供でありますから、身體の健不健もあり氣質も十人十種で、一人づゝ注意すべき點が變つて參ります、幸に身體は一體に壯健な方でありますが

それでも成長させる迄に荒膽を拔かるゝやうなことは二三度あります、氣質も邸外に行列が通る、噂を聞いて駈出すのと、通りかゝつて出るのと、通過ぎた跡へ出るのとがあります、或時は客と名所などの話をしたあとで、子供の部屋へ往つて見ますと、はや外の友達を相手に、それを受賣ならばよろしうございますが、見て來たやうに話をして居る、といふやうなことがあり、或ものは何か小言を云ひましても、後で解ることであるからと云うて、言譯があつてもしないのがあります、それで氣の早いのと、氣の緩りして居るのとを、一やうに見ては行きませんから、氣の早いものは落着せるやうに、氣の緩りして居るのは引立つやうに、と鞭韃をして居ります それから十三人といふ大勢の子供でありますから、子供の敎育を、經驗上子供から敎へられるやうなことになつて參ります、

刀自が子女を敎育せられたる中に就て、最も苦心をせられ、記者の最も敬服せるは、第三令息を園藝家にせられたることである、園藝の趣味を有せる令息を園藝家に仕立てられた、といふ單純な事であれば別に問題にはならない、それが問題となる處に刀自苦心の跡が見らるゝのである、第三令息は當時の親として、最も頭を惱すに足るべく、大の學問嫌である、まして名門の家に生れたる冥利の、學問嫌ひにつくることは歎かはしきことで、嫌ひとあれば、それは廢めて外の事にはと俄に決定する譯には行かぬ、令息が高等小學二年級の時、あまりに成績が劣る所よりして、刀自はその小學校に、更に尋常一年より授業を繰返して貰ひたいと申出でられた、その苦衷察するに餘りあることである、學校にては成績は兎まれ、既にその都度修業證書を渡してあるからそれを今更反古にして尋常一年に編入しませう、といふ譯にも行かぬのであるが、刀自が折入つての賴みに、級外生として、凡そ其力相應の級に業を受けさせた、即ち算術は尋常二年で、讀本が尋常四年といふ風に、特別なる便利を與へたのである、この消

息によつて、如何に學事に心の傾かなかつたことか解る、遂に學事は物にならぬと云ふことになつた、併し、これが通例であれば、學校は何うにか斯うにか免狀をくれたのであるから、それで曲りなりにも通すのである、然るに刀自はそれでは濟まされないいよ〳〵彼は學事は物に成らぬ、併し人にはそれぞれ長所のあるもの、學事には疎かでも、他に秀でるものがないとも限らない、刀自はつく〳〵令息の一擧一動に注意せられた、而して刀自の心を動かしたのは、庭などの掃除を令息方に命ぜらるゝ時、他の方々は偶には四角な庭を圓く掃くこともあるが、第三令息は垣根などの落葉をとる工合といひ、何うも掃除に際立つた所がある、小事なれどそこに長所が認められた譯である、そこで刀自はまさかに捨てたものではあるまい、といふので、親戚なる坪井正五郎博士に、この令息に授くべき適當の業をと相談に及ばれた、人類學の大先生も少々閉口されたが、まあ〳〵よろしい、一日東京中を連れて歩けば、何か目につくものがあるであらう、と云ふやうなことで引受けられ其結果美術思想があるから、方針を美術に向けた方がよいとなつた、美術も範圍が廣いが、繪師か寫眞師かと云ふことになつた、然るに、これも學問が入り、頭腦もよくなければならぬ、そこで庭掃除から思付かれて園藝家にしたらばと云ふ事になつた、それすら學問なしでは、今日の園藝家で候ふと云ふものにはなれぬ、さういへば歸着する所を知らずであるからその技術によつて立つことの出來るやうにと云ふので、大崎の妙花園に頼んで、園藝家たらしむることにした、そこで坪井中將家の令息が筒袖に身を窶せる一園丁となられたのである、一年に一日の休暇あるのみで、世は新玉の春と夜を骨牌などに更す時は、温室に植物を仕立て、温室を出づれば骨を裂く如き寒風に、我知らず倒れて漸く蘇生するといふことも幾度、夏來れば人は箱根伊香保と騷ぐなかに、身も燒けよとばかり炎天に照り付けられながら、朝顏をはじめ百草千花の手入、なか〳〵

尋常一樣の修業ではない、刀自も親の情として、幾度もこれではたまるまいと思はれたことであらう、令息も幾度か逃出さんと思はれたことであらう、されど刀自はこの業を措いて、令息に適するものはあるまい、と情を忍んでは奬勵し、奬勵しつゝ涙に袖を絞られたのである、遂に其丹精空しからずして、到底物になるまじとさへ思はれた令息は、同園を仕上げて、立派なる園藝家になられ、其手腕は早くも認められて、諸所より招聘をせらるゝやうになつたのである、近時華族の令息方によからぬ噂を、新聞紙に歌はるゝものもあるが、多くは脳の不完全なる學業嫌ひの人に多いのである、坪井家に於ても、一歩をあやまれば、或は父中將の英名を傷くるものあるに至るやも知るべからざる事である、子を知れる親、刀自に於て全きを得、而も國家有用の材とすべき専門の技藝を成功せしめた功は、永く傳へて沒すべからざるものである、

以上は刀自が歴史の細片に過ぎないのである、他日また刀自の事を記することがあらう



友を以て其人を知るといふ諺の如く、記者は先年賢夫人として其性行を記したる阿部氏の紹介によつて、更に此賢夫人に面會し、其爲人の幾分を窺ふことを得たのである(口繪參看)

食育に就て

遠城兵造

兒童を養育するに必要なること數多あるも、特に食育なる新熟字を揭げ、之を唱導する所以の者は、蓋し世人が養育に大切なる食育のことを等閑に附し多くは從來の習慣に甘じ改良せざるは全く個人的衞生智識の發達せざるに因る、されば出生の初めより生命を保續し身體を增育するには、必ず食育によらざるべからず、其未だ身神の發育充分ならざる小兒期にありては、固形の食物を攝取し消化し能はざるが故に乳汁によりて養育せざる可らず、漸次身神の發育するに從ひ、齒牙の發生を得て固形の食物を與ふるも自から咀嚼して消化を營爲す、尚ほ成長するに從ひ食物を撰擇調節して營養を營爲するは自然の階梯なるも、特に食育のことは自然に放任して、身神の發育上敢て差閊なきか、或は否らんか、兒童の身神は植物の培養と均しく規則ある食育によりて强狀となり、不規則の食育によりて薄弱となるは極めて自在なるものなり、世の父兄は日夜身神を勞して之が圓滿なる結果を希望し善良なる功績を擧げんと欲するの念常に止むべきに非ず、かくの如く兒童養育上重大なる責任と希望とを有するに係らず、現時の家庭に於ける食育智識の如何を觀察し來たらば、轉た吾人の寒心に堪えざること少なからず、蓋し食育のこと多く家庭教育に屬し之が責任は多く父母にあり、故に世の父母たるものは養育上常に食育の理を充分に了解し、兒童養育上に實行し、善良なる美果を收むること第一なれ、諺に曰く身體强狀ならざれば精神强狀ならずと、宜なる哉、身神强狀ならざる兒童に遠大の希望を屬するも到底成功の覺束なき亦兒童身神の上に於て堪へ得べきに非ず、終生一身の不幸之れより大なるはなし。

兒童養育上食育の重大なる關係を有すること斯の如し、されど兒童保護者にして食育の智識を有せざる限りは縱へ吾人が食育の普及を希望するも、如何

ともなす能はずして自然に放任せざる可らず、されど科學の進歩は自然放任を許さずして、智識の改良を注入して止むなきも、尙進んで注入し食育の理は果して此の如き妙理を有するかを知得せしめんと欲するが爲に、左に消化生理の一般と其結果とを略述せんとす。

(壹)食物消化の機能

口腔胃及腸は食物を消化する主要機關にして、日日攝取する食物の一定量は、必ず一定時間に消化して身體の營養分となる者なり、而して口腔胃及腸が食物を攝取して消化する機能は米飯にあれ、麥飯にあれ、肉類にあれ、野菜類にあれ、必ず溶解性の物質に消化したる後にあらざれば決して組織中に吸收して身體の營養分となる者にあらず。

(貳)食物消化の順序

食物を口腔に攝取するや、先づ齒にて細かに嚙碎き唾液を混和して軟化せしめ、且つ粘液性を與へ嚥下機を便にし、ある物質を溶解して味覺を感せしめ或は唾液の『ジヤスターゼ』は澱粉食(米麥芋類)働きて口内消化を營みつゝ嚥下せられて胃に達し、玆に三四十分時間唾液のため澱粉食類の消化機能を持續する間に、胃の主腦たる鹽酸及『ペプシン』(蛋白の消化素)を分泌して蛋白食(肉及び玉子類)の消化を始むるや、胃液の鹽酸によりて唾液『ジヤスターゼ』の機能を防止するが故に澱粉食の消化は一時中止す、又脂肪及野菜類は胃に於て消化する機能は有せざるが故に消化し終らざる米麥食と共に胃の運動により腸に送り下げらる、蛋白食は獨り胃に止りて充分に消化機能を營爲する者なり、尙ほ胃にて消化せざる蛋白類、米麥類、野菜類及脂肪類は腸に於て更に胆汁膵液及腸液の混合消化液に逢ふて再び充分に消化を營み終るべし、尙は消化し難き食物の殘渣は糞便となりて肛門より排泄す。

(參)食時間と食量の一定

食物消化の難易は食物の性質、分量及び時間による者なり健康なる人の胃は一食(朝食、晝食、晩食)五時間にし

て全く消化し終るものを通例とす、故に第二の食事をなすには必ず五時間を隔てざる可らず、且つ食物の分量は體力と勞働によりて多少斟酌せざる可らざるも常に分量を一定して過食すべからず、又小兒一回の哺乳も出生の年月により哺乳量に多少あるも、多くは消化に二時間を要する者なり、故に第二回の哺乳には是非共二時間後ならざる可らず、而して小兒の哺乳にあれ大人の食事にあれ、消化時間中に慢に食物を與ふる時は、忽ち消化の機能を妨げ遂には停滯となり、或は醗酵となり胃腸を損ずるの、原因となること屢々なれば頗る注意せざる可らず

（四）營養食物

身體の健康を維持し營養の退行を補給するは一晝夜二十四時間に凡そ百九十三匁位の混合食を

蛋白類　百三十匁（肉、玉子類）
脂肪類　十一匁（油類）
澱粉類　百五十匁（米、麥、芋類）

攝取せざる可らず、されど單に蛋白類即ち肉の一品のみにては身體を養ふものにあらず、又澱粉類の一品のみにても同樣にして必ず以上の食物を彼是適宜に混合して常に用ふるにあらざれば、決して身體に營養を維持し增育する者にあらず、例令ばこゝに示し置し所の營養物と雖も分量を超過して用ゆる時は反つて胃腸を過勞するのみにして、容易に消化する者に非ず、故に營養食物と雖、適宜調合して用ゆるこそ肝要なれ、

（五）不規則なる食育に因て起る身神の不和

食時、食量及び食物調和の不規則に因つて起る所の身神の不和は、敢て尠からず、就中兒童養育上最も恐る可き容態は身神の不和にして、常に身體倦怠を覺え、精神沈鬱して擧動活潑ならず、記憶力著しく減退して極めて物事を忘却し、且つ思慮を要することあれば、忽ち腦中朦朧として判斷を缺ぐ等、兒童教育上必要なる記憶力及判斷力の減退は屢々起る障害にして兒童教育の時期に於て最も注意せざる可らず、是等身神の障害は全く食育によりて豫防し

亦た之によりて矯正することを得べし。

前述により食育の必要なる所以と、食育の順序を了解し之れを兒童保育の上に實行し、倘は進んで兒童の腦裏に注入するに至らば身神の改良は固より疾病を統計上に減少し以前に倍する結果は期して待つべきものなり。

西洋料理と製菓法

上野精養軒
菓子料理主任　野村鑑一

ベーキン、エッグス

初めフライパンを火にかけて煖めおき、鍋の煖まりたるを見斗ひ、ベーキン即ち豚の脂肪の鹽漬を厚さ一分長さ一寸五分巾一寸程に切りたるもの二枚を取り之を鍋の中に列べて片側づゝを焦さぬやうに程好く燒き、次に一人前なれば鷄卵三個を碎かずに殻のまゝにその上に載せ、鹽、胡椒等を適度に加味し、之をストーブのオーブンか、又はテンピの中に入れ、殻の中にて白身の方は熟するとも、黄身の方は半熟になるを適度とし、凡そ三分間ばかり燒きて客に供するのである、若しストーブ、オーブン又はテンピの無い時は、息の洩れないやうに堅く蓋を爲して竈の上にて行つても可いのであるが、火の加減に注意をしないと焦すやうな患があるから、最も氣を附けねば折角の調理も無駄になる事がある

ポースト、エッグス

之は麵麭を縦二寸五分、巾二寸、厚さ五分位に切りたるもの二個を作りおき、何れもその片面にバタを程好く附けて黃色に燒き、之を客に出すべき皿に載せおき、更に鷄卵二個を壞さずして熱湯の中に放ちその半熟になるを見斗ひて、傷めぬやうに金網の杓子にて徐かに掬ひあげ、之を前の麵麭の上に載せて客に出すのである。

トマト、パリジヤン

人參六個と中位の馬鈴薯六個程との皮を剝ぎ大根の千切を刻むやうに、初め丸のまゝ厚さ一分乃至一

分五厘位に切り、更に之を横に重ねて右の片端より巾凡そ一分乃至一分五厘程に刻むべし、この刻みたる人參と馬鈴薯とを鍋の中に入れ、水はそれらの冠る位につぎ、その中へ凡そ鹽一撮を入れて克く茹で已に茹りたるを見斗ひて湯を切り、能く冷したる後罐詰のペテパか又はアルコーウエールを適度に混和し、次に鹽、胡椒、少量の砂糖を加味してマヨネーズソースにて混和し、之をトマト即ち赤茄子を二つに切りの核實を抜き取りたるもの丶中へ詰て出すのである、但し一人に一個とす、

　プーテング、カビネー

之を試みんとする時は鷄卵七個、牛乳四合、砂糖半斤、カステラ一斤とを用意しおき、鷄卵は鉢に溶きて杉箸四五ぜんにて克く白身と黄身とを混合せしめ、更に鍋を取りてその中へ牛乳を注ぎ砂糖を加へて火にかけ、砂糖の克く浴解したるを見ば、之を鷄卵の鉢に注ぐべし、

而して型の中へ焦げつかぬやうラードを塗り、その中へカステラを竪一寸五分、横五分、厚さ二三分程づ丶に切りたるものを、竪または横にならべ、之と同時に干葡萄一つかみを所々に配置し、徐々に前の牛乳鷄卵砂糖の混合物を注ぎこむべきものとす、此の混合物を注ぎ込むに方り、急に之を爲す時は中の品物の浮きあがるのみならず、すべて位置を變じて醜くなるものなれば、必らず徐々に爲すべきものである、

　右の如く注ぎ了らば、蓋の隙間等より蒸氣の洩れないやうに堅く蓋をなして、約一時間ばかり蒸したる後、出して客に供するには、之にムスルンソースを注けるのである、

　そのムスルンソースの製法は、饂飩粉二分五厘、砂糖半斤、牛乳四合、鷄卵五箇とを準備しおき、鷄卵は夕ゞその黄身のみを使うので、何れも之等を混合して火上にて煮るのであるが、未だ火の上にかけざる以前に克く粉などのダマの無いやうに攪き交せて置かねばならぬのである、

アイスクリーム、オブ、バナヽ

凡そ十人前のものを試みんとするには、之に要する原料は、砂糖半斤、牛乳四合、鶏卵の赤十箇その他バナヽ、氷、鹽等である、

最初に鶏卵十箇を鉢の中に砕き、杉箸四五せんにて克く黄身と白身とを混和せしめおき、更に牛乳を鍋の中に注ぎ之に砂糖を加へて温火にかけ、尚ほ溶きたる玉子を加へ、杓子にて攪き廻しながら煮るべし而してドロ〳〵となりて杓子にかゝるやうになりたる時は火より下し、萬一を慮ばかりて裏漉にて漉して冷しおくべし、之は砂糖の中などに細小なる塵埃等のあるを恐るゝが故なり、又攪拌に杓子を用うるは鍋底に焦げつくを防ぐが為である、

已に冷えたる時はバナヽを混ずるのであるが、此のバナヽは市中の水菓子屋に行き、成るべく柔らかなるものを撰んで購め來り皮を剝ぎ裏漉にかけおきて混ずるのである、



之をアイスクリームの製作器に入れ、その周圍には約一〆目の氷を砕き、之に鹽三合程を混じて詰めこみ、幾回か廻轉して凍らしむるのである、尤も鹽は之より多量にするも惡いのでは無い、何ぜなれば鹽が多いと凍るのに早い、とは云ふもの丶餘り多量で

は困る、一體アイスクリーム製作器には、底部の横に小さき水の排泄口がある、左れば氷の解け、水の溜るときは、氷の溶け易いものであれば、時々その栓を拔て水を出ねばならぬ、而して氷の少ない時は補足ねばならぬのである、

右は前述の如く約十人前の見積りにて說明したものであれば、讀者は人數の多少に由つて原料を加減して試みらるゝが良い

料理及菓子製造の實驗

富田豊春

紫蘇の實味噌附

赤味噌を、擂鉢にてすり、裏漉して、赤唐芥子の細末を適宜に加へ、醬油にて溶し置、紫蘇の實を莖の儘洗ひ水氣を能く去りて、前の味噌を中皿へ平に伸し、しその實の莖を持て、味噌の上を叩くと、實の先へ味噌が少し附着す、夫を日向にて乾、尙助炭にて乾燥し、壜へ結めて貯置べし、

玉葱酢煮

小さき玉葱の上皮を剝ぎ茹揚て目笊に入れ水氣を去り、酢、味醂、白砂糖、食鹽、唐芥子四五本、適宜の鹽加減にして、煮るべし、煮揚たれば、汁氣を取り、ビフテキ、又は日本料理の鹽燒杯に付合せによろし

落し味噌汁（五人前の分量）

最上等の堅魚節五匁を削り、水凡六合、田舍味噌四十匁、其儘入れ煮たて、水嚢にて漉し、味醂酒を猪口に一杯入れて、再び煮立て、是にて出來、實は何にても時期の物でよろし（小鯛を煠て用ゆれば、吸物に成る、或は剝海老に、冬瓜、又は蕗にてもよし、◎注意何品にても別に煠でるべし）

青魚の山かけ

青魚を普通の刺身より、巾を狹くして厚く切り、醬油に二時間程漬け置、別に山の芋（つくね芋にてもよし）皮を剝ぎ、大根卸にておろし、擂鉢にて能

くすり、大根おろしの液汁を加へて尙すり、前に醬油に漬置し刺身を皿に盛り、其上へ芋を懸て食す、鯖の代りに、松魚を用ゆるもよし、

白燒うなぎ

大串の鰻を白燒にして、極能蒸し、山葵醬油にて食す、或はソースを懸け、西洋芥子付て食すもよし

蕃南瓜菓子

蕃南瓜(カボチヤ)の、表皮を剝ぎ、內部の腸を取去り、正身ばかり、蒸籠にてむし、擂盆にて擂り、白砂糖を少量に加へ、能煉りて、適宜の形に(普通大福餅位)して、メリケン粉を、普通揚物の衣の如くにして付け、本胡麻油にて揚るべし、

梅の生酢 (之は柔道擊劒家の氣付に用ゆ)

青梅を卸金にておろし、白木綿の裂にて絞り、其液汁を深き皿に入れ、上にガラス板を以て蓋となし極暑(土用)日向にて、日々乾し、黑色を呈し、ドロ〳〵に成りたれば、夫れにて出來す、壜に詰て貯置けば、何年經つも、變る事なし、暑中コツプ一杯の水に、二滴白砂糖少量を加へ、飮用すれば、暑氣を拂ふ、又何時にても腹痛する際、猪口一杯の水へ、一滴加へ服用すれば卽治す、料理に用ゆるには、倍の水を入て使用すべし、蓼酢などには尤妙なり、

胡蘿蔔めし

胡蘿蔔の皮を剝ぎ、凡五六寸に切り米壹升なれば六本位、普通飯を炊く水加減に、醬油を猪口に二杯味醂を一杯入れて、胡蘿蔔を米の所々へ差込みて焚く出來上りたれば、にんじんは取除くべし、

鰻めし (大阪にて、まむし◎名古屋にて、まんむし)

鰻めしの調理は、素人には不必用なれば、略す、此製法の濫觴は、何時頃より起りしか詳ならず、予が聞知するには、淺草田原町に世俗にやつこ鰻と稱す、天保年間非常に繁昌を極め、每日早朝から鰻を剝き溜め、漸々白燒をなし置く位で、(普通の鰻屋は注文を聞きて剝くのが例である)あるから、來客を待せず 出すのが名代であつた、そこで賣餘りを、翌日暖飯の中間へ挾み入れて、之を鰻めし又鰻丼と

も名稱て、(丼の蓋は黒塗にて家號を記せり)安値に賣出し、大評判となり、夫より所々の同業者も調製して賣出だせしにや、(其頃食用法があつた、蓋を取りて熱き澁茶を懸け、蓋をして暫く蒸して置きて食す)如上故に下等の品であつたから、極小串蒲焼(俗にめそッこと云ふ)蒲焼をめしの中間に、一串位挾み、上に二串程列べた物であつた、時世の變遷と云ふものは、面白い物で、現時は立派な御馳走にも出現する爲、器も品も上等に成つた、名稱も何とか改良したらよかろう、結局名古屋の鰻蒸が適當である

肉めし

肉めしの沿革も、如上鰻めしと同樣で、牛肉販賣店で、肉の上部が堅く黒色に成ると、(明治の初年頃は肉の購求者が僅少であつた故)削り取り切り出し或はコマギリ抔名稱して、賣出した、そこで露店商が、該肉を串にさして、鍋に澤山液汁を入れ、煮込み飯を丼に盛りたる上へ、串差の肉を三串程列べ、液汁を懸けて販賣したのが、肉めしの(槍めしとも云)嚆矢である、前口上は之でお仕舞、扨て現今の調理法を說かん、牛ロース肉を(豚なれば赤身上肉)操器械に掛け、上酒を鍋に入れ、蓋をして煮立て、マチにて火を入れ、砂糖、醬油にて適宜の加減に味を付け、煮上置き、焚立の飯に交せる、丼に盛り(西洋皿に盛れば高尙)其上へ半熟の煎玉子を列べ、胡淑を掛けて客に出す

親子めし

如上肉めしの製方と同一である、鷄肉と鷄卵を使用する爲に、如斯名稱を附したものであらう、

天ぷらめし

天ぷらを、土產にでも貰ひたら拵て御覽なさい、堅魚の煎出しに、味淋少量、醬油、砂糖にて加減をなし、薄液汁を製し、冷た天ぷらを入れて、暫時煮(長く煮ると衣が破れる)で、焚立のめしを、丼に盛り、煮た天ぷらを載せて煮汁を懸る(面倒でも一人前宛調製すべし)

女子と海水浴

醫學士　久保杏林

近年は都鄙共に海水浴が盛んに流行する所より我も人も夏期に至れば海水浴に出掛ける者が年一年と増加して來て中には大部女子の浴客も見受けるが、此の現象は頗る衛生思想の發達を表示する者の樣なれども、他の半面より觀る時は甚だ不感服の潮流が横溢して居る、と云ふのは、一重に自己が生活に餘裕あるを衒はんが爲に行く者のある事であるが、其は兎も角として、海水浴は健全者を除くの外誰にでも良い効驗があると云ふのではない、夫にも關はらず其所へ行つて白斑病と云ふ皮膚病に罹る者がある、夫は男子よりも女子に多いのである、



此白斑病即ちシロナマヅと云ふは、身體何れの部を問はず皮膚に白い斑が出來て、それが蔓延がると非常に醜くなつて、其部分にある毛髮は白く變るのである、此病の原因に就ては種々の説があつて、或人は長途の旅行をした者に此病に罹る者が澤山あると云ひ、醫科大學の某博士は海水浴の後に此病に罹つた者を澤山實見したと云つて居る、

何うも之は某博士の説が適切であるやうに考へられる、併しそれかと云つて此病と海水浴との關係に就ては、未だ確かなる解決も無いのであるが、思ふ

に之は日光の直射を皮膚に受けるから、その光線の作用に由るものではあるまいか、

一體この病は、女子に多く、男子には少なくして、その比例は、女二人に男一人と云ふ割合に當るのである、之は何故かと云ふに、元來女子の皮膚と云ふものは男子に比しては弱いものであるから、何うしても侵され易いのであると思ふのである、それに此病が海水浴と何か關係のあるであらうと云ふことは、海邊に住む女子又は海水浴後の女子に此病に侵さるゝ者の澤山にあるを以て證據立て居るのである

この白斑病と云ふ皮膚病は、誠に意地の悪いので多くは十才位から三十才位までの青春時代に發る病症で、而かも此が身體の一局部に止まれば可いのであるが、サウ注文通りには行かぬのである、それ故に若しも之が大切の顏へでも出來やうものなら、如何なる天性の美貌も、最早二目と見られぬ容貌に變じて仕舞ふのである、此く爲つた時には、其人は實に氣の毒千萬なもので、爲に緣附も出來ず、遂には生涯を誤るやうな始末になるのである、

昔しは此症を白癩病とも云つて、天刑病の一つに數へたもので、別に治療の方法が無かつたのであるが、現今は醫術の進歩に依つて、初期のものなら外科の手術で之を治癒する事が出來るのである、併し蔓延してからは、迚も治療する手段は盡きて仕まつて、又他に之を癒す可き藥もないのである、何と恐るべきものではあるまいか、

白斑病は前述の如く、海水浴の後に發する病症であつて、それが而かも女子に多いのであるから、今より海水浴に行くものは、精々注意して此の最も忌むべく且つ厭ふべき皮膚病に罹らぬやうに用心せねばならぬのである、

その注意と云ふは、海水浴をする時は、必らず帽子を冠つて日光の直射を避けねばならぬは勿論、顏にはグリスリンか又はその他の化粧水を塗つて置くが可いのである、此く顏面に化粧水を塗附するのは例へば、刀が空氣に觸れて酸化し、銹が生じて汚く

ならぬやうに、油を塗つて豫防するのと同一なる理由である、尚ほ一二夏期の衛生法を述べて置かう、

次に黄斑と云ふ一種の皮膚病がある、この症は一名夏日斑とも云ひ、又は汗斑とも稱へて、鼻および頰の部分に發生するもので、黄褐色または黑褐色の雀斑のやうな小さな斑である　一たび此症にかゝると寒い冬の間は影を隱して居るが、毎年夏期になると現はれるのであつて、是また少なからず天性の美貌を損ずるものであれば、此皮膚病に侵されぬやうに注意をせねばならぬのである、

この雀斑に似た斑の生ずる原因とも云ふべきは、謂ゆる血の道や又は胃病、若くは姙娠の時などに發生するものであるが、尚ほ一つの原因は、夏日に長途の旅行をなし、爲に日光の直射を受けて、光線の作用より發生するものであるから、成るべく日光の直射を受けぬやうにせねばならぬので、之が豫防の方法としては、前陳のやうに、顏にグリスリンなり又はその他の化粧水などを塗附して置くが可いのである、或は糠の油なども可い、而してグリスリンと成らうことなら硼酸曹達と混ぜ合せて塗附するのが良い、何處の藥屋にもあるから、旅行先で不自由するやうな事はない、

この汗斑は、年を取るに從つて自然薄くなつて、つひには全く消え失せるものであるが、また全く無くならぬのもある、之が療法としては、クリサロビンを軟膏にして塗附する時は効用がある、けれども此藥は揮發性であつて甚く皮膚を刺戟するものであるから、動もすれば、眼を傷めることのあるものなればその時は醫療を受けるが宜い、但し之は劇甚に汗斑を發生した時の注意である、

汗疹を豫防するにも、矢張グッスリンか又はその他の化粧水を塗附して置けば可いので、斯うして置けば汗が出ても、表面を走つて了ひますから汗疹も出來ないのである、若し汗疹が出來たならば、之を治するには、硼酸を微温湯に入れてハンケチのやうな物に浸しこみ、それで汗疹の出て居る部分を濕し

たる後、亞鉛化か天花粉を附ければ直ぐ癒るのである、而して汗疹を豫防するにも將又白斑病および黄斑病を豫防するにも、共に白粉を塗つて置くと効能がある、

白粉といへば、近頃鉛毒といふ事を唱へて白粉廢止論が大部盛んであるが、白粉と云ふものは左程鉛毒論者の云ふやうに大害を與ふるものでは無いのである、元來鉛毒症は、震顫痲痺といつて、恰も中風のやうになるのであるが、比較的白粉を多く附けると云ふ京阪地方の藝娼妓などにも、未だ斯ういふ鉛毒症に罹つた者があるといふ事は聞及ばない、此症に罹るものは却つて白粉製造人で、それは工場で働く時に、口や鼻は掩ふて用心は爲て居る、けれども何分にも粉が飛び廻るからして、呼吸の際に何うしても幾らか吸入するので、爲に此症に罹るのである次に俳優が此症に罹るといふのは、大に理由のある事で、近年は俳優も品質の良いものを撰んで用うるやうに爲つたさうであるが、以前は重に粗惡なもの計りを使つたさうで、その量も素人とは違つて、顏その他手足一面に濃く塗けるのであるから、非常に多量でもあり、一日の中に何回も塗けては落し、落しては塗け、而して洗ひ落す時には、樂屋に設けてある湯に入るのであるから、湯が白粉で濁つて居ると云ふ始末である、然るに誰でも湯に入ると皮膚の毛孔が緩むものであるから、白粉の澤山溶けて居る湯に入ると、何時とはなしに鉛分が自然と毛孔に侵入して遂に此症に罹るのではあるまいかと思ふのである、

鉛毒症と云ふものは、前陳の如くであつて、白粉を多量に使ひ、而かも白粉を洗ひ落した湯に入る俳優でさへも、今日までに此症に罹つたものは極めて少數なのである、若し白粉を塗けると、必らず此症に罹ると云ふならば、俳優や藝妓などは悉く震顫痲痺を起さねばならぬ道理である、然かも事實は反比例を爲して居る、

腸窒扶斯の話

在鄕軍醫　高橋房次

余や嚢きに本誌に百日咳の話しをなし聊か所感を述べし事ありしが、日常余等開業醫師の屢々逢遇しますする腸窒扶斯なる疾病も、又た醫藥以外に看護攝養の力を要するものなるを以て病態看護等を述べて愛讀者諸姉に見ゆる事に致します、

此の腸窒扶斯と申す病は窒扶斯菌と稱ふる幺微體により惹起せらるゝ處の熱性傳染病であります、此病原菌を發見し偉大なる功績を立てた人はエエベルト氏であります續てガツフキ先生の如き篤學者によりて愈確認せられたものであります、如何なる方法によりまして吾人の體内に侵入するかと申すと、多くは飲食物と共に嚥下するもので、塵汚と共に空氣媒介によりて呼吸器より犯すと云ふ事は甚だ稀有の事で全然非認する學者もあります、煮沸しない水を飲用すると云ふ事は大に愼まねばなりません、主に病菌は飲料水中に混じ居るものにて、此の病菌は水の中には三ヶ月以上も死滅せず生活して居るもので萬一病菌を含有して居る水を呑むとすると、其の菌は胃の尋常鹽酸含量では死滅されずに腸に行きます、腸に行きましたが最後、病菌は忽ち繁殖します、それは腸は窒扶斯菌の生活するに最も適當なる培養所であるからです、

不幸にも一度此病に感染しましても直に病狀を呈せずに十四日乃至三十日間位の潜伏期と申すものがありまして、たゞ全身の倦怠心神の不快位に止まります、漸く潜伏期を通り過すと全身違和發熱等にともなひて輕度の下痢等を呈します、之れは初期でありまして病狀漸次進行して高熱譫語を來し或は氣管枝加答兒肺炎又は腸出血腸穿孔等嫌怨すべき病態を呈するものもあります、順潮に病を經過しましても三週間乃至四週間を要しますが稀れに五週六週を費す事もあります、又攝生の不良により再燃再發等を見ることもあれど稀れなことで、小兒は大凡三

週間位の經過で全快致します、
本病の特徴は色々ありますが著しいは熱型であります、第一週間は梯段狀に日々高熱を呈し第二週第三週は稽留しまして毎日三十八九度稀れに四十度位の處を逍遙し第四週に至り漸次平温に復します次ぎは消化器障害で舌粘膜は苔を被り口渴あり、咽頭に炎症を起したり、食機欠損したり、或は初め下痢して終りは便秘したりします。此の下痢は便色は豌豆を煮た汁の樣であるので、要するに病竈が腸にありますだけ腸に來ります障害が甚だしく腹部雷鳴、膨滿、腹痛、などを訴へ、もし俄然體温の下降しまするは恐るべき合併症を來す時で、腸出血腸穿孔は多くは不幸の結果を見るもので第三週に最も多い、其の他脾臟や肝臟が腫大しましたり神經系統を犯かされて譫語嗜眠などがあッたり、腎臟炎や膀胱炎を起したり、皮膚に蚤の刺創の如き薔薇疹と云ふものが出來たりします、
本病に罹患した人は、適當の處置を受くればまづ生命は比較的安全と云うてよろしい、老人や酒客や心臟病者肺病者は危險に陷り易い、小兒は至て好結果のものだ、男女兩性に就ては關係がないらしい、腸出血、穿孔性腸膜炎、腦症の劇甚者は疑はしいものであります、豫防法は最も大切のものにして、本病は八種傳染病の一つで法律で或る方法が規定されて居ます、一番確かなのは患者と交通し無いのであります、流行時非流行時を問はず、食物に注意し井水等は一切煮沸した後ちに飲用するが得策にて、患者に就て申さば糞便の處置であります。病原菌は糞便中に最も多く含有せられ居るもので、糞便に同量の石灰乳を加へ少なくも一時間放置した後に厠圊に棄て、時々圊厠にも石灰乳を混入するを要す、只だに疾病中のみでなく解熱後尚ほ七週間は消毒するがよろしい、嘗て私は日露戰役に從軍し腸窒扶斯に罹り廣島豫備病院江波分院に收容せられた時に解熱後六週間經過し營養も元氣も快復したに拘はらず、糞中に病菌を認めたにより、私は殊に糞便の消毒に重

きを置くのである、尿中にも又病菌を有するを以て嚴重に消毒し、便器は五%の石炭酸水或はリーゾール水又はクレシン液を以て淸洗し、咯痰あれば壺中に消毒液を入れ置くを忘るべからず、病者の襯衣寢具等病床中使用せし品は蒸氣消毒か、或は煮沸消毒をなし病者に觸れし手指は消毒藥液にて淸淨すべきは勿論である、

攝生幷びに看護の要件は多々なるもので、病室は日光の直射を避け閑靜を撰び廣濶を要す、病者は柔軟の臥床上に安臥せしめ、放尿排便と雖も床中に於て行はしめ、精神の亢進を避くる爲め會談讀書を嚴禁し、可及的少數の看護者の

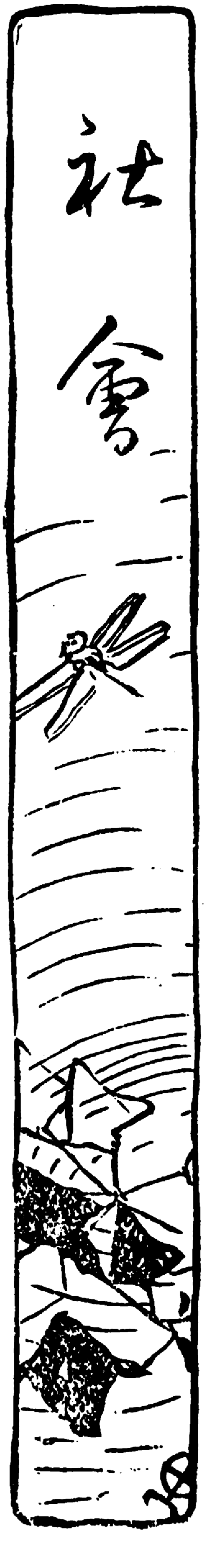


み入室を許し、時々襯衣寢具を交換して淸潔の保持に注意す、看護者は病者の顏面に向ふて坐し、專ら形貌の變化睡眠の深淺等を監視し時々含嗽せしめ頭痛高熱には氷嚢にて冷罨法を頭部に行ひ、口渴には氷片の嚥下或はアイスクリームを與ふべし

食物は殊に注意すべきものでありまして、此意を忽せにする時は種々なる危險を來すものにて、ビスケット一個の爲めにあたら貴重の生命を失ふたり致します私の見た例の中に饅頭一個の爲めに腸出血して幽府に旅立をなした壯漢がありました、要するに消化し易き流動物を與ふるものにして、主なるものは、

牛乳稀汁葛湯等にて一回に多量を與へず一日五回乃至七回位與ふる樣にし、雞卵の黄蛋白も又よし、興奮には肉羹汁効あるも下痢あるものには注意して服せしめ、若し單純の牛乳にして耐えざる場合には時として珈琲茶コンニャック酒等を和して與ふべし解熱後十日間を經て各部の狀況により五分粥を試みしむるも可なり解熱後十五六日も經ば粥食軟菜になし第四週の終りに至りて常食に復せしむ、解熱と共に患者に善飢を呈し食慾亢進するものなれば此の期に嚴重の監視をなし、尚も命ぜられたる以外の食物を與ふべからず、萬一愛にほだされ或は食慾に委せ多量の餌食か不良の食物を與へたらんには實に恐るべき併發症を來し四週間の誠實なる看護を一簣に失ふことなしとも限られず、よくよく注意せられん事を願ひます、病後の衰弱は漸次恢復して病前に優る身體となり、營養佳良に往々知己を驚かすものなり、若し就褥中に褥瘡を來せば之れ看護者の失策にして不注意たりし責を免かれず、臀部薦骨部背部等に發赤部を認めなば早速酒精にて淸拭し以て褥瘡を豫防するものであります、患者は主治醫の細菌的檢査によりて全く病菌の製造輸出者たるの境遇を脱した後ち初めて人にも接し散歩等もなすべきものにて平均約三ケ月の靜養をなしたる後ち徐々就業すをよしとす

●孝行な唖娘　小石川本鄕邊の界隈唖の女髮結と云へば誰れ知らぬものもなき本鄕區駒込東片町五十六地地に安藤お豐（三十）といふあり多くは小村壽太郎氏夫人阪谷藏相夫人などいふ名家よりの寵愛殊に深きが其の素性を尋ぬればお豐の父淺次郎といふは以前大工の棟梁にて材木商を兼ね四百餘坪の地所に數十軒の長家まで持ちし者なれど取引上の失敗より忽ち瓦解したるはお豐が未だ十七の年なりき、生ながらの唖なりし彼女は當時盲唖學校に通ひ居りしも茲に餘儀なく退學して女髮結となり一家を支へんものと少女ながらも健氣の心を起し十八歳の春始めて師匠につき一年の後には早や立派な女髮結として世に立つに至りしも唖の事とて物の言ひ得ぬ悲しさは容易に得意も出來ず然る程に父は死亡し兄の彦太郎はあれど腑甲斐なくも病身とて頗る困難の境遇に陷りしが髮の結方の巧者なるより漸次世間の評判を得るやうになり殊には女髮結といへば大奥深く立入りて矢鱈にお饒舌するが習ひなれど其處が花の姿の唖娘とてその心配一向になければ却て「唖のお豐さん〳〵」と今は諸方より可愛がらるゝに至れるがお豐は非常の孝行者にて毎日稼ぐ收入の中より必ず五十錢は母お岩に渡し家族が衣食に至るまで獨で引受け姉お朝（四十）の長男嶽太郎（三十）をば自宅に引取り逸見小學校に通せ居るなど不具の身の見上げた振舞に知るも知らぬも嘆稱措かずとぞ



男女交際と教育

文學博士　井上哲次郎

男女交際に就て、第一に要する所は、女子の教育を進めなければならぬ、之が餘程交際の上に關係がある、女子の男子に對する交際を幾ら改良しやうとしても女子の教育が十分行屆いて居らなければ、男女の交際が立派に往けるものではない、幾ら男女の交際を改良しやうとしても、唯紙の上の論、詞の上の改良であつて、實際はなか〳〵行はれぬ、此女子の教育を進めて行くと云ふことは、其結果矢張り男女の交際を進めると云ふことになるのである、夫からモウ一つは此女子たる者が交際上の熟練を要する即ち交際にモッとなれて來んければならぬ、乍併交際にモットなれて來ようと云ふには教育が要る、教育ある女子ならば次第に人と交際して段々交際の道になれて來るに違ひない、詰り教育が總ての根本になることであつて、教育のない女子を幾ら勸めて男子と交際させやうとした所が到底ダメである、ナカ〳〵分らぬですナ、第一教育のない女子だと話も本統に出來ない、少し高尚なる話をすると、サッパリ分らぬ、話が出來なければ到底交際は出來ぬ、交際の一番大事な道具は談話にある、即ち談話が下卑てはいかぬのであつて、ズット高尚なる話で交際して行かうと云ふには十分女子に之に應ずるだけの教育が備つて居らないではならぬ、夫で今日は段々女子教育も次第に勃興して來る有様であるからして此教育の勃興して來るに從つて次第に女子が交際にな

れて來るに相違ない、乍併之は男子の方から次第に女子に交際の機會を與へ、又自由を與へて行かなければならぬ、固より一足飛に多大の自由を與ふることは弊害を生ずる所以であるから、段々と自由をより多く與ふべきである、女子が幾ら交際を善くしやうと思つても、男子が之に對して始終勸めて行かなければならぬ、即ち男女相助けて始めて其間の交際を圓滑にし高尚にして行くことが出來るのであらう兎に角女子の敎育さへよく備はれば必ず交際は自然と上手になるものである、西洋の男女の交際が日本の男女のそれより勝つて居るのは、概して女子の敎育が進んで居るからのことである、夫で美術の話でも文學の話でも女子が夫に應ずる丈の話をすることが出來ると、段々と話が面白くなつて交際の道が開けて來る譯である、さうして敎育さへよく備つて居れば又總て男子の女子に對する無禮とか無作法とか云ふことは自然と無くなつて來る、女子が男子に無禮をせぬ丈の十分の反省を與ふることが出來るからのことである、矢張夫は一種の制裁力である、女子が男子に對する一種の制裁力が西洋の貴婦人の社會には出來て居る、此制裁力が歐羅巴の社會をナカナカ優美に保つて行きをるのである、ところがそれが日本では餘程微弱である、日本でも今後は右樣の制裁力が貴婦人から起つて來なければならぬ、是迄の日本の女子は誠に交際に不熟である、不熟であるが其本を云ふと女子の敎育が十分でないといふことに歸するのである、ソコで日本の女子は兎角引込み思案で、餘り出ばつて物を言はないやうにして居る、又從來さう云ふことを奬勵したから、益々さう云ふ習慣が出來て居る、乍併夫を今矢鱈に咎めては又いかぬ、夫を矢鱈に咎めても今日の女子は兎角引込み思案であるからいかぬ、ズッと出張りて潔よく男子と話をしなければならぬと、斯樣に無理に勸めることはいけない、敎育さへ十分備はつて居れば、男子と話をして調子を合はすることが出來るけれども敎育の素養が足らぬ者に强いて出ばれと勸めるのは

いかぬ、襤褸が出る、どう云ふことを言出すか分らぬ、あぶないことである、夫で是は少し消極的であるけれども引込思案と云ふことは實に女子の政策なんで、襤褸の出ない方が善い、寧ろ引込み思案で過ちのない樣にして居ることは一つの防禦策として餘程適切な方法である、夫で敎育さへ進んで居ると此風俗は次第に除れるに相違ない、又女子敎育の進歩するに從ひ、又社會の狀態ハ變るに從つて、漸次に弊風を矯めて行くが善い、夫を斯樣に引込み思案で居るのはいかぬ、抔と妄に女子を攻擊することはよくない、飛でも無い間違が起つて來さうになる、之は



漸次改良して行くべきである、夫であるからして此敎育が餘程今後男女交際を改良するに大切なことであると云ふことが分る、將來の日本國民は敎育いかんによりて餘程變るに相違ない、だから敎育上之は大に注意して改良の出來る樣にせんければならぬ、乍併敎育ばかりでは決して十分でない、何故ならば假令ひ學校で敎育を受けても結婚をすると女子の方はそれから先は餘り廣く交際せぬと云ふが日本の狀態である、結婚しない者も廣く交際して居る譯でないのに、結婚の後は尙更家の中に居つて僅に親戚と交はる位に止まるのが通例で、

西洋の女子の如く廣く交際するの道がないのである夫で教育によりて女子の智識を進むるといふ事だけでは未だ男女交際の改良は決して十分に行はれない先づ男女交際を斯うしたら善いと云ふことを悟つたならば、夫と同時に社會の組織に變更を來たさんければならぬ、即ち男女交際の出來るやうに仕組を拵へんければならぬ、

△次號には　男女交際と宴會　井上文學博士

婦人の精神病

醫學博士　吳　秀　三

前號には身體に關した神經質の婦人の事を話したが、今回は精神に關した婦人の神經病質に就て話さう、其病理を云へば智惠の優れたやうなものが神經質のものに多くある、又勢力の大變惡い人もある、白痴痴狂と云ふ狀態の人もある、又た神經質の婦人に屢々見る事であるが、一方の技藝に富んで居るものもある、外のことはいかぬが裁縫が上手である、また音樂が上手であるといふやうに秀でゝ居る事がある、感情が強いから人の上に立つて働くといふ精神狀況がある、萬目を自分の上に集めやうとすれば、人が自分に注意をしないと腹が立つ人が自分の思ふやうになつて呉れないと氣に掛る、さういふ風の人は、自分が病氣だといふことを知つて居る、自分は病氣だから惡いと云ふことを知つて居る人もあるが、全く理解して病の爲だから直さう、今から改めやうといふて改悟することが出來ぬ、神經病質の人が神經病質といふことを知つて居つて、改めることの出來ぬのは、神經病質の性質である、さうして神經病質の婦人は迷信に陷り易い、昔の宗敎上の狀態から考へても左うである、神經病質の人に見る著しい異常は、意識の障害である、或は精神が恍惚となり、又は全く人事不省となり、或は自分が二つあるやうに思はれる事がある、甲なら甲と云ふものが病氣になつて、乙に代つて仕舞ふことがあり、能く

田舍に有る狐付はさうで、狐になつたり、人間になつたりする、狐になつた時には、本人の事情を知らず、我に返つた時は狐付の時にどんなことをしたか忘れる、外來刺戟の感受性が增進し、注意の散漫となることも多くある、抑も刺戟感受性は、強くなることも弱くなることもあるけれども、強くなるといふのは、色々な刺戟があると、其に一々反應する、色々な人が來るとそれに應接する、少しも休みがない、落付いて居ないのである、注意力が劇しくなつたやうに見える、その爲に應接に暇あらずといふやうになり、從つて事を熟考し物を注意することが出來ぬやうになるのである、是は神經質の人によく見ることである、記憶も惡くなつて來る、是は神經質の人は色々の些細の事を記憶しやうといふ興味を持つて居らぬ爲である、又實際記憶しやうとしても忘れて仕舞ふ人もある、それから嘘を吐くといふことは神經病質の人にある、病的嘘つき、故意に嘘を吐くのでない、病の爲に嘘を吐くのである、記憶の惡いために嘘を吐く、元と聞いた通りに話が出來ぬ、眞と嘘とを取交せて話をする、罪人などの中へこんなのは大變に紛れこんで罰せられて居る筈である、觀念の聯合の障碍を起す、穴と云ふと棒、棒といふと樫を思ひ出す、是は觀念の聯合といふのである、我々の考へや話は皆此法で進んで行くものである、此作用が障碍を蒙むる、神經病質の人が色々の事を考へるのが、當り前の人とは違ふ事がある、當り前の人と考が違ふから、ヘンナ尋常外れたやうな考を聞くことがある、神經病質の人は纏つた話の出來ない事がある、何か話をすると、答が問以外の事になつて居る、或は飛んでもない事に話がツイ移つて行く事がある、それから前に述べた樣に、強迫感念といふ此一つの考が自分の精神の中に強迫的に起つて來ることがある、斯ういふやうな所の扉を開けられないといふ人がある、金物は一切觸れることが出來ない時計を持つことも出來ない、鋏のやうな物であれば一切觸れられぬ、銀のやうなものは一切觸れら

れぬと云ふことがある、或は一定の所を通ることが出來ない赤門の中に這入らうと思つても這入られぬ地震があるといふでもなし、這入つて、怖いことはない、さういふ事は思ふまい、早く這入らうと思つても、赤門前に行くと後退りをすると云ふ事がある或は何んでも問題を置てかゝる人がある、玆に時計を置てあるのはどういふ譯だ、玆に腰掛のあるはどういふ譯だ、三角なり四角なりのものがある、何せ是は圓くないかと云ふやうな無理な疑問を起すといふやうなこと、是等は皆強迫觀念である、又妄想といふことがあつて、之は事實にないことを有りと信念するので、是には色々あるが、誇大妄想とて自分不相當に智惠がある、金があるなど丶考へる、或は罪業妄想とて、自分に罪があると妄信する、或はヒポコンテリ性で我體に重病があると信ずる、或は其爲に是では死なとばならぬといふて自殺を計つたりするやうなことがある、或はもつと酷い妄想が起ることがある、亭主が實義な亭主であるのに、亭主の顏を見ると不義をしたゝらうと云ふやうな妄想が起つて來る、本統の嫉妬ならば兎も角、妄想であつて其爲に色々の間違ひを起して來る場合がある、妄想は精神病にもあるけれども、神經病質の人でさういふことが起つて來ることがある、又神經病質の人は大變に宗教心が強いものである、宗教心の強いと云ふことはよいが、神經性の婦人などは多くは譯を知らずに、宗教が如何なるもので歸依すべきかといふことを知らずに、御經を讀だり、何かして夢中になつて居るといふことは神經質の者に多く、美術に關した觀念も神經質の婦人には間違つたりすることがある、詰らないものが見えても奇麗に思ふ、あすこに斯ふ云ふ風にセメントを塗つた所が美しい、鉛筆が並んだのが美しいと云ふやうに、何でもない事を美と考へる、道徳心も之と同じ樣にひどく強くなることがある、或人は犬ころが鳴いて居るのを悲しがつて引張つて來て、家中犬だらけにして碌に手當もしない惻隱の心は善いけれども矛盾して居る、さ

うかと思ふと自分を先にして同情心の無いことがある、子供を愛することさへ無い人がある、自分ばかりで人の事はどうでも構はぬ、子供が泣て居つても身裝ひをするといふものもある神經が違つて居る爲でもあるが、意外の批評を蒙むることがある新聞などにもよく見えたが、出征軍人の友達などで留守のことなどで手紙の遣り取りをして、戰から歸つて來て却つて家が混亂すると云ふことがあつた、その兵士が國の爲に戰爭に行くのである。氣の毒であるといふ同情心から起つて世話をするのであるけれども却つて家の中に悶着を惹起したのである、又神經病質のものは感情が變つたり、愛情が變つたりする、大抵の人にあることであるが、此頃は甲の言ふ所を用ゐて乙の言ふことは用ゐぬ、乙の云ふこともいかぬ、爲ることもいかぬ、信用も出來ぬ、或は前に疎んじて居つた人を今度は近付け、又前に信用して居た人を今度は疎んずると云ふやうに時々變遷する、食物でもさうである、今日は天ぷらは旨いと云つて毎日々々天ぷらを喰つて居るかと思ふと、今度は鮨が旨いといふやうに機嫌が換つて、丁度秋の空のやうに刻々に變ることは神經病質の人に多い、又感情の間違の一つとして感動の現はれ方が非常に劇しくて、呼吸血行すべての身體狀況の變化に伴うて來るやうなことがとある、それから感情が間違つて逆樣になることがある、悲しむべき事を見て大變喜ぶ、或は樂しむべき事を聞て大變悲しむと云ふことがある、芝居を觀ても人が苦しめられて居る所を見て涙を流して可憐さうだと云うて居る者もあれば、喜んで居る者もある、さういふゝうに酷く感情が間違つて來る、その爲に夫を苦しめて色々の難題を仕掛る着物を買つて吳れとか帶を買つて吳れとか、夫が金が無いから困つて居るのを見て面白いと思つて居る自分の愛する人を苦しめて見て居る、それでは亭主を惡んで居るとか云へば亭主を可愛がつて居りながら此の如くなのである、神經病質の人は又大變に我儘である、是は誰でも知つて居ることである、それ

から嫉妬深く物を疑ふ、それは感情である、

それから、意思、心ばせに就ては如何いふことがあるかと云へば、意思が大變衰へて惰弱になつて仕舞つて、何んと希望もなし、何んといふ志もない、何にも無しになつて仕舞ふことがある、無意思狀態、全く氣力が無くなつてグラツト寢て居るばかりとなつて仕舞ふことがある、或は又その反對で意思が感情と共に動き易くなつて居て何事もやり遂げやうとする、他人の事は構はず自分氣儘になし遂げんとする人もある、それから又意思のことに就て述べなければならん事は暗示性である、人が右といへば右のやうになる、左といへば左のやうになる、どうでも人の心の儘に動くといふやうなことが大變神經質の婦人にはある、人の出やうに依つて丸められて仕舞ふとか云ふことは神經病質の婦人に多い、出やうに依つては人に丸められて其人の思ふが儘に身を任せる、又自分でもさういふやうに堅く信じて來ることもある、又手が利かぬ足が利かぬ、床から出ては歩けない、實際歩かうとしても見ないけれども、床から出ては歩けない、床から出ては坐られないと、頭の中に極めて自分で暗示して仕舞つて、自分で床を出ては駄目だと、自分が知つてさう思ふのでは無い自分が知らぬ中に精神なり身體が影響を受けて變つて仕舞ふ、それであるから、例へば病人が信仰する醫者が來て、此所が痛いといふから、お前の痛いのは成程痛いだらう、僂麻質斯で大變惡い、斯ういふ藥を使へばよいと云つて、氷をつけて明朝の十時までには癒ると云へば癒る、神經病質の人は皆さうである、人の暗示に依つて人の言ふことに依つて、その人の精神なり身體なりが左右されて癒つて仕舞ふが、少しでも醫者の云ふことに就て腑に落ちぬことがある、僂麻質斯か何か自分で考へる、頭の中に先づ醫者と意見の合はぬことがある、今度は癒らぬ、どんな名醫が來て行つても癒らぬ、癒らぬものだとなつて仕舞ふとその自分の暗示が強い、ヒステリー病の婦人などには、暗示を掛けることは出來ぬので

ある、
催眠術やその他の暗示方法ではヒステリーは治し難いものである、それから又神經病質の人には、それ〳〵自分の習慣と云ふことがある、自分の平常の習慣は、何うしても避けることが出來ぬものであるそれを堅く守つて何人でも其他の事はしないものが多い、善いことでも惡いことでも構はぬ、自分の習慣を頑守して通して往くのである、

女子風俗の改良

梶田半古

私が女子教育の改良など〻云ふと、或は少しく筋違ひでは無いかと思ふものもあるか知らんが、決して左樣ではあるまいと考へる、何故なれば、本業の美術に圖案なるものがある、又意匠なるものもある併し是等は或程度の教育を受けたもの〻更に受くべき特殊教育である、專門教育である、此の專門の教育を受くるものは初め何れも普通の教育を施されたものである、けれども予は今その特殊教育上より女子の教育を云爲するものでは無い、云ふまでもなく普通の部分に屬するものに就て聊か述べて見たいと思ふのである、

理想と云ふのも語弊があるか知らんが、兎に角余の理想とする女子教育の學校が欲しいのである、成る程現時生徒を收容して教育せられつ〻ある諸種の女學校は完全であらう、けれども予が理想とする所のものではない、彼の名高い女子大學の如きも、その規摸が宏壯で設備も十分のやうに見えるが、弊も亦從つて多いやうに思はれる、と云ふものは體操を奬勵するの結果、或範圍を越えて曲藝を演じ、宛然興業的の觀がある、之を行ふものも其本旨に遠ざかりて專ら參觀者の歡心を迎ふるに努むるといふ有樣である、如何に女子の體育が大切であるとは云へ、敢て曲藝的のもの〻必要があらうとは認められぬのである、否、之は固より本旨を誤つたものであれば

宜しく制止すべきものであらうと思ふのである、尤も現今の女子は教育の恩澤に依つて、或部分に於ては昔時の女子より優れて種々の人物も顯はれて來たが、他の半面より見ると、何うも一般に女性の持前としての點、即ち一家の主婦としての務、料理や裁縫等のことに至つては大いに昔時の女子に劣つてをりはすまいかと思はれる、無暗に雜誌の西洋料理を捏ねまはしたり、又は裁縫書の講義を繰返したり、若くは口角泡を飛ばして同權論を主張して見ても、決して家庭が温かに形造くらるゝものではない此く家庭に趣味が無いから、從つて家庭が治らない之は理屈ではない事實である、此の家庭の治らないといふものは、畢竟女子の罪である、とは云ふものゝ教育が不完全であるか否かは姑らく措き、教育の方向を過つたと云ふことは辭することが出來まいと思ふのである、それ故に極端から云ふ時は、最早或程度の教育を受けたものは退學して、寧ろ家庭に於て裁縫其他の將來主婦として缺ぐべからざる要件を練習して、その間に讀み書き等のことを學ぶ方が最も利益があると考へる、又女子その者にも將來に得る所が多いのである、

之に由つて考ふるに、予は女子を教育すべき學校の程度は現今の普通小學校および高等女學校の科目中、或者を除きて裁縫および割烹、換言すれば將來家庭の主婦として缺くべからざるもの丶時間を增加した學校を組織して貰ひたいと考へる、但し之を敎へ之を導くには懇切周到は云ふまでもなく、出來得るだけ實用的に行つて欲しい、御座敷稽古は廢したいのである、而して若し時間が許したならば造花や編物の技藝を特殊に授けても宜いけれども、此等特殊教育の有無は主婦としての資格に何等の關係は無いのである、約言すれば將來は姑らくおき目下女子の教育は高等女學校の程度を以つて限りとし、中に就て裁縫および日用料理の如き、主婦たる資格に缺くべからざるものを十分に授くる學校の設立を望むのである、

男女に拘はらず體育は大切であらう、併し男子は暫らく問はずとして、女子には如何なるものかと云ふに、予も亦女子の體育を絶對的に非認するものでは無い、畢竟これは程度問題であらうと考へるのである、それは前にも述べたるが如く、餘り之を奬勵鼓吹すると遂には其本旨を失ふのみならず、一種の好奇心に驅られて曲藝に陷るやうになる、その弊は例へば音樂から舞蹈に轉變するが如くである、而して尚ほ一の弊害は活潑を通り過ぎて粗暴に走るものが尠なくない、即ちお轉婆といふ代名詞を冠らせられて陰ながら世間の人々より排斥される、之と云ふも畢竟餘り體育を奬勵し過るのと、他の半面には其お調子に乘つて粗暴に陷り、知らず〳〵日本女子の特有なる淑德と云ふものを失なはしむるに至つたものであると思ふ、此の故に體育を女子に授くるには或程度までとしたいのである、尤も尚ほ半面には昔日の女子と今日の女子とを比較すれば、卑屈の精神を脱して交際上手になつたのは現今女子の得色である、けれども之を失つた者とプラス、マイナスして見ると得た所はマイナスである、であるから倍々前述の如き學校を建設して、學事は勿論であるが、之と肩を並べて裁縫料理および禮法等を授け、且つ女性の德性を涵養して完全なる家庭の主婦を產み出さんことを切に望むのである、

現今の學生は既往十數年前の者に比べると非常に奢侈に流れて來た、殊に女學生の方が甚しいのである、平常學校へ行くにも綺羅を着飾つて行く、丸で學校は衣服の競進會の觀がある、學校は競進會ではない學問を修業する場所であるにも關はらず、之が監督の位地にあるものは之を誡しめやうとも仕ない、否、暗に裏面より歡迎するの傾きがある、父兄の迷惑は如何ばかりであらう、學生は自家の貧富を問はずして單に綺羅を飾らなければ學校へ行つて肩身が狹いと云ふやうな心を起して父兄に强請父兄は愛に惹かれ外聞を憚り、無理算段をしても着飾らせると云ふ奇なる現象がある、

ソコデ予は思ふに、彼の男子の學校には夫々制服制帽等がある、それにも拘はらず女子の學校には之が無い、尤も一二無いでもないが、何だか髪結の下梳か何かのやうで餘り感服しないのである、兎に角男子の學校に服制があるやうに、女子の學校にも服制を作つたら宜い、何も女子が學校の制服を着たからとて女性の美を沒する氣遣ひもあるまい、尤もその制服の格好は成るべく動作に便利のものを作るとして、その服の地質は紋樣の無い即ち無紋無地の木綿ものに限るのである、紋樣の無いものであれば相互に綺羅を競ふといふ心は起らない、第一木綿は絹に比べて價の安さのみならず、丈夫で身體の爲にも良い、之は初めは可笑いと思ふか知らんが、今の海老茶袴で分つて居るでは無いか、アレも最初は非常に人の目に付たものである、けれども現今は世人の目に慣れて何んとも思はないやうになつたのである制服も之と同樣であると考へる、故に此の制服に改めて無論現時の袴を用うるが宜い、尤も制服の地質色合等は好く婦人の體格に調和したものを撰ばなければならぬのである、

男學生は徽章の付た帽子を冠るけれども、女學生は冠らない、最も之は冠らない方が良いと思ふのである、而して頭髪は矢張り束髪として花簪等の髪飾りを廢し、之に換ふるに男生の帽子の前章に準じて、何か金屬を以て簪を造り、之に該校に於て規定されたる徽章を彫りつけて一見何處の學校の生徒であると云ふことの判るやうに仕たら良いと思ふのである、此くするときは校外に於て自然學校の風紀を保つことが出來るのみならず、其制服および徽章を着けて居るから、學校の歸途にチヨツト芝居の立見も出來ないと云ふやうに自然の制裁が出來て、學校も生徒も相互に得る所が多いのである、且つ尚ほ一つの利益がある、それは克く新聞紙などに散見する所の學生風を裝ふたる醜業婦と混ぜらるゝ憂が無いから從て眞正なる女學生の品位も高まつて來るのである、此故に一日も早く之が改良實行を希望する

結婚法の改良

鳩山春子

結婚は男女ともに、人生の幸福に最大の關係を有するものであれば、之を爲すに方りては、男女兩性ともに最も注意を拂はねばならぬことは云ふまでもないことで御座います。これと同時に從來我國に於ける之が慣例を少しく改良したいと思ひます、尤も此事に關しては既に社會の或一部分にも其弊があるやうでありますが、折角のお尋ね故少々お話し致しませう。

已に御承知の如く西洋では、大概敎會に於て司敎者の下で之を行つた後、他の場所に於てリセプション即ち立食を出し接待いたします、稀に敎會以外で結婚式を擧ぐる例外あるも、其神聖を保つ事に注意をし、別席に於て立食を出します、決して我國のやうに其式場で酒食をするといふことは御座いません一體我國の舊慣によれば、結婚式を擧げてから今日は里開き明日は何と、その披露を了するまでには、數日を費し、新郎新婦をして奔命に疲れしむるは可愛想ではありませんか、第一、時間の不經濟にもなります、元來結婚は尤も神聖であるべきに從來の慣習に依れば、動もすれば料理屋の樓上で執行ふものがありますが、之れは絕對に不贊成であります。近來彼の神宮奉齋所で之を擧ぐることが少しく行はれて來ましたが、あれは結構なことゝ思ひます、私の姪なども彼所で式を擧げましたが、場所が狹隘で多くの人の入る事の出來ぬと、其他神聖を保つ點は、敎會に一步を讓りますが、併しこれは追々に改良することが出來ませう。ソシテ西洋式の如く、豫め招待しやうと思ふ方々へは、先方も都合のあることであるから、二三週間前に案內狀をもつて、何月何日に何所に於て、擧行すべき結婚式並に式後何々の場所へ御來臨を乞ふと認め出せば、先方の都合に依り、或は式だけに臨む人もあり、又式後の接待會にだけ臨む事も出來ます、併し兩方へ出席する人が勿論多數で

ありませう。斯くその日一日で結婚式を擧ぐると同時に其披露までも濟して仕まうやうにしたいと思ふのであります、此くする時は相互に時間の經濟に利する所が多い、併し私の考は餘り西洋式に傾くか知らんが、式の方は和洋折衷となすとも、披露の方は斯樣にしたいと思ふのであります、左すれば新婚新郎の兩家で幾日も〳〵客をすると云ふ煩雜もなければ、招かるゝ方へも迷惑が掛らないのみならず、新郎新婦も今日は何、明日は何と云つて毎日々々引廻はさるゝ憂目を見なくて濟み、且つ望みならば披露の後直ちに新婚旅行も出來、從つて兩者親和の度を速かならしむるの利益もありませう。

斯の結婚といふことは、男女に取つて大變な境遇の變化であるに拘はらず、從來の風習で兩性が相知ると云ふは結婚の當日であつて、其より以前は相互に心持どころか容貌だによくは知らぬのであります此く相互に性行の一班だも知らない異性同士が結婚といふ寰に因つて結び付けられるのでありますから

從つて破鏡再び照さず抔といふ悲劇を演ずることが尠なくないのであります、加之往々媒介口に誤られし結果もあらうと思ひます、此の故に兩者の兩親は充分監督して、豫め交際せしむると云ふことが必要であります、左すれば前述の如き悲劇等に遭遇することは比較的少なからうと思ひます、之も何うか改良したいと考へます、

次に婚禮の入費は何うかと云ふに、我國では男性の方が澤山負擔するが、歐米では反對であつて、嫁の兩親は招くべき賓客への案内狀及びその饗應の全部を負擔するばかりではなく、新郎の兩親などの遠方より來てくれた者の宿泊滯在に關する物までも一切負擔するのであつて、新郎は單に會堂即ち式場に要せし僅少なるものを支出するに過ぎないのであります、併し日本では之を兩方で半分づゝ負擔するやうにするのが公平であらうと考へます。

日本では從來は婚嫁した後に少しも新婦に權利が無い、これ一は嫁入の當時に、衣服や簞笥長持等と

云ふもの丶外、別に婚資と云ふものを持つて行かないのと、一は從來よりの餘弊即ち儒敎佛敎等の舊感化を脱せないのとに基因するのではあるまいか、彼の西洋では、兩親は殊に女兒に對し將來を慮る樣に察せられます兎に角男子は外に出て嫁くことが出來る、けれども女子は槪して其が爲らない依つて假令嫁入らしむると否とに拘はらず、女の子の爲めに莫大な財産を分配する、左すれば嫁入後不幸にして夫に訣る丶か、或はある事情のために獨身生活をするにもせよ決して不自由を來たす憂がない、と斯う云ふ風になつて居るから、嫁入後であるとも、女子は女子の財産を有して居て、縱ひ自分の夫たりとも、濫りに之に干渉し浪費する等のことは出來ないやうに安全に保たれてある、さうでは御座いますが私は之は幾人の兄弟でも平等が宜いと思ひます、惣領だからとて一番多く取らねばならぬと云ふ道理は認められない、また餘り澤山に遣ると惣領の甚六になつて仕まいます、又女子だからとて特に澤山貰はねばならぬと云ふ事も穩當でないやうに思ひます。



それに男子就中惣領にのみ澤山の遺產を遣るといふことと即ち單に家と云ふ觀念のみを重じ、個人を輕

々視する風にして永續したならば、國家の發達を妨ぐることが尠くない、甚だ不感服の話で御座います、而して此財産の無いのも困るが、自分の勢力に依らずして親讓りの財産が身分不相應に有るのも、其者のために害になる、何故なれば其爲に自然懶惰奢侈の念が增長して、概して奮發心が缺乏致しませう、又朝鮮人のやうでも困る、彼國では人民が少し金持になると政府の惡吏は種々の口實を以て之を罪人となし牢に入れて、其留守に財産を沒收するとの事であります、又親戚緣者のものは皆その金持に憑り掛つて衣食するさうであります、之では幾何財産が有つても少しも幸福を得る事が出來ませぬ、之が安全を保障することが出來ません、依つて喰べて通りさへすれば好いと云ふ風であるから、自然に奮發心も出ない、又出して見た所が詰らないと云ふ風であるから、從つて國家の改良進歩を期すると云ふことが難い、まづ亡國と申す樣になるので御座いませう、ツマリ朝鮮人は他人の世話になることを何んとも思つて居ない、之に比ぶれば我國では財産の安固を保ち得るのみならず、教育も進歩して居るから他人の厄介になると云ふことを耻辱として居ます、が、まだ中には全くくの依賴心のある者を根絶することの出來ないのは遺憾の次第と云はねばなりません。

　右に付て思ひ出したのは、前年米國へ行きました時に亞米利加人の各自に生々として居て活潑に立働いて居るのを見た時には、非常に一種の感想に打れました、此の亞米利加人に比べては我日本人は頗ぶる慚色なき能はずであります私も彼の地へ行かない前には、米人は概して稍下品の者が多いとのみ思つて居ました、尤も日本へ來て居る所の米人は大抵中流以下の人物のみであるから、それも無理はないが彼地へ渡つて見ると、日本内地で見たり聞きたりしたとは雲泥の相違があります、その中流以上の人物になると、資財はあり教育はありますから、何の家へ行つて見ても、その順良温雅の態度と懇篤眞實の品性とは、流石に亞米利加人はかくやと嘆賞せしむ

るものがあるのであります、そして又中流以下の者は如何かと云ふに、是また各自に業を勵んで、縱ひ親兄弟なりとも他人の手に縋つて衣食すると云ふことは、最も耻づべきことゝ考へて居るから、毫も依賴心と云ふものがないから、各自に勉强するのであります、斯く各自に勉强して金を蓄へる、金が儲ると自然に地位も高まつて來る、地位が高まると同時に有益なる書物を繙きて精神上の修養をするから、從つて品性が高尚になつて來る　之と同時に朝夕往來し交際する所の人々が温良上品の人々であるから、何時か自己も夫れ等に同化する、管子の所謂衣食足つて禮節を知り、倉廩滿ちて榮辱を知るといふ適例を現はすのであります、此の如くであるから、金を溜ると云ふ元來の主義が、何も溜つたから夫で良い、自分獨り贅澤して他を少しも顧みないと云ふのではなく、成るべく之を善用して社會のため同胞の爲に竭さねばならぬものである、彼人もかくあつたから我も左樣したいものであると自分の衷情から頻りに之が善用に苦心をするのであります、故にロックフエロー氏の如きは單身でシカゴ大學を建設せられました、之は全部を一人で行つた事業でありますが、諸所の大學校や美術館や病院等に行つて見まするに、この化學實驗室は誰の寄附、彼の美術、講話室は某の寄附、何處の病室は某々の寄附金にて建設せられたのであると云ふやうに、大學其他公共の建物の或一部分々々を金持の寄附によつて造られたものが少なくありませぬ、かくてこそ持つた金の光輝も放つのでありますが、若し自分の家族以外には更に放さないものは、社會同胞のために竭すことを知らぬものなれば、彼は守錢奴である、金錢の價値を知らぬものであると社會より擯斥せらるゝので御座います、けれども前陳の如く同化するから、自然競ふて社會同胞のために盡すことに力を致すとの事であります、我國でも近年森村、三井、大倉さんなどが、大分之を善用せられて來たのは誠に結構のことで、尚ほ續々他の諸氏にも之に倣はれんことを希

望するのであります。

兎角朝鮮の如く人々自ら金を儲ても、親戚兄弟又は政府役人等より擄り取らるゝ時になると、迚も溜めても之が安全を保つことが出來ないから、無汰である詰らないと云ふ了簡を起して働かない、ツマリ進取の氣象が失せて、唯食べるだけのものを蓄へて置けば良い、それは何故であるかと云ふに生命が大切であると云ふに止まるのでありますから、遂に野蠻の狀態に於ける犬猫同樣の動物性を現はして、稼ぐと云ふことを爲ない是故に到底國家の發達など云ふことは望を囑することが出來ないのであります、之に反して米國の如きは、人々自由獨立を尊んで進取の氣慨に富んで居るから、その國運の隆盛なることは實に旭日昇天の勢であります。

社會と云ふものは、素と個人の集合體であれば、その細胞たる所の個人の品性が下劣懶惰で少しも進取の氣象がなかつたならば、社會國家と云ふものが生存して行くことは出來ない、苟も社會國家と云ふもの丶基礎を鞏固にするには、個人の品性といふ者を涵養して行かねばなりませぬ、それには只食ふばかりでは足らぬ、乃ち敎育もし練習もして行かねばなりませぬ、之を爲すには自ら財産に餘裕がなくては出來ぬのであります、その餘裕を得るには各自獨立の精神を固持して勤勉せねばなりませぬ、その勤勉には時間を要する、所謂時は金でありますから、話が少し橫道に外れたやうでありますが、婚儀の如きも前陳の如く改良しましたならば、之が爲に節約し得る時間や財産を、一年を通じて全國を合せますと、實に莫大に國家の經濟上に裨益することが出來るであらうと思ひます、のみならず、新郞夫婦の幸福も增加する事であらうと存じます(文責在記者)

學習院女學部の新服制　學習院女學部にては、婦人の浮華驕奢に流るゝ惡風を矯正せんとて、此度女學部及び幼稚園幼兒の衣服に關する心得を規定し、來る九月十一日より實施の筈にて、衣服の地質は和洋とも綿布、麻布、毛布、銘仙及び交織の類に限り、袴地も之に準じて廉價なるものを用うる定めなり、



七日の旅

伯爵　東久世通禧

七月二日、鹽原へとて朝とくいでたつ

鹽原の山いかならむ朝戸出の
　たもとにかよふ風ぞすゞしき

時のまに停車場五つ六つ打すぎて、栗橋を渡る、日光筑波の山々常には見ゆれど、けふは雲かゝりて見えず、宇都宮に車つきて、ひるげものせんとてある茶店にいこふ、黒髮の山びらきとて、白き衣きたる修行者あまたつどへり、三時頃汽車にのる、定めの時よりをくれて、西那須野につきぬけふの山ぶみは夜に入りぬべしとて、那須にやどる。

三日、天氣よし、朝とく車やとひてやどりをいづ、このあたりは那須の荒野なりしを、三島福島縣令の新ばりせし處とて、三島村といふとぞ、同氏の開墾場ありて、家居立ちつゞきたり、二里半ばかり行きて、關屋に着きてしばし休ふ、往來のたび人つどへり。

下野の關屋のさとのあさ風に
　行きゝのひとの袖かへる見ゆ

こゝより山路に入り、溪河にそひてゆくほどに、めもあやなり、回顧橋は丈二十四間にあまり、溪流瀧なして落つる響、山彦にどよめり、橋あり瀧ありみな漢ざまの名を書き付けたり、こは奥玄寶といふ人この地の勝景を探りきはめてものせしなりとぞ、昔よりの名ならしかば、さてもありぬべけれども、新らしう名つけたるならんには、今すこし我國ぶり

の名をと覺ゆかし、一里半にして大網にいたる、温泉は二丁余の坂を下りて、川床に湧きいづ、所のさまゐなかびたり、もとの道の左柄を壽永の頃、鹽原家忠、源三位頼政の遺族をたすけやしなひ、那須資隆の兵と戰ひし處と土俗言ひ傳へたり、昔は懸岸千丈なりしも、今は道開けて車いとやすく行きかふ、寒棲橋を渡りて白雲洞に入る、洞のながさ十七間新にほり開きたるなり

白雲を袖にかざして行くほどは
　われ仙人の心地こそすれ

大網より廿丁あまりにて福渡戸にいたる、峯岳翠をつらね、清溪村を擁してながる、温泉宿十一戸、多くは二層三層の樓、軒をならべたり、天狗巖野立石などを過ぎて鹽湯に到る、わかれ路あり、官道より南に機織の温泉あり、箒川のながれさゝなみをたて吉非の瀧峯にかゝりて、樹間に隱見す、また七八丁行きて門前街にいたる、妙雲寺とて禪宗の寺あり小松内府の姨妙雲尼の開基といふ、蓬萊橋をわたれば古町といふ、温泉宿いと多かり、十二時頃楓川樓につきぬ、樓は披雲峽に對し、箒川にのぞみ、けしきいとよし

たぎり落つる岩まの水の音たかみ
　夏なき里と思ひけるかな

函根路のいで湯もあれと此里は
　猶やま深くすゝしかりけり

夕つかた空くもりぬれど、須卷の湯瀧みむとていでたつ、山路をのぼること七八丁、根本屋といふにいたる、浴槽に六道の木樋を架して、飛泉迸らず、うたるゝに心地よきことといはん方なし、しばしありて夕立ふり出で神鳴わたる、山ふところなれば、雲たち渡り、なる神山彦にひゞきていと物すごし。

瀧の湯もぬるむばかりにそゝぎ、ぬ
　須卷の山の夕たちの雨

夕つ方雨やみてやどりにかへる、風すゞし、ひとへきぬに堪へぬばかりなり、夜半にぬす人いりぬと大聲にさけぶ聲きこゆ、ぬす人はとがめられて、物

も得とらでにげゆきしなりとぞ、人々とかく立ちさわぎて、みじか夜はしらみにけり。

四日、空はれたり、この山の瀧見むとて、同じやどりの人々、われも〳〵と九人まで藁沓はきて出でたつ、鹽湯より山路に入りて、三十丁余り樵路を、つたひ上り下りして、霹靂の瀧のもとにいづ、もとの名一番瀧といへりとぞ、高さ三十間巾十七八間もやあるらん、巖をつたひて断崖に白布を覆ひたらんやうに流れ落つ、右に咆哮と名づくる瀧あり、一すぢ斜に巖にふれて落つるふたつの瀧の間に、巖石突出して老樹參差たり、ひるげとり出で瓢の酒などをくむ。



つゝら折くるしかりしも忘られて
　こゝろ涼しき瀧の音かな

この瀧の上流に雷霆の瀧あり、樹陰苔なめらかにして道いとさかし、こを二番瀧といふ、幽邃寂寞世外のおもひあり、道しるべのをのこ、これより二十町余なる素練雄飛の瀧などみむと云へれど、疲れにたればもとの山路をたどり、また須巻の瀧にゆきてゆあみぬ。

五日、雲立ちまよひ風すゞし、源三窟見にものす、宇津野御殿山の東北の麓にあり、頼政の孫伊豆冠者

有綱、この窟にすめり、土人言ひ傳ふ、洞口一丈六尺巾二丈八尺、奥に入ればいと廣しとぞ、巖崖鐘乳石なり、この傍に眞田伯爵の別莊あり、貴顯の別莊さはにあれども、高崎正風ぬしのやかたことにけしきに富みたり、一とせ支那公使も紅葉見にものしていたくめでにきとぞ、宿にかへるに、あるじ傾城高雄の木像をみす、戯作者京傳の遺愛物なりとか、さし櫛白書の色紙などあり。

名にたかき高雄のあきの紅葉は
鹽原よりぞ染出だしける

ゆふつかた、奥玄寶の撰みし鹽溪十八勝をみて、たゝちに筆とりて

那須曉霧
君が代はなすの荒野も新はりの
烟ゆたけきあさぼらけかな

關屋歸雲
われまさり歸る關屋の夕まぐれ
山路のあとを埋むしら雲

順橋飛瀑
杖たてゝかへりみすれば瀧つせの
ひゞきわたれるやまの棧ばし

大網捕魚
大網と名にこそたるれ釣の糸に
ひれふる魚そまつ懸りける

洞門忘夏
溪川のけしきすゝしきこのほらは
うべ夏しらぬ所なりけり

福渡觀螢
岩はしる波をてらして川風の
ふくの渡りにほたるとふなり

狗巖青松
おもしろきいはほに根さす松が枝の
谷間のみづに影そうかべる

鹽釜殘碑
昔おもふ涙なるらむしほがまの
野邊のを碑つゆしげきかな

機織清漣

はたおりの清き川せの波の上に
　いざよふ月の影のさやけき

塩湯羅磴

塩原やしほゆの坂のつゝら折
　からけに人のゝほりゆく見ゆ

妙雲晩鐘

のみの雲ふかくかゝれる山のはに
　夕べさびしきかねの音かな

古坊新月

三日月のかけてそかゝれ打なびく
　よもきかしまの青柳のいと

源窟聴泉

しのび居しいはやの清水今も猶
　うちむせびたる聲にもある哉

宮崎探梅

宮崎のむかしの春はしらねども
　梅さく頃はなつかしきかな

新湯硫烟

くる人のしるべとなりて立のぼる
　新湯のけぶりましろなるかな

須巻暖溜

あたゝけき湯瀧のもとに立つ人は
　やまひも憂もしらぬなりけり

神祠古杉

神かきの幾世の霜のかゝりけん
　木たかき杉の枝のたれたる

吐月霜楓

さし昇る月のひかりにもみぢばの
　錦さらさぬ峯なかりけり

六日、天氣よし、朝とくやどりをいで、松島におもむかんとす、山のすがた水のながれ、霧たちこめておもしろし。

たちかへり又もきてみん塩原の
　この山かげの秋のにしきを

もときし道を車やらせて、西那須野の停車場につ

きぬ、十一時また汽車にのりて數多の停車場を過ぎて、火ともす頃仙臺につきぬ、やがて車走りいでゝ七時半鹽釜にいたる。

七日、天氣よし、鹽釜の社に詣づ、右宮左宮別宮の三座の御やしろ、神さびたり、和泉三郎忠衡奉納の鐵の燈籠、鹽釜櫻など年ふりたり、また市街に神竈の社とて徑四尺八寸ばかりの鐵器四つをならべて、玉垣ゆひ廻らしたる小さき祠あり、鹽土翁、鹽をやきしかまと云ひ傳ふ、舟をやとひて松島みにものす、市街より掘割なして、蒸氣船たやすく行きかふ、舟こぎ出づればまがきの島をはじめ波にうかべる島々のすがた、めもあやなり、舟人島の名をさし示せど、みなひなびたる名なればよくも覺えず

島ごとに船こぎよせてみれど〳〵
松のみどりはかはらざりけり

松島につきて瑞巖寺に詣づ、明治九年御巡幸のをりに行在所となれり、われも侍從長にて扈從してこの寺にとゐしたりしことなど、昔がたりとなりぬ、政宗の等身の像、厨子をひらきてみせぬ、方丈に休ひて觀月樓にのぼる、ひるげとゝのへて、ひとり欄によりて打見わたすに、空よく晴れて海とひとつ緑のはてなきに、よきほどに島々のけしきそへたる、帆をあげて小船の行きかふさま書に寫してみばやなど思ふ、もとの船にのる、まぎれの風に帆をあげて、夕つかた鹽がまの浦にかへる。

松風も秋のしらへになりに鳧
まがきの島のゆふ月の影

八日、空くもれり、七時頃汽車にのる、窓あけはなちたるに、左右の見わたしいとよし、田毎の稻葉色付きて、年ある秋いとしるし、郡山にてひるげとゝのへ、夕ぐれ大宮につく、こゝより車をおり、公園地の萬松樓にやどる

九日、天氣よし、氷川の御社に詣づ、維新東幸のをり、兩度の臨幸あり、ことしよりみてぐら使、東遊の恒例に祭式として行はれ、ちかく御社造營ありて松杉のみどりも神さびたり、宮司、禰宜などしる

人なれば、處々しるべす、夕つ方鷹留松のあたりをそゞろあるきす、月影さやかに、虫の音千種の花になきて、夜の景色おもしろし、宮司禰宜とゝもにあそぶ。

十日、天氣よし、よべの鷹留松の蟲かきてあそぶ鈴虫を籠に入れて氷室のおこせければ

虫の音を移してきかん秋の野の
　千草をつとになす由もかな

三時頃汽車にのり、兎角するほどに上野の停車塲につきぬ

山海を分けこし道をかぞふれば
　七日あまりの旅としもなし

寫眞術實驗談（續）

井伊直方

現像液

（六）メトール　現像藥中主要のものにして、『アルカリー』を入るるも分解せず、其速度は『アミドル』『チアミドフエノル』に次ぐ、然れども本來の性質は軟き原板を作り、瞬間撮影に最も適當し、兼て又人物の板に適す、只其缺點とする處は露出過度の板は總てかぶるの恐れあることなり、而して本來は沒食酸及『ハイドロキノン』と混用することを得、沒食メトールは最も強き現像藥となり、『メトールハイドル』は力強き濃き原板を作るに適す、『メトール』の處法左の如し

蒸溜水	一〇〇〇、〇センチメートル
メトール	一五、〇グラム
亞硫酸曹達	一五〇、〇グラム
炭酸曹達	一二〇、〇グラム
臭素加里	一、五グラム

使用の際、右液一分を三乃至四分の水と合せ用ふべし

メトール、ハイドロ現像液の處法

（蒸溜水　一〇〇〇、〇センチ

甲
- メトール　一四、〇グラム
- 亞硫酸曹達　一四〇、〇グラム

乙
- 蒸溜水　一〇〇〇、〇センチ
- 亞硫酢曹達　一〇〇、〇グラム
- ハイドロキノン　一七、五グラム

丙
- 蒸溜水　一〇〇〇、〇センチ
- 炭酸曹達　一五〇、〇グラム

使用に際し甲乙丙の三液を等分に混合し用ふべし

メトール沒食現像液の處法

甲
- 蒸溜水　一四五〇、〇センチ
- メトール　一一、〇グラム
- 異性重亞硫酸加里　二四、〇グラム
- 沒食酸　一一、〇グラム
- 臭素加里　一、五グラム

乙
- 蒸溜水　一七五〇、〇センチ
- 炭酸加里　三〇〇、〇グラム

使用の際、兩液を等分に混合し用ふべし、此現像液は、人物殊に度不足の板を現像するに適し、他の現像液にて現はれざる板と雖、此現像液を用ふれば可成の板を作り得るなり

(七)グリシン　本劑は現像極めて遲緩にして、力あり、且つ陰影部をよく現出するの性あり、故に露出の甚しからざる過不足は、其結果に於て異らず故に露出時間に餘裕あり、從て立現像にも適用さる若し速に現像せんとせば、苛性曹達を入るべし、其處方左の如し

- 熱湯　四〇、〇センチ
- 亞硫酸曹達　二五、〇グラム
- グリシン　一〇、〇グラム
- 炭酸加里　五〇、〇グラム（徐々に加ふ）

右液は極めて濃厚の液にして、グリシンの原液なり。

使用法は普通適度の露出を與へられたる板にして普通の速度の現像を終らむとせば、右原液を十五倍の水に稀め、其百センチに付、臭素加里の一割液五滴乃至十滴を入れ用ふべし、尚ほ迅速に現像せんと

せば、原液三センチを百センチの水に稀め、之に苛性曹達の十倍液を二千乃至四千センチを入れ、臭素加里の五滴乃至十滴を加へ用ふべし、反之非常に遅く徐々と現像せんとせば、原液一を三十乃至五十の水にて稀め、其三百センチに付臭素加里五乃至十滴を入れ用ふべし。

(八)アミドル　『アミドル』は『チアミドヘノル』と其本質を同ふし、薬力強健若干の亜硫酸曹達を加ふるときは、他の『アルカリー』物を用ゐざるも、能く現像の力を生ず、故に取扱極めて簡なり、其處法左の如し。

水	一〇〇〇、〇センチ
アミドル	二〇、〇グラム
亜硫酸曹達	二〇〇、〇グラム

使用の際三倍の水に稀め、其液五十センチに付、二乃至三滴の臭素加里を加ふ。

(九)チアミドヘノル　前薬と同性質にして、其處法左の如し。

水	二、〇ヲンス
無水亜硫酸曹達	木匙三杯
チアミドヘノル	同　一杯

露出不足の板には、亜硫酸曹達を八杯迄増加し、複寫には二杯とし、『チアミド』も二杯とすべし。

(十)アイコノゲン　本劑は現像非常に速にして、最も軟き原板を作る故に、取扱最も六ケ敷、且つ鐵氣を忌むを以て、必ず蒸溜水を用ひざるべからず而して本劑は『ハイドロキン』と合せ用ゐることを得結果亦良好なり。

アイコノゲン現像液

蒸溜水	五〇〇、〇センチ
炭酸加里	二五、〇グラム
亜硫酸曹達	六〇、〇グラム
アイコノゲン	一五、〇グラム

右處法は、特に瞬間撮影の板に適す、使用の際此儘用ふべし。

アイコノ、ハイドロ現像液

甲
蒸溜水　一〇〇〇、〇センチ
亞硫酸曹達　一一五、〇グラム
アイコノゲン　一八、〇グラム
ハイドロキノン　五、〇グラム

乙
水　二〇〇、〇グラム
炭酸加里　四〇、〇グラム

使用の際甲液九分乙液二分の割合に混用すべし。

以上述べたる現像藥の外尙ほ一二の現像藥ありと雖之を省き、現像上の參考として、各現像藥の特質に關する比較を概略述べんとす。

現像時間の遲速　現像時間は、藥液の如何に由り其速度を異にす、其最も速なるものは『アミドル』にして、最も遲きを『グリシン』とす、其順位左の如し。

アミドル、チアミドヘノル、メトール、ロヂナル、アイコノゲン、沒食酸、オルトール、アジユロール、パイロガテヒン、ハイドロキノン、グリシン

◎原板の濃淡　現像藥に由り、出來上りたる原板の濃度を異にす、『アジユロール』最も濃き板を作り『アイコノゲン』最も淡き板を作る、其順序を列記せば左の如し。

アジユロール、ハイドロキノン、沒食酸、グリシン、パイロガテヒン、メトール、オルトール、チアミドヘノル、アミドル、ロヂナル、アイコノゲン

◎定着に由る原板濃度の減退　凡そ何現像藥を問はず、定着後は多少原板の濃度を減殺することを免れず、唯現像藥の性質上、各其程度を異にし、『ハイドロキノン』『グリシン』『沒食酸等は其減度極めて少きも、『メトール』『チアミドヘノル』『アイコノゲン』に至りては、其度最も甚しく、就中『アイコノゲン』を第一となす、然れども『メトール』に加ふるに、沒食酸を以てせば、其減度は『メトール』よりも少く沒食酸と同一となり、又『メートル』と『ハイドロキノン』と混用したるものに在ては、其減度は『メトール』のみを以てしたるものより少なし、概して現像の速なる藥液を以てしたるものは、定着後其濃度

を減ずること多きを常とす、然れども尚ほ茲に注意を要するは、乾板の種類に由り、其度を異にする點にあり、凡そ乾板の何種たるを問はず、膜の厚き板は、概して減度強く、『シード』『スタンレー』『スタンダード』『イルホルド』等の乾板は、現像の濃度の少しく過ぎたるを可とす、反之膜の薄き『マリヲン』『アグフア』『ルミエル』等の乾板に至ては、其減度少きを以て、適度の濃度に現像を終るも、定着後左したる差異なきを見る。



◎薬液の耐久力　現像液は新鮮なるを可とすれども現像の際一々調製するは、極めて煩雑にして其勢少からず、故に豫め一定の量だけ作り置くを常とす、故に保存中漸次其成分に變化を來し、從つて現像力に影響を及ぼすことを免れず、爲に現像液中保護劑を加へ、之を防止すと雖、永久に之を保持すること能はず、然れども薬液に由り、各々其耐久力を異にす『グリシン』の如き最も永き保存に耐へ得ると雖、『チアミドヘノル』の如きに至りては、忽にして其効力を失ふ、尤も保存方法の如何により其度を異にするは勿論なり、今其耐久力の長短に由り、順記せば左の如し。

グリシン、アジュロール、メトール、オルトール

パイロガテヒン、ハイドルキノン、ロヂナル、アイコノゲン、沒食酸、アミドル、ヂアミドヘノル

以上述べ終りたる各現像藥に對する處法の使用量は、適度の露出を與へられたる板を標準として、其分量を示したるものなり、故に寫度の如何により、其分量を斟酌加減せざるべからず、尙ほ茲に一言現像液の濃淡に由り、其結果を異にすることを述べんとす。

凡そ現像液の濃厚なるものは、其作用強く、從て硬調の原板を作り、稀薄なるものは、其作用弱く、從て軟調の原板を作るを常とす、故に寫度不足の板は硬調に傾き易きを以て、成るべく稀薄なる現像液を以て、數回取替へて用ゐ、全體の畫像現出したるときは、更に濃厚なる液を以て現像せば、完全なる原板を得るに近し、之に反して寫度の過ぎたる板は、兎角軟調に失し易きを以て、成るべく濃厚なる現像液に多量の制止劑を加へて用ふるを適當とす、然れども『ヂアミドヘノル』『ロヂナル』『アミドル』等の現像藥は、其例外にして液を淡くなす時は、都て硬調となるの傾あり、注意を要す。

以上不完全ながら、現像藥につき其概略を述べたれども、固より實驗上心付きしまゝを說きたるもの故、或は實驗不熟の爲、誤謬なきを保せず、此點は十分諒察せられたし、今日は寫眞術も大に發達し、從つて寫眞に關する著書も少なからざる事故、詳細の事は夫等に就て研究せられたし、敢て予の贅言を要せざれども、尙最後に現像に關し、一二心付し點を述べんとす。

現像は被寫體の如何に由り、特別の取扱をなさゞる可らず、例之ハレーションある物體を撮影したる場合の如き、固よりハレーション防止の乾板を用ふるを以て、普通の現像法にて差支なきが如しと雖、實驗上特別の方法を採らざれば充分の結果を得難し故に假令普通の乾板を用ゐたる場合と雖、現像法其宜しきを得ば、大にハレーションを防止し、良好なる原板を得べし、要するにハレーション防止の板を用

ゐたる時は、其取扱容易にしてハレーションを防止することを得との點にあり、故に此れ等の物體を撮影したる板を現像するに當りては、普通處法の現像液を三倍位に稀薄し用ふべし、尤も其稀め方の割合は畫像現出の如何に由り、加減せざるべからず、凡そ二十秒内外より現出するを適度とす、室内撮影の場合の如き亦此現像法に由らざればハレーションは勿論極めて度ぎつき板となるべし。

右述べたる如く、現像は種々の關係上極めて六ケ敷ものなれども、殊に夏季に於て最も困難を感ず何となれば高温度のため、現像中膜は柔軟となり、從つて剝脫損傷し易く、現像の進行又迅速なるを以て、やゝもすればかぶるの恐あり、故に現像は必らず氷を以て冷却し、使用の水は井水又は氷を入れたる極めて冷たきものを選まざる可らず。

かゞみ

曇りなきかゞみの上にゐる塵を
目に立てゝ見る世とおもはゞや

文齋

雜詠一束

千家尊福

夏草深

立よらむ木かげは近く見えながら
夏くさふかしみちわかぬまで

紫陽花

あぢさゐのさく此ごろは花の色の
かはる〳〵に人もとはなむ

樹間夏月

吹風にをり〳〵見ゆるかげもよし
若葉がくれの夏の夜のつき

採早苗

生立のよくもあるかなとるなえの
瑞穂のあきやいかにとましゝ

山家子規

わが山にかひならしたる心地して
きかぬ日もなきほとゝぎす哉

水風涼

河風のゆらぎに夏も消えにけり
　あつさは水のあわならなくに

撫子

敷島のやまとなでしこ咲きにけり
　からくれなゐをわが物にして

隣家泉

心さへくみしられたるなかゝきの
　となりの淸水とはぬ日もなし

伊香保漫吟

佐々木信綱

伊香保颪小霧をまきておばしまの
　うつくし人がうすき袖ふく

湯の山の低き湯の宿高き宿
　戸をくる音すほとゝぎす鳴く

ひたしなばしをれし花もひらくとふ
　此ゆの山に物おもふわれ

かじかなく湯の澤川の朝月夜
　朝逍遙のうすものゝ袖

門涼み人の噂もさ夜ふけて
　屋根の上なる天の川かな

淺黄絽のこすもす模樣袖ゆれて
　人うつくしき朝湯元道

湯の里や夜目うつくしきうたひめが
　鼓もてゆく夏の夜の月

筧おつる湯瀧の響音ふけて
　ねられぬ夜半をなく時鳥

湯の澤の瀬の音ひくきたそがれを
　弓場に弓ひくたゞ一人かな

湯の町やたちてながるゝさゝやきに
　尺二の的を遠くはなれぬ

湯元がよひ顔知るどちが立並び
　弱弓射るや日まはりの花

もやがくる山の峡野の女郎花

日かげ待ち戀ひうなだれ咲くも
人の世のほだし斷ちかね伴なひし
　山の隱者が愛子なでして
小草まじりあやめ花さく野の小道
　荷馬の鈴の音遠ざかる
のる駒のあがきゆるむる眞萩野の
　ゆくてに見ゆる水海の色

彫刻の話

園田墨川

彫刻の仕方には三種あつて、即ち平面彫、浮彫、丸彫と區別さるゝのである而して
第一の平面彫と云ふは、盆などに繪畫などを彫つてあるもの平たい板に彫付けるもの、例へば、日光などに行くと盆を賣つて居る、それに日光の神橋など彫付けてある、あれなどが平面彫といふのであるあゝ云ふものである
第二浮彫と云ふはさうでない、此は表面に高く出て居るものであつて、その出方に因つて、高く出て居ると低く出て居ると、眞中程に出て居るものと、斯樣に三通りのものがある、
第三に丸彫と云ふは、全體を彫出すのであつて、置物の猫とか鳥などを彫つたものを云ふのである、
その中で彫刻として眞の直打のあるもの、眞の彫刻と云ふべきものは何かと云ふに、肖像即ち人の像を彫り出すのが目的である、平面彫の如きは、只平面の上に小刀で穴を明けて木の形や橋の形などを彫り出すのであるから、恰度絹なれば絹、紙なれば紙の上に畫を描いてゆくと同樣で、その異なる點は、一方は筆や刷毛で描くのであるが、平面彫は鑿で板の上に彫るとの違ひである、左れば、平面彫の方は彫刻物よりは寧ろ畫の方に近い性質を有つて居るのであるから、平面彫は彫刻物としての眞の直打は無いので、云はゞ繪畫と彫刻との中間に立つやうな性質のもので、例へば、繪畫の消えて居るのを橋を架

けるやうなものである、元來繪畫は筆で描くが、平面彫の方は小刀で彫付けるのであるから動かない、鑿で堅い繪畫を描くやうなものである、

浮彫と云ふのは、後ろに物があつて二寸なり三寸なりの板の厚味があるとすると、その厚味の板へ持つて行つて花を半分彫り出す、所謂半肉彫と云ふのであつて、奈良に法相宗の興福寺と云ふ寺がある、其所の寶物の中に、板神の十二神將と云ふものがあるそれは眞中に本尊様があつて、その周圍に居る神様即ち十二神將と云ふのであるから、悉く武裝して居る、眞中にお釋迦様なり阿彌陀様なりがあれば、それを惡魔が來て襲つたりしないやうに、その十二の神將が周圍に六つかしい顏をして立つて居るのである、仁王さんなども裸體で立つて居るけれども、兎に角眞中の本尊様を護衛するのである、此は非常に御秘藏の寶物になつて居て、今では日本の國寶としてある、此は即ち浮彫と云ふものである、

乃で彫刻の眞の目的は丸彫すなはち肖像であることは前述の如くであるが、之に用うる材料に三種ある、即ちそれは粘土・石膏・大理石である、此の三種は各々性質が異なるものであるから、從つて肖像に使つても、拵へ上げた結果が大變に差つて來るのである、

粘土即ちねば土は、極めて軟らかなもので、水分を含んで濕つて居ると形が如何やうにも自由になるので、形を取るに都合が宜い、雛形などを拵へるには適切のものであるから、初め稽古をするには粘土が一番宜い、縱んば行り損なつても握り潰して拵へ直す事が出來て都合が宜い、而して粘土は化學的成分の原素に因つて色は一定して居ないが、通常は一種の黄色を帶て居る、且つ水分を含んで居る時は、花又は動物の如き生活を有つて居るものを造るには最も宜い、であるから粘土は初めて彫刻を學ぶ者には必要缺くべからざる品で、是なくば稽古が出來ない位である、例へば、油畫又は水彩畫を學ぶに方つて、先づ鉛筆畫を練習するやうなものである、併し

粘土は水分が無くなると脆いものであるから造つた物が壞れ易い、設令壞れぬまでにも龜裂がいる、龜裂が入れば直に壞れる、それ故に粘土で造つて其儘で永く置く事は出來ぬのであるから、何うしても何かに形を取直す事が必要になつて來る、

　左れど粘土を日に乾かせば崩れるから燒ては如何であるかと云ふに、燒けば瓦のやうになつて保存には宜いけれども燒けば動もすると變形の虞れがあるのみならず、成分原素の種類に由つては一種厭ふべき色を呈することがある、左れば粘土は生活を有つて居るものを作るに適すると云つたが、燒ては其効力が無くなるのである、と云つて燒かねば保存が出來ぬ、けれども之が無ければ稽古が出來ぬ、何れにしても餘り都合の宜いものでは無い、



　次に石膏は如何なるものかと云ふに、之は粘土より都合が宜い、粘土のやうに脆弱でなくて膏氣を有つて居るのであるから、彫物の理想を模出するは石膏が可い、而し色が白いから生きたものを模出するには不適當である、白色は極く無垢な罪のないと云ふ事を代表するに使ふ、元來此色は混り氣のない純い純なるものであるから、極く罪のない惡い根性のない、小供又は天使のやうな

ものは皆白である、けれども生命がない色である、故に石膏は生きた物を模出するには都合が惡いのである、生活物即ち動物とか植物とか人間とかを造り出すには大變惡い、何せなれば白は無精神の性質を有つて居るものである、

日本で婚禮の時は白を使ふは如何なる譯か知らんが、併し白のみは着ない、白と赤、白赤黑とか、又は白と黑を着る、ソコデ白を着るのは斯う云ふ意味であると考へるのである、女子は一旦嫁入つた以上は、その家にて死すべきもので、度々出たり入つたりすべきものでは無い、必らず其家を住家として其所で死んで出づべきものであると云ふ所より着て行くのではあるまいか、それは兎も角として

一體色は種々の意味を有つて居て、赤は何ういふ意味・黄色は斯う云ふ意味と云ふ事は、己に理學の上に極められて居るので、白色は純潔と云ふ意味を有つたものである、粘土は何處でもあるが、石膏は安いのと色が白いと云ふ事を以て種々のものに使はれる、それで粘土が使ひ得らるゝやうになれば、石膏に移つて之で仕事をする

昔し希臘邊では、豪い彫刻家が大理石を以て、人又は神樣の像を彫つたが、其原作はそのやうに澤山あるものでは無い、それは何故かと云ふに、幾多の星霜を經る間に火災又は兵燹、その他の變遷に依つて消え失せたものがある、故に今日では大層貴重なものとして、何十萬と云ふ大金を出しても買ふ事が出來ない物が僅に殘つて居る、併し其があつても左樣遠方までは見物に行かれぬので、そこで他の國では博物館を建ると、原作を摸造した物を買つて列べるのである、その摸造品は皆この石膏である、東京の帝國博物館にも、西洋の神樣の彫物があるが、迚も日本邊りで買ふ譯には往かぬ、今でも稀であるから時代が經れは經る程少くなるは知れて居る、ソコデ後代の者に手本を示す爲に石膏で摸造したものを買ふのであるが、さう云ふ大理石の摸造品を造るには粘土では保存が出來ねから之を使ふのであるが、

此石膏で造られた獅子の丸彫とか、その他種々あるそれを手本にして或は繪を描き、又は彫刻を行つてそれから生きた人間、生きた動物等を持つて來て行るが善いのである、

歐洲の英國佛蘭西獨逸等の博物館には原作も多少あるけれども極めて少ない、大概は石膏の摸造品である、若し摸造であると云つて壞して了へば殆んど博物館が空室になる位澤山列べてある、我國の帝國博物館は即ち皇室の御費用で建つて居るのであるが此所にも極く僅かしか無い、

原作は固より高いが、摸造品でも中々易くない、一つで千五百圓乃至二千圓もするので、夫も今の人の作は易いが、昔しの豪い人物が彫刻した物を、その當時に摸造したものがある、希臘邊りの昔の儘今日に來つた摸造品は中々我日本の手に這入らない、けれども原作は大理石であるから、如何に良く出來ても原作品のやうには往かぬ、之は前にも述べた如く、石膏と云ふものは生活のない物を摸出するには都合が宜いのであるから、日本人のやうに容易に原作品を見ることの機會の少ないものは、何うしてもその機會を利用して、即ち洋行して巴里のルーブルの博物館か、英國の大博物館に行かなければ迚も原作品を見る事が出來ずに、始終石膏の摸造品ばかりを見て居る者は、生活を有つて居ない方が通例になつて、大理石の物を見た時には、生活のあるものは斯樣な物であると云ふ事が解らなくなるのである、本統の物を見て本統の精神が分らず、却つて摸造品の方が良いのではあるまいかと云ふ考が起つて來るのである、石膏の摸造品は生活が無いから左樣いふ不便がある、

原作の人の像を石膏で摸造すると、原作の大理石が本統の生命を顯はす意味が無くなつて仕舞ふからその生命の無くなつた摸造品ばかり見て居ると、本統の生活を顯はした物を見た時に、身體と精神との調和が、斯う云ふ所に顯はれて居ると云ふ事が分らなくなるのである、從つて非常に間違つた結果を生

じ又間違つた判斷を下す恐れがあるから、石膏は彫刻の知識を增加する上に於ては、無くてはならぬものであつて、又非常な弊害を起す原因となるのである、之は單に我日本ばかりでは無くして、同じ歐洲中でも、例へば、獨逸の北部とか、希臘および伊太利邊りに極く遠い處、其所等の士民は我日本と同じく、迚も伊太利邊りに旅行する事は出來ないのである、さう云ふ物は石膏の模造品ばかり見て居るのであるから、同じ西洋人ですらも、左樣いふ間違つた考を持つて居る者がある、左すれば、其生命のある者を彫刻するには、果して何物が良いかと云ふに、大理石か又は青銅の二つに及ぶものはないのである、

◎皇后陛下の御譽れ　コッペンヘーゲン府五月十四日發電として近着米國新聞の報ずるところによれば明年度授與さるべきノベル氏文學賞金の受賞競爭候補者中にはわが日本文學者の名も見えざる由なるが畏くも我　皇后陛下にも豫て歌道の御心がけ深く渡らせられ日本現代文學の驚くべき發達に御貢獻遊ばされし御事の淺からずとの議によつて右受賞候補者の御內に數へさせられつゝありとぞ陛下の御譽れは申すも畏し臣民の名譽また眞に大なりといふべし

こゝろの友

阿部優子

清閑覺子の君に

事のしげきに、久しくまからざりし

かにかくと思ひ草のみしげりあひて
　ゆき來のみちもわけぞわづらふ

御かへし

利鎌もてかりてもつきぬおもひぐさ
　しげりあふこそ愛世なるらめ

久しく逢ひまつらざりし
南鄉柳子の君に

いかにせむおなし都にすむぞとも
　おぼえぬまでに逢はで過にき

御かへし

あふことはほど隔つれど隔てなき
　君がこゝろぞうれしかりける

五月十日あまり安東菊子の君に

文も參らせざりければ

月花をともに見るべき都にて
　かりの使りも稀なるぞうき

御かへし

ひと日だに忘るゝ君にあらねども
　とはれて更になつかしきかな

おとづれはよしうとくとも君とわれ
　おなじみやこにありとたのまむ

筑前國若松安川のもとに參り居る
隆子がもとよりおぼろ月に雁のゑ
をかきて

君をおもふゆふべ淋しく雁なきて
　こゝろうつすや月もかすみぬ

かへし

かへりこむ君をこゝろにまつ坂の
　やどもゆふべのながめ淋しき

花のころわかれし雁のたよりのみ
　青葉のかけにまたぬ日もなし

鎌倉の祖母君よりも

霞むともおなじ雲井の月を見て
　かりのたよりを聞くぞうれしき

六月八日庭のつゝじさかりなるに
安東菊子刀自、小川直子刀自おは
しけるに、例の今昔の名ある人々
のうへを語りあふ、いとたのし、
おくる日菊子刀自より

嬉しさを何とこと葉にいはつゝじ
　わかきは君の心とぞ見し

よの中にたまわふ友と今むかし
　かたらふばかりたのしきはなし

かへし

我こゝろいはねど君にしられけり
　岩根のつゝじ色にいでつゝ

國のためうせにし人をたまわへる
　友とかたりてをしみつるかな



水の味

（前號參照）

幸田露伴

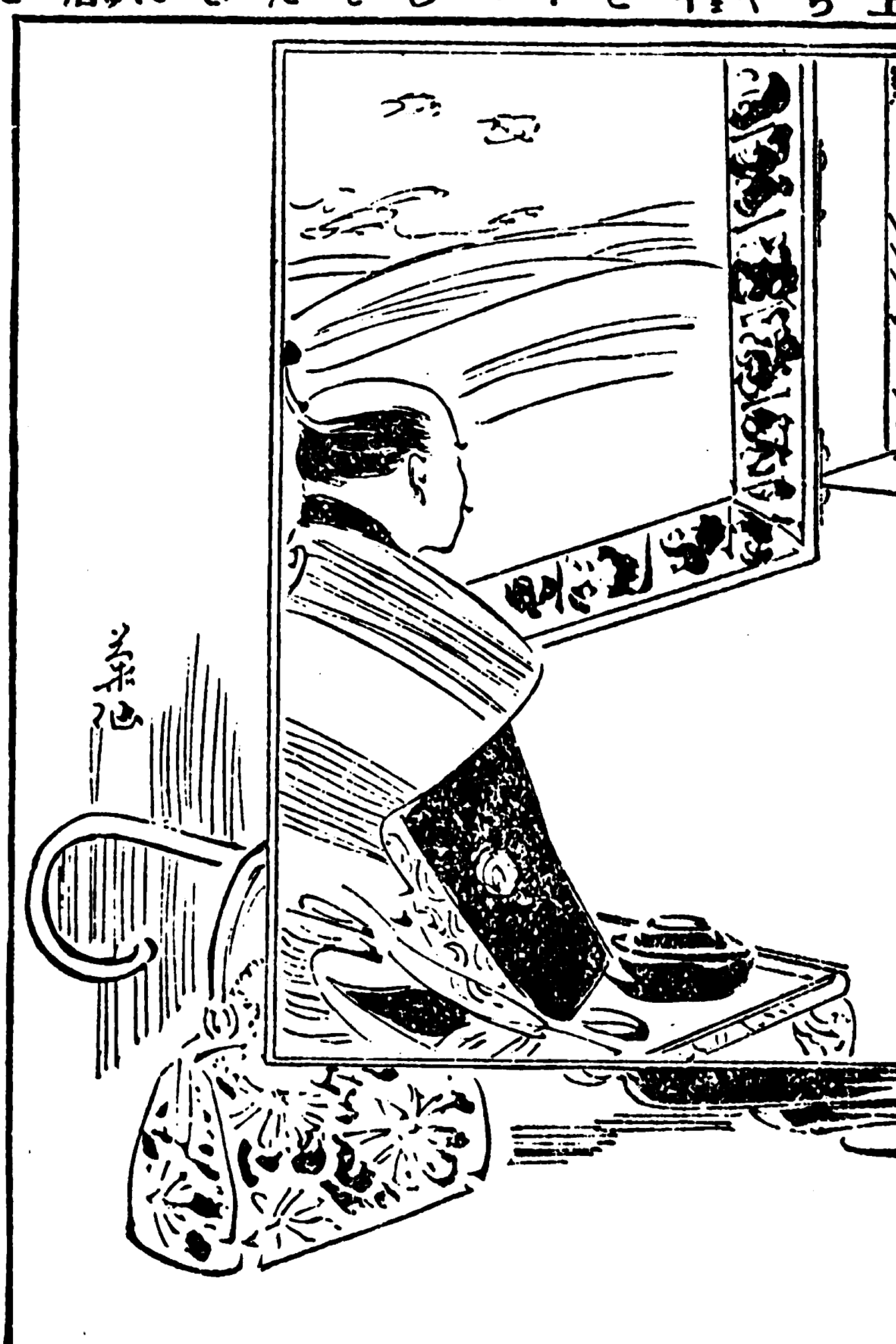
旅寝の日數重なりて後初めて吾が家の好きを知る人心、赤きリボンを春風に吹かせて蝶鳥の心輕く日を過しし頃は父母の恩惠をも能くは辨へざりしが、身は他家の人となりて丸髷の頭重く世を經れば、内外の心遣ひ、其此の氣扱ひ、何ぞに付けて憂き事の少からで、其の度每に實家を戀しみ、娘の昔を懷かしむも、また免れぬ女の情なり、母上の來玉ひしは、つい過般の事と思ひしが、數へて見れば既一ト月ほど前になりて、其後の御樣子を承はらず。御異狀の無ければこそ何の御音信をもなさらぬなるべけれど、それとも吉からぬ事など有りて、知らずも空に心配さするばかりなればとの御斟酌より斯樣ぞとばかりの御文も無きか。何一つ氣になる事は無けれど、御父樣にも御目にかゝりたし。絕えて久しき人々の顏をも見たき心地のするなる。幸に吾家に事無く、人がむづかしいものに云ふ姑御舅御にも左のみは叱られず、まづ〳〵目前に波風も無くて舵の取り難く見ゆる瀨も無ければ目上御兩方の日光松島掛けて三四日の御遊山旅に出で玉ひし御不在とて用事も少き折柄、夫に乞ひて其の許諾をも得たり、いで是よりと氣もいそ〳〵、我居らでも夫の差支無きやう萬般を取り賄ひ置きて、綺羅を張る要も無ければ身繕ひさへそこ〳〵に有合せの瑣細の物を手土産にして、

立出づる心も輕く身も輕く、袂も輕き單衣時、人妻となれば自づから儉素に、娘の頃は假初の出行にも人車と云ひしところを、電車に雑沓を今は厭はず、乘降の後前は雲洩る日の光を小傘に凌ぎて、小刻みの歩きつき律義らしう、漸く我が親の家の門に入りて、一樹一石皆懷かしき四邊を見廻しながら靜かに玄關前へと差掛れば跫音に其と知つてか、人よりは先づ茶斑の大狗、驀直に馳け來りて鼻を鳴らしながら、悦び喜びて身を擦り付けつ飛び付きて狂ひ廻る。眼も朦く脚も弱かりし小狗の時より、我が手に掛けて育てつ、名さへ我が撰みてゴンと付け遣りしなれば往時を忘れず愛想するは然る事ながら、餘りに戲れつかるゝに聊か持て倦む時、折柄端居など仕て居玉ひしや思ひも寄らぬ庭口の方より小聲に叱り制めながら母上の立出で玉ひて噫、珍らしい、さあ、まあ御上り、と慈愛溢るゝ笑の御目に迎へ玉へば、ゴンにはあらねど我もまた飛びつきたいやうに覺えて、一も二も無く御後に隨ひ行くに、弟達はまだ學校より歸らねど、幸ひ父上も居合せ玉ひて、好く來たと例の鷹揚なる御言葉つきなり。互に家の内の人々の健康など問ひもし問はれもし仕て後は、愛想は澁茶ばかりながら、隔てぬ間の談話竭きさせず、此一句彼一句に時は忽ち過ぎて、漸く正午近くなれば女は歸らんとするを、今御話しの樣ならば別に差支も無からうから、些は緩りとしてお午飯でも濟ませてから御歸り、丁度淡泊した好い御肴も有りますからと母は引留む。もとより居たき底心はあるを、留められては振切らうやう無く、それでは御母樣の御言葉に甘へて、と腰を落付くる程無く膳部は出でたり。何やらを鷄卵に綴ぢたる椀盛は、ほんの手拵への取り出でゝ云ふべきにもあらぬながら、嫁の日の我が家にて參らせしとは違ひて鹽梅の加減極めて宜きに適ひたれば、御教訓を受けし其折の事など思ひ出しつゝ御母樣、此の御加減はまことに結構でございまして、先日差上げました御恥しいのとは大層の差異で、と褒むれば母も機嫌麗はしく、給仕せる若き婢を一寸顧みて、此婢が大分器用に覺え込んで爲て呉れるので、と下を悦ばす一

言は流石世に老いたり。椀のほかには小丼の浸物、小碟の香の物、まことの常饌と見えて多く言ふにも足らざるながら、一ト皿添ひし香魚の鹽焼は、いと大きく見事にして普通ならず見えたり。別に是といふ華やかなる取合せもなく、碟も記臆ある我が家の物なれば、正しく仕出屋物ならぬ手輕料理とは知れて、淡泊した好い御肴と母上の言ひたまひしも此の事とは思ひ合されけるが、箸を付けて後更に味の優れるを悟りても、たゞ心の中に褒め悦びしのみにて何の挨拶の言葉も出さずに其儘過ぎたり。やがて食事も濟み膳も退くれば、もとより口數少き父上は、例の何事も詞少く涼しげに仕做し玉ふ御癖とて、檐の吊葱にそよ風の音信れて緘の下葉翠色を扇る庭の景色を白き髯撚りながら見遣り玉ひて、わらためて母上の參らせ玉ひたる食後の茶に、折鷹の一煎を心靜かに味はひたまふ。此方は母上と共に女同士の何彼と四邊を片づけつゝ、扨同じく茶に寛ぎて徐



々清き香を嗅る時、母上は面上の優しき笑をしかめ玉ひながら斯樣云へば褒め辭〻催促するやうで眞に可笑しい事ながら、今の御鹽燒は何と御思ひかえ、と問ひ玉ふ。何の心も無く、ハイ眞に結構に存じました、と云へば、愈々面上に笑の皺を深くして、何樣も其では眞に若過ぎてそれで奥樣役が能く御勤まりだらうかと、餘計な案じ過しがされてなりません、と云はるゝに一向合點行きかねて、美しき眉を顰めつ、何故でございますと問ふ。過日も食物の御話しを仕て、今日もまた食物の御話しでは、何だか餘り下卑て鄙しい樣ですが、それは御聞だから話してあげますがネ、今のはたゞ市中の魚屋から買つたものでは有りません、御父樣の舊い御朋友が今しがた鬼怒川から御持歸りになつたので、香魚の形と云ひ大さといひ又風味といひ、普通の品とは大分立優つて居るのが、汝樣にも分らない事はありますまいのに、一ト言の挨拶も無かつたのは、何樣も宜



けませんだつたネ、吾家ですから何樣でも構はないやうなものですが、若し旦那樣の母御一族の方やなんぞへ御招きなどを受けて、今の樣に氣の至らない事だつた日には、おまへさんの評判が思ひ遣られてなりませんよ、私が御茶の宗匠樣から伺つた事がありますが、細川右京太夫勝元と云つた人は、足利の頃の大の利物で山名宗全といふ人と天下を二つ分けにして爭ひ合つたほどの人だつたといひますから定めし歷史やなんぞで私などよりも能く知つておいでだらうが、其の勝元が或大名に招かれて、他の大名共と一緒に饗應を受けた時、亭主が態々淀川の鯉を取り寄せて其の作り身を侑めたのに他の人々は少しの氣も付かないで、結構な御料理とばかり挨拶したと云ひます、其の時勝元が言葉を出して、是は我々を馳走の爲に、主人が遠路に使を馳せたまひて特さらに求められた鯉と覺えまする、定めし淀の鯉にてもあるべきかと存ずるに、人々の褒詞は聊か無骨のやうに思はるゝと云つたといふ事です、亭主の身になつて御覽なさい、勝元のやうに人の心入を會つて呉れる人は何樣なにか嬉しい事でせう。然樣いふ心の細い氣の至つた人であつたればこそ人々も自然に懷き從つて一方の大將とも仰がれたかと思ひます。過般の大西鄕さんの話、今日の淀の鯉の話一は他に寛大にする事、一つは自分を細に責める事、まるで違つた事を云つて聞かせるやうですが然樣ではありません、能く考へて御覽なさい、皆道理のある事です。何樣か過失も無く良い奧樣になり徹して、行末御目出度榮えて行つて貰ひたいので、思ひついた儘を長たらしく饒舌りましたが、是も朝夕汝を思ふ餘りです、何樣かまあ何にも彼にも能く〳〵氣を付けてネ、と噛んで噛むる母の敎に娘は聞き入つて温順しく服し從へば、父上は白き髯を撚りながら此方を向き玉ひて、ハヽヽ、昔時自分が娘だつた時に云はれた事を今度は娘に云つて居ると見えて、餘り間違つた事も云つて居らぬやうだ、ハヽハヽハヽと笑ふ聲朗らかに、折柄庭樹を搖りて渡り來る風一座に涼しかりき。

雜錄

女子と國體

文學博士　南摩綱紀

私は兎角當世流行の敎育には反對の意見を有つて居る者で、或は夫が間違つて居るのか知らないが、元來敎育といふものは、只口の先や書物の上ばかりで行ける者ではあるまいかと思ふ、夫には實行が大切である、のみならず此に一つの最も大切なることがある、されば日露の戰爭にしても、是まで世界の最大强國として、自らも誇り將又歐洲の列國も許して居つた彼の露國を、僅か二十餘ケ月の短時日の間に征服することの出來たのは、畢竟何であるかと云ふに、我日本の人々が外に出征すると否とに拘らず、皆咸く國躰を知つて居たからであらうと考へる、故に私は先づ敎育の大本は幼少の頃より克く斯の國躰を知らしむると云ふことが何より肝要で、之は敢て女子のみに限るのでは無く、男女を通じて必要であるが、今日敎育の有樣を見ると、此を疎んずると云ふのではあるまいが、如何も之を知らしむるに於て手落があるやうに見受ける、全體何所の家にも自らその家の家風といふものが在るが如く、國には國の躰といふものがある、夫に現今は一にも西洋二にも西洋といふ工合に、大部西洋流行で持切て居るが、夫も結構で無いとは云はない、明治の御代となりてからは、女子も幸福で、私共の育つた舊時とは違つて、昔は女子の學問と云うても、ホンの和歌など位であつたのが、現今は何でも學ばれるやうになつたのであるから、何より結構なことであるが、夫に就

ても一つ心に掛ることがある、

これも或は當世とは反對であらうが、私は教育の基礎を漢學に置きたいと思ふ、何故なれば、大は治國平天下より修身齊家の小にいたるまで、悉く說き示さゞるはないので、然して之を約めて言へば、誠心誠意即ち誠の心と誠の意とに歸するのであつて、若し家長たる父兄が、此の誠心誠意を以て、家庭に於ける子弟は勿論下女下男に至るまで、朝夕時々に國躰の話を爲て聽かせるやうにし、また兒女が小學校に通ふやうに爲つたならば、學校の先生は何につけ彼につけ、誠心誠意を以て國躰のことを話して聞かせ、或は時々生徒の家に往來して此の談話をしたり、又は時々生徒の父兄を學校へ呼んで演說したりするやうに爲たならば、誠に宜からうと思ふ、けれども此中の或る部分は今直に望むことは出來まいと思ふ、如何しても今より四五十年の後でなければ可けまい、何故と云ふに、今はまだ舊時に育つた祖父母祖などが多いから、近時教育を受けた人が、祖父祖母と、なるやうになつてから、家庭に於ては子女の兩親は云ふに及ばず、その祖父母までが孫兒に如斯いふ話をするやうにならなければ可かぬと考へる、元より智と德との教育の大切なることは、今更事新らしく言ふまでゝもないが、それに付けても此の國躰といふことを確乎と腦髓に浸染せておかなければならぬ、苟且にも日本人としてこの國躰を知らなかつたならば、イクラ學問が出來て悧口發明であつたとて、成程形は日本人であつても、眞の日本人とは云はれない、たゞ形が日本人であつても中に詰込んだ物が左樣でないと、自然朱に交はれば赤くなるの喩で、已に其本質が替つて居るから、其人も亦先入主となつて、其主義で教育を司るときは、子弟は自然その感化を受けて妙な者が出來て仕まふ、私も女子の高等教育には從事したが、始終この事に就ては苦心いたして居る、何うか家庭の教育は家長が主と爲つて、誠心誠意之を教へ、學校は家庭と相待つて之を導くといふやうに致したいと思ふ、

全體我國の君臣は他外國の君臣とは異つて、君臣とはいひながら父子の親がわるから、謂はゞ日本中は一家内も同じことである、何故なれば、我國開闢の大昔、遠き神の御代より、日本の種族といふ者に就て按へて見るに、大凡三種に分れて居る、即ち第一は神別と云つて、天御中主神より鵜葺草不合尊に至る神々これを神別と申し上るので、第二は皇別 即ち鵜葺草不合尊の御子に在まして　今上陛下の御祖先なる神武天皇より、萬世一系替ることなく、連綿として今に至る御方々を申し上るので、第三は蕃別即ち外國より歸化したる者の種屬であるが、是は尤



も少數なるのみならず、今は既や皇別の末裔と雑婚して幾ど日本人に純化して居る、乃で我々の祖先はといふに、素は神別より出で給ひし皇別より、漸次と水の流れの源は一つながら、末に至つて幾つもの支流支派となるが如くに分れたる者なれば、即ち一方には君臣の義わりとも、一方には又父子の親がわるので、如斯な國柄は世界廣く國々多しといへども決して他に比類のない國なのである、夫であるから中世外國などから隨分敵をなす者などもわつたが、謂ゆる斯の父子の親わるを以て、克く上下一致して之を討ち退けて、祖先を辱しめな

いで、二千五百有餘年の久しき間治まつて來たといふものは、全く之あるが爲なのである、即ち克く國躰を辨へて忠と孝との心に厚きから致すのである、然るに支那を始め他外國では、世の中を治めて行くのに都合が悪いから天子を置くか、又は智恵の勝れた權力のある者が大統領になるとか云ふ按排で、俗に云ふ強い者勝といふ風であるから、彼の支那に於ては大聖人であると頌はるゝ堯でさへも、己が子の均は不肖なるを以て、終に百姓の舜を擧て天子と致した、夫といふも畢竟支那などは五倫五常などゝ八ケ間敷説いて居るけれども、國といふことになると人民を第一に置くのである、故に孟子も民を重しと爲す社稷之に次ぐ、君を輕しとなす云々と、又他外國では年限を以て治者を選ぶなどゝいふこともあるが、夫等は迚も我國躰とは同時に論ずることは出來ない、若しも夫等の國躰を我國に移さうとするならは、謂ゆる四角の木を丸い孔に容れやうとすると一般、企て及ぶものではない、斯様な理由であるから、

敎育を施す者も、亦敎育を受くる者も、克く此國躰を知つて、西洋等の長所は何んでも取るのは差支ない、のみならず進んで取るが宜い、けれども若しも之を知らず、且つ皇室と我等とは、一面君臣の義あると共に、父子の親ある者で、君に忠なるは即ち父母に孝なる所以で、親に孝を盡すは取りも直さず君に忠なる理由で、忠と孝とは二つであるものゝ實は一つであると、克く〳〵斯の道理を心に銘じて置いて、縱令西洋の事を學ぶにしても、己れより進んで之を取らなければならないが、その時放心して先方に捲き込まれて、己を失つてはならない、此の言は誠に僅かであるが、例へば、胃に食物を受けるやうなもので、その受けた食物を十分消化する丈の力ある者は、謂ゆる進んで取るのであるが、若し其受けた食物を消化するだけの力がなくつて溜飲を起したり、胸痞を發したりするやうなのは、謂ゆる己れを失つて仕まふのである、夫ではならぬ。

夫につけ是につけ縲言ながら、敎育の根本は家庭

にあるのであるから、之が家長たる者は、子女の幼き頃より、克く國躰の何物たるやを、折に觸れ時に應じて說き諭し、既に學校へ通ふに至らば、家庭と學校と氣脈を通じて、完全なる教育の効果を收めたいと、始終この事のみを心配いたして居る次第である。

電氣燈の前身

工學士　草野公羽

吾人が日常使用して其便利に馴れて居る者は、何物を問はず大抵何時の時代にか發明されて、長足の進歩を以て完全なる今日の有樣になつたやうに思つて居るが、一應その過去に溯つて見ると、何者でも其改良進歩の度の遲々たるは驚くばかりで、其間の苦辛經營といふものは非常なるものである、

往古穴居の民が薪柴を燃して燈火とした時代と、今日白晝をも欺く光輝燦然たる電燈時代との間には種々なる歷史がある、始め柴を焚て明を取つた事に歩を起してより松の木の炬火となり、稍人工を加へて木の節の樹脂だけを取つて燈火とするに進んだのである、之は現に今尚ほ野蠻未開の國民が重に使用しつゝあるので、前世紀の始め頃は、北米合衆國に於てすら松の節を燃やし、戸外で丸本を焚て書見などした者である、餘程昔の事と思つて居る事で、その實は決して古い事では無いのである、十三世紀までは獸脂の蠟燭さへも工夫されないので、古代の人間は實に文字通りで暗黒の中に暮したものである、少しく進んでから、貝殼や凹んだ岩の破片や燒け土の器に獸脂を盛つて、それへ燈心を入れ其器の緣へ出た一端を燃すやうになつたのは、殺した獸類の脂の小片に火が付て燃たから思ひ付た事である、それより漸次に年所を經て、ランプは立派な格好に造らるゝやうになつて、ヘブリユーの都市のあつた所から土器、石器、眞鍮、黄銅製等の種々立派なランプが見出され、エヂプトやアッシリヤの墓、又はバビ

ロンの古趾或はカルデヤ聖人の墳墓からも、室内用ランプの遺物が續々現はれて、此の種のランプが紀元前何百年といふ昔から一般に使用された事を證明して居るのである、希臘大昔の史家ヘロデタスもランプの行列の壯觀なる事を言つた物がある、ホーマーも竿の上に乘せた炬火の事を歌つて居るのを見れば、疑もなく其燈火は粗末な蜜蠟や山林の樹脂を燃したものに相違ないのである、尤も是等は紀元一千年前の事であるが、バビロン王ベルシャザーの宴席に於て、幾多の美人無數の勇士の面を照した燈火も、降つてナポレオン一世が催した古今未曾有の一大舞踏會に用ゐた燈火も、最古の獸脂樹脂または蜜蠟から發達した燈火である、その後橄欖又は他の植物より油を絞り取る法が發明されて、之等を用ゐた燈火が貴族富豪の間に流行し、ランプも金銀寶石等で作られ、精巧緻密の細工を施す樣になつたのである、その頃下民の用ゐたと云ふ土器のランプでさへ中々今日の技術では及ばぬ程巧妙な細工で風雅に出來て居る、その時代のランプは美麗ではあつたが實用の點に於ては如何はしきものであつたのである、十八世紀の頃僅か八ペンスで買た錫の反射器が付て粗末なガラスの窓手燈でさへ、羅馬希臘の全盛時代のランプより遙かに明るかつたのである、その頃は未だ油の精製を知らないのであるから、バラ又は橙香の香料を油に混じて、華奢を衒ひ且燈火の缺點を補なつて居たのである、けれども燈火は煙を吐くこと夥しく、一寸の風にも忽ち消えるといふ有樣であるから、羅馬貴族も夜會の終りには丸で目鼻口耳が煤だらけで煙突掃除人宜しくであつた、併し此の羅馬時代のランプは繼承して獨乙、ゴール、ブリテインに傳はつたのである、尤も此諸國を羅馬が征服する迄は、是等の國々では、松明や脂肪に浸した髄や、甚だ臭い魚油を燈火に使用したのである、その頃の髄の燈火は、皮を剝て木心を熱した脂肪に浸し木の盃に突差したもので、餘程明るいから今日でもアイルランドの片田舍では現に用ゐて居るのである、廉價な動

物の脂肪より精錬した蠟燭の製法が發明されざる以前は、蜜蠟で作つた蠟燭は高價であるから、此種の燐火が一般に使用せられたのである、蘇蘭土人やデーンスやスカンヂナビヤ人は、羅馬征服の時代頃迄に燐火を用うる迄にも進歩しないで、只怪しげな鳥の形に木を切つて松明を燈して居たのである、羅馬傳來のランプは何處にても十三世紀の頃迄は格別の改良もなく、次で來る蠟燭の發明さるゝ迄は一般に其儘用ゐて居られたのである、中古時代は凡て日出て起き日入て眠ると云ふ有樣であるから、燈火の如きも不愉快なものであつたに相違ない、故に彼のカーヒユーベルとて、午后八時に鳴らして消燈就眠の合圖の暮鐘は、當時の人には別に無情には響かなかつたのである、

抑も現今使用して居る蠟燭の發端は牛脂炬火の發明である、此牛脂炬火は十二世紀の末に始めて使用さるゝ樣になつたので、約百年間も繼續したが、牛脂をシタヽラして殆んど今日の如き形に製造する事となつたのである、併し當時は非常な高價である故に彼のジョン王を强てマグナ、カータに署名せしめた高慢な貴族も、蠟燭一束を貴重する事は恰も王より得たる權利[illegible]であつた、であるから一本の蠟燭を盜んだ爲に終身懲役に處せられた例がある、降つて十五世紀の頃迄は、一本の蠟燭でも決して平民の手には入らなかつたのである、十九世紀の初めに於て一本の値段が二十四五錢したのを以ても推想せらるるのである、

昔の蠟燭の心は麻であるから能事がない、けれども當時は絹より木綿が高價であるから蠟燭の心に用うるなどは夢想だも及ばんのである、例へば靴足袋一足さへ木綿製のものは百年以前には三十圓もしたので判かる、彼の蜜蠟製の小蠟燭は九世紀以後、會堂では用ゐたが家庭では一切使はれないのである、十四世紀末になつて僅に宮中や貴族の家で用ゐられたので、その貴重さ加減は、廟祠に右の小蠟燭を奉納することは大した供物と考へられ、一斤の小蠟燭

を神前に供へる時は贖罪の特典に預り得るとして居たのを見ても知れるのである、ヘンリー王はカンターベリーの大僧正トーマス、ベッケットを慰めんとて一本二十斤の蠟燭二本を金貨二千圓で買つて送つたのである、

ピザの本山寺で圓天井の上から、一噸ばかりもある黄銅製の燈明吊り臺が下つて居る、此吊臺上で燃えて居る百本の蠟燭は、毎夜彼所へ來て禮拜する千餘人の男女を照して居るのである、今も昔しも少しも變らない、この燈明は古星學者のガリレオの頭腦に光明の音信を傳へて、ユラ〳〵搖れて居る其燈明吊り臺を見てガリレオは振子を以て時を測るといふ一大秘密を看破したのである、

千五百九年に至つて小利口な蠟燭屋が蜜蠟に獸脂を混合して安直のものを作る事を工夫したが、時の英王は勅令を以て混合蠟を國内で賣捌く事を禁せられた、又オリヴアー、クロンウエルは荒物屋の書出しを見て蠟燭の爲に一打毎に十八圓宛を仕拂ふ事を知つて、妻君の針仕事場にある二本の蠟燭の一本を贅澤過ると云つて吹消したと云ふ話がある、ルイ十五世もヴハアセイル宮中で使う燈火の費用で、優に一聯隊の兵と音樂その他一切の費用を維持するに足るとツブヤイたと云ふ事である、ヴオルテイーアはフレデリック大王より受くる俸給に不滿で、時々主君の使用する蠟燭の切端をポッケットに入れて來て小使の費用に當てたと云ふ事である、ナポレオン一世がチユイレリー宮中を照した蜜蠟燭の費用は、正に今日の電燈費用と等しく一年に四千圓を費したと云ふ事である、この皇帝がドレスデンで壯大なる祝宴を催す時分には、一夜に千二百圓餘の蠟燭を費した事は珍らしからぬ事である、然るに蜜蠟と牛脂とで客間抔を照す安價な蠟燭の製作せられてより、油燈および隣燈は臺所の隅へ蟄居する事となつたのである、十八世紀の中葉になつて蕪油が發明された爲に下層社會にも廣くランプが用ゐらるゝ事となつたのである、蕪油は其頃佛蘭西伊太利に用ゐた橄欖油

や、英國で用ゐた鯨油よりは遙に廉價であつた、千七百八十三年に熱心なるスウィツルランドの化學者アルガンド氏が、平たき火炎の兩側より絶えず酸素の入來るやうにして無烟無臭のランプを工夫せられた、此ランプは非常に明るくランプ蓋の必用を生じたのである、是はランプの歴史上誠に急激なる改革であつた、この新ランプは佛や英に於て直ちに流行したその後火焰の後ろに凸反射器を設けて、光輝眩きばかりに明るくする事となつたのであるが、アルガンド氏は丸心のものを工夫せられ、ギヲルド氏兄弟はアルガンドランプを改造して、燈心の下に油壺を設け、スリガラスにて眩き光輝を柔らげ人工燈に一段の美彩を放たしめたのである、此新工夫のランプは初めて英國に亡命中なるド、バアリー侯爵夫人の夜會に用ゐられたが、本國のジヨセフヒン女皇は此事を聞て非常に羨敷がつて直ちにギヲルド兄弟に注文をされた、此ランプこそは其頃衣食にも倘ほ且窮して居た無名の工人で、其後世界に名聲を博したるゼーン、ヲオグスト、イングレスの手にて装飾されたのである、

少しく遡つて千六百二十一年に彼のピユーリタンの一派共が北米のプリマウスに到着して、印度土民の用ゐ來れる松の節を焚て燈火とした、けれども眞黒い油が滴つて堪らぬから、本國より蠟燭が來た時には非常に重寳がつたのである、然るに彼輩一行の北米に着してより十一ヶ年の後までは未だ家畜を輸入しなかつたのであるから、其所で蠟燭を製造する事は出來ない故に、時々の輸入を待つのみであつた、されぱエリオットの聖書飜譯も、薄暗き煤烟燈下で成つたのである、ニユーイングランドの文學と其始め煤臭き烟と共に散布されたのである、

十九世紀の初めまで倘は使用された祖先傳來の炬火と、その炬火より胚胎した電氣探照燈とは其段階は霄壤も啻ならぬのである、抑も今日の街燈の先驅は町の辻々の建物に取りつけその後街路の左右を横切つて鎖で降ら下げた松明燈である、此松明燈は籃

の中に松の節を入れて燃しもので極めて大きなものであつた、ボストン市の高地の頂上にても鐵桿から此種の松明燈がブラ下つて居たからベーコンヒル烽火岡の名が始まつたのである、千六百六十年には彼の渡米ピユーリタン一派は、戸々で家婦が蠟燭を製造する事となつたのである、但し牛脂が無いから熊や鹿の脂を混用したのである、併し燈光に變りは無いが資質が柔かで持が惡かつたのである、その後眞甲鯨の脂と脂肪質の所を蠟燭に用うる事が工夫されてより、價は少し高いが强燭光のものが製作されたのである、之はスペルマセチ蠟燭と稱へて、角燈の中へ入れてボストン市街の富豪の門前に吊られたのである、

千八百三十年までは我等の祖先は燐寸といふものを知らないので、煙草の火を點けるにも餘燼または火打から附けたもので、若しも爐の火が消えた時は隣家へ走せつけて火種を貰うか、又は燧を用ゐて火を出すのであるから、隨分寒い朝などは決して慰み事では無いので非常に困つたものである、彼のサー、ヲーター、スコットが倫敦からエジンボローの友人へ送つた手紙に、倫敦市を煙で照さんとする馬鹿者ありとある、その煙とは石炭層から吹出す瓦斯の事である、此瓦斯は甚だ可燃性のものであるから、夙に古人の注意を惹き、石炭層の上に祭壇を設けて、神々に常夜不滅燈を奉納する事を實行して居たのである、又支那人も何千年來この天然瓦斯を燈火用にする事を工夫し來つたのである、千七百二十六年にヘールス博士が事珍しさうに石炭數グレインを蒸して殆んど同容積の可燃性瓦斯を得た事を化學家に通知して、若し箇樣な瓦斯を大仕掛で取つて、大道へ導いたならば此世は不夜の世界となるであらうと附言して居る、その後八十七年を經て千八百十三年にサー、ヲオターの所謂煙なるものも倫敦のウエストミニスター橋で燃やされ、一年の後には聖マーガレットの街路やウエストミニスターも瓦斯燈で照さるゝ事となつたのである、

今日普通の石油ランプは、そのホヤ硝子に蓋に油壺に能く燈火の發達を證明して居るのである、この透明で揮發性で廉價なる天然油は、夙に文明國民にその土地より出でたる天然の儘で知られて居たが、北米ペンシルヴァニア州ピッツバルグ市近傍の河流の表面に紅色の泡の浮立てるを見て、工夫家をして大仕掛に採掘する事を發念せしめたのは、漸く千八百四十五年の事である、インヂアン土民は其以前より遠方からピッツバルグの河に來まして毛布を之に浸して、その濡た毛布を器の中で絞つて其石油分を取り何か秘密の用に供して居つたのである、亞米利加人は遂に其石油層の廣大無限にして、廉價の燃料と燈火用に供し得べき事とを悟りたる故、盛んに掘出すやうになつたのである、千八百六十年頃には破竹の勢を以て流布し、蜜蠟、獸脂、樟腦、鯨油ランプの如き凡ての種類の燈火は、秋の木の葉と散り失せて其跡方を失つたのである、

それからフランクリンやエヂソンの如き發明家が夕陽舂く頃天地彷彿たる所に下れる雲霞の中より電火を起すを見て遂に電氣燈の發明となり、世は不夜の世界と變つたのである

母の膝

佛國　エルチスチース作

殘夢山人譯

昔よりこのかた、婦人にして、詩作に名を得たる者もなければ、小説脚本の名人も稀なり、又、代數學、望遠鏡、靴下編の發明者も、婦人にありし沙汰を聞かず、併しながら夫等の名家發明家よりも尚一層尊くして、誇るに足るべきは婦人の膝なり、此世界に於て最も大切なる、德望ある、偉丈夫、賢婦人を育て上げたる膝なり、婦女にして、母親の教育宜しく、賢く成長するに於ては、必ず其身に似寄りたる、賢き子供を育て上ぐる事、當然の理なり、され

は、婦人の膝は、名人の詩文、上手の技術も及ばざる傑作の製作所なり、婦女の功は、其家を齊へ、夫に幸福を與へ、小兒をよく育て上ぐるに増すものなし、昔ペルシヤの或る全權大使は、レオニダの妻に對ひ、ラセデモースに於ては、何故左樣に女が尊きかと尋ねたるに、妻は直に、人を育て上ぐるは都て女のみなればなり、と答へしより、軈て『女は人を造る』と云へる一の諺は出來にけり、又第一世ナポレオン帝の『子供の將來は母の職也』と云ひしを、人聞き傳へて格言とはなしぬ、學者バッホンも、亦同意味にて『子供の精神と心の品位とを傳ふるは母なり』と云へり。扨、經驗の上より見るも、總て男女に係はらず、子供にて、母親の敎育を受けずして成長する者はなく、皆多少母の薫陶に預るは、世間普通のことなり、故に人の妻となりて、第一の勤とするは、家事の取賄に綴ぎて、子供の敎育なり、男子は之に反し、其勤とする所、内にあらずして外に在り、農工商の諸業は、男子の勤に屬し、家事の整理と子供の敎育とは、母の勤なりと知るべし。

以上陳ぶる如く、母は子供の敎育者にして、母の膝は、子供の敎育場なり。

母既に家族の敎師たる以上は、宜しく相當の學業を修め、我が學びたる諸學科を其兒に授け、軈て學校に入りて修業する學科の手ほどきを爲すべし、其母賢ければ其子も賢きは、自然の理にして、母親の讀書勝れし者に、其子の無學なるは少なきものと知るべし

形の上にての家庭敎育は、勿論母親の擔當たること、前に陳べたるが加し、而して、形なき心の敎育、即ち道義的敎育も亦母の注意に非ざれば發達せず、此事は父たる者も與り知らずと云ふを得ざれども、第一に注意すべきは母親にて、父の目の及ばぬ所に迄周密に注意して、假りにも、惡き習慣を附け、惡き道に踏み込まぬ樣、心掛くべし、然らざれば子供は知らず識らず、道義に背きたる習慣つきて、容易に矯め直すこと出來ざるに至るべし、之を矯め直

すには、隨分と剛直堅固に心を持ち、若し其子供の行狀に惡しと思ふ節あるを見ば、直に矯め直すことを猶豫すべからず、決して惡しと知りつゝ許し置くこと勿れ、併しながら、强慾者が貸金を催るが如くすべからず、溫和にして堅固に、强剛にして過激ならぬやう、よく道理を說きて、靜に服從せしむべし。

次に又養成すべきは、記憶力なり、小兒の最も先きに發達するは、この能力なり、小兒產れて數月を經れば早く既に母の顏を見覺え、にこ〳〵と笑ひ掛くるなり、此の記憶力は、最も迅速に發達す、蓋小兒は尤も單純なる判斷をなす爲に、我が認知せる者を想ひ出す必要あるが故なるべし、故にこの能力を養成し、其發達を助くること、尤も必要なりと雖、餘り過度に養成するは、害ありて、却つて宜しからず、世の親たる者、稍もすれば、我が兒の怜悧なるを誇らん爲め、これに歷史、諭言、詩歌等の、未だ其腦髓に入り難き、六ケしきものを敎へて、記憶力を惱亂せしめ、又激勵せしむるは大に宜しからず、徒に腦膜炎を起さしむる媒となる而已にて、能力の發達上に益なきなり、試に看よ、世間の五六才なる小兒にて、驚くべき記憶力ある者は、後來書生となり學者となるに至りて、甚だ平凡なる器量となる事を。

さて道義的敎育中、最も重大なる者は、心の敎育なり、之を敎ふるには、假にも、子供に對ひて、虛言を言はず、眞實を云ふ習慣を付くること、甚だ肝要なり、子供に虛言を云はしめぬやうなさんには、須らく先づ己自身に虛言を言はず少しの虛言も云はず、又云ふを恕すべからず、何事も隱し立てをなさず、有體に云ふべし、隱し立ては、虛言の一部分なり、若し母親の答へ難く、又答ふるとも會得し難きことを問はゞ明白に其事を說き聞かせ、今は云ひ聞かせ難けれども、他日必らず說き聞かすべき旨を告げ、而してこの約束を忘れぬ樣に注意すべし、斯くの如く、母の言葉に僞なく、始終眞實のことのみ云ひ聞かさば、子供は自然と母を信じ、母の言語の何事も僞なきを知りて、他人に對ひ『母さんが斯樣に

云ふたれば眞實なり』と云ふに至るは自然の理なり。
又仁心とて、下を愛し慈む心を養成し、人たる者は、假にも無慈悲の擧動ある可らずと、常々訓へ戒め、貧者を見れば、物を惠まざるも、哀れと云ふ心は、是非持ちたきものなり、總じて人の親たる者、其子の慈愛深く、兄弟朋友に向ひて深切に、心なき家畜等にも優しくある樣、養育ありたし、就中、鳥獸に付きての非道を謹ましむべし、鳥の首を撚り、犬猫を打ち散らして啼かせ傷つくるを樂むの習慣を着けなば、この殘酷なる習慣、萬事に渉りて、粗暴不良、無情の根原、是より萌し、しかも、其增長、頗る速なれば、嫩葉の内に、其惡習を驅り、其斧を用ふるの憂を未然に防ぐべし。
有名なる教育家ランディは左の說をなせり。
曰く、教育は人間幸福の第一の基礎にして、智識才能、これに亞ぐこと、世界一般普通の說なり、而して、人の心に最も強く、永久に離れ難き感觸の、幼少の間に腦髓に入り、身體の成長するに隨ひて、

其感觸も亦共に成長し、恰も若木に生じたる寄木の、親木の成長と共に成長するが如くなることを知らざる者多し、左れば幼少の間に、惡しき寄木を留め、後日の憂を醸す等の事なき樣、教育すること、尤も肝要なり、予は之を我が父に聞く、老人若くは目上の人に對しては、溫順恭謙を主とすべしと、母又教へて曰く、何人に對しても、惡しと思ふことをするな、併し善きことは少しにてもよし、可及的なすべしと、我姉は又、人に對して暴行と傲慢との擧動を謹むべしと教へ、兄は又、如何なる場合にても、剛愎にして勇猛なれと教へたり、而して我が家の下男又我に教へて曰く、都て何んに依らず、疑ふことを止めよ、目下の者に愛憐を垂れよと、尙最後に、我が友は、何人をも他人と思はず、兄弟の如く、姉妹の如く、深切に交はれと教へぬ、あゝ如何に善き父母よ、善き姉兄よ、善き友よ、善き下男よ、予は一同に對し『善き』の一語を以て謝禮に代へんとするなり。

楓幃獨語（二）

橘　終　子

世の英傑、明相、君子、隱者の如き人、はたなべて賢行もて世に聞えたる人が、幼時の家庭の美しかりしさま、くさ〴〵なるを聞かんに、感慨も亦等しからず、例へば、彼の人の父なん、いみじう徳高き人にして、善く其子を敎へたりときかば、さこそありつれと、頷きてたゝふべく、また彼の人の父は、早く失せて、家道日に傾きければ、母なる人、大方ならず惑ひ苦しみたれど、稀なる賢女なりしかば、其子を火に鍛へたる鋼の如くしたり、などきかば、いとたふとく慕はれて、父の手に養はれたらんよりも勝れる心地すべく。また彼の人に一人の姉あり、いと聰明にして友愛ふかく、母を助けてよく其家を整へ、自ら努して弟を學に就かしめ、こを敎ふること嚴なれども、愛其中に滿ちたれり、彼が今のほまれを得るに至りしは、此姉あればなり、など云ふを聞かば、崇敬の心いやまさりて、我れに敎ふべき弟なからんことの、いと悔やしき心地ぞする、これ女子は其同性の事をきく時は、感慨常にふかく、わきて、妻たり母たり子女たる者は、各己れと同じき位置ならん人の美談を聞くを好めばなり、さは云へ、たま〳〵女子が其同胞の爲に盡せる美談を聞きて、その床しさ、父母が子の爲になしゝよりも超ゆるはわれのみにもあらざらんか、そは心ある父母が、我が子を世に秀づる者となしてん、賢き者となしてんと願ふは其子が胎中にありし頃より、はた未だやどらざりし時より、猶さかのぼりて、未だ夫妻の契あらざりし頃より、心がまへして忘れざる事にしあれば、其生るゝや、敎育怠りなく、遂にほまれある賢き人となして、其願を果たせるは宜なり、姉なるものが其同胞を思ふは、かく遠きより及ぼせるにあらず、また其範を書の上などに多く認めて、倣へるにもあらず、只天職の常性として生れし時より其愛を具へ、かつ父母の敎と、己れが智惠どをもて、さと

りしに過ぎず、かくて其同胞を教ふること至れる者あらば、其績、いかで父母よりも大ならずとせん、世の家庭のさまを見れば、姉は弟を愛すれども、固より父母の愛に若かず、これを顧みるといへども、多くは服食の勞なり、其權勢を伺へば、姉は概、弟に悩られ、利せられ、否らざれば、猥に弟を苛叱して強いて己れに從はしむるのみ、この二つの他といへども、眞心より其姉に恭しう事ふるもの、いくばくかある、是父母の教、忽せなるにもあるべけれど、姉なる人の友愛、未だ至らずして、自ら其權を棄てたるなり、愛衣食の事にのみ留らば、其恩遺れ易く、徒らに苛叱せられなば、却つて恨をいだくべし、これ二つながら其權を棄つる所なり、さる中に偶々弟を教ふる事道にかなひ、敬して畏れざらしめ、慕ひて凌ぐことなからしめ、而もこを導きて、人よりたゝへらるゝ者となすは、いかで易からんや、人若し威氣四海を呑むべく見ゆる英傑の口づから其姉の恩を感謝するをきかば、誰か其風を慕はざらん

これ只英傑とのみいはず凡そ世にあらはるゝ者とあらはれざる者と此の中にあり、世に賢母まれなりといへども、賢姉は更に稀なり、此をもて、こを思ふ心のわきて深きをぞおぼゆる。

典籍を人に借らば、永く留めて常用に當つべからず、之を披きて紙破れ、とぢいと切れたらんには、自ら繕ひ、汚れたる所にて覽ず、液質の物の側に置かず、日光を避け、風襲を防ぎ、苟にも、墨つけ、そこなひ、破る等の事なからんやう心すべし、我が物の如く、みだりに人の書籍を借覽し、期至りても返さず、毀ひ汚しても知らず顔なるは、いと心なくすべての事に等閑ならんやう見ゆるものなり、

自ら威容ある人は、言を和らげ、色を下して、其下を迎ふるに若かず、しかせざれば、人々その懼るべきを知るのみにして、上下の心通せざるなり、面婉柔ならん人は、言を寡うし、四情を包みて、其下を迎ふるを可とす、しかせざれば、人々其慢りやすきを知るのみにして、命に服せざればなり、剛は柔

によりて和らげられ、柔は剛によりて調へらるゝと、これ世の理なり、

心静にして、暇あらん日、人の音なひ來たるは、大方ならず嬉しけれど、事ありて他へまかる備し、衣さへ更めたるに客人の用なき事くりかへして語ふばかり腹たたしきはあらじ、しばしば往來する人ならんには、事の由告げて還さんも、さまたげあらねど、さなき人には流石に憚あり、また己れに代りて欵待せん人だにあらば、任せおきて出で行かんすべあれど、此の人なからん時は、其日を限れるわざを缺ぐこと、無きにしもあらず、されば、凡そ人の許へゆきては、先づ己れのあるじとせる人の言語、動作、また周圍のさまを伺ひて、さまたげ有りや無しやを知り、極めて强ひられざらんきはゝ長居すべからず。



よろづに咎あらじとおもはゞ言寡からんには若かじとは知れども、心しらひなき人の集ひには、益なき雑談かまびすしく、ともすれば、人の才藝、行跡よりすべての品さだめ、至らぬくまなく恩あるをたゝへ讎あるを怒りて、其いふ所おほむね私に從はざるはあらず、とかくの言がまへして、いかで彼の人をあしう陥れましなどいふ、ことゞしき毒心あらずとも、意なき言のはしに、

人をそこなひ己れを誤ること無からずやは、さればこそ、ふるき書にも、婦の長舌あるは厲の階なりとぞ記さるゝなれ、これはた、わるだくみもて、言を上にすゝむる者の謂のみにはあらず、およそ思慮なくして、言にのみ長くるたぐひは、皆これなりけり言の一度口門を出づるや、能く騖すること駟馬にも過ぎ、かうやうの密事は、深く心にをさめてよ、と口がためすれば、たやすく諾ひつゝ、えつゝまで先づその腹心の者に泄らし且言を添へて、密にせよといふ、この人亦かくの如く人に傳へて、果ては、其秘事なりてふこと、いつしかにひろまりて、洽く人の語りぐさとなり、技棄さへやう〳〵のびまさりぬべし、むかし燕丹の秦王を謀るや、田光先生先づ內旨を被りけるが、其出でゝ荊軻を召さんとするや丹之を門に送りて、戒めて曰ふやう、願くば先生これを泄らす勿れと、田光笑ひて退きぬ、既に荊軻を見て、詳に太子の大謀を告げ、且云ひけらく、長者の事をなすや、人をして疑はしめず、今太子の我を

戒むる者はこれ我を疑ふなり、人をして疑はしむるは、節俠に非ずと、終に自ら刎ねて疑を解けりとぞかばかりの極まれるふるまひは、さゝやかなる事に絶すべくはあらねども、死に代ふばかりなる固き心根こそ、養はまほしけれ、なにがしは言に謹みあらねば、などゝ警しめあひて與せられざらんは、皆自得の辱なり、つゝしみてこの辱を避け、つゝしみて恩讐の私を言はず、人をそこなひ、己れを誤らざらんやう勉めなは、言從ひて少く、よろづに咎あらじとぞ思ふ。

財ゆたかなる家には、早きは其子うまごより、遲きも數世の後に、財をもて其身と其家とを合せ破らぬものあらざるべし、たま〳〵この事あらざらんもはた欺かれ、はた脅され、火に罹り、水に葬られなどして、かはりなき富を長久につなげる者、いくばくかある、こを思ひても、產を造らんことを望まば自ら造りて自ら用ゐるにとゞまり、辛じて子孫の爲に備ふる要なきを知るに足りなん、裕なる產をもて子孫

◎於米國聖路易萬國大博覽會名譽最高大賞受領◎

最上油醬

山十印

千葉縣銚子町
醸造元 岩崎重次郎

東京南新堀一丁目
發賣元 同支店（電話浪花三三五番）

濃厚 甘美 量多 樽堅

日本一手
發賣元



○プレスト洗粉は品質純良にして色を白くし皮膚を滑にし光澤を出す

○プレスト洗粉は普通の洗粉の如く多量に用ふ可からず壹袋を以て六七回の入浴に適す

定價 小袋入貳錢 大袋入拾錢
小壜入七錢 大壜入拾五錢

本品は忝くも皇后陛下東京勧業博覧會場へ御行啓の際献上し奉り即時御嘉納の光榮を得たり

内務省衛生試験所検査済

ムスク香油



壹瓶 五十錢

一本品は最良の植物性原油を精製し更に毛髪の攝養上肝要なる加工を施し尚優等なる芳香を配合せしものなれば他に比類なき模範的香油であります

一本品は一度び御用ひあれば乍ち髪の毛さらりとし艶黒く麗はしく其上優美なる(バイオレット)の芳香を保ち紳士淑女の一日も欠く事のできぬ香油であります

一本品は毛髪の發育を大切になさる御婦人は申に及ばず男子方の散髪用として無比の佳品で有升

一本品は市内到る處賣薬小間物化粧品店にて販賣致し居升御最寄にて御需めを乞ふ

○若し品切等の節は端書にて本舗へ御注文あれば東京市内に限り壹瓶以上何程にても直ちに御届け申上べく候

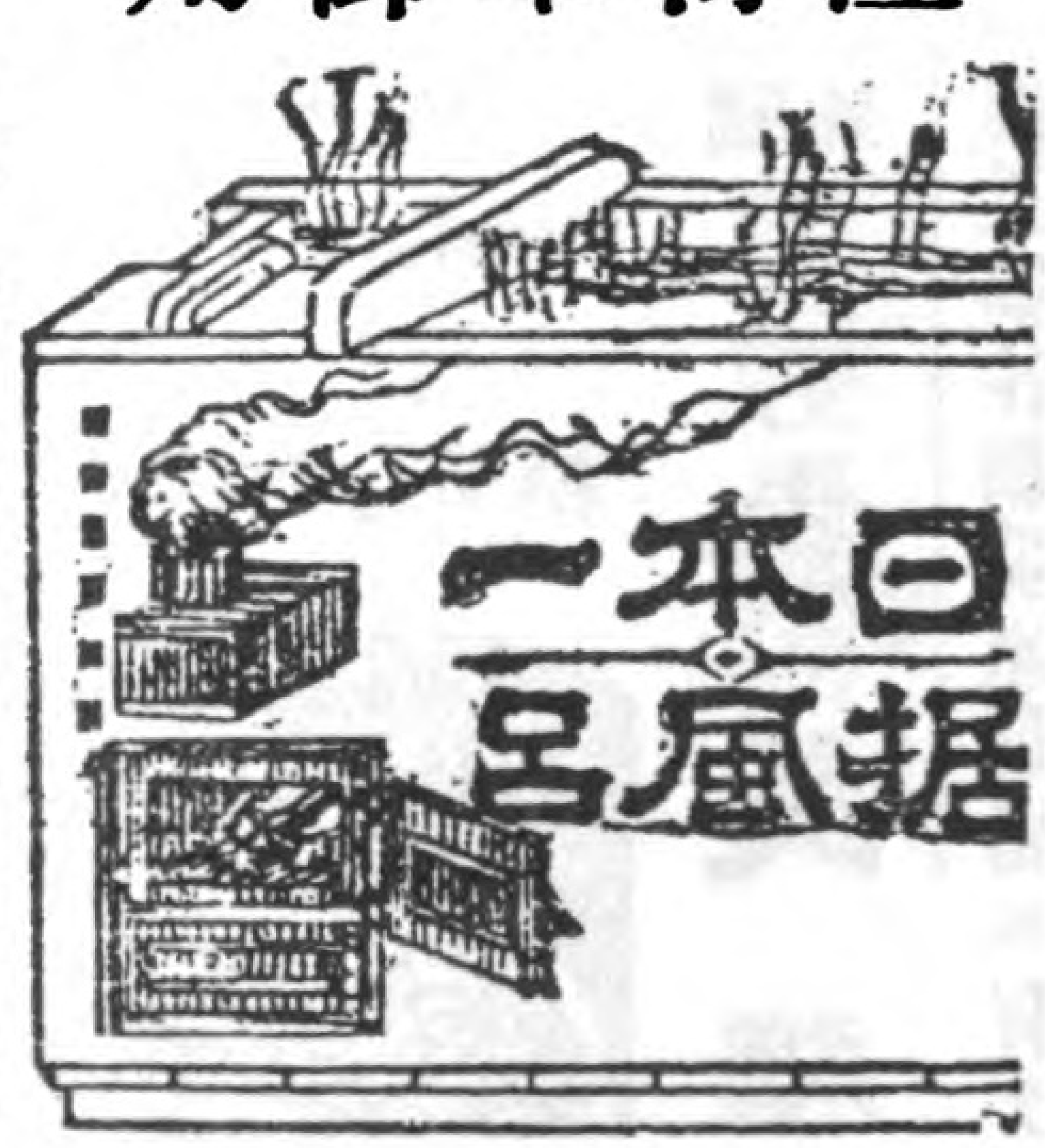
ムスク香水

ホーサン石鹸

東京日本橋區本石町四丁目

本舗 松澤常吉化粧品部

陸海軍御用



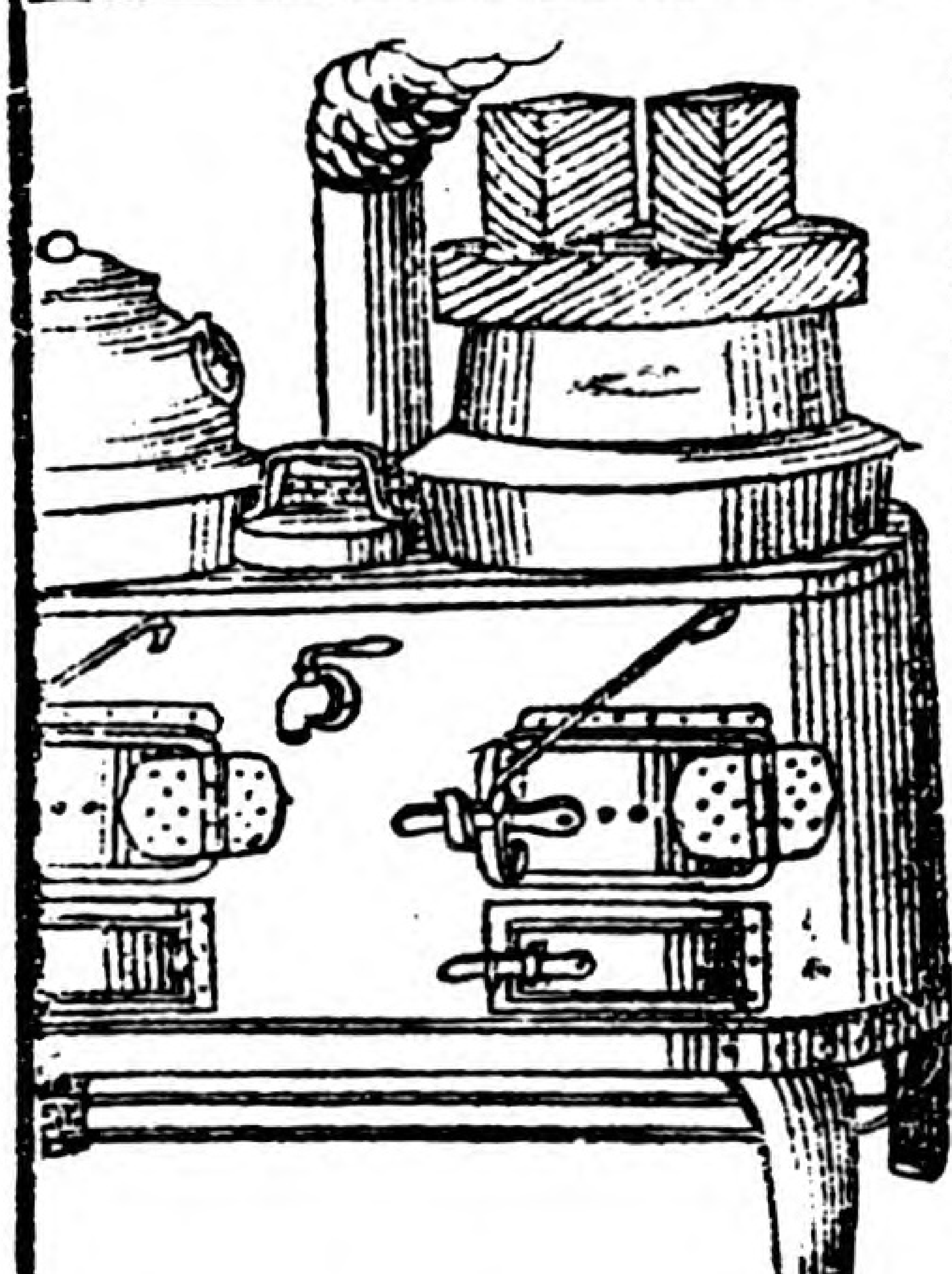
總檜木製並二人入銅製改良薪石炭燃早沸釜付上り湯付種々其他何人入にても出來合之有又桶風呂もあり改良早沸釜丈にても廉價に販賣仕候

實用輕便鐵製傘置臺にして後方捻留に仕込あれば取はづし自在なり



定價一組 一圓卅錢

總銅製五德用竈各種出來有



(定價表郵券二錢送れ送附す)

元祖製造販賣所 東京日本橋區通油町 石川商店 電話浪花(一四六一番)

に禍せんと計るは、これ姑息のなさけなれば、眞に其子孫に幸あらしめんことを望まば、むしろよく自活しよく福祿を保つに堪ふべき家訓をこそ遺し得さすべけれ、予も亦ひとしなみに、智惠と形體とを具ふるきは、夙に獨立の心をやしなひ、家財によりて安らけき渡世をむさぼらんてうあやしき心根を捨つべし、家財の保ちがたきことかくばかりなるを、世には身を苦しめ、思をこがして、いくそたびか義に戻り、いくそたびの恥を忍びても、ひたすら子孫の爲よからしめんとて、おぼつかなき不正の黄金をかきあつむる人あるこそ、いたましけれ、わきて怪しきは、子女繼嗣だに無からん人の、善業を營まんとにもあらず、餘生を樂まん爲とにも非ずして、徒らに貯ふることのみをつとめ、法を亂し、人をあざむき、銖錙の利を爭ひても破れを取らずてふさまに見ゆるはいかなる心まうけにぞあるらん、知らずや、嗣子あらざれば、若干の財は、わが墳土未だ乾かざるうちより分爭の媒となることを。

朝寢と朝起

黄華女史

羅馬の賢良なる一皇帝は、臣下に慈惠の普からざるを悔いて、『朕は日を喪へり』と言はれけると聞きしが、我々が平生に於ても幾何多く日を失ひつゝあるか計るべからざるものあるべし。監督スイウフトの語に、朝の床に横はる者にして、偉大且卓越せる人と成りしを決して知らずと、實にやプロイスのフレデリック第二世は、晩年痛く老い衰へたる時に當りても、猶且朝の四時より遲く其睡眠を自ら許さゞりき、ペートル大帝はロンドンの船渠に於て、船大工としての勞働中にも、將た鐵砧に向つて鐵匠としてある時にも、又ロシヤの大皇帝としても、終始日の出前に起き出づるを常とせられたり。帝の曰へるに余は余の能ふ丈け長く生命を保たんが爲めに、出來得べき丈け睡眠を少うしつゝありと、吾人敢て偉人たるを求めざるまでも朝起は是非共心懸けざる可ら

ざることなるべし。

夜更しの朝寢坊!、これ世間甚だ多き例なり、一家の主人主婦に於て然り、子女に於て然り、書生に於て然り、而して朝戸の開くことの遲さが、如何に町並外づれて見苦しきかは知る人は知らん、八時九時頃漸く起き上りて、先づ烟を吹く、顔を洗ふ、茶を飮む、斯くて朝飯に向ふ其如何にしだらなくして又損多き事ぞ。

ドリッヂは、著しく且感ずべき注意を吾人に殘せるあり、其意を約して曰はゞ、余は余自身に取りて、大なる功用の基礎を爲せる所の注意をこゝに記せんに余が事業の結果と、余が他の文書の多くが、其注意に負ふ所多大なるものにして、即ち朝五時に起出づると七時に於てするとは、其間の差四十年間に於て殆んど十年間を増殖するに當ると、一生に十年を餘して更に事業を繼續すると、十年間を喪ふとは、之を個人の上にするも、一家の上よりするも、社會の上よりするも、非常なる損益の差にあらずや、若し緻密なる統計を立てゝ人事萬般に及ぶ損益を擧げたらんには、我ながら、驚倒するにも至らん乎。

朝の早起を奬勵する一面には、夜の早寢を奬勵せざる可らず、ドクトル、ダワケドが其門下生に敎ゆる爲に用ゐたる語あり、曰く、夜半前の睡眠の一時間は、夜半後の二時間より最も價値あるものなりと此一語を以て吾人平生の鍼となすべし、且吾人が燈火を夜十時には必らず打消す習慣を一家に固く立つるを要す、斯くて朝五時に起き出づるものとせば、都合七時間睡眠を取ることゝなりて、生理上自然の要求もそれにて充たされ得べければなり。

◎奉献の紀念書棚

華族一同は日露戰捷の紀念として豫て東京美術學校に書棚の意匠及製作方を依囑し約二年の星霜を要して今般愈々出來せしに付畏き邊りへ献納の手續を爲せし由なるが右書棚は高三尺、横三尺五寸の桑木製にして帝室技藝員全部の製作に係り頗る精巧雅致を極め材料のみにても五千圓餘を投じ厨子棚一基に要する桑木材の如き擔當者伊藤平左衞門氏は殆んど全國に亘りて良材を選み香爐擔當者淸風與平氏は五十爐を燒きて漸く一個を得たるが如き其他製作者の苦心は實に意想の外に在りと云ふ

二日の遊び（江ノ島の一日）

山岡超舟

江の島の朝ぼらけや見んとて、一行の少女等は、昨日の疲勞も厭はず疾起き出でけん。

世界にまたなき國風の　忠と孝とを本として
開け行く世の新智識　合せて研く女子の德
同じ心に修めわふ　同窓八百有餘人
出立こたびの遠足に　さして行へはそも何處
一日探ねし鎌倉の　名勝故跡を後にして
七里が濱の浦づたひ　白玉よする片瀬がた
見渡す限り廣々と　寄ては返へす白波に
心の塵を洗ひつゝ　うさ忘れ貝拾はんと
學の親にいざなはれ　おり立けふの面白や

と唱ふやさしき聲々に驚かされて予は漸く目覺め、欄杆近く立ち寄れば、二十四日の朝日子麗々とさし上りて、東の方水と天とを彩色、宛然波の間に〳〵錦を流したる如く、そが波の上を白帆孕せて、漁舟の漕ぎ行くさま得も云ふべからず。

いざゝらば海邊を逍遙て、此雅趣多き朝景色觀ばやと、顏もそこ〳〵に洗ひて宿を出づ、割烹店、漬物屋、貝細工舗など軒を並ぶる町を過ぐれば華表あり、夫れより九十九折の徑路を上りつ下りつし、一の宮、二の宮を經て頂に達す。是れ全島の最高地にして江の島神社のある處、拜殿莊嚴、老樹枝を交へて神さびたり、此三社を邊津宮、中津宮、奥津宮と云へり。傳へ曰ふ、人皇九代開化天皇の御宇に當り一夜大に鳴動し、黑雲朦朧として洋々たる百灘天地を分たず、然れど其鷄鳴に及んで龍女の音樂千波の中に聞え、天童舞ひ遊んで花降り異香薫ず、既にして驚濤長く靜まり暴風遍く盡きて、孤島海上に湧出す、是れ江の島なり、此時天女忽然として降臨し給ひしより今に之を祭り來る、其後人皇八十四代順德天皇の御宇に至り滄海たちまち陸地と變じ、今の如く歩して通行さるゝに至れりと。

斯くて一行は社前に額き、山中此處彼處に葭簀張

の小屋しつらひ、例の名產貝細工を陳列して土產に買はんせと勸むる店女の聲を聞き流し、松吹く濱の汐風に

渚に浮ぶ江の島に　八千代を懸て動きなく
鎭りいます姫神は　宗かた三前のわけ魂
加茂と三島の御祖とて　代々のみかどの守り神
波間に寫る富士の根に　今も官幣大社とて
いつかれ給ふ大神は　花の笑ひのさくや姫
父の命神と君のへに　あつく仕へし神ときく
不二の御姿いや高き　孝と貞とを鑑にて
この江の島の大神の　恭と順とをあふぎつゝ
拾ふかひある濱づとを　いざや尋ねむ諸共に

と唱和しつゝ、迂曲せる十町余りの坂を下り、辨天の洞窟に行くに、山に據りて蠑螺の壺燒など賣る三四軒の茶屋あり、此邊より先は岩石峨々として下駄などにては歩みがたければ貸草履の用意もあり然れど一行は皆靴、草履の出立ちなれば其憂ひ更に無く我れ先にと海邊に至り、寄せては返へす怒濤の岩角を嚙みて、碎て白き玉吹雪の美しさに漫々たる海原渡る朝風身に泌めば清々しさ云はん方なく、愉快窮まり無し、然れば又此處に樂しき紀念の撮影を爲して、最小やかなる棧橋を渡り、松明の代りに買れる蠟燭に火附恐々ながら窟の中に入る。

　抑も此の洞窟は本島第一の勝地にして海水の元浸蝕したるもの、橋下には怒濤の絶えず去來して鞺鞳の音もの凄く、各自が携ふる火光は只微かに我身邊を照らすのみにて、窟中闇々として水常に滴り、頬をつたひ襟首に落ち人を驚かしむ、斯くて奧の院胎内くゞりに至る路傍には石像數多あり。辨才天女は即ちこの終點木柵の中に祀らる。然れど案内者は誠しやかに法螺を吹きて、此柵を越えて尙進めば道せまけれど、遂には富士の拔穴に達すべしと云へる可笑しさ、揶揄一番すべき處なれど、そは再遊の樂みに殘して早々窟を出づれば、岩間に焚火しける漁父漁童等一行中の先生等を取卷て、我れに二十金を賜へ蠑螺取り參らせん、昆布參らすべし。我れにも

五銭十銭、海へ投じ賜へ拾ひ申さんとて、五月蠅く附纒ふに先生遂に憤發し玉ふ。見るから恐しき澁紙色の皮膚したる荒くれ男三四人は、逆巻く波をものともせず潜りて蠑螺取り、或は投じたる銀貨の未だ水底に落ちざる間に、早くも拾ひ來たれる其手練その敏捷驚くべき哉。

聽て小女等は三々五々、こゝに彼處に何れも嬉氣なる面持して、藻草拾ひ小蟹追ふ可憐さ、興ます〳〵深く時の移るも知らざるなり此處を兒ケ淵と稱し岩上の眺望最も佳絶。

若し夫れ遠く眸を放てば、四顧皆豆相と房總との風光を占め、就中大島は烟波朦朧たる間に隠見せられ、富嶽は高く半天に懸りて白雲其麓を包み、近くは由比ヶ濱より源氏山に連る老松一帶の鶴岡八幡鳥居道、一塔翠微の間に兀然たる長谷の觀音、一帶の白砂波に洗はれて恰も白布を晒せるが如き七里ケ濱、さては新田左中將が昔偲の稲村ヶ崎、九郎判官が紅涙鐵衣を濕したる腰越、相模太郎が元使を誅し、日蓮が豪邁の英氣を養ひたる龍口、片瀬なんどの風光を指顧の中に收め津々として妙味盡るなし。



夫れより一行は其傍の茶店に憩ひ茶を啜りたる後、名木龍頭の松も觀て、歸路思ひ〳〵に貝細工の土產を求めて宿に歸り、朝餉

の膳に着く、名物の鮑に鯛のアラヒは昨夜既に賞味したるが今朝の蠑螺も亦中々甘く舌皷を打たせたり食後再び江島神社に至り例の如く幣帛を献じ、西校長及び生徒總代高鍬らい子は告文を捧讀し何れも懇に參拜す。斯くて午前十一時と云ふに袂を連ねて、この神韻縹緲たる江の島を辭し、電車の便をかりて再び極樂寺村に着きぬ。

此處より稻村ケ崎までは程遠からずと聞き、さらば其古跡親しく探らんとて至り見るに、今は一私人の宅地となり自由にさへ入る能はず、而し此儘歸るも口惜く、遂に乞ひ得て許るされ山に上る、松は亭々として昔ながらの風情あるも、朝臣が寶刀を捧げて起ち海若に贈りたる處は、新しく絶頂より直角形に截り下げられし心なさ、實に思ひがけヽんや。然れど何しろ空腹たれば、携帶の辨當を食べ次で鎌倉權五郎景政の祉に詣でヽ、彼が當年の義勇に隨喜し長谷の觀音を經て大佛に向ふ。

折柄學校歸りの土地の二少女、我が一行の落したるゴム櫛を拾ひたればとて、屆け來れる正直感ずべきかな、其名を聞けば顏赤らめ、神田きよ(十四)高橋やす(十五)共に鎌倉小學校高等科四年生なりと。

大佛は長谷町の中央より入ること二町淨泉寺境内にありて、高さ三丈五尺、膝の廣さ五間半、其掌中には二三人を優に立たしむべく、彼の奈良の大佛と共に我國銅像の最大なるものと稱せらる、盧遮那佛の座像なり、一行は此處に少憩して後、歩を海濱に移し、砂ふみしだき貝殼を漁り、互に喜べるさまの罪なさ、リボンは蝴蝶の如くに舞ひ袴は風に翻りて美くしく、實に天女の天降り給ひしかと外目さへ樂しく見ゆ。

去程に歸京の時間も漸く逼り、午後四時五十九分鎌倉發列車には僅に三十分間を餘すのみ、一行即ち停車場に向ふ。時に昨日尼將軍の墓を訪はざりしもの數名あり、路は二十餘町、時間は三十分。到底三十分にては往復六ッかし、止むべきか、目的を達せざるこそ不甲斐なれ、如何にせばやと思案に

暮る丶折りしも、予は好奇心にかられて學兄西須賀雄君をそゝのかし、兎に角二人にて行かんとせる矢先き、妾も加らん夢先生方に劣るべきや、思へば昨秋妙義の嶮峻を上りて脚を試したりし事あればとのことに、話は直に決し、駈足に又駈足を以てし遂に五山第三の壽福寺に至り寺僧に乞ひて墓鑰を借り、其山阪に駈上りて先づ右大臣實朝の墓を奠し、次で尼將軍政子の墓を訪ふ、水落石を沒して哀れ深く、彼の罪障如何ばかり深きとも、千有餘年の今日願は許せかし、予元鎌倉時代史を見る毎に痛く政子の性格を惡む、然れど今茲に此墓に對しては、寧ろ一掬の涙なからんや、斯くて目的を達し停車場に歸へれば時間を餘すこと尙ほ八分間、一行の健脚驚くに堪へたりと云ふべく、即ち此一隊を强行軍と稱し、かゝる身心共に健全の婦人あるを喜ぶと共に、其氏名を記し長く紀念とせん。曰く

專攻科生堀内ふさ子、同三輪とめ子、卒業生鳥海玉子、同須藤はる子、同中野きね子、其他西須賀雄、山岡超舟の二人、合計七人なりき

豫定の午後四時五十九分鎌倉を發車したる我が日本女學校春季修學旅行四百餘名の一隊は、午後六時三十分無事新橋停車場に着き、解散して各自家に歸り樂しき夢ぞ結びける(完)

因に前號忠義臣淵邊義博とありしは直義の臣何々の誤りにつき訂正す

家婢としての務

島野達三郎

英國は知らるゝ如く商業國だけに、實利を重んずる國民である、さりとて苟も自利我利をのみこれ計り他を顧りみないかと云ふに、決して左樣ではない他の一方に於ては權利思想に富み、權利を尊重する美風が、この實利主義の國民の心裡に存在して居て具體的の實利主義、抽象的の權利尊重主義、この二つの主義が工合よく調和されて居るのである、それ

故に、東に往く人、西より來る人、北に驅ける馬車南に進む電鐵、高架の軌道を走る市街鐵道といふ風に、その雜閙此上もなき倫敦の街道にて、ステツキの一端が、一寸通行の人に觸れても、シルクハツトを脱してパードンミー即ち御免下さいの挨拶なしに過ぎ行く紳士は無いのである、苟も權利の侵害が、少しでもあれば飽くまで法廷に於て是非曲直を爭ふのであるから、曾て一ペンニーの事件のために、一ポンドを費しても、權利侵害の訴訟をしたと云ふ判決例は少くなからぬのである、依つて頭髮一本を損傷されても、又一本の指で壓されても、權利を侵害したる不法の行爲として、損害賠償の制裁を加害者に科するのである、現に民法中に、不法の行爲に關したる最も綿密なる條項が澤山ある、また之が判決例にも乏しくないのである、是等の事實より推考しても、權利を尊重する念慮に富んで居る事を了知する事が出來やうと思ふのである、從つて違約する事や、言を食むと云ふやうな事は、惡德の極めて大なるものと考へられて居るのである、左れば汽車の發着時刻が一分でも遲れると、直ちに各ホテルへ電話で其旨を通知する位であるから、以て如何に時を惜み、刻限を重んずる念慮が深いかと云ふ事も驚くばかりである、斯樣な美風が充滿して居るから、凡て社會の制度が整然として、何事も規律正しく爲され秩序立ちて遂行せらるゝのみならず、一家の內でも其通りで、食時の刻限は勿論、勉學、訪問、買物、戶外の散策、遊戯等の時間が悉く定つて居る、且つ面會日は一週の中の何々曜日と云ふ風に定めて置くのである、故に婢僕等の働くにも、其仕事の役割が劃然と明らかに定めてあつて、各婢僕どもは忠實に而かも其職責を重んじ、規則正しく日々の仕事が繰り返へされて居るのである、試みに英國の家庭に於ける家婢の働き振りを述べて見やう、

或市の街道の片側に建てられた家に、兩親と成人せる四人の男子と三人の女子とより成る一家族が住つて居る、此家の廣さと家族の人員より考へても、

仕事の少なくないと云ふ事は確に想像が出來るのである、此家に召使はるゝ二人の婢僕は早朝より働きを始めるのである、

その順序とも云はうか、最初家婢が食堂および客間の窓戸を開き窓を推し上げて顯はれる、料理人が座蓆の塵を掃ひ、廊下を掃除し、玄關の戸の入口の階段を洗滌して拭う、之は家婢のすべき掃除の役目の一部分を料理人が手傳はねば、朝飯までに部屋の掃除が出來ぬからである、何の家でも斯うと云ふのでは無い、一體料理人は其名の如く料理さへ調へれば可いのであるけれども、人數の少ない家では箇樣に助け合ふのである、と云ふものは、此間に於ける家婢の戸内の仕事が澤山あるから、餘程朝早く起きて敏捷に立廻らないと、家族に不便を感せしむるのである、それでは役目を遂行したとは云はれぬ、それに或一定の時間内に爲るのであるから尚更ら骨が折れるのである、

然らば凡そ如何なる事をするのであるかと云ふに日常家族の座を占めて居る各室は云ふまでもなく、階段、各室と各室との通路を掃除し、敷物の塵埃を拂ひ、火を備へ、窓や格子を清淨にし、家具を磨きコップや磁器を洗ひ、銀皿を清め、夜具や食卓掛を補綴し、その他に若干の事をするのである、尤も從僕か又は客間附の婢が居れば、家婢の役目の或部分は手傳つてくれるのである、何せなれば、元來客間附の婢は、特に家族や訪問者に從屬するものであれば、食卓に侍し、來訪者の呼鈴に應じ、或は皿杯磁器等を裝置し、食卓掛を繍縫し、客間や圖書室の家具を磨き、此の外客間に關する一切の事が其役目である、而して若しも家婢が一人であるときは、時々臥褥の裝置その外に就て補助を家婢に與へることに爲つて居るのである、

此の如く家婢の職責は重くして且つ澤山あるから之を滿足に遂行するには、自から多種なる仕事の心得が無くてはならぬのである、家具を磨き又は拭ふ事や、敷物の塵埃を拂ひ落す事や、杯磁器等を洗ひ

淨める事や、鐵器を銹ぬやうにする事等に不案内であれば、家長に大いなる損失を蒙らして、樂しき家庭の成立を妨ぐるに立ち至らしむるのである、

尙ほ少しく巨細に仕事の模樣を述ぶれば、窓を開きて後、第一の役目は、居間と客間とを掃除する事で、之を終れば、煖爐の炭受の金具を淸淨にし、火を裝置し、家族が寢室より出で來る迄に食卓を持ち出して、程善く之を整頓して置かねばならぬのである、決して之が遲れてはならぬ、

毎週定日の朝は、早くより各室に特別に大掃除を爲さねばならぬので、その當日は食堂が食前に秩序よく整頓されねばならぬ、その景況は、竈前の敷物や、机卓掛は取り去られて塵埃を掃はれ、暫時外氣に觸れしむるために戸外に持出され、窓の幕は捲き上げられ、家具の小さな品々や、シーツや粧飾品は戸外に運び出され、椅子や他の家具は寂しげに立つて居るのである、火爐の圍や火搔は磨くために取出され、粗布の一片は火塲の前におかれるのである、

灰や石炭の燃跡は篩はれて、午後の厨房に用ゐんが爲に持ち去られ、煖爐掃除用の一切の道具箱が持ち込まれるのである、此の間家婢は堅固なる鞣皮の手袋を着けて勇しく立働くのであるが、之は何の爲かと云ふに、蓋し食卓に侍する時に、手が穢くならない爲の豫防である、已に鋼鐵の棒や窓の格子や引手等が、柔皮又は磨粉によつて磨かれ、火の準備も出來ると、次はカーペット即ち上敷を振ひ、塵埃を拂ひ落し、グンプ、グラスや茶の葉を毛氈の上に撒布して、室の隅々角々までも短い柄の箒ブルームで掃除をなし、ダストパン即ち塵取に掃き込むのであるが、之は多くの塵埃が室内を飛び廻り、壁または窓の幕や或は繪畫等に附着せぬやうに、ワザト短い箒や塵取を用うるのである、

物馴れし家婢は、巧にカーペットの毛面　又は表面をたゝき、裂け目を生じたり、所々が不揃にたるみ來ると云ふ事の無いやうに注意して拂ふのである何せかと云ふに、ブルッセル製又は土耳其製の上等

のカーペットは塵埃を拂ふ時に注意をしないと、直ぐに傷むのである、家婢は此の塵埃を拂ひ終ると、直ちに火爐の圍、搔火棒、爐前の粗氈、机掛、その他室外に置きたる總ての物を運び返し、家具の塵埃を拂ひ、磨くべきは磨き、拭ふべきものは拭ひ、佛國流の磨きをかけたる家具には太き絹布を用ゐ、額および架には塵埃を拂ひ去るためのブラッシと柔らかきリンチル製の拭塵物を用うるのである、

各種の粧飾品は、清淨な布片で埃塵を取り去り、家具も塵埃を掃はれ、指の跡などの無いやうに綺麗に拭ひ去られ、ベンチや椅子も拂はれ、繪畫、姿見鏡



硝子面は最も注意して拭はれ、窓の硝子や框も淸められ、窓の幕や覆ひ物、裝飾品は家風に則りて定所〱に排置され、何時にても部屋の使用せらるゝ樣にするのであるから中々忙しい、之が終れば、家婢は寢室に急ぎ昇つて窓戸を開け放ち、毛布、敷布をベッドより取り除け、ベッド及びマッドレスは、新鮮なる大氣、輝ける日光に曝さるゝやうに擴げられ、凡ての汚水は階下に持ち去らるゝのである、

朝餐が濟めば、食堂は綺麗に片付けられ、麵包の屑等も掃除されて、他の殘物は堂外に運び去られ、食卓掛やナップキンは程

よく疊み折られて戸棚の引出しに入れられ、使用されたる銀の器すなはちフォーク、ナイフ、匙等は直に洗ひ拭はねばならぬのである、

料理人が朝飯に用ゐし食器を洗ひ居る間に、家婢は多量の湯を寢室に持ち行きて、化粧道具を洗ひて一々丁寧に拭ひ、洗面架を洗ひ乾かし、ベッドの準備を初めるのである、若し羽毛入のベッドが使用さる丶家なれば、毎朝よく打ちた丶き、マッドレスは只裏面を表面に打ち返へさる丶のみである、之等が濟めば、家具の下から短き柄の帚と塵斗にて、室內に塵埃がた丶ぬやうに注意して掃除する、各室の家具も磨かれ、又拭はれ、塵埃も掃はれ、壺や水瓶には水が盛られ、階段掃除中は、室內に塵埃の侵入を防ぐために、各室の戸を密閉される、ベッドの緣邊が婢家の衣服と相觸れて汚れぬ爲にや、ベッドを整へる間は、特製の淸淨な大前垂を着用するのである、階段が又短き柄の帚にて掃除され、欄干が磨かれる、客間の家具は、家族が朝飯を喫し居る間に磨く事が出來ぬ故に、寢室の整頓にか丶る前、またその後直ぐに爲さねばならぬのである、少なくも何時訪問者の來訪するも差支のないやう客間を整頓して置かねばならぬのである、

若し客間を家族が使用する所では、家族が朝飯に降り來る前に、爐のグレート即ち石炭を抱持し居る鐵の格子が磨かれ、火は準備され、爐前の粗氈・塵埃掃ひをもなし置かねばならぬのである、

家婢が訪問者に應接する粧飾をなし、來訪者が呼鈴を鳴らす時、急に着用する綿紗の前垂を手にしつ丶、家風に從うてランチ及びディンナーの準備を始めるので、盆、五味瓶架、鹽器、水壺、手巾、スプーン、フォーク、ナイフ等を一まとめとなして食堂に持ち來り、夫々排置し、定刻に至れば家婢が振り鳴らす鈴にて、家族一同は食堂に集り來るのである

食事の間、家婢は食卓に侍し、最早小用なしと思へば、家族が食後に行く客間の火爐の掃除をする、食事が濟めば食卓は拭はれ、食器などはそれ〴〵定

所に始末される、
ディンナーの後、家婢は汗衫を瀰縫する事や、他の針仕事をなすの暇があるのを常として居る、左れど家により料理人の外、タヾ一人の僕より無き時はかゝる暇は僅かなのである、
家婢の次の職務は、茶の用意をなし、家風に準じて客間又は食堂に運ぶ事がある、料理人は茶の用意をする事には、少しばかり手傳ひくれるのみであるそれは元より家婢の務めに屬するからである、
家族に茶を侑めし後は、家族のベッドが準備され窓が閉られ、手洗水、飲用水が代へられ、窓簾が引下され、各房の燭臺が定所〳〵に据えられる、夜食の命の下る時は、家婢は夜食盆を準備し、終ればそれ〳〵片付けたる後、翌朝の燃料を備へおく、之にて一日の任務を了るのである、隨分込み入つて居るから我國の家婢などの比ではない、その代り主家でも家婢を優待するのである、

姿容と粧飾

駿臺女史

女子の虛榮心ほど恐るべきものは無い、人の歡心を買はんとの慾望は、蓋し女子が生れながらの性のやうに思はれる、男子には權勢と名譽との道が開かれてある、けれども女子には其道が閉されてあるから、自然心身を粧飾するのを以て之に代へんとするのではあるまいか、心身の粧飾に加ふるに、尚ほ又風貌容姿の溫雅ならんことを切望し、延て家具一切のものに至るまで、凡て美麗にしたいものであると熱中して居る、例へば、髮の結樣、リボンの掛方、衣服の色模樣などは實に些細の事である、けれども女子の身に取りては最も大切なる事として居るのでも分るではあるまいか、
かゝる虛榮心は、我國の女子間に於て最も甚しいやうである、新奇を好み流行を逐ふのは、我國民の性癖であるとは云ひながら、何んと愚の極みではな

からうか、蓋ふに此性癖の熾んなる時は、必らず品位を失墜し、且つ紊亂するものである、左れども斯る弊害を矯正するのに、別に社會國家に法律と云ふものは無し、さりとて國法が、個人の服裝食卓にまで干渉する譯も無いのであるから、各人は金のあるに任せて金衣玉食を恣いまゝにせらるゝのである、併し金の有るものは尙ほ恕するとしても、只虛榮心を充さんが爲に、種々たる權謀術數を行つても、ひたすらに服裝の美麗と山海の珍味とを希ふに至りては、沙汰の限りなるのみならず、その國家に流す害毒の程を思へば洵に寒心すべき事と云はねばならぬのである、

元來奢侈は一家の破產を來し、家憲の廢弛は風俗の敗頽を招くものである、而かも奢侈は又貧賤の人をして、急速に富豪家たらんことを欲せしむる、けれども一攫千金など丶云ふ所謂山師的の事業は、往々正義に戾らなければ爲し能はぬものである、嘉すべき事で無い、また奢侈は氣品の高い人に取りては

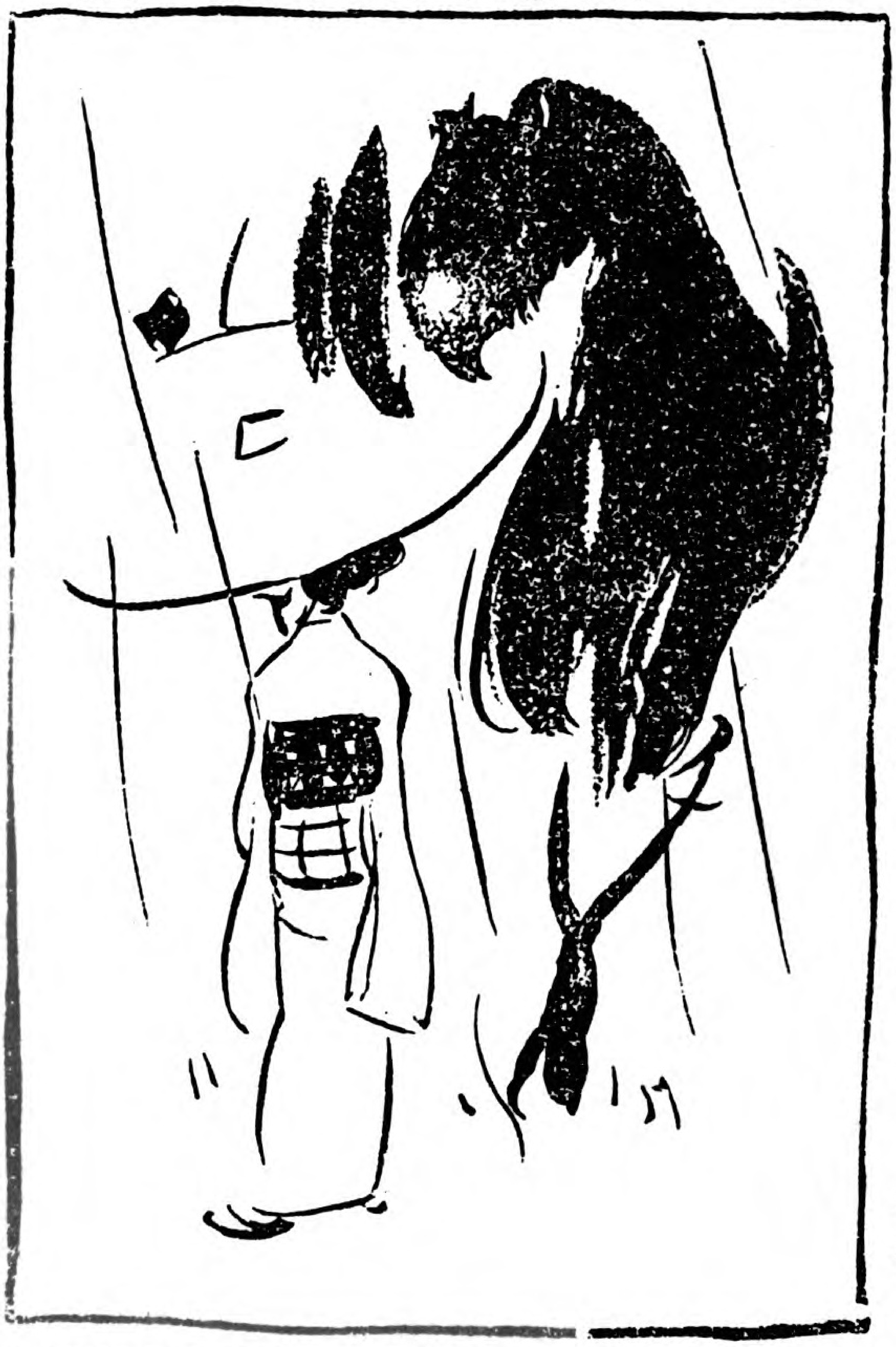
遙かに富貴を求むるの策もなければ、その衣食上の多き費用を維持せねばならぬ必要に迫られて、遂に忌はしき所行を爲さしむるものである、此くなる時は骨肉親族に對してすらも名譽と信用とを失ふのみならず、それ自身に於ても誠實および人情等を失つて仕舞ふから、世間より指彈を蒙るやうな境遇に立ち至るものである、

虛飾を好む我國女子の影響は、知らず識らず端正木訥にして温雅優良なる秋津洲特有の美風を埋沒せんばかりに立ち至らしめつ丶ある、

左れば女子敎育の任に當るべき者は、須らく敎ふるに衣服や頭髮の飾りよりは、貞操と名譽との優れたる理由を以てしなければならぬのである、近時快心の事には學習院の女學部に於ては服裝の制を定められたが、他の女學校等に於ても一日も早く之に倣はれん事を切望するのである、

乃ち美貌は之が愛翫者よりも、却つて之が所有者を惑はす事の甚しいもので、例へば、心中を擾亂し

精神を昏冥し、彼の美人を愛慕の情念の熾んなるにも勝りて、己れ自から己が崇拜家となるに至るものである、さりながら月に叢雲、花に嵐の諺に洩れず、その美と否らざるとの區別は、夢幻の間に消てしまふのである、一體美貌は女子をして玉輿を夢想せしむるのみであつて、他の方面には極めて益の多からぬものである、よしんば美貌の女子であつて、錦繡を纏ひ玉樓に住みたればとて、若しも智もなく德なき時は、何に因りて己れの幸福を繼續して行く事が出來やうぞ、美貌女子の配偶たるべき者は、青年血氣の痴狂者のみである、智識を



備へ貞操を守れる女子は、美貌よりも尚ほ一層堅固なる德を愛慕して、眞心を呈する所の男子に結婚を願はるゝものである、美貌によりて寵愛せられたる者は、久しからずして哀れ果敢なき身となるの例が少なからぬのである、月日を過ぐれば、滿開の花も色褪めて、あはれ世に味きなき者となるべきものを、獨り自ら沈魚落雁など、慢するのは、實に片腹痛き沙汰である、容姿の秀麗にのみ心を用うるのは、體力の强弱によりて、人の高下を品評する野蠻蒙昧の民と均しく、天理に違ふものである、

以上は容姿の虚榮心に就て述べたるものなれば、次に裝飾に就て語らん、優美にして温雅であることは、眞に女子に無くてならぬ美德である、けれども虚飾または過飾は決して温雅では無い、美風では無い、今更ら云ふまでもなく、衣服は寒暑を凌ぐが爲の要具なれば、之を調ふるには、清潔にして釣合よく、且つ便宜なるものを擇ばなければならぬのである、たとひ綺羅を以て身の周圍を煌めかしたればとて決して眞美を作るの價値のあるものでは無い、

古代希臘羅馬の婦人が、高尚純潔の服裝を爲したことは、今日傳ふる肖像繪畫等に就きて察せらるゝのである、それは髮を緩かに結びてしどけなく後に垂れ、廣やかにして長き折目を數多付けたる衣を風に靡かしたる樣は、優美にして而かも犯すべからざる風情である、古代の粹を好む畫工及び其他の人々に就きて當時の風俗を尋ぬれば直ちに判るのである

世の流行に走らぬ女子は、不自然なる頭髮の捲縮と、こちたき粧飾の衣服とを厭ふの念を生ずるであらう、けれども論者とても、今女子をして餘りに潤飾なき古代の服裝や又は一種奇異のものを其儘採用せしめやうと希望するのではない、それは時勢に逆うからである、餘り古代に泥まず唯當時の服裝の高尚優美であつて、單純なる嗜好に倣つたならば日本的風姿にも適する事であらうと思ふのである、外部の修飾をして現代の風に契はしむるの智識は備へねばならぬ、只それ流行を辿るのは、不快なる抑制の下にあるが如く、止むを得ざる場合にのみ粧飾するが好い、年少の女子に屢々虚榮心と輕佻浮薄の精神が流行を招く源因であると云ふ事を確く知らしめねばならぬ、二重三重積み重ねたる飾りを髮に纏ひて、頭を大いに仕立てたるは實は善からぬ沙汰であつて眞の典雅と稱するものは、自然に從つて之を妨げないものを云ふのである、

流行なるものは自ら消滅して復完全ならんとしても成効する事が出來ないもので、今日は世人に持囃さるゝとも明日は疎まるゝなど、新陳代謝の樣子は

恰も浮雲の頼み難いのに異ならぬのである、便宜と美麗との點に於て完全なる工夫を發見し、之を永く世上に傳へたならば、流行とても徒勞ではないが、始終改良せられんが爲に改良せらるゝ流行は、眞に常識を得るよりは、寧ろ不堅固不規律を來たすものと云はねばならぬのである、されば流行は常に一時の氣紛れを供給するのみに存して、女子でなければ之を撰定するに大いなる勢力を有する者は無いのである、此く流行の源は女子より出づるが故に、世人は此點に於て彼等を信用して來たのである、輕佻にして思慮なき女子は、忽ち人々を誘導するやうに爲つたのである、女子が流行の取捨に於ける事に付ては、別に一定の規律も何もあるのではなくして、巧みに意匠を凝したる流行物も、月日を過ぐると共に古めかしく思惟せられ、如何程をこの樣したるものにても新たに想出せられたるものを以て流行と呼びて持囃さるゝのである、

●富士登山女子 この花會

女子の富士登山希望者此頃漸く多くなりしも其便宜少き上に適當の同行者なき爲め年々其希望を遂ぐる機會なく徒に高嶺の雪、靈山の姿を慕ふばかりなるにぞ女子教育に熱心なる芝公園第十四千葉秀胤氏は進で登山熱心の夫人令孃を集め最も安全にして興味多き登山會を組織し昨年其第一會を催し好成績を得たりしより今年は少しく其規模を改め野中到氏夫妻の賛助を得夫人千代子女史を會長とし『この花會』と名付け八月中旬を以て第二會の登山會を催す事になりしと云ふ登山希望者の爲め左に同會の規約を掲ぐ

一、參加希望者は健全にして父母家長の承諾を得若くは知己の照會を經たる平素品行方正の婦女子に限る一行の人員は毎會八名とす

二、參加希望者は本會より發する注意書により豫め身體の調節を整へ更に出發の前約一週間に於て本會よりの通知を待て其時日に差支なき時は會費を支拂ひ旅裝を準備せらる可し若急に事故ある時は參加取消すことを得

三、會費は三泊出入四日の豫定にて一人金六圓とす

四、登山順路は甲州口及び御殿場口とし時に本會特別の宿舍を設け本會選拔の強力を依賴して往復す其の豫定見學順路等は別に是を報告すべし

五、登山は八月中旬後にて天氣其の他の方法によりて天候を豫測し得ざるときは全然中止すべし

新刊紹介

女子文章作法　鹽井雨江著　東洋社發行

本書は美文、韻文の大家なる著者が、女子の文章を作るに便せんが爲に、想の組立方及詞づかひを叮嚀親切に說明せられたるものにて、誌友諸君は是非一本を座右に備へざるを得ざる好著也、著者序文の一節に曰く「作文はなほ絹布を織るが如し、美しき絹布を得んとせば、先づ其糸をして美しきものならしめざるべからず、次に其のあやをして美しき形ならしめざるべからず、而して其美しき糸、美しきあや、これを得るには、其處に美しき法の用ひられざる可らず、文章を成すの想は、其糸に同じ、想を發表するの詞は、其のあやに同じ、美しき想、美しき詞、以て美しき文章を得んとせば、其想詞の構成發表に、自ら美しき法を知つて用ひざる可らず、世に修辭學修辭法と稱するは、皆此法を語りたるにて、我が此書も其類に過ぎず」とあり、製本美、定價五十錢

現代青年活動要訣　佛國ワグネ原著　成功雜誌社發行

人は一日も一刻も活動せざるべからず、美なる意志を以て活動するものに人生を悲觀するものなし、人生を悲觀するほど、意思の弱きものはなし、宜しく人は美なる活動によつて、あらゆる人生の苦鬪に遠かるべし、世潮漸く墮落せんとする時、本書の如く青年に活動を教ふるもの、亦參とせざるべからざるものなり、定價三十五錢、

和洋裁縫大全　小出新次郎著　女子裁縫高等學院發行

本書は和洋服裁縫を以て其人ありと知られたる著者が、多年の苦心經驗により、最も簡明に、最も親切に裁縫術を說きたるものにて、和裝三十一册を以て完結せる大部の著述也、其要目を擧ぐれば小裁本裁、長着の裁方罫引及積り方（卷一）同實地裁方及篦標附（卷二）小袖、振袖、比翼、單重、打掛の裁方罫引及算式（卷三）同實地裁方、篦標附縫方（卷四、五）小裁、本裁の半纏、羽織の裁方罫引算式及其實地裁方、篦標附縫方（卷六上下）小裁、本裁、被布、道行、合羽の裁方罫引及算式、同實地裁方篦標附縫方（卷七上下）男女袴（卷八上下）和裝端物裁方及造り方（卷九）長絹紡、新古一切に關する袋もの（卷十上下）はさ物、はぎ込物（卷十一上下）夜具、雜具（卷十二）洋服端物（卷十三上下）男女洋服（卷十四上中下）法衣（卷十五上下）女學裝束（卷十六上）男子裝束（卷十六下）教授法（卷十七上中下）給衞の卷（卷外）等にて、今回は豫約濟となりたれば、來春更に豫約をなす由以上纒めて價十二圓、女子の技藝界も進步したるもの也

主婦の職分　手島益雄編　新婦人社發行

本書は渡邊四武子外三十氏の主婦の職分に就て、東より西より、或は右より左より、或は縱より横より論述したるものにて、之を通讀すれば、ほゞ家庭に於ける趣味と、主婦の務むべき道とを會得するを得べし、定價廿錢、

女子教育講演會

第壹回講演筆記

さる六月廿二日本社の催にて開會したる第一回女子教育講演會は、前號記載の如くなかなか盛會なりしが、本號より其筆記を掲載して、來聽せられざりし誌友諸嬢の一讀に供すべし、讀みもてゆけば講演諸先生が諸嬢の面前に立たるゝ如き思ひあるべし

日本女子の將來

文學博士　井上哲次郎

私は此日本女子の將來といふことに就て、少しくお話しやうと思つて居ります、少しの間どうか御辛抱を願ひます、私のお話することは、大分和田垣博士のそれとは違つて居ります、が、先づ明治維新以來の女子教育の全體の傾向をお話して、それから、今後日本の婦人といふものは、どういふ工合になつて行くであらうか、又どういふ方針を取るべきであらうか、それを少しばかりお話しやうと思つて居ります、何分時間に制限がありますからして、ほんの大體に過ぎませぬのであります、明治維新以來日本の女子教育が餘程進んで來たといふことは、誰も認むるところであります、併ながら唯左樣に認むといふ丈けではいかぬ、確に其證據を摑へて來なければなりませぬ、處が丁度私も二三日以來文部省から來ました第三十

三年報といふものを見て居りました、が、こゝに其日本女子教育の確に進んで行き居るといふ證據を捕へましたからそれをまづお話をして、それから將來のことに及ぶ積りであります、それは斯ういふことであります、日本の此高等女學校といふものは女子が小學校を卒業して、更に其れ以上の高等教育を受ける處でありますが、此高等女學校が段々增加して行き居ります、其增加の比例を申上げますと斯ういふ工合になつて居ります、明治三十五年度は全國に於て高等女學校の數が八十ありました、處が明治三十六年度に至つては九十一校に增して居ります、それから明治三十七年度に至つては九十五校になつて居ります、それから明治三十八年度に至つては百校に增して居ります。其後のことはまだはつきり分りませぬ、私には分つて居りませぬが、明治三十八年度には百校になつて居ります此割合を考へますと、四年間に高等女學校の數が二十校程增加して居る譯であります、一箇年に五校づゝ增設されて來て居ります、斯ういふ工合に四年間に高等女學校の數が左樣に增加して居ります、それから此四年間に於ける高等女學校の生徒數を申上げますと斯ういふことになつて居ります、明治三十五年度には二萬千五百二十三人、それから明治三十六年度には二萬五千七百十九人、明治三十七年度には二萬八千五百三十三人、明治三十八年度には三萬一千九百十八人。此四年間には非常な增加であります、それから卒業生の數も斯ういふ工合になつて居ります、是も參考になりますから讀んで見ますと、明治三十五年度には四千八百九人、明治三十六年度には六千二十四人、明治三十七年度には六千八百七十八人、明治三十八年度には七千八百九十七人、斯ういふ工合に此高等女學校の增設と共に生徒數も次第に增加し亦卒業者も次第に增して來て居ります、所が此高等女學校といふものは百校ありますが、是は文部省が高等女學校と認めた學校に限るのであります、此外にまだ高等女學校程度のものが凡そ三十校位あるであらうと思ひます、若し假りに三十校とすれば高等女

學校の總數が明治三十八年度に凡そ百三十校ばかりある譯であります、さういふ工合に次第に增加して行つて居ますが、茲に又注意すべきことがあります、それは此女子の小學敎育といふものが明治初年から今日に至るまでに非常に進んで來たといふ證據が第三十三年報に明かに見えて居ります、それは餘程面白い現象であります、明治六年の頃から分つて居ります、明治六年の頃は明治三十八年に較べると女子敎育の程度が非常に低い、百人の中に就學者が十六人しか居ない、處が明治三十八年には百人の中に就學者が九十七人七分二厘であります、今少しのことで百人の中百人となる譯ですから、もう七人ばかり就學者が增しまするといふと、日本の女子は悉く小學敎育を受けるといふことになる、明治六年以來女子の小學敎育の進んで來た割合が男子よりは遙に早いのです、それで男子の就學者は明治六年に百人中四十人の割合であります、明治六年の男子と女子の就學者の差は明治三十八年の男子と女子の就學者の差よりはズット多いです、此學齡兒童百人中就學者比例を今一層正確に申しますれば、明治六年度には男子が四十八人、それから女子が十六人、明治三十四年には男子が九十三人、七八となり、女子が八一・〇八となる、明治三十五年には男子が九五・八〇、女子が八七・〇〇、明治三十六年には男子が九六・五七 女子が八九・五八、明治三十七年には男子が九七・一六、女子が九一・四六、明治三十八年には男子が九七・七二・女子が九三・三四とかういふ工合になるのです、明治二十八年には男子が七十七人、女子が四十四人、其差が三十三人です、それが明治三十八年に至つては、其差が非常に少なくなつて僅に五人の差であります、女子と男子と小學敎育を受けて居る者の差が僅に五人に減じて來ました、それで女子の方がもう五人增すと男子と同じことになります、さういふ工合に女子敎育といふものは統計に依つて調べて見まするといふと進んで來て居ります、尤も是は數量的に見たのに過ぎません、假令數量的にしても女子敎育が進んで參りまする

といふと其女子の精神上又道德上に於ける進歩といふものも亦從つて著しいことであらうと思はれます、其方は何分無形のことでありますから統計で示す譯には行かないが必ず進んで居るであうと思ふ、それからもう一つ健康の側を言ふと、女子の健康といふものは必ず進んで來たに相違ない、是は女子ばかりではない一體男女共に日本人の體格が日露戰爭の頃までに餘程進んで來たものと思はれます、それは學校の體育が非常に與つて力あるのであります、明治維新以來國民教育を奬勵すると共に體育を奬勵した結果、男女共にナカ〳〵身體が良くなつて來た、それで男子の方は日露戰爭の際、徵兵檢査の結果體格の良くなつたことが分つて居ります、女子の方はどうであるかといふと女子の方も確かに良くなつて居るやうであります、明治三十三年度から明治三十八年度までの公私立諸學校生徒及び兒童體格の百分比例(女)といふので分ります、之を見ると生徒百人に就ての强壯なる者が確に增して居るです、明治三十三年度には體格の强健なる者の數が非常に多い、其翌年はそれよりズット減じて居りますけれども次第に又上つて明治三十八年度になると全體には餘程上つて居ります、明治三十三年度程に上つて居りませぬけれども、次第に高くなつて居ります、是は僅かでありますから讀んで見ませう、明治三十三年度には檢査した人の數が十八萬二千二百五十二人、是だけの數に就て調べて見た所が强健なる者が百人に就て四二●二、中等が五〇●七薄弱なる者が七●一と斯うなる、ところが其翌年は減つて居ります、是は檢査する方法が區々であつて隨分所に依つては醫者が餘り正確でないやうなこともありませう、明治三十四年度には十七萬千二百一人に就て調べて見たところが、强健なる者が二四●五、中等が五七●五、薄弱なる者が一八●〇斯うなつて居ります、明治三十五年度に至ると大分違ひます、三十萬五千六百三人に就て研究して見た所が强健なる者が二七●九、中等の者が五九●六、薄弱なる者が八二●五、三十六年度には二十六萬三千四百七

十一人に就て調べて見ました所が強健なる者が三八・九です、茲になると三十四年よりは増して居る、中等の者が五二・八、薄弱なる者か八・三、で薄弱なる者が減つて居ります、それから明治三十七年度には三十五萬七千八百三十一人に就て調べて見まするど強健なる者が三八・九、それから中等の者が五二・七、薄弱なる者が八・四と斯うなる、明治三十八年度には三十六萬八千四百七十七人に就て調べて見た處が強健なる者が三一・一、中等の者が五八・八、薄弱なる者が一〇・一、薄弱なる者か又少し増して來て居ります、斯ういふ工合に概して之を言ふと體格の方も確かに良くなつて行つてるやうであります、是は随分多數の生徒に就て調べて見た結果であります、して見るといふと、健康上に於ても日本の女子が次第に良くなつて行き居るといふことは文部省から出しました所の統計の上に明かに現はれて來て居ります、それに就きまして少しく私は日本女子の將來に就て考へて見ました所がなか〳〵此教育上から見るといふと實に前途多望である、日本女子の前途は喜しいことである、此統計は確かに其徴候を示して居ります、彼の明治六年以來女子教育の進んで來た有様を見まするといふと間もなく男子と同じ數になるであらうと考へられるのであります、男子と女子の間の差といふものは、僅かに五人であつて、明治六年から女子方の進み方が男子より割合が早い・其早い所を以て見るとどうも早晩同じやうになるであらうと思はれる、併ながらそれから先きは進むことが餘程むづかしい、男子の方もむづかしいが女子の方もむづかしい、百人が百人だけ義務教育を受けるといふことはなか〳〵むづかしい、どうしてもそれから先きは教育を受けられない者が幾らか社會に殘つて居ります、それでそれから先きの困難といふものはそれまでの困難とは比較にならないのである、併ながら男子の方は暫く措いて女子の前途を教育上から考へるならば、今のやうに次第に良くなつて行くばかりであります、是は將來女子の幸福を示して居ること丶思ひます、それで又斯う

いふ事があります、高等女學校の數抔は男子の方に較べると餘程少い、明治三十八年度に百校あると云ひましたが中學校の數が明治三十八年度には二百七十一校程ある、文部省の認めた中學校が其樣にある、さうして又中學校の生徒數が十萬四千九百六十八人ありますが高等女學校の方は僅に三萬千九百十八人でありますけれども、日本全國で三萬以上の女子が高等敎育を受けつゝある處を考へますと中々多數の女子が敎育されて居るとが分ります、要するに日本の女子敎育は非常に希望多き狀況になつて行きつゝあるのです、日本の國運の進歩と共に女子の任務も多大となつて來ました、今日の處では高等敎育を受けた女子が廣く東洋諸國の女子敎育に關係することになつて居ります、是は決して是までなかつたことであります、例へば支那であるとか、羅暹とか、蒙古とか、さういふ地方に女子が往つて他國の女子を敎育する任務を負ふて來る樣になりましたです、朝鮮滿洲などにも定めて隨分行つて居るでありませう、さういふ工合に他國に行つて他國の女子迄も敎育する任務が日本の女子の負擔となつて來たのであります、それで日本の女子の前途は中々多望です、さうでありまするが又斯ういふとを考へなければならぬ、日本の女子敎育の將來を考へると今日の處ではまだ餘程低いのであります、第一日本の女子の高等敎育は高等女學校に止まるべきではない、高等女學校以上に出でなければならぬのであります、處が高等女學校以上の學校は僅かしかない、女子高等師範であるとか、或は女子大學であるとか、僅かの學校ほかありませぬ、夫に女子大學など、いふ者が出來て以來まだ日尚ほ淺しであります、それのみでない女子敎育といふものが本當に進んで來ますると今までのやうなことでなくして、帝國大學に這入るやうになつて來なければならぬ、日本ではまだ其處までに進まぬので帝國大學に這入る女子などはチョトあらうやうに考へられぬ、さういふことを云つた處が迚も人が、眞に受けぬ、けれども西洋では次第にさういふ工合になつて來ました、例へば

獨乙などでは女子が大學に入りて本當の學生として研究することは十幾年來のことであります、私や和田垣博士などが初めて獨乙に行きました時は女子が學生として入學を許されて居つた大學は一箇所もなかつたのであります、其後段々女子が學生として大學に入るやうになりまして今では伯林の大學だけに何百名といふ女子の學生があるのであります、さういふ工合に女子の大學に入學して研究するやうになつたのは獨乙と雖も未だ近來のことであります、さういふ工合に女子の高等教育といふものが漸々進んで今までは高等女學校程度を以て高等教育と心得て居つたのが更にそれ以上に進まなければならぬやうになつて參るのであります、若しそれ以上に進んで來るといふと高等女學校程度が普通の教育になつてしまうであらうと思ふのであります、將來を考へるといふとどうしてもさうなるであらうと思はれるのであります、それから女子が其學問を其樣に高い所まで研究し得るものであらうかどうか、かういふ問題が起つて來るのであります、それは非常に困難な問題でありますけれども、是は議論よりは實際の事實に依つて解決せんければならぬ、實際女子が次第に學問をして其處まで進んで來れば其時其問題が解決される、



即ち事實に依りてそれが解決し得られるのであります、假令理論を立てゝ到底出來ないことだと言つても、實際女子が其處まで進んで來れば、さういふ理論の間違つてゐることが直ぐ證據立てられるのであります、今日の處では帝國大學令などにある學生は女學生をも意味して居るのであるか何うか、女子にして帝國大學に入學を希望する者があると必ず問題になつて來るのであります、それは大分先きのことでありませうけれども、早晩さういふ問題が起つて來るであらうと考へられます、それから斯ういふ疑が起るのであります、女子が餘り高等教育を受けたならば段々出產する力が減つて來るではなからうか、どうも餘り學術の研究などで腦を苦しめた曉には女子が子供を產む力が減つてしまふであらうといふ虞を懷く人があります、是は幾らか理由のあることであります、非常に腦を使ふものは子供が少ないといふことは是まで學者の論じたことであります、併ながら女子が次第に學問をして進んで來まするといふと腦力も發達するのであります、急に一足飛にやるといふと其爲に非常な害を受けることがありますけれども次第に秩序を踏んで昇つて來るといふと、其虞は餘程減ずるであらう、但し學問藝術等の性質に依つては女子に不適當なものがあらうと思はれます、例へば工學のやうなことはどうも女子には餘り適切でなからうと私は考へる、又政治學杯も女子にはどうであらうか女子の政治家などいふものも世の中に出ることもありますけれども、さういふやうなことはどうであらうか、それよりは比較的女子に適切なる學問もあり、又女子としてやるべき事でさういふ事より勝つた事があると思ひます、女子の爲に考へますれば其女子に最も適切なる學問藝術を選んで研究するといふことが必要である、どういふ學問藝術でも差支ないといふことではない、それに近世のことを考へるといふと女子にもえらい發明などをする人が出て居る、最近の時代に彼のラヂウムの發見をしたのがキユリーでありますが、この發明はマダム、キユリーが大に與つて力があると云

ふことであります、女子にさういふ發見をなす者さへも出て來るのでありますから、女子も段々智識を磨き學問を研究して行けば必ず是迄人が豫想して居らぬやうな結果が出て來るであらうと考へられます、併ながら何分今日の所では一足飛にさういふ非常に高尚なる學術を修める譯にはいかぬのでありますから、それは次第に秩序を踏んで行かなければならぬ、けれども女子は高尚なる學問藝術を修めるに不適當であるといふことは決して斷言はせられぬことであります、それから女子を敎育者として見ると今後其勢力を發展して行くにまだ餘程餘地があると考へられます、何故ならば今日の處では敎育範圍を家庭敎育と學校敎育と社會敎育と三つに分つのが通例で、斯樣に敎育の範圍を三ッに分けて、此三ッの敎育範圍内に於て女子がどれだけ敎育家として權勢を有つて居るかと考へると第一、家庭敎育に於ては女子の勢力は大したものであります、是は昔から自然に男子よりは遙に重大なる關係を持つて來て居ります、學校敎育に於てはまだなか〳〵女子の勢力を發展する餘地が殘つて居る、女子が或種類の學校に於ては比較的敎員に適して居る、高等小學は男子を煩はさなければならぬのでありますが、尋常小學は女子の方が却つて宜しい、幼稚園から來た處の子供などといふものはまだ小さいのでありますから女子の方が之を敎えるのに工合が宜しい、それ故今では大分尋常小學には女子の敎員が居りますが、まだ〳〵、女子の敎員が増加しても宜しい、十分の餘地があると私は考へる、其外總ての女子敎育に關係ある學校に於ては女子が十分敎員として適當なる範圍であります、又女子の敎員は今日の處では餘程不足して居るだらうと思ひます、最も文部省の檢定試驗を受けて及第する女子が大分多くなりました、けれども敎育者として女子の勢力を擴むべき範圍がまだナカ〳〵殘つて居ります、それから第三の社會敎育の範圍に於ては女子が今日の處では實に勢力がない、殆んど零であります、實に悲しむべきことであります、それは私は斯う考へる敎育上から見る

とさうなつて居りますが更に其次ぎに社交上から考へるといふと、女子の大に勢力を發展すべき餘地が其處にある、さうして社交上からして女子が社會教育に大に關係し得られると考へられます、固より輿論を作るといふことは西洋でも矢張男子が主となつて居りますけれども西洋でも社會に於て女子の制裁力が誠に強い、それは決して日本のやうなとではない、西洋では男子ばかりの集會でありますといろ／＼我儘なことも出て來ます、隨分無禮なことも出て來ます、貴婦人の居る席では云はないやうなことを憚らず云ひます、けれども男子の集會に唯一人の貴婦人が這入ると忽ち其言動が變つてしまつて今度は社交上の禮法を守ることになります、態度が忽ち一變してしまふのであります、貴婦人の社交上に於ける勢力はナカナカ強い、男子が煙草を吸ふにも西洋では御承知の通り貴婦人の許を受けなければならぬ、日本では貴婦人が居らうがどうであらうが平氣で煙草を吸ふ、甚だしきは食卓に就てまだ食事の了らぬ中に卷煙草を吸ふて居る人があります、けれども歐羅巴の文明國では男子の方では女子の許を受けなければ煙草などは吸はれない、滊車などでは煙草を吸ふ所が別に拵へてあつて其處で吸ふ、さういふ譯でナカ／＼貴婦人の制裁力が強い、先刻和田垣君が云はれました如く矢張西洋でも昔は女子を男子の附屬品のやうに思つて居りましたが、漸々文明が進むに從つてそれが、一變して參りました、即ち人間其者を貴ぶ精神が強くなつた、殊に一個人の人格を尊重するといふ精神が強くなつたから歐羅巴の思想といふものは次第に變つて來ました、其變つて來るのが文明の進歩であります。

それで日本の女子が社交上に於ける地位を考へて見ますると西洋よりはズットまだ低いです、何が低いかといふと男女の間の考が西洋のやうに高くなつて居らぬ、其處が文明の未だ至らざる處であります男女の間の考が未だ舊套を脱して居らぬ、昔の考で居ることが多い、昔の考で宜しいこともあるけれ

ども、離れなければならぬものがまだ附纏うて居る、西洋では男女の交際が立派に出來て居る、處が日本では男女の交際が一般まだ西洋のやうに立派に出來ない、或一部分に於ては出來て居ります、それは外交社會であるとか貴族社會であるとか社會の一部分だけに行はれて居るやうに見えます。が、日本の全體から言ふとそれは極めて小部分であつて日本全體の男女の交際といふものはまだナカ〳〵西洋のやうな譯になつて居らぬ、男子の女子に對する考が西洋のやうに進んで居らぬ、昔のやうに女子は男子の勝手になるものゝやうに考へて居るのであります、女子に對する觀念がまだ進んで居らぬ、そこで本當の交際が出來て居らぬ、固より西洋でも男女の交際が完全に行はれて居るとは云へない、併し兎に角表面だけは上品なる交際が出來て居る、さういふ處まで參らなければ西洋のやうな文明はまだ出來て居らぬ、男女の間の關係がさういふ風に立派にならぬ間は迚も日本の文明は西洋の文明に比肩することが出來ぬと思ひます、それで西洋では男女間の交際といふものがちやんと出來て其間に何等の不都合もないと斯ういふことになつて居ります、固より實際のことを調べましたならば幾らか不都合なることも出來て居るかも分らぬけれども、それは表面上分らないことになつて居ります、それがどうも日本ではさういかぬといふのは全く女子に對する男子の考が舊套を脫して居らぬからである、女子を男子と同じやうに各々一の人格を備へたものであるとして尊重する念慮が起つて來ますれば自然此交際といふものも立派に行けるだらうと思ひます、それには又女子の教育の進歩が關係して居る、女子の地位の高くなるといふのも女子自からが進んで來なければ到底駄目である男子の方から頻りに引立てゝ教育のないものを高くしやうとした所がナカ〳〵高くなるものでない、女子が自ら進んで高等教育を受けてさうしてちやんと立派な人格を備へて社會に相當の制裁を與へるだけの力を得て來なければならぬ、西洋では女子が十分男子の集つて居る集會に來つて

制裁を與へるだけの力を有つて居ります、日本ではそれが丸でない、男子は男子、女子は女子と別々に集つて居る、今迄の所ではさうするより外に致方がない、女子が交際に馴れて居らぬ、それで女子は女子で別々になつた方が話しが仕易い、男子は男子で別々になつた方が話が仕易いといふので別々になつて話をするからどうも男女の交際が巧く行かない、立派な男女の交際が出來ませぬから男子は料理屋に往つて藝者を揚げて男女の交際をやつて居る、さういふ交際は困る、さういふ考を持つて來るから此社會の男女間の交際が本當に進んで來ないのであります、此交際が本當にならなければ決して日本の文明が西洋のやうにならぬと思ふ、此困難が茲に一つ殘つて居るのであります、女子が勢力を得て來ると女子が社會に制裁力を與へる、無禮をしてはならぬといふ制裁力を與へる、西洋では女子の制裁力が強いから男子が之に對して無禮を加へることの出來ないやうになつて居ります、西洋では女子が一種の權勢を持つて居る所からナカ〳〵社會敎育の上に影響を及ぼして居る、議論や何かでやるよりは實際の勢力がある。で、此女子の社交上の地位がもう一層日本では進まなければならぬそれから第三に事業上から云ふと女子の發達すべき餘地がまだある、事業上に於ては近來女子の發展が明に見えて居ります、第一女敎員の數が次第に殖えて來て居る、此割合には今茲に統計を持つて來て居りませぬけれども確かに殖えて居るのです、それから或種類の官吏即ち遞信省の判任官等に女子がなつて來た、是等は近來の新現象で日本の女子の歷史に特筆大書すべきことであります、それから又新聞雜誌の記者となる者が多少出來ました、それから美術家になる者もあります、又今後は醫者になる者其他種々社會の事業に從事するものが漸々殖えて來るであらうと思ひます、女子に適した社會の事業はナカ〳〵少なくない、或る種類の社會の事業、例へば遞信省の仕事の如きは女子の方が却つて宜しいやうである、例へば郵便局が郵便切手を渡すことなどは、確に女子の方

が宜しい、男子は時々役人風を吹かして怒つたり何かしますが喧嘩した所が詰らぬから人は皆それを默つて怺へて居るけれども女子だとさういふ事はやりませぬ、餘程軟で其處は工合が宜しい、それから最後に一ッお話して置きたい事があります先刻和田垣博士が女子の獨立といふことに就てお話がありましたが、女子の獨立問題は重大なことでありますから諸君の御參考までに私の意見をお話するのであります、女子の獨立といふことは人格の獨立自重といふことと違ふので、獨立生活の意味であります、此獨立生活といふことはどういふものであらうか、果して女子に必要なることであらうかと考



へて見まするに、獨立生活の道を得て居るといふことは女子に無かるべからざることである、それは獨立生活の道を得て居りまするど自分で自分を賴む力が強くなつて將來安全である、獨立生活の道を得て居らぬといふと、將來が危ない、それで此獨立生活の道を得る爲には結婚などが幾らか遲くなるやうなことがあつても、生活上獨立して行くことが出來るといふやうな一ッ賴む處があれば氣強い、それがないといふとどうも心細くなる、結婚の時機に達して結婚しなければ困る、何處からか貰つて吳れる人が出て來ないと

非常に心細い、萬一貰ふ人が出て來なければ世の中に對して耻しくもあるし、何したら宜しからうと實に情ないことになる、其爲に煩悶を起すことがあらう、處が獨立生活の道を得て居れば何もさう憂ふることはない、自から賴む處があつて自重して居ると却つて其中には良緣が出來て貰いたいといふ人が向ふからやつて來ることもある、それを此方が貰ひに來るのを的にして居ると的が外れることがある、其上に女子に依ては斯ういふことがある、稀に學問藝術に優れた人がある、さういふ人は獨立して更に其研究を遂げたいのでありますから、さういふ人には思ふ存分に研究を遂げさせるが宜しい、さういふ人は女子の中の傑物で學問藝術に身を委ねて一生それで暮さうといふのであるから其通りにやらせるがいゝ、教育も或程度までは宜しいが學問があまりあると男子の方で忌嫌がる、忌嫌がるのは何だか負けさうになる、やり込められさうになる外のことはどうでも宜しい、けれども、智識の方で侮られるやうなことでは男の顔か立たぬといふので、さういふ危險を避けるが爲にあまり學問の有る女子は貰ひ手がない、夫故女の學者は大抵獨身者が多いのです、どうも顔は可なりだが忌嫌だお前貰つたらどうだ、あんな者は忌嫌だといふ、それに又斯ういふ人があります、學問の出來る女子の良人になつた人もあります、處が奧さんの方が良人より官等も高いといふので困る、どつちが旦那だか奧さんだか分らぬ、お客が來ると奧さんの方がゑらいのであるから旦那の方がお茶を出したり何かしておべこべになつて居るですね、遞信省の判任官の家庭は拜見しませぬからどういふ工合か分りませぬが隨分面白いことも其中にはありはせぬか、それは研究すべき問題でありませう、それで女子の學問藝術の出來る者はズットやらせて其處に獨立生活の餘裕を拵へて置くが宜しい、それから又結婚に遠ざかり易い人があります、それは云ひにくいが云はぬと分りませぬから云ひますが、皆顔が奇麗といふ譯に行きませぬ、傴僂鳩胸跛者片眼いろ／＼なものがあります、どうも

さういふものは仕方がない、さういふ人でも亦性質が優れて學問などの隨分出來るといふことであれば貰ふ人のあることもありますが、何分さういふ不幸なる人は他に方針を立てゝ置かぬと困る、そこで獨立生活の道を求めて萬一の時に安心して行けるやうにしなければならぬ、それのみでない、假令顏は奇麗で十分結婚の見込があつてもやはり獨立自活の道を求めて置かないと困ることがある、例へば結婚の後、良人が戰死したとか或は不幸にして離縁になつたとかいふことは隨分あることであるから、さういふ場合に於ては一人で生活して行ける道を拵へて置けば心强い、殊に年を取つてから一人で慣れな境遇に陷つた場合には非常な難儀をしなければならぬから、豫て獨立自活の道を拵へて置くといふことは必要なることであります、さうでありますが私の考では日本の多數の女子といふものはやはり結婚といふことを度外視してはならぬ、それを眼中に置かなければならぬと考へる、それは日本では女子の數の方がズット小ないのです、日露戰爭がありましてもやはり女子の數の方が男子よりは少ない、戰爭の時は男子が戰場に出て多數死ぬるのでありますが日清戰爭を經日露戰爭を經ても、まだ女子の數がズット少ない、明治三十四年の統計を見ますると男子の數が二千二百九十二萬八千四十三人、女子の數が二千二百四十九萬八千六百四十九人であります、それで男子が女子より四十二萬九千三百九十四人程多い、女子が四十三萬人ばかり少ないのであるから、若しも獨立して我々は結婚はしないと云へば困る、(笑)さう云はないで女子が皆結婚した處がまだ男子は餘程餘る、さういふ有樣である處に女子は是から先きは獨立自活をせんければならぬと云つておだてる人がある、固より女子は獨立自活の道を計らなければなりませぬがやはり女子と產れたからには、若しも機會があらば良緣を求めて結婚するといふ考を持たなければならぬ、日本の女子敎育といふものは何處までも良妻賢母主義を離れぬのであります、敎育といふものは男女に拘はらず個人として即

ち一ッの尊重すべき人格として教育しなければならぬ、是は西洋も日本も變るべきでない、固よりそれは何處にも共通なることである、けれども日本の今日の狀況に照せば女子はどうしても結婚するものとしなければなりませぬ、其結婚を的にしないで獨立自活の道を得て置くといふことが必要であります、獨立自活の道を得て置くといふことは男子に對して反抗するのではない、矢張和田垣博士が先刻云はれましたやうに社會に於ては男女相互に調和して行かなければならぬ、個々の夫婦が調和して行かなければならぬばかりでなく、社會に於て男性と女性とがやはり調和して行かなければならぬ、どうしても男性と女性と一緒に進んで行かなければならぬ、男子が進んで行かうとすれば女子も亦一緒に進んで來ないとどうしても進まれませぬ、先刻和田垣博士の蔦葛の話がありましたが、男子が先きに行かうとする時に女子が蔦葛のやうに絡み着いて放さぬときには一歩も進むことが出來ない、文明進步などゝいふことは思ひも依らぬ、男子の進むと共に女子も進んで來るやうになつて、そこで始めて日本の文明が進步するのであります、今日のお話は極く概略ですが何分時間がありませぬから是だけにして置きます。(拍　手)

折に觸れたる感想

法學博士　和田垣謙三

折に觸れたる感想といふ題が出て居ますが、是は其實私が出した題ではない、私は何時でも題がないのです、無題といふのが私の規則である、然るに無題といふのでは淋しいといふので、多分係りのお方が氣を利して、折に觸れたる感想といふやうなことにしたのでせうが、なか〳〵能く出來た、此題を此處にお揭げになつたものであらうと思ひます、是は無論嘘言ではない、折に觸れたることを話すより外仕方がな

い、自分の感想以外に渉つて、お話の出來やう筈はないのです、誠に近頃敬服した、
そこで、鏡といふことに就て思付いたことがある、是は誠に悲しい話だ、諸君は笑ふこともあるから、又ちッとは悲しいことも聞いたら宜いかも知れませぬ、餘り甘いばかりでもいけない、甘い所に鹹い、所謂鹽梅といふことがなければいけない、先づいきなり歌を言つて見ませう、『今日のみと見るに涙の増かゞみ、馴れにし影を人に語るな』これは婦人の歌で有名なものである、鏡といふものは婦人に取つては大切なるもので、お嫁入のときに、それを持つて來た所が、不幸が重つて、或は良人にも別れる、家にも離れる、終に追々と品物を賣つて、それで其日の生活をする、けれども婦人に取つて最も大切なる鏡といふものは容易に手放さなかつた、處が終に殆んど賣る物が無くなつて、其最愛の鏡を賣らなければならぬことになり、それを賣るに當つて、其鏡の裏に書いたのが、今の歌です、是が鏡とのお別れだ、最後だ、何十年の間自分の顔を寫してゐた鏡にも、眼があれば必ず此方の顔を覺えてゐるのであらう、是が今生の別れでござる、『今日のみと見るに涙の増かゞみ』、併ながら婦人がですな、其大切な鏡を賣るといふことは、誠に情ない、實に貧乏の果の話であります、お前がよく私の顔を知つて居るだらうが、決して此元の主は何の某であるといふことを他人に言つてはならないよ、私の影を人に語るな『馴れにし影を人に語るな』。其樣な境遇に陷つた者が、諸君の中にありますか、或は失禮ながら諸君のお母さん等に其樣な歷史がありますか、先祖にもない、或は諸君にはなくても、諸君の子々孫々に至つて、決してないといふことが斷言出來ますか、誰であらうがさういふ境遇に陷つた者は、實に憐れむべく、又同情に堪へぬことであります、幸にして其鏡が、或る心ある人の手に落ちて、取上げて見れば、今の歌が鏡の裏に書いてある、是は尋常ならぬ歌である、是だけの歌を詠むのは、尋常一樣の人ではない、何の某に相違はない、搜して來い、

そこで其約束に背いて實は斯う〳〵いふ人で立派なお方だ、それは誠にお氣の毒であると言つて、其鏡を返して、尙失禮だけれどもと言つて、それに對して同情の涙、涙よりモウ少し硬い光る物硬い物を山の如く贈つたといふことである。是は半ば事實、半ば小說的の話である。是は女鑑といふことに關係がありますが、併しながら、我輩は今日は鏡の話をする積りではない、尙又今日は婦人ばかりの聽衆であつて、男子禁制といふことに聞いて居つたのです、そこで萬綠叢中紅一點の反對で、萬紅叢中綠一點か黑一點か、令孃方の中へ、僕一人で飛び込むといふ譯だから、衆寡敵せずだ、けれども大部分を前に控へて、之に向つて手に武器を持たず、唯一人でこの演壇に立つて、戰を挑むといふことは、そんなに卑怯なことではない、衆を恃んで味方の負けるときには、君助太刀を賴むといふのは卑怯だけれども、一人で百萬の軍に當るといふのは、是は決して恥しくない、我輩は寧ろ諸君に向つて、今日は喧嘩をしやうと思つて來た、併しながら婦人といふものは、オベッカが好きだ、何か賞めたヽへて、おベンチャラの百曼陀羅をやれば、それは必ずどうも和田垣先生といふ方は面白い・親切なお方だなどと言つて、大に喜ぶかも知れぬ、けれどもさうはいかない、此オベッカとアベカハといふものはどうも婦人の好きなものだが、併しアベカハはお腹の毒になります、オベッカも餘り澤山お食べになりますといふと、矢張りあなた方のお爲にならぬのです、それで寧ろあなた方のお爲を思つて、餘り甘くないかも知れぬ、餘り軟くないかも知れぬ、どんなことが折に觸れて出るやら、是は一つ諸君と共に考へねばならぬ、諸君と共に考へるといふと、或は變に思はれるか知れませぬが、事業はさうだ、又さうでなくてはならぬといふことを、是から說明します、試みに雨は何處から降るかといふと、雨は天から降る、雨は空中から天降つて來ると、多數の人は言ひませう、併しながら我輩はさうは思ひませぬ、雨は矢張地から降ると思ふです、天に決して水はありませぬ、

空中は即ち空です、雨も雨の種もありはしない、然るに水といふものは、我地球の上には澤山ある、地球の三分の二、寧ろ四分の三は皆水面です、或は湖水或は河、或は此邊の溝泥に至るまで、皆水だ、其水といふものが、所謂水蒸氣となつて空中に向つて、ドシ／＼昇つて居る、それが時々折に觸れて、或は雨となり、或は霰となり、又は雪となつて元の故郷なる地球に歸へるのであるから、雨の源泉は空中にある氣遣はない、其源は矢張地上にある、己より出で丶、己に歸るとは此事である、であるから諸君が少し學理的の目を以て、學理的の心を以て考へられたならば雨は決して天から起つて來るものではない、矢張地から降るものであるといふことが分る、そこで我輩が此所で譬へてお話をすると今和田垣謙三が立つて居るこの演壇を天とし、諸君のお居でなさる所を地とすれば、此天から雨霰が降る如く、諸君が唯袂に手でも入れてぼんやり聽いてさへ居れば、何か出て來るとお考へだらうが、それは大間違だ、此演壇は矢張天です、是は矢張空中だ、此所には、何物もない、我輩は己を空しくして、實に公平無私の考を持つて居る、虫も殺さぬやうなやさしい心を持つて來て居る所が、諸君の中から此地球の水蒸氣が昇るやうに、肉眼にも心眼にも見えないけれども、精神に感じて一種の水蒸氣がズット上に昇つて來る、それが我輩の腦天に昇つて暫く滯在して居る、さうして諸君を眺めるといふと、即ち折に觸れて是が五月雨のやうなものになるか、或は大雨になるか、嵐になるか、或は霰になるか、或は疾風迅雷ガラ／＼ッといふ雷になつて出るか、それは本人自身少しも知らぬ、本人は元と空なものである、諸君がどれだけの水蒸氣と、どれだけの電氣といふか、元氣といふか、我輩の誠に小さな天であるけれども、我輩の腦天へ送られるかといふのだ、面白い有益な演說が出來るか、出來ないか、それは皆諸君自から爲す業だ、己のなすものは己に返る、即ち我輩は關せず焉だ。

私は明治十七年頃から、今日まで殆んど二十四五年、この敎育といふことに從事して居る、又十七年までは或は日本に於て、又は海外に於て、同じく敎育を受けてゐた、兎に角、時々其地位は多少變つても、敎育界に放浪して居ること凡そ茲に五十年、とはまさか往くまいが、まアそれ位にして置かうではないか、其五十年、人生五十といふが、其間には、いろ〳〵のことにも出會した、殊にこの終りの十數年間には、或はもつと短かく言へば、數年間といふものは一ツ女子敎育といふことをやつて見やうといふので、一種の女子敎育といふことを、今ドシ〳〵やつて居る、即ち日本女子商業學校といふものを創めて居る、決して此席を借りて自分の學校の吹聽をしやうなどゝいふそんな卑怯な我輩ではない、是も折に觸れたから言ふのである、そこで日本女子商業學校といふのは、市ケ谷見附で實に堂々たる新築である、總二階の建築です、而して其中には現今二百名内外の生徒が居る、北は北海道より南は鹿兒島に至るまで、殆んど我國の全部を代表して來て、勉强して居られます、創立以來既に四年、卒業生を出すこと百名で、今日は戰後の經營とか、戰後の經濟とか、或は宇内の競爭であるとか、兎に角一國の實力を養つて行かなければならぬ、さう何時でも戰爭ばかりして居られない、俗にいふ平和の戰爭、或は市場の戰爭、經濟上の戰爭といふものは、三百六十五日休むといふことはない、それには唯男子ばかりが、其戰場に出て働いて居つて、婦人は指を咬へて見て居つて宜いか、そんな氣樂な譯には行かない、既に今日までゞも、日本の婦人といふものは、養蠶事業から、其他機織等いろ〳〵な事業に就て働いて、婦人が日本の經濟社會に一大要素となつて働いて居ることは申すまでもない話、日本が年々歲々、海外に輸出する何億といふ輸出品、其大部分といふものは、纎弱き婦人の手になつて居ると云つても宜い、けれども唯指頭を使うとか手の先を使ふといふばかりでは、此二十世紀の平和の戰爭は出來ないのである、追々戰爭でも昔の戰爭は鵯越だとか一

の谷だとか、馬に乗つて、オーイ〱それに立たせ給ふは平家方の大將と見奉る、敵に後を見せ給ふかハヤ〱馬を返させたまへ、見參々々など丶言つて、なか〱呑氣なものだ、所が日清戰爭と云ひ、北淸事件と云ひ又最後の日露戰爭と云ひ、組打だの、兩馬の間に落ちにけりといふやうなことはないです、なかなか規摸が大きくなつて、學理的になつた、一人一個で功名手柄を現すといふことはむづかしい、總て大隊運動だ聯隊運動だ、そこで經濟上又然りです、それに就ては或は銀行といふものがある、從つて手形であるとか、何とかなか〱機敏にやる、あれが銃砲です、武器です、或は今日法律といふものがあり、契約といふものがある、なか〱昔のやうな單純なものではない、そこで婦人と雖、苟も實業界の中に立つて働くとか、或は自分の良人たるものに十分の同情を持つて、或は慰藉者となり、或は内助者となるには、多少其事が分らなければならぬ、新聞を讀んで見ると、成程權利株のことがある、權利株といふものはどういふものである、相場の上り下りと云ふものはどういふことから起る、今日は輸出が順調だとか、逆調だとかいふことがある、さういふことが多少分つて居なければ、相場の變動で困つた事になつたと云はれても、此方はどうして困つたのだか一向分らない、だから兎に角婦人でも、少なくとも經濟上の普通の智識、穩健なる常識、又經濟思想、或は多少法律などの思想も持たなければならぬ、そこでさういう精神を持つて、他日實業界に入り、實業者の家庭にあつて、實業者を亭主として働いて行く婦人、是は實にこの平和の戰爭に於て、必要なる一種の矢張軍隊である、唯戰後の經營だとか、戰後の經濟だとか、口でばかり言つても、それを行はなければ何にもならぬ、百人の生徒が學校から出て行けば、更に百人の働きを産む、又百人が百人の働きを產む、又それが宜いとなれば他の人が眞似をする、それで我輩はさういふ趣意で日本女子商業學校といふものを創立して、年々歲々盛になり來つて居る、諸君の中にさういふ方面に向

つて働いて見やうといふ方があつたならば、どうぞ諸君自身でも、或は諸君の妹さんでも、少しも遠慮はいらない、どうぞ私の處へお出で下さい

右のやうな關係で、我輩は婦人の問題、婦人の將來、婦人の發展、婦人の教育といふ事に就ては、及ばずながら[illegible]を傾け、多少の勞を執つて居る、それ故に和田垣は婦人といふことに就て多少の考があるであらうといふので、女鑑の此會の御發起の方から今日の會に來ても宜からうと云ふのであらうと思ふそれも宜からう、そんなら何か一つ自分も我田引水ではないが、お互ひだ、人間はお互に助けたり助けられたりしなければならぬ、斯ういふ考で今日此處に出て來ました。

そこで是は誠に小さくつて諸君には迚も見えますまいが（繪葉書を示されて）我輩は斯ういふ繪葉書を拵へた、此處には御覽の通り鷄の雌雄が油繪で描いてあるのです、之を描いた人は日本第一の油繪師で今日私の見るところでは日本第一、或は歐羅巴に行つてもそんなに引けは取るまいと思ふ、此油繪は十四度刷で、此横の方に或人の歌がある、其下に又我輩のまづい英文だけれども書いてある、三人で申合せて出來たものだ、それは何であるかといふと斯ういふ諺がある、雌鷄助けて雄鷄時を作る、或は雌鷄勸めて雄鷄時を作る、或は地方に依ては雌鷄つッ突いて雄鷄唱ふなどいふのがある、又それと似た言葉で雌鷄の旦するとか、或は女房賢うして牛賣り損ふなどいふ諺がある、これ等のことは皆男子が作つた言葉であつて、さうして寧ろ婦人を叱り飛ばした言葉である、そこで餘り賢いのも氣が利いて居て間が拔ける、女房が賢くして牛を賣り損ふことがある、又雌鷄の旦するなどいふのは雌鷄といふものは時を作るものではない、それが時を作るから不吉であるといふのである、私も雌鷄の時を作つたことを聽いたことはない、そこで雌鷄つッ突て雄鷄時を作る、男をづッ突いてはいけない、雌鷄がつッ突くといふのは、亭主を尻に敷

くといふので、是は甚だ宜しくない、如何に婦人のお尻が大きくつても澤庵の重し見たやうなお尻の下に亭主を敷くといふのは餘り感服しませぬ、尻に敷く人も宜くないが、尻に敷かれる人は侚意氣地のない話で、そんなことでは無論いかぬ、けれども雌鶏勸めて雄鶏時を作るといふことであれば、必ずしも惡い意味に取らなくつても宜い、勸告する、注意する、もう一番鳥の時でので、御座います、あなたお起きなさい、天下の人が待つて居ます、あアさうかと言つて眼を擦りながらコッケコーと鳴くさうすると彼の家の鶏が何時も時を作るのが正しいと、云つて人に褒められる、是は良い心掛ですけれど、



さういふ助けだの、勸を待たずしてサッサと自分の本分を盡すやうな亭主が侚えらいかも知れませぬが、其處は人間は多少長所短所があるから、互に助けるといふとが必要である、夫を雌鶏勸めて雄雞時を作るといふ我輩は、之を少し變へて雌鶏助けて雄鶏時を作るとしたのです、英文では“The hen helpeth The cock croweth”是は頭の方で韻が踏んでありります、或一種の文體でありります、即ち雌鶏が助けて雄鶏が時を作るといふことは、何時でもさうでなければなりませぬが、殊に今後の婦人と云ふものは、何處までも雌鶏

即ち婦人が如何に學問しても、雄鷄になる氣遣はない、若しなつたら大變だ、併し其雌鷄が汝は汝、我は我といふやうな風で、雄鷄に對して同情を持たなければ、雄鷄の苦みも十分に理解することが出來ない、唯精神でなくして、殆んどより低い所の點に於て、男子の伴侶である、補助者であるといふことであれば、是は二十世紀の婦人でもなければ文明國の婦人でもない、何處までも雌鷄が雄鷄を助けて、さうして雄鷄に時を作らせる、其義務を完うせしむる、それが婦人たるもの丶理想であらうと思ふ、中にはどうも少し割が惡いといふ、婦人が默つて居てさうして男ばかりに唱はせる、婦人といふものは元來お喋舌だ、昔は七去と言つて、あまりお喋舌だと唯其一點で以て離緣をしたものだ、日本の婦人は存外喋舌です、自分が先きに立つてやつて見たいけれども、成るべく控目にして、男子を先きに立て丶やる、是が謙遜の美德と云つて、婦人に最も能く似合ふ、さうすれば男子の方でも隅には置かない、又互に思ひ遣りといふもがある、情といふものを持つて居るからして、どうしても婦人は婦人である、鷄の比喩はどうか知りませぬが、鷄ならば自分は、雌鷄の積りでやらなければいけない、雄鷄以上にならうと云ふのは不了簡極まる、又そんな不了簡にならしむるやうに、男子共が集まつて教育するといふのも是亦不都合である。

そこで我輩は此婦人の教育といふことに、多少關係してゐるが、實驗がない、婦人の教育といふものはむつかしいものです、受ける方も其經驗がまだ比較的淺い、與へる方もこうである、お互にまだ試驗的である、御承知の通り十數年前に女子教育といふものが流行つた、所が其結果たるや一種の變性男子とも付かぬ、女子とも付かぬ、譯の分らないものが出來上つた、是ではならぬと、男子が自分の夫人を求めるのに、彼は學校出か、さうです、學校出の婦人は御免を蒙むると云つて、却つて其當時の教育ある婦人を蛇蝎の如く忌み恐れたといふことは、そんなに古い話ではない、是はあなた方でも能くお覺えになつて居

らう、そこで物は原動反動といふものがある、一時は廢めたが波打つて、近頃は又咲返りて昔の弊を改めて、今日再び女子敎育といふものが誠に盛になつて來た、又盛にならなければならぬ、それで此吾々男子もです、或は餘計なお世話と言はれるかも知れないが、男女は詰り一つのものであるから、又岡目八目で自分で自分の顏は見えないから、鏡に寫して見なければならぬ、それだから男子のことは婦人が能く注意するが宜い、又婦人のことは男子がよく注意して鑑みさせるが宜しい、そこで此婦人といふことに就て、今日は稍ゝ之を十數年前に較ぶれば、女子敎育といふものも完全に近寄つて來た、けれどもまだ決して、完全無缺ではない、それ故、吾々も大に工夫しなければならぬが、婦人自身も大に工夫を要することであらうと思ふ。(未完)





佐々木信綱先生選

和歌兼題 **初秋露**

天 下野 井上倘子

渡し場はさぎりの中にわしのはの
つゆをもげなる初秋の風

評 こたびの題は新らしくよまむとするに、いと困難なる題なりき。此歌渡頭の初秋に着眼して詣の如き風景をよくうたひ出られたり天と定む。

地 東京 五十嵐清子

虫のねもまだかたなりの初秋に
つゆけく見ゆるにはのあさちふ

評 かたなりといへる中古の語を巧に用ひたる淺ぢふといふに調和してよろしければ

人 美濃 長濱闘子

旅人の笠一ッゝき朝風に
尾花つゆちる初秋の道

評 二句いまたしき難はあれと、下句のうつくしきをとて採る

秀逸

伯耆 錦織よし子

こほるゝは花か雫か袖垣に
我が世さひしきしら萩の露

信濃 奥原きよ子

文月や山居の詩人訪ねんと
辿る徑の露に濡れけり

兵庫 梶原京子

草苅の忘れし鎌や露おきて

里川堤秋は來にけり

松山　上原のぶ子

朝顔も眞はさきも遂に花にせむ
露はこゝろにまつかゝりけり

横須賀　柏原美奈子

草枕背たの旅路やさむからむ
來る秋しるき庭の白露

美濃　芳翠とし子

初秋の朝つゆぬきし初なすび
小さきは瑠璃の玉の如なる

東京　平塚白百合子

なく虫の涙か露か初あきの
わさぢが原に玉とむすべる

東京　中村千代子

まち〳〵し初秋風のふくまゝに
匂ころほるゝ萩のうへの露

伯耆　錦織ちよ子

年毎のつらき別れをくり返し

[illegible]

送るみち柴露美しき

甲

夕月に玉ときらめく白露をむすびつられし庭の糸萩　○　東京　川合りく子

初秋の露にうつして見つる哉ゆめに結びし月の桂を　○　磐城　木幡きよ子

萩の葉にまづ置きそめし秋の露つゆなみだしそ今朝の初風　○　東京　永井さき子

秋やとき風やおそきと思ふまに萩のはそよき露光るみゆ　○　東京　岩谷淺子

秋はまた淺茅が原におく露は我袖ぬるゝ初なりけり　○　常陸　岡田萬子

秋立や日中のあつさかわられとさく朝顔の花のつゆけさ　○　名古屋　不破きみ子

涼風を袂にうけてかへる子のもすそ染めけり糸萩の露　○　東京　關津梅子

おく露に萩の初花うつろひてうす紫の玉ぞちりける　○　東京　土田八重子

初風にもろくもやれし蝶の羽におく露しろし野邊のほそみち　○　岩代　岸野常子

おきそむる草葉の露や末つひに人のたもとの秋とならまし　○　松山　田村多豆子

聲あらはさぞやなくらん初秋の露うつくしき萩による蝶　○　美濃　笹島みゆき子

けさははや風よりさきに白つゆのおきそはりてぞ秋は來にける　○　東京　青木たま子

　和歌山　植木雛子

月清み淺茅の野邊にさまよへは 衣手寒し初秋のつゆ
○　埼玉　橫田政子
三日月のほのめく山の淺茅原 露おきわたす秋のはつ空
○　丹後　小山田花子
燭の火の一ツ一ツに消え行きて 置く露あはし大殿の庭
○　名古屋　山脇しけ子
草むらに置く白露に夕月の光を見れば 秋はたつらし
○　東京　服部彌惠子
秋あさく日かけになつはのこれとも 千草のはなにつゆはおきけり
○　神戸　今西操子
吹き初めし萩の上風身に泌みて 置く露しけく成にけるかな
○　淸國　富成梓子
桐の葉といつれかさきにちりそめて あきを告けゝん草の上の露
○　神戸　足立あさ子
はつ秋の露の玉しく庭の面れたくも風の吹みたしけり
○　秋田　古瀨りく子
あはれなるあきのはしめを朝かほの 花のつゆにそみるへかりける
○　東京　河合淸子
きのふけふ秋にいりのの草むらに 玉をしきてもむすふつゆかな
○　東京　小幡ろく子
ゆきゝしてもの裾ぬれぬ初秋の けしきのもりのみちしはのつゆ
○　東京　西村直子
秋きぬと風はそよけと野へ見れは またあさちふのけさのしら露
○　東京　原三卆子
物おもふ秋のはしめのしるしにや けさおきそめし草のうへのつゆ
○　土佐　秋月廐江子
待ち〳〵し秋は來にけり茂りあふ 稻葉の露そ見れはたのしも

乙

○　伯耆　錦織きち子
うらみよとつれなき風につゆちりて くつの葉かげに秋は立ちけり
○　千葉　中川千鶴子
わかためにあきはたゝれどおく露も 淚とみえてみにはしみけり
○　東京　靜子
秋風にこぼす千草の玉見れは こゝにも月のやとりけるかな
○　長野　北澤千枝子
わがやとの桐のひと葉のちりそめて 露おきまさる頃にもある哉
○　越後　水野やす系子
みたれ飛ふほたるしつかになさまりぬ 光は露の玉にゆつりて
○　東京　佐々木森子
おのつから秋は來にけりやちくさの 花にも葉にも露むすびつゝ
○　常陸　北垣くは子
笹かにの糸の上まて露おきて あき立今朝の風そ身にしむ
○　埼玉　濱野秀子
桐の葉の散りそめしより 野に山に繁くなりけり露の白玉
○　福井　牧かれ子
秋といへはまちにし風も身にしみて つゆ置きまさるにはの面かな
○　東京　林たま子
八千草も思ひは同し秋立ては 物愁しとや露をやとして
○　三重　森本しつ子
背戸垣の朝顏はまた咲かれとも 秋は來にけり露はおきけり
○　三重　中村奚枝子
糸萩の枝もたわゝに露みえて 玉しく庭に秋は來にけり
○　東京　林艷子
秋たつといふしるしにや草の上に 置く白露のうつくしきかな
○　東京　堤いく子

夏果つる名殘を咲ける朝がほに けさおきそめし初秋の露

○　東京　小杉薫葉子

有明の月草々に殘されて 螢とも見る初秋の露

○　旭川　佐藤央子

つゆすがら小野のしのはらわけゆけは 衣手寒し初秋のゆふ

○　東京　吉岡龜子

蜘のはの露のしら玉ゆら〳〵に むしもくだまく初秋のそら

○　岩手　高山愛子

きゝなれし音かへて吹く芭蕉葉の 風心せよ露やこほれむ

○　東京　松原岑子

月かげもいつしか清くてり初めて 露さへにほふあきは来にけり

○　陸前　前田河千年子

いつのまに秋はたちけん月さえて 庭の千くさにつゆのたまちる

○　陸前　前田河みさを子

露おきて草の葉ことにたまなせる 野へより秋やたちそめにけん

○　山口　村上操子

吹風もあれと秋とは目に見せて 露こそはやくおきそめにけれ

○　東京　島村作子

風もまた音せぬ庭の糸萩に むすびそめたる秋の白露

○　伊賀　佐々木まさ子

いつのまに秋は立ちけん淺茅原 淺くもあらぬけさのしらつゆ

○　大坂　木村春江子

秋立ゝば下り立露のしけゝれは 我袖にさへ置きあまるらん

○　東京　花柳子

露しらぬ夕へ〳〵の秋風に 綻ひ初めし歌袋哉

○　甲府　名取正代子

秋きぬとこよみにしるし朔目よく 見出し庭の露のすゝしさ

○　甲府　風間ちよ子

此朝け庭の柳もちりそめて そてに露ちる秋はきにけり

○　佐賀　尾方綾子

露の玉あさな〳〵におきそひて いよゝすゝしき秋はきにけり

○　佐賀　尾方やゑ子

虫の音はまたとのはぬくさむらに 葉末にしける露のしらたま

○　神奈川　奈良八重子

吹く風に蓮のうは葉露ちりて 秋立ち初むる不忍の池

○　千葉　瀬上拳子

まとをうつ桐の一葉にあきそしる こほるゝ露の色ににほひて

○　神奈川　吉田はな子

暑き日はいつすぎにしか露おきし 秋の黄菊はほころひにけり

○　埼玉　横田やな子

淺ちふのをのゝしの原露みえて 夜嵐身にしむ秋のはつ空

○　長野　關谷己子

初秋の涼しき朝な賤が家の 草はにちれる露の白玉

○　秋田　長田せつ子

よや長き秋のゆふへとなりそめて さやけき月のやどるしらつゆ

○　秋田　細矢はる子

草も木も夏のすがたとみえしかと あきたちそめしけさのしら露

○　埼玉　横田秋子

桐の葉のおつる音して夕庭の 秋くる道につゆやおくらん

○　東京　服部光子

風かをるまがきのうへにおく露は 秋をしらせのしるしなるらん

○　韓國　原野みきえ子

いつしかと早くも秋のきたるらし 千草に結ふ今朝の白露

○　新潟　岩本芳子

秋きぬとのへふく風もみにしみて 草葉に露の玉そこほるゝ

○　神戸　足立ゑい子

思ふとは思ふ人には知られまし 風にみたるゝ初秋の露

○　岐阜　山田しげ子

夏衣またぬぎやらぬ袖の上にこぼれそめたる秋のつゆかな

奈良　栗山保光子

○

秋はまたきのふ立ちしを庭の面の千くさのつゆのかくもしげ〻ん

東京　高野元子

○

はぎの葉の下ふく風もおとつれてつゆの玉ちる初秋のそら

東京　益子逸子

○

白露をたてぬきにしてはたおりのすだくや秋のはしめなるらむ

東京　小島榮子

○

きりのはのけさ散りそめていつしかも秋に入野のそでそつゆけき

神奈川　中島兆子

○

八重むくらしげれるかきのそでにおく露そす〻しき秋をきそへる

和歌懸題　常磐御前

天

名古屋　山脇しげ子

わか竹はちひろになりぬおほひつる
常磐の松のかげによりつ〻

地

東京　五十嵐淸子

ときはなる松のこかげにひな鶴の
なくねかなしき雪のよはかな

人

新潟　岩本芳子

伏見路の雪にをれても常磐木は
そのみどり子の春やまちけん

秀逸

松山　上原のぶ子

子の爲といひはけてともひめ松の
なとふた〻びは雪にうもれし

奈良　栗山保光子

いだく子もおゆめる子らも寒からん
きたのくそらにふれるしら雪

神戸　足立わさ子

白雪のか〻る歎きの折にしも
こずゑ花咲く春や待けむ

神奈川　鈴木まつ子

みさを〻はすて〻みさを〻まもりける
君が心をおもひやるかな

埼玉　横田秋子

常磐木のみさを〻かへぬ心より
終に小松の世に榮えぬる

秋田　細矢はる子

みなもとの絕なん事を惜みつゝ
　みをしがらみとなしゝときはぎ

甲

○　東京　中村千代子

しはしたに世の憂ふしをしのかんと
　伏見の里をまよひいてけむ

○　埼玉　横田政子

末終に松のみとり子世にいてつ
　ときはの色のふかき心に

○　埼玉　横田やな子

みとり子に思ひかへたる常磐木の
　伏見の里につもるしら雪

○　信濃　奧原きよ子

天かける翼生ふる日樂みに
　雛をはぐゝむ親心かな

○　東京　林　艶子

積む雪に伏見の里の吳竹は
　世をへたてゝも榮えけるかな

○　東京　永井さき子

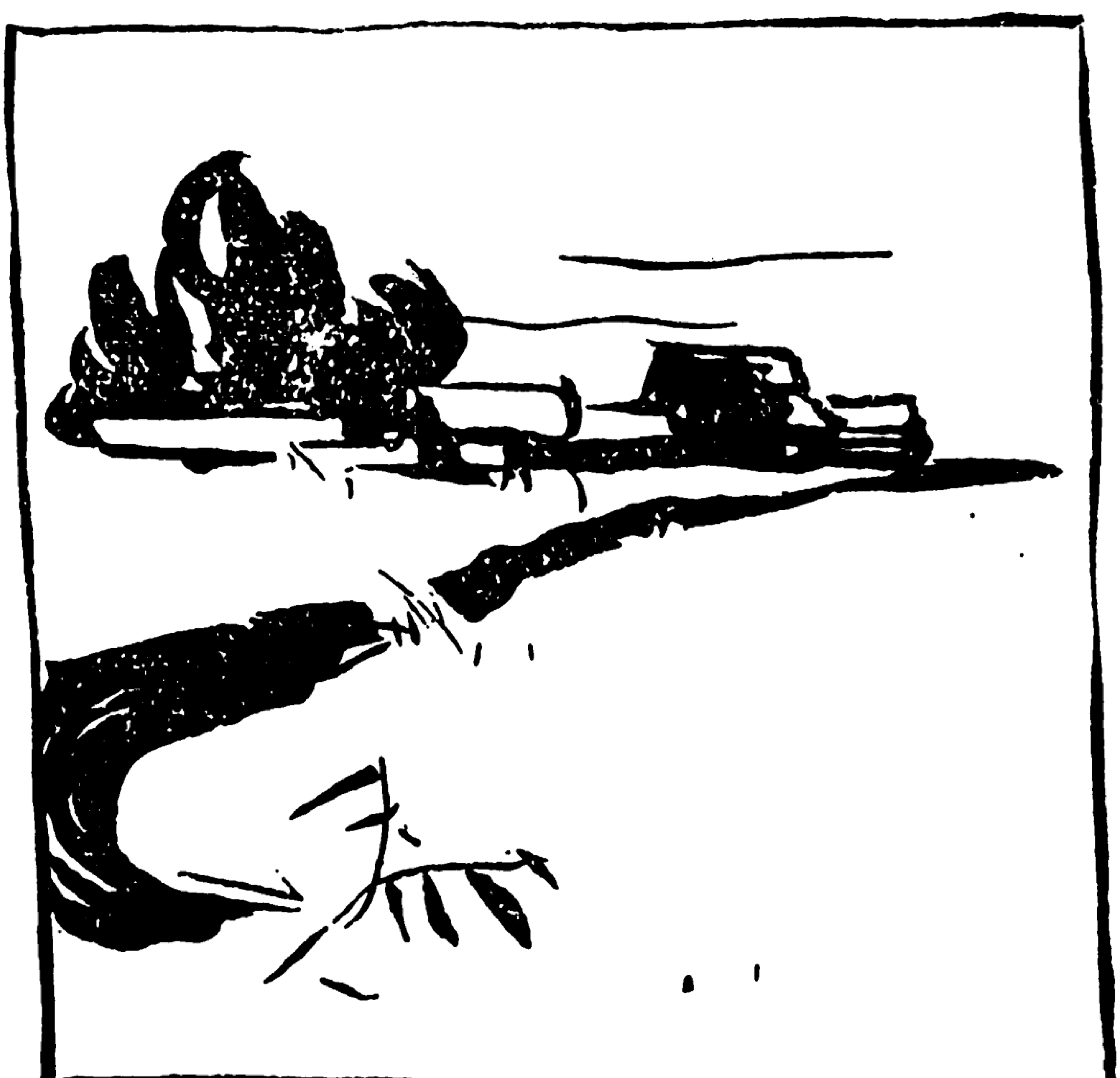
降りすさむ雪にうもれし常磐木や
　みとりにかへる春まちにけん

○　東京　松原挙子

世にのひむら若竹を折られしとふあはれ常磐木いろはかへけん

○　下野　井上尙子

夜のつる操のかけになきし聲ちとせのけふも高くきくかな



○　甲府　名取正代子

心にもあらでなひくそあはれなるやがてのひなむ竹の子のため

○　佐賀　尾方八重子

常磐なるまつのこすゑも嵐の はげしきまゝにうちなひきけり

○　神奈川　吉田はな子

三人の子いさないつれて雪の日を
　行し心のしのはるゝかな

○　東京　高野元子

をさな子の命にかへてふる雪に
　みさをの松やをれふしにけむ

○　東京　小島榮子

をさなごのいのちにかへて常磐木も
　雪の下にや折ふしにけむ

○　東京　吉岡鶴子

みとりなるふたはの苗をからさしと
　ときはの松も雪をれやせし

○　東京　原三幸子

をさな子の末のさかへをたのみにて
　雪に折ふす常磐木あはれ

乙

○　長野　北澤千枝子

色かへぬ松そ常磐の今もなほ
　世々にその名のかくれさりけり

○　伯耆　錦織さち子

吳竹の折れしみさをにみなもとの
　なかれをとはにたやさゝりけり

○　伯耆　錦織ちよ子

雪にくるゝ伏見の里に稚兒三人子ゆゑに折れしみさをかなしも

○　千葉　申川千鶴子
常磐木の伏見の雪にたわみてそ　みつの二葉は千代にかをれる
○　東京　靜子
つむ雪にときはの色はうもるれと　いかて散るへき大和なてしこ
○　東京　川合りく子
常磐なる松のみさをともろともに　代々のかゝみとなりにけるかな
○　磐城　木幡きよ子
撫子の花故匂ふ母の名や　捨し操の身そ哀れなる
○　越後　水野やゑ子
なひけともかはらぬ操雪に見えて　忘れかたない松の面影
○　東京　佐々木壽子
をさなこを思ふ心にふりつけて　肌へをとほす閨のしら雪
○　常陸　北垣くは子
子のために雪をはらひて色かへし　まつの操の高くもある哉
○　埼玉　濱野秀子
舞ふ袖に固きみさをの現はれて　和らけしかな君の心を
○　福井　牧かれ子
花のさく春をまちつゝくれ竹の　つもるみ雪にしはし伏しけん
○　東京　林たま子
家の風後に吹かせつゝ玉たりし子　君がいさをゝ高くもしつる
○　三重　森つれ子
愛らしき我か子の寢顏なかめては　ひとり常磐の松の操を
○　三重　森本しつ子
雨ふれと　はふれとも風吹けと　ひとり常磐の松の操は
○　東京　山下こう子
捨てこそいよ〳〵高し常磐なる　松の操の今の世までに
○　常陸　岡田萬子
みとり子の春を待ちつゝ降る雪に　松の常磐も下折にけり
○　旭川　佐藤央子

うなゐ子をすかしなからにゆきくれて　又もふゝきのかゝりける哉
○　名古屋　不破きみ子
吹く風に君は小松のかけとなり　いろをかへてもみさをたてしか
○　兵庫　梶原京子
をしから身も稚兒ゆゑに迷ひ行く　伏見の里の雪のゆふくれ
○　陸前　前田河千年子
みさを立てし常磐の松も風になびく　心やいかにくるしかるらん
○　陸前　前田河みさを子
常磐なる松のみさをもあれし世の　風にたらむそくやしからむ
○　岩代　岸野常子
つむ雪にふしみの里のなよ竹は　終ひになひきしうまし子のため
○　山口　村上操子
夜の鶴わか子はぐゝむよすかにや　あた野の雪にうつもれにけむ
○　松山　田村多寡子
ふる雪に子をおほはすは常磐山　松のみさをはうもれさらまし
○　東京　島村作子
心にもあらてなひけるなよ竹の　すがたやいかに雪をいとひし
○　伊賀　佐々木まさ子
ふる雪の重さに堪へて下折れし　ときはの松の色そくやしき
○　大阪　木村春江子
時なれぬ常磐の色もかへてしを　あたなる花と誰れかうたはむ
○　東京　化柳子
磨きたて人の鑑とならまはし　寫る汝か名も常磐の前よ
○　甲府　鳳間千代子
撫子の春やまたんと心ならす　ときはの松やみさをゝりけん
○　横須賀　柏原葵奈子
朝東風にさやかになひく白旗に　君かこゝろのかけも見えけり
○　佐賀　尾方緩子
ふく風に枝はなひけとときはなる　松のみさをはかはらさりけり

○　美濃　傍島みゆき子
しろたへに道をしへ石もうつもれし深雪路たとる君をしそ思ふ

○　神奈川　奈良八重子
ふる雪に常磐の松はしをるとも操は正しよろづ世までも

○　千葉　海上孝子
ときはなる松の操もいろかへし心のうちや涙なるらむ

○　神奈川　中島兆子
ふる雪もあつきなみたのしつくよりとけてなかるゝみなもとの水

○　東京　青木たま子
常磐なるまつの操もふるゆきにひとしほまさる色のみえつゝ

○　和歌山　植木撫子
今はとてたのむかけなき子ゆゑにはいかなることも忍ひてやみん

○　東京　河合清子
つるぎばをみにはかくしてをし鳥のふすまや風のふくはらの里

○　土佐　秋月旋江子
雪に折れぬ常磐の色のいちじるく鎌倉山にあらはれにけり

○　秋田　古瀬りく子
ふるゆきにしはしたふれてときはきのおとに時めく春やまちけん

○　岐阜　山田しけ子
子を思ふ君かなさけは深見草伏見のゆきもうつみかねけむ

○　神戸　足立ゑい子
子を思ふ道にや迷ふ仇し野の雪に常磐の松もなひきぬ

○　神戸　今西操子
色かへぬ松のみとりも世と共に常磐の外のものとなりけん

○　東京　服部光子
常磐なるまつのみとりのくろかみにきみの操はあらはれにけり

○　東京　服部彌惠子
常磐かけまつのふたはのおひたちて操をよゝにつたへけるかな

○　丹後　小山田花子
われとわが幸なき身をはうちすてゝくるしきつとめあゝ他ならす

○　秋田　長田せつ子
た折らるゝみにしあられどた折られしみさをそたかき常磐木の松

○　長野　關谷己子
背になく子もふところのいとしこも凍るさむさのかたみにとしれ

短文

文學士塩井雨江先生選

天

捨子の妾　　信濃　奥原きよ子

梅雨は、しと〳〵と降る。淋しい！　淋しい!! 面白い事を云うて、家内中の者を笑はせるお父さんは、今朝お出ましになつた儘、未だお歸りにならぬ。無邪氣な遊びをして、妾のお友達になつて呉れる、美ちやんは、お母さんの里の産土様のお祭へ行つて留守、お母さんに手を曳かれ、林檎の様な頬に靨を見せて行つた、美ちやんは、どんなに嬉しかつたらう、妾も誠の親が有つたなら、よしや美ちやんの様に、お母さんとお祭へ招かれて

行かなくも、どんなに嬉しいであらう？

兩親は貧の爲に、妾を捨てられたのならば、濟まぬ事ながら、恨みます、御飯を澤山食べられないで乳が出ず、妾を大きうする事が出來なかつたならば、なぜ兩親の傍で死なせてくださらなんだか？大きうしても、學問やお針を仕込む力がなかつたので捨てられたのか？妾は學問やお針は知らなくもよい！、兩親と一所ならば、乞食をして野に寐るも、山に寐るも、厭はない、人の家に奉公して、どんなつらい目に逢ふのも、ぢつと辛抱する。

あゝ誠の御兩親樣！　妾を捨てた、十六年前の夏を思ひ出して下さい、そして誠の子の樣に愛み育てられ、學問やお針を仕込まれ、身には絹布を着け、何不足なき有難い境遇に在り乍ら、誠の親に逢ひたいと、日ねもす終夜、小さい胸を傷めて居る儚ない子の事を、夢になりとも見て下さい。

誠の兩親に逢つて顏を見たい。妾の顏は父母何れにか似て居るに違ひない、と、手箱の中から鏡を出して、顏を寫し、ぢッと見てゐる兩眼から、ハラ〳〵と零れる涙！　妾は「ワッ」と泣き出して持ちし鏡を落した。

あゝ何處かで、妾と同じ思ひになく時鳥の聲がする。

（雨評）其の情、能に人を動かすものあり。結末の時鳥の道具、用ゐ得て妙、結び得て千金の力あり。

地

夏の苦樂　東京　土田八重子

風は死したのであらうが、簾かゝげて待てども〳〵そよとの音づれもない。庭の遣水は打てども〳〵後からすぐと、涸れてしまふ。草も木もあの勢のよかつた呉竹も、だん〳〵に萎れ臥してしまつた外の方では、氷賣る子の聲もきこえずなり、涼しかるべき裏の泉水も、なんとなく煮えて沸くやうな音がするのに、ひとり蟬ばかりは元氣よく、ことさらに聲はり上げて、暑さを添へて居る。朝より塵程の雲もなく、いりつくやうに照りはたゝく日影の、早く西に傾けかしと、只それのみが待ち

遠しい。と見れば嬉しや、彼方の山蔭に、浮雲の二つ三つ見え初めたが、次第に重なり合ひ、さながら山の奥より湧き出づるかのやう、此方へ〳〵と、早忽ちに青空を、半ばすぎ包んでしまつた。折りしも、吹きくる風につれて、大粒の雨はぼつり〳〵とふり出して、一としきりは土くさき臭ひを上げて、ふるは〳〵。が、それも束の間で、夕立は名殘りなく晴れた。するとあたりの草はせい〳〵と、恰も甦いて目をさましたかのやう、風も蘇みがへりしが、葉末の露をころがして、風鈴はいとも涼しげな音をたてゝ居る。やう〳〵人心地になつた私等は、日中の暑さを流すべく、湯浴みすれば、此の時、風呂桶よりも大なる夕月は昇りて、松はさやかに地上に影をうつして居る。そしてまた葉毎〳〵に宿つて居る月は、涼風の渡るたびに、上葉より下葉へと住みかへてゐる。池の彼方には、涼臺が持ち出され、盡日水泳に暮らしたる兒等は、おとなしく煙草盆を圍んで、線香花火に餘念がない、老いたる昔語りの鬼を說くか、若きは人を說くのか、笑聲は絶え間なく起る。やがて、一同程近い堤の方へ散歩につれ立ち、涼風を浴びて、日中の苦熱を忘れ　歸つては又涼棚に夜の更くるも知らで、樂しく語り交はすのである

（雨評）新しき題にはあらねど、さりとて陳しとのみは覺えしめざる才氣の、何處となくにほふものあり。殊に、修辭の餘に淺からぬ華づかひの見ゆるをよしとす。

人

伊豆山の夕暮　神奈川　奈良八重子

僅か三里の水が浮世の風をへだてて、昔ながらの夢に眠るやうな初島・穩に射る夕陽の光に、紫色に變りゆくとき、語らふ友もなく只一人、伊豆山のある客舍の欄干にもたれて、移りゆく海をこの上もなき美しきものと思ひに沈み、空想にかられて、知らず知らず恍惚として見入つた。

眞鶴崎より出でし白帆は、名殘りの光を浴びて、金色に閃めき、國府津通ひの小蒸氣船、今しも初島をはなれやうとして、黒煙を紫匂ふ沖の小島にたなびかせ、平和な里を暗黒の中に埋めやうとし

てゐる。やがて夕日の分一分と沈み行くに從ひ、眞鶴崎、初島、網代の港は、紫より紺に染められ、伊東の小富士、奥伊豆の山々、大島、さては三浦半島と次第次第に遠ざかり行くにつれて、紫より紺、紺より藍に變化し、はては、だん〳〵と灰色の靄に包まれて仕舞ふ。蒼然として暮れ行く冲の方、夕風に蹴られて立つ白波が、丁度白鷗の飛んでをるかのやうに、所々に見えると思ふ中に、その波は刻一刻と近づく、近づくにつれて、漸く大くまた長く、後の浪が前の浪を追ふと、前の浪もまけまいといふ風に、勇んで進み來ては、脚下に横はる巨巖にふれて、雪と崩れ、霰とちり、果ては、白煙となつてのぼる、かく去來する波を見詰めて居ると、我胸の愁も自づと消え、魂も肉體を離れ誘ふやうな波にさらはれて、何處ともなく漂ふやうな心地がして、暫し我れおることを忘れた。突然隣室からの洪笑の聲に驚かされて、我れにかへると、闇は益々四邊を包み、星の數も漁火の數も殖えてゆき、山から岬、島も港も灰色になつて賑かであつた舟の往來も見えなくなつた。たゞ變らないのは磯である。浪である。巖に當つて退く汐の音のみである。

（雨評） これも新しとは云ひ難けれど、情致は髄に浮びて見ゆるものあり。叙景の筆また既に得たるものあるをよしとす。

秀逸

◎一日　　東京　新井俊子

朝から空は曇りとして蒸暑く、何とも言へぬ厭な日であつた。

正午を一寸廻つた時、務めを終へて歸宅し、先づ汗に濡れた體を拭つて、机の前に投げ出すやうに坐ると、俄に疲勞を覺えて、何時かうと〳〵と夢路を辿るのであつた。

寒氣がするので、ふと眼を開けば、あたりは寂として、只蕭々たる雨の音のみである。雲の絶えずふは〳〵と動いてゐるなど、なか〳〵にさびしい。

それに、こんな大きな宿で有りながら、靜まり返つて人のをる氣勢など、少しもないので、一しほ寂しい。

大方皆晝寢でもしてゐるのであらうと思つた時、ずつと離れた室で、誰かせきをするのが聞えたが、それが止むと、又元の寂しさに歸つてしまつた。

同時に言ひ難い悲しみが、胸に浮んだ。

自分は自分よりほかに賴む可きものはないのである。

こんな時母樣が此世の人であつたなら積る思ひの限りを語られやうに…………

是を五六年前の學生時代と較べたら、どうであらう、あゝ。

實にあの頃の事は、悉く空想であつた。

（評）文はよく整ひ得たり。筆の簡なるはあつさりとして、なか〳〵に力あれど、其の作意にもの足らぬところあるををしむ。

◎柳の雫　　岩代　岸野常子

明日はいよ〳〵我家に別れねばならぬかと思ふと悲しいやら切ないやら、胸も張り裂けんばかりになるので、妾は孤りで窃つと庭に下りて、飛石傳ひに泉水を廻り、築山の傍の櫻の下に、何思ふともなくうつとりと立つた。一ッ二ッ……九ッと數へたお寺の夕鐘が、今やんだばかり、薄黒い佗の幕がそろ〳〵と降りて來る。あたりはシーンとして、夏としもない寂しさ。チピンと音して、柳の青葉から雫が落ちた。水面には波紋が起つて、星影が搖れる。

「姉さんッ」といきなり走つて來たのが、妹の靜ちやん、「姉さんは明日お嫁に行くつてねい、眞實なの？」、今お三がさう云つてよ」と尋ぬるので、妾は妹の手をしかと握つて「「姉さんはねえ、靜ちやんも知てる通り、自分はちつとも嫁きたい事はないけれど、世の中は何一つ思ふやうにならぬからねえ……」「では眞實ねえ、妾もついて往きたいわ自分の家にゐたつて、お繼母さんがひどいから……、綾ちやんだつて、妾を姉さんとは云つて呉れないんだもの……」と、早や泣き出す可愛さに、妾はもう胸が一ぱいになり、思はずヒシと妹を抱きしめて、薔薇の頰にキッスをしました。

チピンと又雫が落ちる。

小さな星が長く尾を曳いて東に飛んだ。あるかないかのそよ風に、チビン〳〵と續け樣に雫が散つて、頻りに星影が搖れる。ポツ〳〵、柳の雫ばかりでせうか。

（雨評）柳の雫の趣向は、工夫のあとゆかしけれど、情のなほ動き足らざるををしむ。

◎夕立文　　東京　吉岡龜子

土さくといふなる夏の日の照つゞきたる、よべより皷の音のきこゆるは、近き里の大みたからのつどひて、神の社に雨を祈るにやあらむなどいふに、今朝は雲のたゝずまひもたゞならず、風の氣色も變りて聞ゆるは、夕立のもよほしにやとあふがるゝ。空は墨のやうなる雲立渡りて、稻妻の光りやみよをてらしていと物すごし。やがて降過てゆくもあわたゞしう、やれたる板ひさしにとほりぬべくはらめく。

をつくはのねごしの風に雲立ちて、夕立すなりむさし國原。

まきのはの陰にひそみたりしひぐらしの聲聞くほどに、名殘りなく晴れて、緣りのそらに日影のさしいでたるは、ぬれたる心地していとすゞしうなむ。

（雨評）擬古文の筆はいともめでたうなむ

〇こひしき花ぞの　　品川　星野淸子

日露の戰始まりし年の彌生、父母より姉妹三人の自由の地として特に賜はりし二坪ばかりの土地日あたり風通し申分なく、且肥えて、自らなる花園なれば、嬉しさ限りなく、力を合せて美事花壇をしつらへぬ。かれてより集め置きし種子に苗に、近く札幌の從兄より送りし和洋數十種とりまぜ、悉くまきぬ。三人の花守の至れる注意に、數月の後には、交る〳〵咲き出しぬ。花守の誇はこりとり〳〵美しき中にも、つゝまやかに愛らしき三色菫、見るからすが〳〵しき白の除虫菊、もゆる情を色に現はせる如き朱の金蓮花、てる星に似たるフロックス、天使の如き美人草、け高き姿の黃菊白菊など、誰が目にも變りなかりき。此花、近くは父母友とちに、遠くは恩師學友に、はては戰の庭におきふす兄達にまで、喜ばれ愛でられしが、わきて今はなき友の、其常時補習科の業半にして重き病を都に近き平塚海岸に養へるが、初花封じて送る毎いかに喜ばれしか。看護の母君の御返しにしるし。斯くも趣ある花守末ながくと願ひしに、僅二年にして、己まづ辭して遠く都の空に住ふべき運となり、妹も亦修學の爲暫し別かるゝ命とはなりて、なほもる者は小さき妹のみ。折々の花たより限りなう嬉しけれど、遠く住ふ身の、近き未來に彼の花ぞの訪づれて、昔を語らふ事の期し難きを思へば、はかなく美しき夢のさめし心地のみせられつゝ。

（雨評）思ひつきは面白き花園の文なれど、筆はなほ今一入の花を添へたき花園に候。

〇亡き弟　　美濃　長濱關子

さ夜ふけて窓の黍萩に月の光を宿し、雁の二聲三聲淋しう泣いた夜、弟の敏夫(六歳)は、はかなくもかへらぬ旅に立つたのである、あゝ、此夜、雁が誘うたのか、弟が誘はれたのか、兎もあれ淋しい雁の聲と共に亡くなつたので有。敏夫が少さき胸に湧くが如き望みの光りも、今は尾花の露と化した。あゝ、つひ此の頃まで「姉さん來年の四月は、あのかばん、あの服で、學校に行くのよそして、級長になつて、父樣に御褒美をいたゞくのだ」と勇んで居たに……あゝ、その面影が目に浮んで、どうしても忘れる事が出來ないのみか、此聲が耳にのこつて常にきこゆる、カバンも帽子も、姿が手に編んだあの靴下も……今はむなしくなつてしまつた。あの敏夫は、いま冥神の手をはなれて、此カバン此の靴にこの靴下で、其望みの光を手にするのか……

(雨評) 姉さんの涙は一ととほりわかつた。

○○大岩寺まうで　越後　水野やすゑ子

雨を犯して、大岩寺にまうづ、牛車にてはあらねど、垣の卯の花雨をふくみたる氣色、おもしろし、門の前にて米とぐ尼君をかし中に入れは、木立物ふりて、石苔滑かなるものからおのづと神々しきを、堂に溢れん老若の、さゝめ言さへ聞えて、すましたる讀經のみ洩るゝは一入。聖あまた立ちて修法したまふ、たふとしともたふとし。節おもしろくよみたるに、人の忘れたるをよく覺えたるうれしと、清少のいはれしも思はれて、ゆかしかりしか。歸りによき據得たりといへるをきく、これもうれし。乞食に鳥目もとらせで行く人にくし。側なる店にてかへて小さき鳥目をとらせたる人更ににくし。紺の衣裳、さのその型、讀經たふとし五月雨の院。

(雨評) 此の文は、さて、をかしきもの〻中にや、くちをしきものの中にや。

○夏の朝　東京　神田けい子

曉告くる鐘の音に驚かされて、やり戸自らくりやりて、欄によれは朝霧深う立ちこめて、鎭守の森の老松に殘れる月、いはんかたなくをかし。折りから、村はづれあたりに鳴く鷄の聲、高う靜けさを破りて聞ゆ。淡かりし星影も一つ〳〵消え失せて、東の空紅に、夜のとばり名殘なう開けぬ。朝風冷やかに、心地よきまゝ、庭におりたては、露は歩むにつれてしげく、木陰に匂ひし紫陽花は、既に色あせたれど、垣根の朝顔は、いよいよひろごりて、破れし中垣をも搦ひぬ、木戸より出でゝ、裏なる畑に行けば、露は一きはしげく、大きなる芋の葉毎に銀の玉を載せたる、垣にはひかゝりし糸瓜の、ぶら〳〵と風にゆられたるいとをかし。翁は瓜茄子なとを取りに行きけむ、籠にあふるる計り擔ひて歸り來るめり。いつしか家々の軒に、白き烟、棚引きて、日は森の梢よりわづかに輝きぬ。折しも松並木の邊に、人の聲しげくするに、顧れば、大きな帽子戴きて、朝の潮あみて歸る人々なりけり

(雨評) 其のけしきは聞えたれど、筆の色なほ其景色に伴はざるをしむ。

○花かご　吉野ひさ子

そも何處の乙女か、胡蝶追はんとて置き忘たる、獨り野草に捨てられて、無情の主を呼ぶらんいたはしの花かごよ。

花あれど摘み入るゝ主なく、蝶こそ來て舞はず。折しもシトシトと五月雨そゝぐ憐れさに再び曉き空の手に入らん事を願ひ、我れはそと、籬への青柳のしだる、枝に、結び付け去りぬ

（雨評）評者も心のとまる作龍に候かな

〇逍遙　和歌山　植木撫子

今しも大つ日は、明神の森かげに落ち、夕映の光は次第に淡れゆき、塒に急ぐ一群のからすは、空低くあはれに鳴き渡る。涼風を身にうけて、紀の川堤を、そゞろあるきするに、右手の田面には、山際まで殘る限なく、稻うゑつけられ、いつのまにかやどしけん葉末に結べる露の玉は、淡みどりの波をたゝよはす每に、はらはらとこぼるゝ樣は、實にいはん方なし。流れにそひて、たどり行き、とある柳の木陰にたちより眺むるに、いつしか月は、山の端を離れたり。葉ごしに、さし出づるその光は、さやかに水の面に影をうつし、吹き來る風のまにまに、長く、短く、ゆらゆらとゆらめく景色、さながら秋の夜の心地ぞしたる。折りしもあれ、一艘の舟下り來り、かなたの岸にと止む。如何なる人の乘り合せしかいとも妙なる笛の音に、身もひえこほるまでにきこえ、とみに此の世の外の心地して、つきぬ思は、行く水の流れに等しく、たつ空もなく覺へたれど、夜やふけんぬらん、しつとりと、衣濡ひぬれば、心を殘して、家路にとたどりぬ、

（雨評）筆は整ひてあれど、心も詞も今一層の感興をこむる工夫を要す。

〇月夜の瀧　千葉　吉松さゑ子

閑かな月は昇つた。光と影とが入り亂れる。闇に包まれた榊木の谷も、今は生き生きとなつてきた。雲一片もなく、月光で眞白く見ゆる大空は、谷間を越えてかゝつてゐる。遙かな運動をして、絕

えず落ちては流れ、流れては落つる瀑布は、縱に燃ゆるか如く輝いてゐる。瀑より落ちた水は、岩を銜いて月光を碎きつゝ、彼方に走り去る。自分は今、此景を前にして川床に佇んでゐる。風はそよとも起らない。林はざわめかず、只もう大古のやうなこの榊の谷に夜の寂寞を破つて滔々と落下するは斷魚の瀧。女神が白妙の衣を脫いで吊したかく絕壁にかゝる此の瀧の、颯と飛沫を散らせば、霧みたやうな水烟は兩方に分ちて、瀧壷の面を立迷ひ、遂には消えてしまふ。月下に繰り返さるゝこの瀧の落下するさまを見てゐるうちに、自分は恍惚となつてしまつた。胸は靜かに呼吸するに、思ひは心の底に湧く。親しい人の顏なつかしい人の姿、生きてる人も、亡くなつた人も、自分の心にありありと見える、わが生涯は我前に展かれる、永く忘れてゐた事ども思ひ出される過古の追憶、未來の幻影、自分は宛然自分を離れてそれを見るやうだ。心の作用は、はげしくなつて、小鳥の狂ふやう。空想は空想を生じ果しもない。あたりのものは、一としてそをかきみだすものはなのでいある、月の光も、流るゝ水も、果た滔々たる瀧の音も――

（雨評）文に氣はこもりてあれど、筆に練熟の足らぬををしむ。

〇田舍の夕　和歌山　とく子

夕陽西山に傾きて、半天紅に色どり、鴉は泣きて塒に歸るの時、浴を終へて、神氣爽快となりたれば、姪をつれて、軒近き黒川の堤をさまよひぬ。雨に、細やかなりし流れも、今日は滔々として流れ、左右の木立は、或は濃翠に或は淡綠にあやなす。露しげき野路を踏みわけて、田の水見に行く人もあり、螢狩りしは此處よ

と語りつゝ、月見草摘める幼子も見ゆ。折柄、夕を告ぐる鐘の音堂々として聞え、斷續して、稲田の水を渡り、紫雲棚引く山に至りて、餘韻久しく傳ふ。間もなく、暮色は村落を覘び來りて、遠村は暗く近村は淡し、其間より農家の燈、點々として、自然の平和を示す。

（雨評）これも其の景色は聞えたりと申さるれど、見えたりとは未だ申されず、

○陸奥の翁山

東京　川合りく子

すぎにし春、故郷の友と打連れて、朝とくより翁山へと出立ちぬ。二三の小村を過ぐれば、見渡かぎり山續き、こゝかしこの森には、淸き流の谷川のしらべに、節あはせて面白く歌ふ百鳥の聲、身に浸み渡りて心地よく、われらも共に聲揃へ……と歌ひつゝ、足の疲勞をも知らで行く程に、いつしか翁山に昇りぬ。山は一面に紅の杜鵑花咲きみたれ、靑空に囀る雲雀の聲微かに聞え、あまつ女神のかなでたまふ琴の音もかくやあらんと思はる。遙か彼方に浪靜かなる海の面に眠れる如き白帆三つ五つ、又此方は霞みて見ゆる津輕山、麓に咲ける薔薇の花、ときならぬ雪けしき、げにながめうるはしき翁山よ。



（雨評）重い筆、やつとの事の山のぼり。惡口はお容赦く。

○火鉢

紀伊　茨木とく子

今日は、雪さへ降り出でゝ、枯木には、時ならぬ花を咲かし、寒さ殊の外烈しく、堪へ難ければ、火桶引きよせ、炭など加へぬ。やがて火は盛になり、手足の暖りしまゝ、空想に耽り居りしが、何時ともなく、うと／＼と夢路に入りぬ。折りしも、母刀自の來給ひて、「燒けなんとするに、知らずして、何をなして居るぞ」と、注意せられ、驚きて目さめぬ。あゝ、豫定の仕事も多く殘れるに、早や一時間も過ぎつるかと、いと口惜しかりき、實に火鉢は、人を眠らしむるものにて老人には、必要ならんも、我れ等姥婆の身には、無くてありなんとぞ、覺ゆる。

（雨評）意味は聞へたりとのみ

○月の夜琴の音をきゝて

和歌山　島田千代子

げにたへがたかりしひるの暑さも、いづこにかさりて、今し夕月のかげすゞしゝ、老松にかゝりぬ。折柄たえだえに聞ゆる琴のしらべ、そもいかなる人のすさびにか、いとゆかしくて、その音をなし

るべにたどりゆけば、浮世のちりにかけはなれたる山がつの垣ほにつゞきて、いとおやしう打よろぼひたる門の、かなたこなたに青やかなるかづらはひかゝれり。垣根にたちより、おそる〳〵さしのぞけば、まばらなる軒にいとやつれたる、おしのすだれ少しまきあげて、かろらかなるうすものきなして、月かげにいとうちとけてひきたる、折りしもさつとふきくる松風に、もてはやされたるつまおと、一しほおもしろく身にしみわたりぬ、あはれ氣高き人なるよ。

早秋朝

大坂　木村春江子

見し夢に驚かされて、例よりもとく起出でつ、雨戸おしあけ庭に下りぬ。有明月の影空に殘りつゝ、星の影さへ二つ三つ、薄霧の晴まより見ゆ。思へば昨日今日、はつ秋立ち初めしな、大方のけしきは夏と變らねば、さる心もつかでありしななど、つぶやく折しも、吹過ぎし風の、一しほ冷と身にしみて覺えしも、秋てふ事に心づきしにあらすつ。

病の床

越後　水野やすゑ子

病中うれしきは、退院の日定まれる友より來れる文、運命にかちたる小說、偉人修養談、すゞしき風、あき瓶の花、やさしき看護婦、尋ねし人、窓の月、子供のうた。

いやなものは、炊事場の石炭のにほひ、なまぬるき風、病人の呻吟、きざな醫師の回診、やかましく物いふ小使、やせた顔に目の光る人、はじめての看護婦。

羨ましきもの、健康な人。退院する人。

梅雨

福井　細井なる子

春暮れてより、幾日もたぬ心地するに、早やさみだるゝ、けふの空となり、軒端をつたふ玉水の音淋しく、前栽には見なれぬ小川をなし、築山の麓には、いつしか瀧の落つる音、しよぼ〳〵と聞えて、いと淋しく、日を經るにつれて、里川の水かさ增さり、道行く人の跡絶えて、親しき友も訪ひ來らず、家の內は、凡てしめやかにて、心地惡し。なべて雨の降りくらす日は、淋しく無聊なるに、まして五月雨は、をやみなく、降り心も浮かず、たゞつれづれと明し、暮らすのみ。今宵は、音づる雨も靜かなればと、思ひて我が窓を開け見れば、僅かに晴れし雲間より、かすかにもらす光り。あまりの珍らしさに、「五月雨やふる夜ひそかに松の月」を想ひ出されて、げに此の句の趣と眺むる程に、つれなくむら雲おほひかゝりて、見えずなりぬ。あはれ、いつ晴るべきか、このなが雨。

卒業後師に謝する文

紀伊　中岡登良子

拙き筆にて申し上げ候。日毎御目にかゝりても、猶あかず思はれしを、かく遠ざかり參らせて、朝夕いとゞ御なつかしさ、やるかたなく候。先づ御なつかしき師の君様にはいつも〳〵御氣色うるはしうおはしまし、こよなううれしく存じ上げ候。私方も變りなう暮し居候間、御心安う思召下され度候。さて、此度小學校の業を卒へ、證書を授けられ候ひし事、全く師の君様の御教へにあづかりし故とて、父母もいたく打よろこび居候。もとより愚なる性質にて、學の道は無下におさなかりしを、年月御前にはべりて、露深き教へ草つみそふるまゝに、辛くして人なみ〳〵になりぬるうれしさ、言葉にも盡しがたく候。この御恩海山もてたとへんも中々おろかなるわざにして、いつの世にか忘れ奉るべき。今はた遠く別れ候ひて、御前に侍らずなり候は、殘り惜しき限りに御座候。此の後はよろづ御教のふし〳〵を守り、ひとへに女の道にたがはじと心がけ居り候。右よろこびのかたはしを申述べ度、斯くの如くに御座候。何卒〳〵師の君様、御如才は御座なく候へども、時

時分柄折角御いとひ遊され、御風の一つも御引きあそはさぬ樣、切に念じ上候、あなかしこ。

夏の朝

清國　富成梓子

軒の風鈴の音すゞしく、忍ぶの草のうちゆれて、こぼるゝ露を、しらさじとうけたる袖垣に、朝貝の花の、いろ〳〵咲きたるもまたつぼみの程なるも、いとをかしきに、月さへ白う在明の空の心地よさ、滑女が目には映ぜざりけん、あはれ夏はあしたといはまほしき物を。

うつしゑ

韓國　原野みきえ子

花は根に鳥は古巢に立ちかへりて、青葉の梢にそゝぐ雨蕭々の夜ほの暗き灯火の下に取り出したるうつしゑよ。我れ韓都にさすらひて早三年、未だ業ならず。父母はらからと共に樂しく過さんの日やいつ。思へば今の我が身の怨めしう。嬉はしき此のうつしゑ見てはそゞろ其のかみの戀しくて、顏におしあてしばしは忍び泣きつ……

をりにふれて

松山　田村多豆子

梅雨の頃はをやみなくふるも、さばかりは思はざれども、今年は晴れのみつゞきて、田つくる人人は、早苗をうゝるたづきなっしなひ、池澤にはたくはふる水のみたざるを慨きつるか、時過て昨日も今日もふりくらすは、思ひもかければわびしともわびし、世の中はなに事も、其時を得ぬはいひがひなきものになむ、

夕立

福井　岩橋花子

遠雷が三つ二つ聞えたかと思ふと、天の一方に怪しく動き出でたる雲、あれはと見る間に、大粒の雨が篠をついて。涼風颯と吹いて簾を卷く。木々の青葉濃く深く、倦みし手足も一時にのび〳〵として。

新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

低き聲

土佐　廣江子

もゆる光のいや強く　泥土わきたつ田におりて
小草とるなる日すがらを　都の人はいかに涼みて
軒傾きし賤がやに　蚊遣の煙にむせびつゝ
糸つむぐなる夜すがらを　都の人は如何に涼みて
草深き里に生まれ來て　草と枯るべき身なれ共
一日はなりて見まほしや　心のまゝの都人

（雨評）可憐の情掬すべし。

地

折にふれて

大分　佐藤家子

花の白雲むら〳〵の　峯の下道たどり行く
わかき乙女のただ一人　雪にもまかふ白たへの

すげの小笠を冠りつゝ　籠におふるるさわらびに
折りてそへたる花一枝　すゞしき聲をはり上げて
ふし面白きひなうたを　水のしらべにあはせゆく
丸木のはしを打渡り　曲りし〳〵細野道
たどる行手は何處ぞや　立ちもこめたる春がすみ

（雨評）　風情掬すべし。

人

病みて歸國

越後　水野やすゑ子

見えそむるあの高峯　見え初むるあの綠野
あゝうれし故鄕の山野　鮮かなり鎭守の森
森のつゝき一本の松　あゝその下ぞわれの古巣
なつかしき父可懷き母　まちまさん我れのかへり
こゝを去るに何を望みし　こゝを去るに何を誓ひし
廣かりき深み洋々春の海　高かりし誓稜々金石の心
こゝに歸る何をかもてる　こゝに歸る何をか齎せる
望は遂げず誓は破る　病みて窶れて細きかひな
靑山我れをねぎらはん　白水われを慰めん
されどされど嗚呼されど　怨綿々限りなきかな

（雨評）　多少の情動きたり。

秀逸

○◎螢

大阪　木村春江子

夕立はれしみ園生の　竹の若葉に宿しめて
月にきらめく白露と　消えぬ光を爭ひし
樂しき夕もありにしを　一夜乙女にとらはれて
今は軒端のわび住居
風吹き出でゝ露置きて　心のまゝに遊ぶべき
その夕とはなりにしを
籠の窓よりながむれば　螢る靑葉のこゝかしこ
靑き光りのゆきかふは　我がはらからか我が友か
あゝ父戀し母戀し　遊びし庭も戀しきを
我れ虫の身もうき籠に　うき身の果をもだゆれば
燃る思ひに身は燒けど　聲なき歌をいかにせむ

（雨評）　やさしく整ひたれど、情の動かざるをしむ。

○◎

東京　平塚白百合子

光りくまなくさす月に　思ひある身のなかるゝよ
琴引きよせて奏れば　むせぶに似たる響かな
慰むすべも今はつき　そゞろ下り立つ庭の面
思ひにしづむ足もとに　桐の一葉はこぼれたり
あゝ哀れなる秋來ぬと　虫は千草にうらみわび

涙こぼりてこりたるや　草の葉末は露しげし
もの皆かくもうらぶれの　我にはふれどかくもなど
悲しき物ぞとみる果の　庭のかたへの袖垣に
これもうき世の白萩の　花ちからなくほろ〳〵と
いとゞ思ひをまさしむる

(雨評)　今少しく詞に力をこむる事を心がけ給はば　愈に一段の進歩を見らるゝならむ。

◎つり床　　下野　井上尚子

緋鯉をどれる池のべの　茂みにかけしつり床に
眠るわが子の袖さらず　ゆめぢの伴れか赤とんぼ
寐息静かに笑みよする　寝顔は神に似たる哉
浮世を夢も知らぬ身は　今がエデンの園ならむ

(雨評)　すべてものたらぬをなしむ。

〇夢途　　東京　花柳子

悲しからずや、我はしも、　君がやさしの瞳より、
「癒えぬ病の恨みとて」　涙にくれし此の文よ、
實にや悲しき其の涙、　共に泣かんのはらからよ、
悲しからずや我はしも、　君がやさしの心より、
「肺の病のとりことは」　夢か誠かまぼろしか、
現に聞ゆ梅雨の音、　君が濡る我が袖よ、
悲しからずや我はしも、　君がやさしの口もとに、
去年の今宵の樂のふも、　今宵は亂る胸の糸、

死出の田長の血に喘きて、　闇より闇をたどるなる

(雨評)　言ひまはしを今一入工夫せられなば、　はじめて面白からむ。

〇友に　　越後　水野やすゑ子

望む高根の月影も、　世の浮雲にさへられて、
空しく送る幾年を、　君よ、あわれと思はざる。
君よ、都と言ふ勿れ、　われには塵の巷なり、
自然の神の寵あつき、　この山里は、うるはしな。
花のあけぼの露の夜、　その折々は思ひ出の、
言葉のはしを偲へてん、　君よ、都といふ勿れ。

(雨評)　少しく朦朧の嫌ひをまぬかれし。

〇庭のながめ　　和歌山　植木撫子

曉つぐる鐘の音に、　夢やぶられて起き出でぬ、
み空に殘る星影は、　しだい〳〵にうすれ行き
葉末に結ぶ白露は、　吹き來る風にはら〳〵と、
こぼれて落つる庭の面、　くづれしまゝの袖がきに、
はひひろがりし朝顔の、　三つ四つ五つ、露ながら
ゑみさかえたるその様は、　優にやさしく見ゆる哉、

(雨評)　今一層感情想像をはたらかされば　面白からす

〇深山の一日　　東京　禰津綠葉子

涼風通ふ松蔭の　岩のはざまにわきいづる、
神代ながらの岩清水、　みどりの苔はなめらかに、
岩根にふるゝ白玉の、　千々にくだけて散る時は、
心も清く身し浄く、　天津み神の優聲の
さゝやく如くひゞくめり
松かぜの通ふ木かげの岩清水わきいづる音も涼しかりけり
夏をよそなる此のみ山、　其の古はなか〳〵に、

乙女得入らぬ此の山路、楯を拂ふ風もなき、
けふの暑さにたへかねて、詩集片手にたどり來つ、
思はず得たる此の涼味、

(雨評) 意味はきこえれど流暢なる散文の如し

○故郷の影　東京　川合りく子

けしき涼しき海原を前に占めたる脇野澤。
左に仰ぐ、八幡のやしろのみかげ、いや高く、
君の御ため國のため荒野にはてし武夫の
譽れのみ靈、百千代にとむる石碑に、今こゝに。
右に向へば、愛岩山、峯にましします山神の
まもりたまへる湊川、入來る船のたえまなく、
見渡す限り青々と、綠したゝる山つづき、
流れも清き谷川の、涯に綾織る青柳の、
糸にそよふく涼風に、なびくも清し我が故郷。

(雨評) 意味はきこえたれど、詩情動かす。

○梭の音　千葉　吉松さよ子

隙間もる風身にしみて、むすび凍ゆる冬の夜も、
更けて靜けき　の音は、寢覺の床に聞ゆなり。
落葉深くなる山里に、草の戸深くたれこめて、
梭の音たゆる時もなく、はたおり暮らす機織女、
たまのうてなの姿見に、月の細眉つくらずも、
若き命をくれなゐの、口紅ふかく染よかし。
見ずや、南の窓の梅、み冬の夢にこもりたる、
薫さそふ花の香を、折りてもかざせ、前髮に。

(雨評) 詩題は面白けれど、意味少しく索然たり。

○癈兵を思ふ　埼玉　濱野秀子

日露の干戈をさまりて、平和の花は咲きにけり
今ぞ輝く我威光、遠征勇士の大丈夫は
胸の勲章に功見せて、怨讐の天地に曝らすなり
されど、天運拙くて、恨みの痛手身に負ひつ、
矢たけ心ははやれども、あはれ其身は不具となり、
軍籍よりは捨られて、軍の庭の功しを、
再び立てん術もなき、兵共こそあはれなれ。
殊に春秋豊かにて、前途多望の壯士等は、
眞の力是よりぞ、世に現さむ時なるに、
人に示さむ時なるに、かくなりし後は何如計り、
世をはかなしと思ふらむ。
かくて浮世に長らへば、櫻の花といさぎよく、
風も色ある戰地にて、散りし人こそ、中々に、
羨やましくぞ思はれむ。
されども、されど、あゝ、されど、功し高き其名をば、
いかで世人の忘るべき。ましてや　今の世の中は、
戀舊の光日に月に、てりかゞやきて行くなるを、
手なく足なく眼も失せて、たどるすべなき癈兵も、
險しき山路に踏み迷ひ、行手の荒き浪風に、
なやむ事もやなかるべし。

(雨評) これも意味はよくきこえたれど、詩韻更に無し

百日紅　新潟　岩本芳子

塵の浮世に媚びもせず、玉の臺を外にして、
奥山寺のやれ垣に、咲くもかすけきさるすべり
咲くもけ高き百日紅、汝れが名には、世の外に
つきぬ常世の榮かや、色香ゆかしき法の花、

夏瀧　東京　永井さき子

岩にくだけて、ちる露の、白玉かづく、百草の、

したゝる緑色清く、夏はかゞくのものならん、

衣手寒き瀧の下、

短歌

本居豊頴先生選

天

朝顔　　三重　中村美枝子

千年へん籬の竹のふしのまを
我世と咲ける花の朝顔

（評）いと長きと短きとを對へたる趣をかし

地

川納涼　　東京　西村直子

隅田川つきをのせたるふなあそび
波のよるこそすゞしかりけれ

（評）川水のごとく淀みなく月影のごとく清し

人

夏夕　　東京　神田けい子

家々に蚊やりのけふりくゆらして
かは邊にすゞむなつのゆふくれ

（評）畑にわびて人皆宿を出るゆふへのさまけにとおほゆ

山家の夏月　　埼玉　横田やな子
山さとの夏わすれ井の水くみて涼しき月をにこしつるかな

紙　　埼玉　横田須磨子
こきうすき筆の命毛あらはして紙の心のふかくもあるかな

婦人園泥的祝捷會　　埼玉　横田秋子
梅柳さくら山吹さまぐ〜に花くらへしていはふけふかな

舟中水鷄　　東京　服部彌惠子
いさ舟子しつかにさせよ今しはしきしのわたりに水鷄なくなり

渡時鳥　　秋田　笹金すゑ子
舟人よしはしまてかし時鳥いま一聲をきゝてわたらん

思ひのまゝ　　羽後　鳥海いし子
不忍をそゝろあるきのをとめらよ池の逝に心によかし

殘暑　　神戸　今西操子
秋きぬと思問しなき衣手はなれし扇そ命なりける

朝風　　神戸　秋山もみち子
春の日に恨みし風も憎からす蟬の羽袖に吹けよ朝風

朝顔　　福井　岩橋花子
日毎〜花あたらしく咲きいてゝなかめもあかぬかきの朝顔

折にふれて　　韓國　原野みきえ子
繪葉帋の笑まいの小女愛らしと雨のふる日を友に交しぬ

折にふれて　　越後　吉野ひさ子
姉君のきぬ裁ち給ふやさ風に涼し思はす針の手とめぬ

七夕　　東京　中村千代子
一年にたゞ一度の逢瀬のみ契りはかなき天の川かな

螢　　奈良　栗山たか子
うてはなほ光みたれてみづの上をちるかことくに行ほたるかな

折にふれて　　土佐　秋月廣江子

詞藻

雲峯のやゝにみたるゝ夕かな 我におなしき人よにありや

夏富士 東京 原三幸子

すゝしさのそうへこなけれ夏も猶 そひえてしろき雪のふしのね

夏人事 東京 吉岡龜子

ほむら立中にかれいろかねちらは いよ〳〵あつき夏をしるらむ

夕立 東京 小島榮子

夕立のひとむらすきしこすゑより 露のたまちるかせのすゝしさ

田家秋 東京 小幡ろく子

やつかほの山田は露のうるほひて ゆたかに見ゆるとよとしの秋

海岸 東京 益子逸子

月照りて汐もひにけりうら賀かた ひしきやからむかきやあさらむ

潮魚 東京 河合清子

瀬川にのほれはくもちゆく魚の ときをまつまや淵にすむらむ

五月雨 東京 松下萬里子

うらぶれて訪ふもののもなき宿に さこそあはれと五月雨の降る。

晩夏 和歌山 植木撫子

ふきすくる葉わけの風のよな〳〵に 身にしむはかりふくる夏かな

涼風 埼玉 濱野秀子

涼風に誰か忘れけむ姫扇 小川の柳匂ふあなたに

名所夏月 神奈川 鈴木まつ子

あらし山青葉をもれて夏のよの 月は涼しくいてにけるかな

夏の夕 新潟 岩本芳子

暑くるき日はたそかれて蜘蛛のすの 糸目もれくる夏の川風

秋夕 福井 岩橋花子

吹く風にむしのこゑさへ音つれて まはきかす散る秋のゆふくれ

同 神奈川 奈良八重子

夕暮を秋草匂ふ野路行けは 一とあしことに花そ亂るむ

納涼 廣島 鈴森きみ子

涼み舟うしろに二つ前に三つ 月も隅田のなつの夕くれ

曉鶴 美濃 飯島みゆき子

高き山ひくき山みな見えそめて あかつききよし鶴の聲

青蘆 千葉 吉松さゑ子

青あしのそよきに朝の風ひゆれて 歌なうみゆく行々子の聲

夏月 下野 井上倫子

雨すきてすみゑの如き竹むらに 光すゞしき夏のよの月

折にふれて 大阪 木村都江子

袖ふれし小笹の露のこぼれ來て 虫の音やみし野邊の細道

夕顔 兵庫 田淵みき子

みや人の姿もかくと思ふまて 匂ふ垣根の夕顔の花

庭撫子 松山 田村多豆子

からやまとたゝしく植てその庭の をしへも見ゆる撫子の花

蜩 佐賀 藤松りか子

夕月のかげもすゝしき松が枝に こゑもしられて日くらしのなく

虹 岩代 岸野菊子

夏山の緑をひたす水うみに たかわたしけむ虹のうきはし

夕顔 磐城 木幡きよ子

笛の音も垣根や越えて通ふらん 月に波立ツ夕がほの花

親を失ひつる人の許に 東京 家壽子

行衛なき君が涙をしのびつゝ しぼりもあへぬ我袂かな

述懐 東京 松原岑子

偽りのなき世なりせばおしなべて 人のこゝろはのどけからんを

夏草 東京 土田八重子

いぶせしと刈りな拂ひそこん秋に 盛り見すべき菊もましるを

雨中訪友 東京 星野清子

蛙なく畔道つたひ友とへは かしら重けにあちさゐの花

郭公 東京 堤てい子

待兼の山ほゝぎすことゝはん むかしの人もかくや詫びしと

逗子にて 東京 小杉蕪葉子

君をおもふ枕に波のとゞとして　いねれぬ夜半のさびしかりけり

磯螢　東京　永井さき子

いさりびのためしも今はことなりぬ何に例へん磯の螢火

撫子の絵葉書添へて友の許に　東京　爾津梅子

芳はしき花咲かしませ美しき秋の庭のなでし子の花

水鶏　三重　森本ぬい子

我里は四面田にして水清く庭は面白く水鶏なくなり

露　三重　中村平予

露やつゆ露のはかなき命とも　知らで我子に名づけてし哉

朝ほとゝぎす　名古屋　山脇しげ子

さみだれはあとなくはれて朝日影　まばゆき空に鳴く時鳥

秋の朝　長野　関谷己子

絵にしゆくたくみが姿態にて　秋の朝の霧まだふかし

秋風　神戸　足立あさ子

すゑ終になびかぬ草もなかりけり　唖が小島の秋のはつ風

夏夜　神奈川　吉田はな子

山の端に出でし月かげすゞしくて　夏のあつさもわすれけるかな

瀧　神戸　足立ゑい子

苔衣かされて高き岩のうへに幾代さらせる瀧の白糸

螢　千葉　海上孝子

秋ちかくなるしるしにや草の葉にすかるほたるの数もよめつゝ

月　横須賀　柏原美奈子

隣よりなびく蚊やりの烟にそ　すめる夜はなき庭の月影

首夏藤　甲府　風間千代子

夏山のこするゑにかゝる藤波の　ながくも花の匂ひけるかな

海邊松　甲府　名取正代子

網引する聲にちからを打そへて　しらべあはする磯なれ松風

納涼　東京　花柳子

涼しさや日は暮れ竹の　伏見にて螢狩る子の浴衣美し

花盗人　信濃　奥原きよ子

病む母を慰めんとて一本の菊を盗みし人を告ふめじ

松下泉　東京　岸光惠子

松がげの夏をよそなる岩がれに　涼しさそろふ玉の井の水

雨後の夕顔　兵庫田淵ふじゑ子

夕立のなごりの露にゑみのまゆ　ひらける花の涼しくもある哉

清水　埼玉　野中松子

暑さをは愛になかせと旅人に　谷の清水の音たてゝけり

夏夕　東京　神田けい子

家々に蚊やりのけふりくゆらしてかは邊にすゝむなつの夕くれ

夏の月　旭川　佐藤央子

いつよりもあかぬ心そまさりける　みる間にふくる短か夜の月

水鶏　常陸　岡田蔦子

早苗とる賤が門田はくれ初めて　水鶏の聲の近く聞ゆる

螢　東京　佐々木燕子

夕立の晴し河邊のくさばより　光れる露は螢なりけり

時鳥　三重　森本しづ子

月落ちて文に更けたる窓おせば　慰め顔に時鳥なく

俳句

内藤鳴雪先生選

天　東京　杉江光子

秋空や鳥なきよる島の松

地　山口　氷室晶子

灯に榮えて八尋殿の牡丹哉

人

神奈川　三富登代子

衣更て喧嘩もしたき奴かな

涼しさに圓き小山を廻りけり　相模　山下てる子
短夜や岐阜提燈の影疎く
炭を掘る澤邊に見たり百合の花　神奈川　飯沼みつ子
夕顔に牛の子吼ゆる小雨かな　東京　中川ゐい子
渡船待つ人さゞめくや夏の月
夕顔の背戸拔けて行く貰ひ風呂　東京　土岐ゆき子
朝市や魚切る手に秋の風　東京　杉江光子
秋を待つ心尊き柳かな　東京　服部幹子
白瀧の露に氣高し百合の花　山口　岡村よしの子
雨ふる日我が櫨燕巣だちけり　丹後　小山田花子
夕立のがらりと晴れて月一つ　埼玉　濱野秀子
雨乞ひて雨降り過る昨日今日　神戸　足立ゐい子
紫陽花や日影とゞかぬ局口　神戸　足立あさ子
子規啼く夜を那須の詣疑哉　東京　松下万里子
花笠の花香を競ふ踊りかな　新潟　岩本芳子
町人が馬の稽古も月夜かな
ほとゝぎすあるじは誰ぞ庭の月　神戸　船津かつ子
枝豆を食る僧の月見かな　廣島　鈴森きみ子
内環やむかしゆかしき花菖蒲　横須賀　柏原美奈子

短夜の付け忘れたる日記かな　東京　花柳子
聞きし夜も亦れられぬや時鳥　松山　上原のぶ子
花火見る舟美しく並びけり　岩代　岸野常子
瓜刻む女美くし京の宿
宵すだれ卷いて虹見る女かな　兵庫　梶原京子
灯ともして琴ひく家や宵すだれ
お月樣いくつと稚子の涼臺　東京　土田八重子
ゐはがきの須磨から屆く月夜哉　東京　爾津梅子
先生と人に呼ばるゝ暑さかな　神奈川　三富登代子
いざ池の鯉見に行かん五月雨　三重　森本松聲子
小坊主の頭を洗ふ淸水かな　三重　中村美惠子
五月雨に水汲む女錢きたり　名古屋　高津くわ子
雲の峯鐵橋ひくゝ見ゆるかな　東京　本橋つや子
夕顔やよき人とめし滋賀の宿
温泉烟に簾涼しき率哉　横須賀　吉岡登志子
一日の磯入もして甃疑哉
夕立や橋の下なる傳馬船　横須賀　高橋つれ子
夕風や肩にかけたる夏羽織
衣更て茶屋の女の口輕く　横須賀　渡邊久子
虫干の中に梅干す內儀かな　横須賀　藤松りか子
銀燭に君が眼の涼しさよ
蚊遣焚く草の庵や祇王祇女　神戸　船津勝子
鮓ころんで鷗敷ふる座敷かな　東京　山本靜江子
暮かゝる本堂廣き蚊遣哉　東京　高野みち子

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月十日とし、翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により本月は十五日〆切とし、其の次即ち九月號に掲載すべき分は、本月三十一日を〆切とし、爾後締切を掲載前々月末日迄とす、
兼題和歌の甲乙、短文、新體詩・兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

◎和歌兼題

九月 秋夕 行路薄
十月 海上雁 女子讀書
十一月 水鳥 看護婦
十二月 落葉 歳暮

定價

一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾貳冊	前金	貳圓拾錢

全國無選送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年七月廿八日印刷
明治四十年八月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 合資會社 國光社
右代表者 東京市京橋區築地二丁目二十番地 橋本忠次郎
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 河本龜之助

發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋 特八八番)

某伯爵夫人の化粧實驗談

何故女は化粧する？　妾にはソンナ理屈は存じませんがね、併し何故樹には花が咲くでせう。木に花の咲のが自然なら、人の化粧するのも自然ではないでせうか、尤も御婦人方が化粧を凝しますのも、顔姿を美くしく仕やう為には違ありませんけども、それは強ち人樣の前に我こそ美人だと云つて誇らうと云ふわけではないですよ、確清少納言だッたと覺えてますが、頭洗ひ化粧してドウとやら、殊に見る人なき所でも心ときめくものだと云ふ樣なことを云つてあつたやうです、これは全く、化粧致しました後の心地は、ソレは〱サッパリとしましてね、自分ながら能い心持になりますよ、又お他人樣に致した所で、臺所仕舞で不潔なつてるお鍋どんの顔よりか、同じお鍋どんでも、手水身仕舞でもして清潔とした姿の方がいくらか好いお心持に見られるではありませんか。

夫に化粧は禮儀の内の一ッとやら申すことで、嚴格な家庭へ參りますと、寐亂髪の姿はおろか、素顔のまゝを良人にさへ見せないと云ふ位のものださうです、はい自家などでも其理想でやつて居りますがどうも心得のあるキチンとした婦人は、化粧を蔑視に致さんやうですね。併し世の中が忙しくなつて參りましたので、往日のやうに安閑として朝から晩まで身仕舞化粧に鏡と首引ばかりしては居られない時勢になつて參りましたから、ぢやと申して化粧は止して仕舞わけに行かず、却ッてます〱社交と云ふ上からも一層化粧の必要を感ずるやうになつて、參ッたのでそれには是非とも從來の化粧法を改良とやら致さえでは困りますわね、そこで妾などはハイカラぶると仰やられるかも知れませんが、西洋化粧法の簡便にして而も一層の美を呈するに如ずと信じて現に妾はじめ孃方や女中達にも之を奬勵て居ります

ンですよ。
いゝえ、夫ばかりぢやありません、妾が從來の化粧法を棄て、今日まで有振た日本の化粧品を用ません理由は、化粧法の上で一番の要とも申すべき衞生と伴はないからで、化粧は精神を爽快させると共に肉體にも滋養になるものでなければ駄目ぢやありませんか、日本在來の化粧品で害にこそなれ、毛先ほどでも滋養性のあるものがありませうか、化粧品だからと申して、容顏の色艶ばかり美くしく見せるだけでは、よし害がないにしても未だ立派なものとは申されません、それだのにチヨツト化粧した時だけ顏の難を蔽する切で、お負に後に害を殘すやうなものでは衞生的とも申されないぢやありませんか。
御園おしろいも使つて見ました、米國や獨乙あたりのも使つて見ましたが駄目ですね、この理想に叶つたのはドレもありませんよ所が端なくも一ッ見付カッたですの、それは主人が不圖佛國の雜誌にある記事を讀みまして近頃ペローとか申す藥學博士ださうでね、此お方が長いこと苦心なさッてやッと發明遊ばしたのなさうですが、非常に貴婦人社會から歡迎されまして、佛國の大博覽會でも金牌を得たとのことでした、そこで試しに注文して取寄せて使ッて見ますと實に立派なもので御友達などにも御分したり現に某宮家でも御使用になつて居ります。
會社の名はキセロルと申して、此會社の製造品にはどれにも赤十字の中Xerolと白字に拔いた商標がついて居りますから誰にも直ぐ解りますよ。
この會社の製出化粧品は一種や二種でなく澤山ありますけれども、自分は一切盡く實驗して居りませぬから、まだ實驗せず又目下使用中のものについては早計によいとは申兼ねますれど、プードル、ド、リ。クリーム。ローシヨン、プリヤンチン、エッサンス、石鹸、煉齒磨、齒香水、まアこれ丈は責任を帶びて世の貴婦人方に御勸め致たしたいと存じます
プードル、ド、リと申すのはお白粉のことでこれは赤と青と白との三色ありまして、使用なさる方の皮

膚の原質によつて使別なさるやうに斯く三色になつて居ります、併し妾などは地が青醒めて居りますから、一時に三色を使ッて居ります、それは先目の周圍かけて頬の邊まで赤を輕くふりまして其上から青を面全體にふるのです、さうしたら鼻やアゴの邊に濃く白いのをふつて、ドン／＼と眉刷毛で叩きますと、こんな顏でもソレは／＼生々とした自然の肉色美を顯はして參りまして、他のおしろい類をつけましたやうに、如何にも御化粧しましたといふやうな粉箱から出た鼠と云つたやうな風になりませんのです。

尤も此プードル、ド、リは粉おしろいですから、これだけでは着きません、これを着けますにはクリームを先づ薄く解いて顏に塗りますのですが、このクリームこそは實に偉大な功能をもッて居りますもので、例令プードル、ド、リを使用なされずに、他の白粉を使用なさるにした所で、このクリームを塗つた上に施けなさると、おしろいが皮膚によく密着しますから自然、ほんの地の色のやうに見えます、それに此クリームをつけますと第一日に燒けませんそれから日に燒けたのも除れますし、手や足のあれでも、これを解いて塗付けますと、どんなお鍋どんのひゞ荒手でも二日ほど經つと乾度艶々とキメよくなります。

ローションと申すと、これは御顏の化粧品ではありません、頭の方の香粧品になつて居ります、お互に御婦人方の困りますのは、取分夏向になりますといくら手入して洗ひましても髮毛の臭みの去れぬことですが、其時このローションを四五滴頭にふりかけますとソレは／＼見事に臭味を止めまして一種のえも云はれない佳香がします、併し夫丈なら何もローションを使用せんでも安い香水で胡魔化せると仰やるかも知れませんが、駄目です、のみならず此ローションを使用しますと拔髮を止めますし髮を早く延すこと非常です、妾は例しに之を産後の御婦人に御すゝめしたいですね、ブリヤンチンと申すのは香油

ですがどうも舶來の香油にはワゼリンを入れてありますので髪を赤くして了ひますのが多いから之も其傳ではあるまいかと思ひまして使ふ心持になれませんでした、だもんですから従兄の理學士になつて居る人に話して分析して貰ひましたのですよ、ところがワゼリン性のものでないと解りましたので、ヤッと使う氣になりまして使つて見ますと、他の香油のやうにベタ付ませんで、却ッて髪がサラ〳〵となりまして毛がフワリとなりますから、取分け廂髪を結ますには髪毛がフーとふくれ上ッて實に格好がよくなります、それの香がいやに高くありませんで優美い崇高い香がしますから、それをふりかけた時の心持は何んとも申されませんよ。

エッサンスは香水の一種で、この會社の製造にかかる香水は八種ありますけれども、そのうちで秋冬にかけて使用するに適して居りますのがビオレット春夏のはエリオトロップのやうですが、あとのリラとかジャスマンか何とか云ふのは、好憎もありませうが妾には餘り感服されません、只エッサンスと申すのは流石に此會社獨特の絶品だと威張て居りますだけに立派なものです、ビオレットは御承知の通り重い暖かいやうな香がしますし、エリオトロップは輕い涼いやうな香がしますので一つは夏向・一つは冬向となつて居りますけれども、エッサンスは四季を通して使用されるやうな、重くて輕い涼くて暖かいと云つた按梅の佳香がありますので妾などは始終こればかりを使つて居ります。

それから石鹸です、がもう據ろない御客の參る時間ですから、その外に歯磨や歯香水、オードトワレットなどの御話も致したいのですけども、今日はこれで御許願ひまして、何れ其内に目下使用して居ります品々を實驗しました上で又御話致すことゝしませう。

●中學校用教科書

日高秩父先生書
●中等習字帖 全三册（文部省檢定濟）
正價 上、中、下各拾三錢　送料 貳錢

國光社編纂
●中等國語讀本 全十册（同）
正價 各貳拾貳錢　送料 各六錢

內堀維文先生著　國光社編纂
●中等漢文讀本 全五册（同）
正價 一、二、貳拾五錢 三、四、參拾錢 五、四拾錢　送料 各六錢

大林弘一郎先生著
●中等國文學史 全（同）
正價 六拾錢　送料 八錢

大宮兵馬先生著
●中等日本文典 全（同）
正價 五拾五錢　送料 八錢

小林萬吾先生編
●中等習畫帖 全八册（同）
正價 一、二、各貳拾錢 三、四、各貳拾貳錢 五、六、各貳拾四錢 七、八、各參拾錢　送料 一册・貳錢

松本雅邦先生編
●中等科習畫帖 全八册（同）
正價 一、二、各拾七錢 三、四、各拾八錢 五、六、各拾九錢 七、貳拾錢 八、貳拾貳錢　送料 一册貳錢

松本敬之、高橋正熊兩先生共著
●法制教科書 全
●經濟教科書 全（同）
正價 各六拾錢　送料 各六錢

宮森麻太郎先生著
●イージー、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジション 全（同）
正價 五拾五錢　送料 六錢

同
●モーア、レッスンズ、イン、グランマー、アンド、コンポジシヨシ 全二册（同）
正價 一、五拾五錢 二、六拾錢　送料 各六錢

東京高等師範學校教授
文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース
菊版二百頁
定價五拾五錢
郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次
◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價値
◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語
◉第十兒童と圖書 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社**

關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**

女鑑

明治四十年八月一日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第八號
明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷